

拝啓、ハクスラ世界より（更新停止）

naow

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マイペースなゲーム好き27歳、ディアブロ3の能力を持って異世界へ。

云々。

そんな予定でした。

※ゲーム内の要素が薄すぎる問題の為、オリジナルとして改訂版を投稿し直しています、それに伴い、こちらの更新は停止致します。

お読み頂いた皆様には大変申し訳有りませんが、宜しければ改訂版
<https://syosetu.org/novel/237374/>

をご覧くださいましたら幸いです。

尚、内容は同じとなります。

こちらの作品は、取り敢えず、しばらくは未完としてこのままに、状況次第で削除する事になると思います。

思い入れが有るので、残したいのが本音です。

※※※皆様のお陰で「読み上げ機能」に対応！ 聞きやすくなるよう、頑張つてルビの整備やっています、作業用には非！ ※※※

文章書けないと、すーぐ落書き始めるんだから←

→文章書いてる人が描いた落書き。下手です注意。

※落書きはPixivさんトコにも貼ってます<https://www.pixiv.net/users/6052065>
へたつぴいな落書きばかりだから期待するとかっかりするよ！

目次

| | | |
|------|-------------------------|-----|
| 第1話 | はじめりは鳥三昧から | 1 |
| 第2話 | 思い返せば、ハクスラ世界つて殺伐とし過ぎだよな | 21 |
| 第3話 | 荒事はとても苦手なんです | 41 |
| 第4話 | 目は醒めたけど醒めてない感じの新生活 | 54 |
| 第5話 | 日常はいつも昨日の続き | 72 |
| 第6話 | 前略、救えませんでした。追伸、救われました。 | 92 |
| 第7話 | 夢と居場所、現実と仲間 | 112 |
| 第8話 | そうだ、不動産屋へ行こう | 131 |
| 第9話 | 大森林調査隊・上 | 151 |
| 第10話 | 大森林調査隊・下 | 168 |
| 第11話 | 急に言われても困るってこと、案外多いよね | 185 |
| 第12話 | 結成！ クラン、その前に | 202 |
| 第13話 | 面接ドラんカーズ | 221 |
| 第14話 | 溢れる悪意 | 240 |
| 第15話 | 顕現 | 258 |
| 第16話 | 帰還、おまけつき | 278 |
| 第17話 | 踏み出せ挨拶回り、新しい仲間を添えて？ | 293 |
| 第18話 | 拾って帰って、再始動 | 308 |
| 第19話 | 意味は望郷、帰る場所 | 323 |
| 第20話 | それいけ悠々ライフ | 340 |
| 第21話 | イリスと本格銭湯の気配 | 357 |
| 第22話 | 死闘！ 夜の大邸宅！ | 373 |
| 第23話 | 異世界いただき商店街 | 388 |
| 第24話 | 厄介事は面倒な時にやって来る | 409 |

第1話 はじまりは鳥三昧から

何やらPえ……ご家庭用のゲーム機もいよいよ5回目の更新という発表がメーカーから有った頃。

俺は仕事終わりに適当にお惣菜を買い込むと、週末の楽しみを思っ
てニヤつきを押しえ切れないうまま家路を急ぐ。

東京……おっと、念の為に住所はボカすべきか。

えーつと、東K都E戸川区どがわくの、区内では珍しくもない川沿いの一角。
帰りに川沿いの土手を歩きながらボケーツと眺めると、川面のほう
が俺の住んでいるアパート側の地面より高い位置にある気がする、そ
んな家賃月5万円の1K暮らし。

とあるお店の商品管理担当という、接客業なのかオフィスワークな
のか問われたら物流部門です、と答えるしか無い仕事内容を思い出し
てちよつと溜息が出る。

まあ、そういうちよつぱり特殊な立ち位置に居るおかげで、お店勤
めだと言うのに土日休み。

問屋さんがお休みだから、出勤しても仕事ないのよ。

え？ 接客しろ？

入社当初から裏方&事務仕事だから、今更店頭に出ても役に立たな
いよ？

仕事からの帰り道なので、これ以上仕事のことを考えるのはやめよ
う。

この週末も、俺はいつもと変わらぬゲーム生活予定である。

……は？ 彼女？

居ませんが、何か？ (キレ泣)

そんな存在が居たらアレだ、ゲームなんぞに引きこもる休日なんぞ
選ぶ訳がないだろう。

ちなみに、土日祝休みだが日曜日はもうひとつの趣味、自転車で皇
居周辺に繰り出す——晴天限定——という用事があるので、ゲームは
土曜日・祝日及び毎夜しか遊べないのである。

知人友人に毎週日曜に皇居に行く、などと言えば漏れなく勘違いさ

れ、説明が非常に面倒臭いのは最早お約束だ。

自転車趣味の人は一発で理解わかってくれて非常に助かるのだが……。

あ、俺はクロスバイク派っす。

ロードバイクとか本気すぎるのは無理っす。

適当に流すのが面白いし、遠出の行き帰りに気軽に自転車停めてラーメン食うとか、幾ら有料駐輪場近くできっちり鍵かけるからって、ロードバイクで出来る気がしないっす。

それが貧乏人ってモンっす。

俺だけっすか、そっすか。

そんな訳で、帰りにスーパーで買ったお惣菜と飲み物を意気揚々と振り回し——きつと後で後悔する事請け合いです——土手の上の散歩道を通って帰る。

そんな時間も自宅が近づけば終わる訳で。

突然の鉄砲水や謎の堤防決壊等があるわけもなく、居眠り運転のトラックが入ってこれる場所でもないの、何の問題もなく自宅……っていか自室に辿り着き、狭い玄関——室内保管の自転車のせい——へと身体からだを滑り込ませるのだった。

ご飯だけは出勤前に炊いて出る。タイマー機能は偉大だ。

お惣菜を、もう面倒なのでトレイのまま食卓代わりのPCデスクに並べる。

キーボードは収納してあり、邪魔にはならない。

余談だが、トレイじゅうらいって字面、パツと見でトイレに見えちゃうよね？

俺だけっすか、そっすね。

一応、彼女が居た時分には、1人の食事の時にも、お惣菜であつてもちやんとお皿に並べ、なんか人並みに食事気分を高めて食事してたモノなのだが。

独り身となると、もう本気でどうでも良いのだ。

……理解わかってる。

そんな事だから振られるし、それ以降浮いた話のひとつも無いのだ。

考えるとどんどん悲しくなってしまう。

大丈夫だ、まだ俺は27歳。

まだ余裕はある、ある筈なんだ。

焦る必要は無い。

ゲームを始める前に現実逃避を完了させ、PCで適当に動画を見ながらご飯である。

何か見ながらご飯というのも、あまり行儀は宜しくないが、ゲームしながらご飯、よりはマシという……言い訳だ。

ゲーム中のポテチは食事では無い、それは救済である。

ちなみに、TVは無い。

色々とTVに言いたい事は有るが、一番の理由は買うのが面倒なのだ。

面倒な思いをして買って、それでTVを見るかと言えばそんな事は無いだろう。

興味の赴くままに見るにも、ニュースが気になる時も、天気予報や地震情報すら、今やネットで済んでしまうご時世だ。

TV観れます。チューナー内蔵なんで。あ、HDとか諸々ついてるので、色々便利でっせ。

そう仰られても、レンタルしてきた映像ディスクならゲーム機でもPCでも再生余裕ですし、見ないTVを録画する事はない。

そして、余計な機能のない、ゲーム専用のモニターが欲しいなら、職場のご近所で中古を買えば済む。

今日の動画は、と。

お好みは色んな素材———というか思いつきにしか見えない———で包丁を作り続ける男の動画か、ゲーム実況系。

いつもの飯時めしどきにはこの辺を眺めながらご飯をかつこんで居るわけだが、今日は気分を変えたい。

理由なんぞ無い。強いて言うなら、思いつきだ。

そんな訳で、今日のチョイスはボカ○歌ってみた系、ただし海外勢。

一昔前（大げさな表記）に比べると海外の歌い手も選別された感があり（謎に偉そう）、安心して見られるのだ（何様）。

……俺の一人称の筈なんだが、なんで俺に対して刺々しいんだろう。

それはさておき、今日の動画も決定。

食事時にいちいち再生操作をしたくないがオススメはたまにスカタンなので、動画主のプレイリストを選択。

食事はのんびりと、味わって食べるべきだ。

お惣菜なのにつて？

俺じや手の込んだ物は作れないから、こういうのも十二分にご馳走なのだ。

手が込んでいなければ、なにか作れるのかつて？

焼くのと炒めるの。あ、魚介系は無理。

カレーとシチューは市販のルーが有れば作れる、というかあれは誰でも行けるだろう。

あ、オイスターソースを使っておでん作れます。

自慢すな？ はい、俺が考えたレシピじゃないしね。

ネットで見かけて作ってみたなら、当時の彼女にも好評だったんだよ。

……イカン、思い出したら泣けてきた。

よし、気分を変えてご飯だ！ いい加減ハラが減った！

今日は豪勢に唐揚げにチキン南蛮、グリル焼き風チキン。

……鶏肉ばっかだな。

好きで買ったんだけどさ。

こうして並べてみると……こう……自分の浅はか……愚か……。

うん、勢いだけで生きてるつて気がして心配だね！

あ、ちゃんとサラダも有ります……。

はい、バンバンジーサラダ……。

なんで今日に限って売れ残ってたかな……。

見掛けたら買っちゃうでしょうが！

い、いつもはシーザーサラダなんだからね!!

期せずして鳥三昧を堪能し、いつそ焼き鳥でも買ってこようかと壁

の時計を見上げると時刻はもう22時30分を回っていた。

21時閉店で、従業員一同が力を合わせて締め作業を行っても、帰宅して一息つくところな時間である。

まあ、それも今週は終了、週明けまではお休みだから鷹揚に構えて居られる。

それは良いが、この時間ではご近所の焼き鳥屋さんも終了しきつて
いる。

ではコンビニまで行くか？

と問われれば、素直に面倒くさいと答える。

食事も終わり食器も洗ったし、此処からはそう、ゲームのお時間である。

今日も、仕事のアレコレで軋んだ心に潤滑油を。

この週末こそ、グレートタワーリフト G R 100到達の悲願を。

かれこれ1年そこそこのプレイ時間で、色々試して漸くたどり着いたグレートタワーリフト G R 97。

クラスはウィザード。

挑むのはソロ。

ビルドは夢の遺産・メテオばら撒きビルド。

最近実装された新ビルド「夢の遺産」は、元々愛用していた「悪夢の遺産」ビルドの装備がそのまま転用出来たが、更に細かい変更を加えて完成。

俺には理解わかか解る。

このビルドが俺の切り札になる。

それはさて置き、いざ。

Pえ……ゲーム機を立ち上げ、ゲーム用のモニターに光が入ったその刹那。

室内が暗転し、俺は意識を唐突に刈り取られたのだった。

……。

青空を見上げながら、記憶を辿る。

何度か繰り返したが、結果は同じ。

ゲームを始める直前で、キレイに記憶が消えている。

記憶が喪失してる訳ではなく、自分の名前も思い出せる。

井原賢介、27歳。

思い出しながら、草原にあぐらをかいている。

丘から見えるのは、草原と、今いる丘の右手には馬車の轍わだちがある土肌うでの道、左手には少し離れて広がる森。

何が有ってどういう経緯で、深夜の自宅から、気がつけば清々しい晴天の下、丘の上に佇んでいるのか。

どなたか是非お教え頂きたいものである。

これが異世界転生とか言う物か、などと埒も無い事を考えて一人苦笑する。

正解は恐らく、意識を失い、見ている夢、といった所だろう。

自分が思っているよりも、疲れていたという事だろうか？

腕組みして思い返せば、週末だし、忙しかったといえれば忙しかった。だが、倒れる程だったかと言えば、いつもの金曜日並でしかない。

というか、昨日今日の疲労で倒れたとかでは無いだろう。

日頃の疲労の蓄積という奴か。

驚きの能天気生物と自認していたが。どうやら人並みに疲れやすいらしい。

……今、年齢トシって言ったやつ、反省文な？

それはさておき。

目が醒めたら、きつと朝だろう。

せつかくの土曜日だが、健康はあつて当たり前のもではない。

素直に病院に行こう、そう心に決めて、今はせつかくだし、夢を楽しむのも良いだろう。

あぐらをかいたまま、両膝、と言うより両腿を叩いて、立ち上がりながら自分が左腕に甲冑を装着していることに気が付いた。

あー。こういうの好きだけどき。

なんというか、夢の中で自分がこういう格好してるって、なんか恥ずかしいな。

普段からこういうの身に着けたらいつて思ってるって事だろうか。
照れ隠しに鼻を掻こうとして、指先が硬質ななにかに触れる。
顔の前に、何かがある。
ソレに触れる。

視界が普通に確保されていたので気が付かなかった。
何かを……仮面？ ヘルメット？ を被^{かぶ}っている。

夢の中とは言え、混乱しつつ顎の下に手をやると、ベルト状の顎紐
が留められている事に気が付く。

手探りで外す……何故か手慣れているのが気になるような助かる
ような気分で。

外したソレを確認する。

のっぺりとした、見た目は金属製のマスク一体型のヘルメット。

いや、ヘルメットと言うには、頭頂部が開いている。

それは、髪を出すため……。

頭頂近く、後頭部寄りにまとめたポニーテールが邪魔にならないよ
うに……。

いや。

いやいやいや。

不審なのは、とても外が見えるような造りにはなっていないにも関
わらず——実際、こうして手に持ち、しつこく眺めてみても、向こう
が透けて見えるわけではないと言うのに——先程はこんな物を被^{かぶ}
つていると気付かないほど視界がクリアだった。

それに、この、ファンタジー臭漂うデザイン、あまりにも見覚えが
有る。

いやあ、俺、こういうの嫌いじゃないけどさ、ねえ？

……いや、もう目を逸らすのはよそう。

これは、ヴィジエール・ハット。

俺が、ゲーム……ティアブロ3での愛用キャラに装備させている頭
部装備……の、見た目を変更させてある物だ。

恐る恐る、俺は視線を下げる。

夢だと気付いたときから、自分の身体^{からだ}の確認などしなかったので、

どういう格好なのか気にもしていなかった。

しかし、ヘルメットというか、仮面を見て、その正体に気付いた以上……確認しない訳には行かなくなった。

そこに有ったのは、いつもとは違う視点……主観視点で見る、見た目を変えた、ゲーム内での愛用装備。

夢の遺産・メテオばら撒きトレントビルド装備そのものだった。

正直に言おう。

まず、俺はライト層、所謂エンジョイ勢だ。

言うほどガチガちなビルドじゃない、というか「エンシエント・レジェンダリー」さえ揃えればそこそこ火力が出せると言うのが気に入り、悪夢の遺産ビルドに手を出したのだ。

そうこうしている内に「悪夢の遺産」に上方修正が入り、エンシエント1個につき750%UPアップと大幅に火力上昇に。

13箇所の装備品全てをエンシエント品に出来れば、驚異の9750%UPアップ。

そして、最近実装された「夢の遺産」という宝石ジュエルにより、俺のビルドは劇的に変わった。

……宝石枠が1箇所潰れた代わりに指輪2箇所が自由になった事により、カナイのパワー——特定武器に備わった、隠しスキルのようなモノ——とのシナジーが発生。

具体的に言うと、「マナルド・ヒール」と言う指輪の効果、感電している敵に武器ダメージの14000%の追加ダメージ、と言うものと、「カリニの後光」という指輪の特定スキルで離れた位置にいる敵をスタンさせる効果プラス5秒間被ダメージが80%減少する効果。

そして「ウイルウォード」という指輪は、稲妻ダメージを与えると、35%の確率で敵を1.5秒スタンさせると言う効果。

本来は2つしか装備できない指輪3つの効果を発揮しつつ、「悪夢の遺産」と同じ効果をも引き出だせる。

「悪夢の遺産」は同様の火力を誇るものの、その効果は「セットの指輪2つ」必要で、その時点で指輪枠は確定でふさがってしまったている。

指輪の固定スキルを含め、幾つかのスキルの自由度が失われているのだ。

このように特定の指輪、それもエンシエントで揃えなければいけない事は確実に枷になる。

少なくとも宝石は確実に入手出来る「夢の遺産」は敷居が低く、取り敢えず「エンシエント・レジエンダリー」が装備出来ていればそれだけで強力。

なんとも小狡い^{こずる}装備^{もの}と言えるのではないだろうか。

セット装備の効果を1つも発揮してはならない、という制限は有るのだが、それにしても、である。

まあ、愛用しという言葉台詞では無いのだが。

そして定番の「ゴースウィツシュ」と「エツチングを施された印」……この2つは最近、火力を発揮するまで1秒掛かるという下方修正が入ったが、それでも強力な固定スキルを持つ装備だ。

そしてパワーは先に述べた「ウイルウオード」に加え、「グラウンド・ヴェージェール」、「ハーグブラツシュの束縛」。

細かい説明は避けるが、要は「特定スキルの火力UP^{アップ}・特定スキルのパワー消費減・そして稲妻ダメージで短時間スタン」というセットだ。

正直、ウイルウオードに使っていた枠は元々固定しておらず、試行錯誤で色々と変えていた部分だった。

そこが固まった事で、結果的にビルドの方向性もハッキリと決まり、ソレに合わせて細かい装備や装備につける宝石の種類も決めて行った。

そうして完成した組み合わせこそ、割と最近のアップデートで手にした俺の新、そして最強装備だった。

重要なのは、操作自体は簡単である、と言う事。

ボタンひとつで2つのスキルと2つの追加攻撃、都合4種の攻撃が発動する、お手軽ジェノサイドセットなのだ。

はっとして、冷静になる。

今は自分の装備状況に自分で酔っている場合じゃない。

短時間反省すると、俺は自分がどういう状態かが気になり、恐る恐る「何時もの様に」ステータスを確認する。

手元にコントローラーが有るわけではないが、装備を確認したいと思ったときには、それは目の前に浮かび上がった。

間違いない。

そして、これが夢であることもまた、間違いなかった。

装備名やその説明まで細かく覚えて居た自分に引くが、これは。

これは間違はなく、ゲーム内で俺が装備していた物たち。

そして肝心の身体からだは。

俺は、女が好きだ。

ゲームで、概ねソロで遊ぶ世界で、何が悲しくて男の背中を見ていなければならぬのか。

そこに居るのは自分の分身、性別変更なんか論外と言う人々が居ることも知っている。

無論、考え方は人それぞれ、楽しめるならソレで良いと思う。

だが、俺はイヤなのだ。

どうせ眺めるなら、男の後頭部より女の尻である。

こんな俺なので、ゲームを始めるに当たって、当然のように自キャラは女。

敢えて声に出して言うが、俺はネカマでは無い。

ネカマと言うのは女である様に振る舞う事であろう。

俺は、男であることを公言し、女キャラを使用する理由を問われれば――

聞かれることなど滅多に無いが――胸を張って上記のように答えたものだ。

そう、つまり。

今の俺は、女ボデイの男と言う、最高に王道なステータスを手にしたのだった。

なにが「つまり」なのか、混乱している俺に問うのは控えて欲しい。鷲座の胸当て越しに胸を触ってみたり、股間の落ち着きの無さ、やるせ無さに溜息を漏らしたりしつつ、どうせ夢なのだからキャラチェンジ出来ない物かと考えるが、そこはうまく行かなかった。

なんでだよ、1回ゲーム終了してキャラクター選択選べば良いだけだろ。

何となく作ってレベルだけ上げといた男ウィザードも、一応居るのだ。

大体、女好きなのは俺が「男」だからであって、女になりたいなんて思ったことは1度たりとも無い。

「女好き」と「女になりたい」の間には果てしない距離がある。

ホントに、明日目を覚ましたら即病院行かねば。

ゲーム内で自分の使用キャラになりたいとか、病んでいるにも程があるだろう。

溜息吐くぞコンチクショウメ。

それはソレとして、である。

爽やかに風がそよぐ丘と、抜ける様な青空。

どう見てもディアブロ3の世界では無いが、これは一体、俺のどんな逃避願望なのだろうか。

いや、ディアブロ世界に行きたいかと聞かれたら全力で否だが、ディアブロのキャラで牧歌的な風景の中に居るといいうのも正直意味が理解らない。

変身願望と、逃避願望か……。

本格的にヤバイ予感がする。

入院とかになったらどうしよう。

と、暗くなっても仕方ない。

折角見ている夢なのだから、多少遊んでも問題あるまい。

右手を何気なく掲げ、ディスプレイド……は流石にアレなので、アーケイントレント——指先、本来は掌から放たれる、青白く輝く鍬。

何かをタゲって放つわけでもないの、それは僅かに上昇しながら宙を舞い、そして切っ先を地面へと向けるとひらりと空を滑りながら地面へと落ちていく。

ああ、ゲーム内の拳動と同じだなあ。

ターゲット……敵を狙って居ない時のアーケイントレントは、割と

すぐ目の前に落ちる。

そう言えば俺、トレントは稲妻トレントだったなあ。

そんな事をほのぼの考えて居た俺の目の前に。

見た目に反して大地を大きく抉るトレントと、それを追って大地に降り注ぐ7つの火球の轟音が空気を激しく震わせ、俺の失われた息子を縮み上がらせたのだった。

これも、幻肢痛フアントムペインと言うのだろうか？

多分、違う。

ゲームの世界は基本頑丈で、地形が変わることが無かったから気が付かなかった。

ディアブロと言うゲームは、ステータスがおかしいゲームの一つだ。

序盤は良い。

だが、ストーリーをクリアし、装備を整え——順番がおかしい？いや、この順番で合っている——「グレーターリフト」に挑むようになると、与えるダメージがおかしなことになるのだ。

まず、ダメージ表記が、気が付くと「300M」とかになる。

メートルではない。

MMOをやっている人は、「メガ」だと思うかも知れないが、このゲームではミリオンである。

意味はほぼ同じだが。

要は、100万ダメージを超えましたと言うことで、30Mということは3千万ダメージということだ。

これが4桁、3000Mとなれば、それは30億ダメージと言うことで、途方も無い数字だと理解して頂けるかと思う。

これが、その上になるとどうなるか？

正解は「B」、即ちビリオン……10億ダメージ表記になる。

30Bと表示されたら、即ちそれは3百億ダメージ。

幾らゲームとは言え、そんな馬鹿な、と思うかも知れない。

しかし、このライト層の俺でさえ、自力で1500B前後ぜんご、白オー

ブを拾えば2500B超え、2兆5千億ダメージとかが普通に出るのだ。

トップランカーなんかはどういうダメージの世界で戦っているのか、想像も出来ない。

ちなみに、装備次第では俺でもこの上の世界を垣間見ることは出来る。

この上のダメージ世界は「T」即ちトリリオン……兆ダメージの世界。

この数値を見るには、個人的にネタ装備だと思っっている「セヴァー」を装備し、敵にトドメを刺せば良い。

この武器、トドメだけが超絶ダメージになり気分が良いのだが、トドメまでは普通なので、要するに意味がない。

トドメのダメージを範囲化してばら撒ければ最強！ などと夢を見た事もあるが、超ダメージはあくまでも「トドメ用」。

トドメにならない攻撃は、超ダメージから派生した筈の範囲攻撃であつても通常ダメージでしか無いのだ。

それがトドメになったら？

超ダメージかも知れないが、確認はしていない。

それが超ダメージだったところで、トドメでしか発揮されないダメージだったら意味がない……と、俺は思っている。

実は凄い使い所つかいどころが有るのかも知れないが、残念なことに俺にはつかいどころ使い所を見いだせなかった。

与ダメージで回復？

そういう効果をアイテムに付けられるけど、他に欲しい効果が多すぎると、何となくそういうのは重要度が——俺の中では——低くなりがちだ。

そんな考えだから俺は高難度では通用しないのかも知れないが、そこはそれ、俺なりの拘りこだわという奴だ。

となると、本当にトドメで大ダメージの出番がない。

ストレス発散くらい、だろうか？

ちなみに、被ダメージはそれほど大きくない。

今の俺の自キャラのHPが90万そこそこで、1〜3発程度は耐えられる。

その上でダメージカットの障壁を張ってたりするので、そこそ段り合いでも耐えられる。

え？ ダメージ差が卑怯？

4桁 B ビリオン ダメの攻撃を10発以上食らわせても沈まないボスとかいる世界に立ってから、その台詞をもう一度お願いします。

などと、夢の中で現実逃避と言う離れ業を披露してしまったが、いかん、思考を現実……じゃない、夢では有るのか、とりあえず目の前に戻そう。

先程までの風のそよぎが戻ってきてても、挟られ、焼かれた大地はおいそれと元に戻ることはない。

俺は自分のキャラクターの装備状況ビルドを思い出し、そつと装備画面を開き、悩んでからスキル画面に移動する。

それは「エツチングを施された印」の効果。

特定スキルのダメージを上昇させるほか、他の特定のスキルたちをも同時に発動させる、チートですか？ 以外の感想が浮かびにく難い素敵装備だ。

なにがチート臭いかと言えば、追加で発動するスキルはプライマリ・リソース……あー、わかりやすく言うとMPの消費がない。

なのに威力は普通に使うのと変わらないのだ。

スキル同時使用でMP消費がスキル1個分とか、別ゲーマーに言ったらチート扱いされること請け合いである。

その同時発動の条件だが、実に簡単である。

先程の例で言えば、トリガーとなった魔法が「アーケイントレント」、光るやじり鎌のような攻撃スキルだ。

それがただ一発で恐らく20M、2千万前後ぜんじのダメージ。

意外と低いのはデスイッシュのスキルと同じく、発動までに1秒掛かる関係上、放つてすぐのダメージはどうしても大したことがないのだ。

え？ 2千万で低いのかって？

さつきも説明したが、ダメージの桁がおかしいから感覚が狂うのだ。この辺は、ぜひともディアブロ3をプレイして体感して欲しい。そしてハクスラにハマると良いと思うよ？

冷静に考えると、2千万以上のダメージを叩き出しといて低威力呼ばわりとか、ホントに感覚が狂いすぎである。

そして、そのアーケイントレントの後に降り注いだ7発の火球。

今は何処から降ってきたか見てなど居なかったが、アレは「メテオ」。アーケイントレントの発動をトリガーに、自動で発動した魔法だが、ちゃんと単体でも使用出来る。

その「メテオ」に、流星雨りゅうせいうという、1度の発動で複数降り注ぐ属性を付与してある隕石……と言うか火球である。

本気で隕石だったら、もつとシヤレにならないことになると思うので、俺はあれを火球呼ばわりだ。

そもそもあんな至近距離に隕石とか、普通に死ぬ。

そんなダイナミックな自殺なぞ、望む所ではない。

とは言え俺の切り札でも有るので、威力は折り紙付きだ。

複数個に分散されているので威力もお約束に従ってそれぞれは低い。

しかし、もう説明も面倒になるようなアレコレの特殊能力の重なり——正直に白状すると3つのスキルの効果の重複——によって、低いとは言え1発あたり1500B〜2500Bのダメージ。

アーケイントレントの方は、どう頑張っても俺のビルドでは最大50B前後ぜんごのダメージ止まりなので、ソレと比べると狂気のダメージ値だ。

そう考えただけで、トップランカー達の事を考えたく無くなる。

兎も角、最大でそこまでの威力を叩き出す火球群は、幸いにも今はスキルダメージが乗り切らない状態だった。

それでも1発あたり1000B前後ぜんごの威力か。

ゲームと違って、メテオは俺よりだいぶ前方に向かって広がるように落ちたようだ。

俺の知ってるダメージ値が大地に与える影響というのは、正直ピン

と来ていないが、それでも目の前に直径5メートル程度のクレーターとして広がって頂くと、大変解りやすい。

一応、曲がりなりにもクレーター状態になって居るので、やはり威力は侮れない。

これで最大威力状態だったらどうなるのか、考えただけでヒュンとしてしまう。

今の俺には、ヒュンとするモノは無い筈なのだが。

そんな、割とすぐ目の前の惨状に、素直な別の疑問も湧いて出る。

俺はなぜ無傷なんだろう？

って、そっか、これは夢だったな。

何度目かの自己確認に、途方にくれて空を見上げた俺は、どうせ夢なんだから飛べないかと思案してみたりもしたが。

飛べることもなければ、いつものゲームの様に、破壊された風なエフェクトの地面が修復される、なんて事もなかった。

飛べない以上、歩くしか無い。

夢だと言うのにユーザーに優しくくない。

ディアブロ3だったらマップで行き先指定で一瞬だと言うのに、ゲームの仕様に負ける夢とは一体何だというのか。

なんとなく大地を荒らした現場に居たくなかったの——犯人だからこそ——ついでに街でも探そうと歩き出したのだが。

理解^{わか}ってる。おいちゃん——でもまだ27歳——これが夢だって理解^{わか}ってる。

どうせあれでしょ？ この道沿いに歩いたこの先、草原の只中^{ただなか}に、突然秋葉原とかの、見知った街が出てくるんでしょ？

夢なんて、前後^{ぜんご}の繋がりがメチャメチャだからね。タダの記憶の連なりだし。

この景色に見覚えがない、って事実はスルーで。

さて、夢の中で出るのは秋葉原かな？ それとも、うちの近辺だったりして？

無責任にワクワクしながら、しかし黙々と歩く。

そりやそうだよ、独り言ブツブツ垂れ流しながら練り歩くとか、どう考えてもアレだろう。

そんな事を考えながら、街道を征く。

前後に人影は無し。

街に近づいているのか遠退いているのかもサツパリである。

これ、街に行けないとか言う類の夢の可能性も有るな。

いや、いやいや。幾ら夢でもそれは性格が悪すぎる。

信じて進むだけだ。

うん、カツコいい。

単に、引くに引けない距離を歩いちゃってる、っていうだけなんだけどね。

それにしても、こう、行く宛の無い旅路と言うか、先の見えない道つてのは不安が募る。

俺の夢のクセに、随分と手の込んだ嫌がらせじゃないか。

……どうにかしてこの嫌がらせじみた不安行軍から開放されないものだろうか。

そんな事を思いながら空を見上げた俺は、唐突に思い付いた。

きつと、現実であれば、思い付いても実行などしなかつただろう。

それはバカバカしいから、だけではなく。

可能だった場合、冗談抜きで命に関わると、子供でも理解する事だからだ。

しかし、今は夢の中だ。

寧ろ、これを切っ掛けに飛行能力なんてものに目覚めるかも知れない。

良いじゃないか、夢は自由であるべきだ。

謎の強気で自分を鼓舞すると、俺は……少し考えて周りを見渡し、街道から少し離れた所で、地面に向けて両手を、いや正確には右手の長剣「デスウイッシュ」と左手の魔力の源、という種別の魔法触媒「エッチングの施された印」……ええい長いな、「でーくん」と「えっちゃん」で良からう。

その2つを、いつもの様に、しかしいつもと違って地面に向けて構

る。

剣は切っ先を向けるのではなく、剣の腹を見せるように自分と相手——この場合は地面——とを結ぶ線に対して直角に交差するように、左手のえつちゃんを右手に添えるように、しかし触れないように絶妙な位置で。

いつもはゲームで、ボタンひとつで繰り出す得意攻撃である。

ソレも「アーケイントレント」と同じ様に、「メテオ」発動のキーになるスキル……魔法だ。

だから、今度は予め「メテオ」を使用しないようにスキル準備状態を解除してしまう。

戦闘とかになるようなら、戻せば良いのだ。

気を取り直して、俺はソレを発動させる。

どうやって発動させるかを考えるより先に、頭の中でコントローラーを操作する如く。

呪文の詠唱どころか魔法名を言うこともなく、ソレは発動した。

デイスインテグレイド。

それはウィザードの代表魔法とも言えるもの。

武器と「パワー」だけでもそこそこの威力を引き出せるため組み合わせがしやすく、俺の「悪夢の遺産」ビルドでも運用が容易な為、当然のように愛用している。

それ単体でかなりの火力を見込める、主砲と言って差し支えのない、迸る火線を大地に叩きつける。

ゲーム内で出来る挙動ではないし、遊んでいて反動が有るような様子など見受けられなかったが、きつとアレだ。

凄い魔法技術で制御してるんだろう、きつと。

それにこれは夢だ。

何でも有りの夢だったら、「極太ビーム魔法を推力に飛行」とか、余裕だろう。

言うほど極太じゃないが、代わりに火属性の「魔力拡張」スキルで、同時に2本発射のイカツイ仕様に変更済みだ。

ちなみに、普段は「ケイオス・ネクサス」というスキルを付与して

ある。

説明は、夢から覚めて覚えていたら、しようかな。

どうでも良い事を考えてる間に、発動から1秒経過。

急速に威力を上昇させた「デイスインテグレイド」は大地に激しく突き刺さり、特に抵抗なく俺を遥かな高空——多分俺が思ってるほど高くないんだろう、きつと——まで運んだ。

正直、夢だと言うのに滅茶苦茶怖い。

高度感がリアルで、浮遊感がリアルで。

割と遠目になにか城壁のような物が見えた気がしたが、そんな物の確認などする余裕もなく、恐怖心から「デイスインテグレイド」を解除した俺は、引力に引かれて地面へと急速帰還を開始する。

やばい、やばいっ！

慌てて「デイスインテグレイド」を地面に向けて放つが、どうやら行動が遅かったらしい。

落下に拮抗する程の出力を發揮する前に、俺は比較的やんわりと、腕を突き出した姿勢のまま大地に手荒く受け止められたのだった。

激痛にのたうち回ることしばし、これは絶対に腕が折れてる、というか折れてるで済んでる気がしない、そう思いながら何とか身体からだを起こしてみれば。

痛みこそ残るものの、俺の両腕は健在であった。

あの高さから、いくら減速したとは言え腕からモロに落ちたと言うのに、これは……。

そう真面目に考えかけた所で、はたと気が付く。

そう、これは夢なのだ。

途端に、身体からだから力が抜ける。

夢なんだから、どうせならさつき見えた建物？ 壁？ に向かって飛んでみても良かったな。

そう思う俺だが、じゃあやって見よう、とは思わなかった。だって怖かったんだもん。

幾ら夢だつて言っても、怖いもんは怖いんだよ！

そんな事しなくても、もう歩いて行けそうな距離には見えだし、きつと大丈夫。

さっきの高さとその臨場感を思い出し、足が震えるのに任せ、少しの時間だけ、その場で立ち尽く……のんびりと過ごすのであった。

第2話 思い返せば、ハクスラ世界って殺伐とし過ぎだよな

簡単な依頼クエストの筈だった。

そう、街の外で、ありふれた野草をかき集めて、納品する。

それだけの、ありふれた依頼クエスト。

駆け出し冒険者の自分達には、手頃で安全、簡単に実績を積める、そういうモノだと。

だから、いくら4人居るとは言え、油断していた。

街のすぐ近くに魔獣が現れるなんて、考えもしていなかったのだ。

遠い。ダルい。

何なんだよ徒歩移動！

異世界って体の夢ていなんだろうこれ!!

空飛ばせるか、最低でも自転車、道が悪いからMTBかシクロクロスクらい乗のさせろ！

のっけから愚痴スタートで恐縮です、俺です。

いやもう、思ったより近いかもとか思った1時間前の俺を殴りたいね。

ちよつと高いところまで行つて足ガクガクになったクセに、ねえ。

いやそれ俺の事だよ。

自分で考えても凹むわ。

脳内で気分転換に、スキル……魔法関係の構成を弄りながらダラダラと歩く。

こうして眺めると、今まで殆ど使つてなかった魔法つてのも、意外と有るもんだと気付かされる。

勿論、全く使っていないものは無い筈だ。

軽く使用して、使用感の確認程度はしているのだが、自分の使用用途に合わないものはどうしても使用頻度が減る、或いは使わなくなる。

使わないから印象に残らず、記憶から薄れていき、こうしてたまに思い出してなんだか新鮮な気分になり、そしてまた使わないから……。

なんだか急に、今見ているこの魔法が愛おしく思えたが、多分現状では使わないだろう。

南無。

それはそれとして、歩きがダルい。

気分転換しようが、ダメだ。

夢なんだから、ここは脈絡のない場面転換で街の中にいるとか、やりようは幾らでも有るだろうに。

融通の効かない夢である。

もつと柔軟にいかんと、夢なんだからさあ。

脳内で理不尽に不満を並べる俺だが、その夢を統合してるのは他ならぬ俺なのだという事は無視だ。

柔軟、柔軟ねえ。

ぽつかりと空に浮かぶ雲を眺めていて、俺は急に思い付いた。

デイスインテグレイド、あれ、手からじやなきや発動出来ないのは絶対なのか？

いや、それ以前に。

試したいことが出来た。

俺は徐に、両手に武器を持たずに魔法を使ってみる。

まずは、何も考えず、普通に「素手」で使うイメージ。

一応、さつき確認した街とは反対方向に向かって徐におもむくデイスインテグレイド。

1秒以上発動させたが、特に威力が上がったような手応えはない。というか、反動が軽い。

さつきの空に浮かび上がった時のような身体からだを押し上げる程の圧力を感じない。

一度解除し、今度は武器をイメージする。

本来両手に装備する武器、「でーくん」と「えつちゃん」——本来の名前が長いから愛称だ——を脳内で明確にイメージしながら、同じ様

に同じ魔法を放つ。

結果は、明らかに違った。

まるでさつき、武器を持って使用したのと同じ様に、油断すれば身体からだごと後ろに飛ばされそうな圧力。

体幹に力を入れて耐えるが、実際にはカウンター・マスの様なものを射出しているのかも知れない。

そうでなければ、簡単に耐えられる気がしない。

さつきのセルフ打ち上げは、そのカウンター・マスを目的に応じて解除した結果なのだろう。

この魔法が、ゲーム内で使用するには完全に足を止め、せいぜいがゆっくりと旋回できる程度になる理由が理解わかった気がする。

そして、少なくともこの夢の中だったら、そのカウンター・マスを解除出来る事も理解わかった。

次は、手ではなく、任意の場所……じゃないな、部位？ から発動できるかの実験だ。

具体的に言えば、背面。

背中で発動して、それを動力に前方に移動出来るかどうか？

夢の中だから、せめてそれくらいは自由に出来てくれなければ困……りはしないが、面白くはないだろう。

発動位置を背中、何となく両肩甲骨辺りに設定。

浮き上がってしまったては困るから、発射方向はやや上方じょうほう。

取り敢えずの実験感覚で、まずはこれくらいから。

この時の俺は世界が驚く程度には軽率だっただろう。

普通は、低出力からテストするだろう。

だが、俺は何を考えることもなく。

迷いなく、いつも通りのイメージ、かつ、カウンター・マス無効を追加でイメージに加え、デイスインテグレイドを発動させた。

1秒後、俺は僅かな射出で空中に打ち上げられるその威力に背中を押され、激しく転倒した挙げ句、その衝撃で魔法が解除されたにも関わらず結構な距離を転がされ、被かぶっていたヘルメットに感謝しつつ、自分の軽率さに歯ぎしりする。

だが、そんな程度ではへこたれない。

俺は、楽するための努力を惜しみはしないのだ。

身体からだについた土を払い、黙々と準備を整え、そして俺は今サポート付きで走ることに成功している。

イメージで発射位置も威力も制御出来ると判明したので、今度は武器無しで発動させた。

今度は予め負荷を予想できていたので、走り出しに成功。

威力上昇効果が発動しないので急に押し出されることも無く、威力が低いと言ってもそれは飽くまで俺基準……というか、ディアブロ世界基準であって。

走行のサポートとしてはじゅうぶん十二分の性能である。というか、これでも走り出すと、ともすれば足が着いてこないまでである。

というか、多少楽になった程度で疲労はするので、走らない方向でどうにかならないか、と考えれば。

俺は思いつきのまま、魔法を発動させた状態で、まるで両足を突っ張るように固定させる。

あくまでも、動きそのものを、だ。

地面に停止するためではないし、この状態でそんな事したらさつきと同じ様にスツ転ぶだけだ。

正直、思いつきにしても咄嗟過ぎて、自分でもなんで実行出来たのか理解わからない。

思うに、なんにも考えていないからだろう。

イメージとしては、地面の上を滑るように。

爪先を上げ、地面に対しての抵抗を極力減らす。

さつきのも、その前の落下も、怪我らしい怪我をしていないがすつげえ痛かったから、慎重に。

何なら、靴底に魔法の板すらイメージして、滑りやすいようにと祈る。

石かなにかに躓いたら吹っ飛ぶので、足元の注意は数メートル先まで怠れない。

なにこれ、すつごい早いけどすつげえ疲れる！

そうは思うものの、走るのもダルいし歩くのも飽きたので、俺は街道を滑走するに任せるのだった。

人間、慣れるもんだ。

ひよんな（滑走中に地面の傾斜の関係で跳ねた）事から、俺は低空を「飛んで」居た。

慌てて姿勢制御を失い掛けた時に、咄嗟に魔法の射出方向を調整し、空中での姿勢制御に成功した……らしい。

全くの無自覚、無意識である。

らしいというのは、自分で制御しようとして見事に失敗、一瞬で上昇を開始したのにビビった俺は慌てて方向調整、地面に斜めから押さえつけられ、その状態で暫く街道を滑った。

摩り下ろされるかと思った。

正直怖すぎて、もう二度と挑戦するかと思いはしたものの、結局飛んだのは、やはり事故だった。

反省とはどうやら、縁が薄いらしい。

その2度めの事故で、どうも無意識に任せた方がほう良いらしいと把握した俺は、何となく向かう方向を意識するだけにしたのだ。

こういうのを、力に振り回されていると言う。

もう色々諦めたし、目が醒めたらもう見ることもない夢だろう。

切り替えて、状況を楽しむ事にする。

俺の耳に、微かな、しかし切迫した悲鳴が飛び込んだのは、呑気に構えた俺が、もうじきさつき見えた城壁辺りだな、などと考えていた時だった。

見たこともない様な体躯の、赤い体毛の狼の様な魔獣が3頭。

気がついた時には囲まれて、彼らは逃げ場を失っていた。

街の外で狼を見た事は有るし、数匹程度なら追い払うくらいは出来る自信が有った。

だが、魔素を取り込んだ、或いは取り込まれた獣——魔獣に出会うのは初めてだった。

初めてなのに、理解^{わか}る。

理解させられる程に、その獣は異質だった。

確かに、そのシルエットは狼。

だが、まずサイズが違う。

見上げるほどの体格は威容と言うに相応しく、3頭に睥睨されただけで萎縮してしまい、身体^{からだ}の自由を奪われたように感じる。

1頭は右前足で仲間の1人を押さえつけている。

ダメだ、あれは助けられない。

恐怖に震えながら藻掻く仲間を見ても、彼らは救助に動けない。

押さえている魔物が動かずとも、フリーな魔物がまだ2頭もいる。

戦える相手ではない。

駆け出しの、普段は葉草採取がメインの冒険者が出会って良い相手では無い。

押さえつけられている仲間——少女はもう、恐怖に喉^{のど}が貼り付き声も出ない。

弱々しく暴れるが脱出どころか身を振^{よじ}る事も出来ず、見下ろす狼は悪意を感じる目を獲物に向けているだけだ。

殺される。

全員の脳裏に浮かぶのは、恐怖を伴う諦念。

冒険者に憧れ、育ての親の反対を押し切り、冒険者ギルドで登録し、雑用の様な仕事を続けて半年。

正直、腐つても居た。

いつかは魔物と戦い、打倒して有名になりたい。

そう思っていた。

だけどそれは今じゃない。今じゃないんだ。

魔獣が、少し押さえつける力を強めたらしい。

押さえつけられていた仲間の口からくぐもった悲鳴と鮮血が溢れ出し、少年の意識を現実^{現実}に引き戻す。

「やめ……ッー！」

激昂し、走り出そうとしたその足だが、1歩踏み出しただけで萎縮して動きを止めてしまう。

彼の前には、一瞬で間合いを詰めたもう1頭が見下ろしていたのだ。

殺される。

みんな殺される。

街に戻れば、他の冒険者も大勢居る。

高ランクの冒険者も居るだろう。

だが、助けを呼びに行けない。

街に向かって走った所で、たちまち追いつかれ、殺されるだけだろう。

悔しい。怖い。助けたい。死にたくない。嫌だ。

ぐるぐると絶望が頭の中を回るが、起死回生の妙手など浮かび来る事もない。

腰砕けになることすら忘れ、目の前に立ちふさがる絶望から目を逸らす事も出来ずに立ち尽くす少年の耳は、その時、確かに捉えた。

「はいー・ドローン!!!」

見知らぬ、少女と思しき咆哮と。

仲間を押さえつけていた魔獣の胴体が切り飛ばされる音を。

随分遠くの音が聞こえたもんだ。

漸く視えたシルエットに、俺は素直に感嘆しつつ、進行方向をそちらに定める。

恐らく、たまたま風に乗って聞こえたのだろう。

どうせ夢なのだし、派手にやっつてやろう。

そう思った俺は何気なく目を凝らし……判別できる距離とも思えないのに、そこにいるのが3体の獣だと理解した。

でかい犬……狼って奴なのかな。

少なくとも、愛玩犬が巨大化したようには視えない。

随分と精悍な面持ちである。

距離を詰めるに従って、人が3人、絡まれているのが理解わかった。

サイズ差がエグい。

なんだよ、いくらあの人間が子供みたいだとは言え、それが見上げ

て尚余りある巨体って。

普通の大人でも見上げるサイズだぞ、あれ。

高さでそう感じるんだ、全長で言ったらもう、あんな人間近で見たらおっかねえよな。

何処か呑気に考えていた俺だったが。

それに気付いた時には冷静で居ることを辞めていた。

子供は、もうひとり居た。

魔物の足に踏まれて。

まだ動いていたその子供は、急に血を吹き出し、動きを止めた。

子供が死ぬ？ 死んだ？ まだ間に合うか？ 離れすぎているか

？

脳内に取り留めない言葉が散らばる。

視界が赤く染まった気がした。

「俺より若い奴を……」

考えは纏まっていけないのに、目は狼を見据え、身体はまっすぐに向かい、口は言葉を吐き散らす。

「殺してんじゃ無エよ!!」

落ち着け!

自分を叱咤する。

まだ、死んだとは限らない。

一応、ディアブロ仕様のポーションなら有る。

他人に使えるか不明だが、試す価値はある。

ウダウダ考えてる間に、距離は充分に詰まった。

子供を押さえつけている狼がコチラに気付いたが、もう遅い。

俺はディスイングレイドを発動させたまま獣の胴に横から飛び込み、その胴体に向かつてもう1つの魔法、スペクトラルブレイドを叩きつける。

感電効果を持つ雷の刃が数十、狼の無駄にでかい胴体を易々と切り飛ばし、予定と違う結果に俺はブレーキ（物理）を失い数メートル過ぎ去った所で慌てて推進魔法——ホントは違うけど——の噴出方向を強引に変え、無理やり停止させる。

反動で身体中が痛え。

残りの狼どもは既にこちらに注意を移し、1頭は飛びかかって来ていた。

あちら、随分と果敢な事だ。

もう一度スペクトラルブレイドを放った俺は、狼が細切れになった事を確認すると子ども達の方に駆け寄る。

残った1頭が俺の行動にどうするか悩んでいる間に、スペクトラルブレイドと同時に放っていたアーケイントレントの楔が頭部に炸裂し、吹き飛ばしていた。

弱い。

なんだあの脆さ。

「でーくん」も「えつちゃん」も構えてないどころか、イメージすらしていない。

だと言うのに、ブレイドで細切れになるわ、トレント一発で頭吹っ飛ぶわ、ちよつと弱すぎませんかね？

頭に血が昇ったとはいえ、勇ましく吠えちやつた俺が恥ずかしいじゃんよ？

あつ。

んな事言ってる場合じゃねえや！

「おい！ そいつは大丈夫か!!」

俺は何処からともなくポーションを取り出すと、倒れている子供へと駆け出した。

魔獣の1頭の胴体が細切れに変わった時には、何が起きたのか判らなかつた。

ただ夢中で、押さえつけられている仲間を助けたくて、強張る身体を強引に動かし、ぎこちなく駆け出していた。

他の魔獣の事など、頭に浮かぶ事もなく、ただ仲間の事だけを。

「おいー… おいー… しっかりしろよオー！」

駆け寄ったが、仲間は小さく呻くものの、呼びかけに応える事はない。

「おい！ そいつは大丈夫か!」

鋭い女の声にハツとして顔を向けて、初めて魔獣が討ち果たされている事に気がついた。

バラバラに切り刻まれた魔獣の破片と、頭部を失った魔獣の胴体の間を、その人は走ってきた。

凜とした声のその人は、黒衣の、鎧と言うには軽装で。

左腕にだけガントレットを付けているが、それより目立つのはその顔、いや頭。

口元だけが見える仮面のような物を付けているが、目が覗くような隙間も何もない。

のっぺりとしたそれはまるで前が見えるようには見えないが、こちらへと真っ直ぐに走ってくる。

「あ、ああ、へ、返事が無くて……」

質問に対して遅れて返事を返すも、声は上擦り震えている。

このままでは、仲間が死んでしまう。

街まで運ぼうにも、間に合いそうにない。

助けてくれた人に答えようとして状況を考えた途端、涙が溢れる。

どうして。なんで。

いつもと同じ仕事^{おな}。

危険なんか無かった筈だ。

なのにどうして。

後悔しようにも無理をした訳でも無く、いつもより遠出した訳でも無い。

いつもと同じ、愚痴を言いながら薬草を採取して、帰って報告するだけの、いつもと同じ日だった筈なのに。

「落ち着け」

静かなはずのその声は、少年の絶望を叩き割るように響いた。

肩に置かれた手は思いの外力強く、自分の横を通り過ぎるその横顔

——仮面ではあるが——は不思議な安心感を与えてくれた。

返事が無いとか、ヤバいか？

意識が無いなら、ポーションを飲ませるのも簡単では無い。
内心がザワつくが、俺が慌てても仕方がない。

涙と鼻水でえらい事になってるガキの肩に手をかけ、出来るだけ優しくその横を通り、倒れている少女の傍らにしゃがみ込むと、その顔を覗き込む。

目は開いている。こちらを見ているのか、目が小さく動く。

辛うじて意識は有るのか。

酷い状態だが、しかし、これなら助かる。

今なら、助けられる。

俺は座り込み、なるべくゆっくりと少女の上体を起こすと、片手でポーションをその口元に運ぶ。

「飲め。ゆっくりで良い」

優しく言葉を選んでも、伝わるか判らない。

短く、分かりやすく伝えてやりながら、その口にポーションを流し込む。

一気に流し込んで咳き込んでみずいので、あくまでも少しづつ、ゆっくりと。

一口でいい、まずは一口飲んでくれれば。

祈るような気分の俺の視界で、少女の喉が小さく上下する。

飲んだ……！

少し間を置いて、また一度、そして続けてもう一度。

確実に、ポーションを飲んでくれている。

ディアブロ3のポーションは、数種類有るものの、基本効果はほぼ同じだ。

体力回復効果は、最大HPの60%。

俺のポーションは副次効果として、操作障害を7秒無効化する効果がある。

経験から言えば、操作障害を受けている時にはその効果を思い出すことはない。

当然、有効活用したことはないが、それは今はどうでも良い。
今気になることは2つ。

まず、ポーションは効くのか？

そして効いたとして。

使用したポーションは、ちゃんと補充されるのか？

効果の方は、すぐに判明した。

ゆっくりとだが、少女の目に光が戻る。

「……聞こえるか？ 聞こえるなら、自分で持って飲んでみてくれ」

俺が少しゆっくりと声を掛けると、少女は直ぐに理解し、両手でポーションの瓶を持つとゆっくりと飲み始めた。

うん、問題ないようだ。

あと、今ので言葉が通じると判断して良いだろう。

見守る先でポーションを飲み干した少女が、おずおずと瓶を差し出してくる。

……かわええ……。

緊張の反動か、気が緩みに緩む。

って言うか、その可愛らしさでその動作は反則でしょうがよ。

夢だからって、抱きしめちゃうぞ。

夢だし、良いよな？ 俺も今は、見た目女な筈だし。

筈だよな？

「あの、有難うございます」

葛藤しながら瓶を受け取った俺に、少女は身体からだを起こして小さくお辞儀すると、立ち上がって仲間の方ほうへ。

……惜しいことしたとか、全然思っていないよ、ウン。

泣いてねえよ？

ちらりとポーションの瓶に目を向ければ、瓶の中には徐々にポーションが貯まりつつ有る。

使用制限は無い代わりに、再使用までに存在する30秒のクールタイム。

その正体は、ポーションが瓶いっぱいになりまで戻る時間だった、と言うことか。

貯まってる最中に試しに蓋を外そうとしたが、固定されて外せなかった。

貯まりきるまでは使用できないらしい。

まあ、惜しいと思つたところで、どうせ夢なんだけど。

立ち上がって砂を払い、振り向けば、仲間と抱き合つて泣いている少女。

まあ、間にあつて良かった良かった。

「あまり無理はしないでくれよ？ このポーションは身体からだに優しいが、その代わり完全に回復するわけじゃない」

何となく微笑ましく思いながら、声を掛ける。

「怪我は消えると思うが、体力の方は6割程度しか回復しない。死にはしない、程度のモンだ」

そう言うと、泣いていた少女がこちらに振り返る。

こうして見ると、12〜3歳つてところか。

保護欲を掻き立てるね！

女性的魅力まではまだ数年かかりそうだけだな！

割とロクでも無いこと考える俺に、少女は改めて頭を下げる。

「危ないところを、本当にありがとうございました」

礼儀も弁えているとか、もうね。

俺よりしっかりしてないか、この子。

「ありがとうございました！」

周りの子供達も、一斉に頭を下げる。

何だよ何だよ、おいちゃん照れるぞう？

「あー、気にしないでくれ。たまたま通りかかって、運良く間に合っただけだから」

照れ隠しに指先で頬を掻こうとして、仮面で突き指しそうになる。

うーん、慣れねえ。

「あの……」

忌々しげに指先を眺める俺に（表情はわかるまいが）、先程俺が肩を叩いたガキ……少年が声を掛けてくる。

「ん？ どうした？」

気のいいオッサン全開で応える、

耳に入る自分の声の違和感が凄いが、どうせこの夢の間だけだ。

「というか、目を覚ましたらこんな夢を見ていた事を、覚えているかどうかも怪しい。」

「病院に行こうと思ってた事だけは、しっかり覚えておかなくては。仲間を、助けてくれて本当にありがとう！ ああ……お姉さんは冒険者ですか？」

少年の瞳が、心無し輝いて見える。

冒険者？

「いや、冒険者とは何か、というのは、それなりに知っているつもりだよ？」

「だがしかし、俺は何かと問われたら。」

「物流業者？ 接客業？ いや、それは現実の俺の仕事か。」

「んじゃあ、この夢の中では？」

「ディアブロ3では、単にウィザードだった。」

「自分の職業が何かとかいう問答する余裕があったら、敵を殺せ！ っていう世界だからなあ、あつこ。」

「さて。どう答えた物か。」

「ああ、冒険者……では無いな。俺はウィザードで、旅人だ」

「これ以外、答えようが無い。」

「ウィザードなんて単語が通じるかは不明だが、まずは冒険者であることは否定しておく。」

「つまり嘘は、大体面倒事しか呼んでこない。」

「素直が一番だ。」

「旅人……！ じゃあ、街へ行くの!?!」

「少年の間に視線を巡らせれば、青空の下、少し遠くに城壁が見える。あそこが、街か？」

「期せずして、質問に対して質問で返してしまった。」

「ああ！ 俺達の街だ！」

「答える少年はそんな事を気にした様子もなく、輝かんばかりの笑顔で言う。」

「後ろでは他の少年少女がやはり笑顔で、少年の言葉に頷いている。キミたち、ちよつと人を信用し過ぎでは無いかね？」

こんな怪しい仮面被^{かぶ}つた人、信用しちやダメでしょうが。全く、眩しい子供達だ。

「そうか……。行く宛が有る訳じゃなし、立ち寄るのも悪くないか」ハッキリ言えば行く宛など無い。

というか夢だしな。

「じゃあ、一緒に行こう！ お礼もしたいんだ！」

元気を取り戻したらしい少年と仲間たちの笑顔を踏みにじるとか、これ無理だろ。

せつかくだし、感謝されていい気分が目をさますのも悪くないかもな。

俺は特に深く考えもせず、少年の提案に頷いていた。

所で、こう、異世界っぽい所に居るとき？

よく有る、アイテムボックスとか、便利アイテムって付き物じゃない？

ディアブロにそんな便利アイテム無いだろ、なんて考えてた俺だけど、冷静に考えてみた結果。

あるわ。

あのゲーム、そんな説明なんぞ当然^{とうぜん}のように無いが、考えてみたら一度戦場^{フィールド}に出ると、結構な数のアイテムを拾って帰れる。

よくあるラノベみたいに、無闇に容量が多いわけじゃないが、無くはないのだ。

というか、俺が思ってるよりも大きい可能性すら有る。

なぜかって？

君は、約50億枚の金貨つてのがどれくらいの量なのか、理解^{わか}るか
ね？

俺はワカンネ。

何も考えずに出そうもんなら、どれくらい広がるのか分からないが、そこその量だろうというのは想像できなくもない。

そんな物まで持ち歩いてて、かつ、この状態で保管箱にもアクセス出来るため、合わせればかなりの容量が入る。

流石は「横着者」のこの俺の夢、保管箱アクセスがどこでも可能ってのはポイント高い。

それが何の自慢かって？

違いよ、自慢じゃなくてな。

倒した狼……魔獣らしいが、この死体を持って帰りたいて子供達かな？

ギルドに報告すれば、良い小遣いになるんだと。

生活も色々大変なんだろう。

袖触れ合うも他生の縁、っていうしな。

ギルドとやらまで、運ぶのを手伝うことにしたのだ。

胴体を斬り飛ばした方と正面からバラバラにしちゃった奴は、拾えるものは拾って、ぼつちい部分とか細かすぎて持っても、って部分は焼却。

放つとくと他の魔獣が寄ってきたり、腐ると内臓は瘴気を放ったり、とかで危ないらしい。

通常火力のデイスインテグレイドで、あつという間に灰にしてやった。

頭を吹き飛ばした方は、そのままアイテムボックスに放り込んだ。

飛び散った脳漿やら頭部パーツ類も、念の為焼却。

目ん玉は売れるかもってんで、回収してある。

……俺の装備類に、変な匂いとか着きやしないだろうな？

今更心配になってきた。

そんな感じでデカ犬の死体まるまる1体プラス細々としたパーツ類をアイテムバッグに収めたが、これでもまだ多少の余裕が有る。

初めてアイテムボックスを見た（見えないだろうに）少年少女の尊敬の眼差しにこそばゆい思いを味わいながら、彼らの案内で街へと向かうのだった。

街の入口、まんま砦門なそこで衛兵に魔獣の出現を報告する少年冒険者。

訝しむ衛兵たちの前に、少年に請われて俺は魔獣の死体を出し、検分してもらおう。

結果、確かに魔獣だと言うことで、防壁の外の警戒を強くする事を決定してくれた。

一方で、俺たちはそのまま冒険者ギルドとやらにも報告しに行く事に。

そうする事で、各冒険者達に注意喚起と、優先討伐依頼とやらが出されるらしい。

その辺の事は1個も判らないので、少年少女におまかせである。

俺と言えば、初めて訪れる異国情緒と、冒険者ギルドとやらの活気に当てられ、お上りさんよろしくあちこちを見回している。

「あの、お姉さんは、冒険者にはならないんですか？」

ポジションを飲ませてあげた子がすっかり元気になった様子で、目をキラキラさせながら問いかけてくる。

冒険者ねえ……。

出来ればおいちゃん、危険な事はしたくないけどねえ。

ディアブロ3のプレイヤーが今更何を、だって？

あのな。

ゲームはゲームだし、あれは斜め見下ろしだから出来るようなものだ。

FPS視点でディアブロ世界とか……いや、意外と有りかも知れないが、俺は泣く自信がある。

とか言いつつ、興味は無くもないのでちょっと想像してみる。

……やっぱ泣くわ。

想像しただけで怖すぎだろうが。

おつといかん、目の前の天使を無視し過ぎだ。

「冒険者か……」

とは言え、どう答えたものか。

というか、この少年少女は何を期待しているのか。

……うーん。

一緒にパーティ組んでとか、そういう事なのかなあ。

どうせこの夢だけの話だし、うーん。

登録するだけして見せても、良いかもな。

「悪くはないな。登録は、此処で出来るのか？」

少年少女の顔が一層輝く。

そんなにか。

というかおいちゃん、こんなに子供にモテた事、今まで一度も無いからどう接したもんか判らん。

少年に手を引かれ、俺はさつき少年たちが魔獣について報告し、魔獣の死体の買取を申請したカウンターへと再び着いたのだった。

「はい、ご記入はそれで大丈夫です」

書類の記入とか、こんなに手こずると思わなかった。

文字が読めるのは助かるが、これ、アルファベットだよな？

というか、もつと言えば……これ、英語だよな？

英語なんか理解わかるか！ と思ったが、まあ、一応読めない事もない。というか、言語は英語なのか？

俺、英語出来ない人ですけど……。

なんで意思の疎通ができて……あ、そっか、夢か。

うん、確かに俺、英語に憧れてるけどさ。

みんな使ってるの、日本語にしか聞こえない。

こんなに都合よく英語を習得したと思ひ込みたいのか、俺は……。

1人で恥ずかしく、情けなく思えて来て赤面してしまう。

仮面っぽい頭部装備で、本当に良かった。

「それでは、登録料は銀貨3枚になります」

1人で勝手に恥ずかしくなっていた俺の耳に、ご請求の音が滑り込む。

銀貨3枚つすね。

先程買い取ってもらった狼の代金（5人で山分け）の中から、3枚を渡して無事終了。

狼を持って帰ってよかつたぜ、危うく少年に金を借りなきやいけなくなるどころだった。

この夢だけの来訪だろうし、改めて返しに、なんて来れなくなるかならな。

踏み倒しはイカン。

はしやぐ子供達の輪の中で1人頷いていた俺は、背後に立つ気配と子供達が静かになった事に気がついて振り返る。

「なんだあ？ またガキどもが寄り付いてんのか。それになんだ、この怪しい風体の女は」

わかり易い程に人相の悪い巨漢が、俺達を見下ろしていた。

「おい、返事くらいしろよ。お前は何だと聞いてんだ、女」

さつきまで騒がしかったギルド内が静まり返り、子供達は顔を青くしている。

こいつはそれほどにヤバい奴なのか？

しかし、俺は知ったこっちゃない。

と言うか、ハッキリ言っつてこいつの態度が気に食わない。

「返事して欲しかったらそれらしく謙れ、^{へりくだ}このハゲ」

気に食わないから全力でケンカを売る。

別にハゲてないのは見れば判るが、大抵はハゲと言われると怒る。

俺だつて怒る。

「なんだと……う？」

おー、分かりやすく怒ったなハゲ。

周囲は凍りついた様に動かない。

俺はさり気なく進み出ると、子供達に被害が及ばない位置へとさり気なく移動する。

ホントにあの子供達に被害が及ばないか、自信は欠片も有りはしないが、こういうのは気分だ。

「なんだ、バカなのか？ 耳が悪いのか？ もう1回だけ教えてやる」

俺は殊更にバカにしたように溜息を吐いて、バカにしたように口を開く。

「人様に返事して欲しかったら、立場を弁えてそれらしく謙^{へりくだ}つて、言葉を選べと言ったんだ。理解できるか？ ハゲゴリラ」

「テメエ……！」

おーおー、分かりやすくキレてやがるな。

バカが、お前の事なんざお見通しなんだよ。

こういう場面で絡んでくる奴は、雑魚ザコい三下って相場が決まってるだ。

顔を真赤にしたゴリラを挑発する俺の右手の袖を、誰かが引っ張る。

振り向けば、真つ青な顔の少年が震えて立っていた。

あー。なんか、コイツになんかされたことが有るのか。

余計に頭にくるな。

そんな事を考える俺に、少年は震える声で呟いた。

「お姉さん、ヤバいって、そいつ、いやその人」

まあまあ落ち着き給えよ。

そう思う俺の耳に、少年は言葉の続きを放り込む。

「その人、Aランク冒険者で……ここいらじゃ有名なんだよ……」

……はい？

Aランク？

まって？ ちよつと待って？

こういう場面の新人イビリは、低ランクのクズって相場が決まってるんじゃないのかよ！

俺の内心の叫びは誰にも届かないし、振り向いた先ではAランクゴリラが剣まで抜いて、やる気満々なのであった。

第3話 荒事はとても苦手なんです

冒険者ギルドで絡んでくるせいぜいが中堅止まりの三下冒険者。

そう思い込んで煽り倒した相手がAランク冒険者でした。

こんちわ、俺です。

先程手早く冒険者登録した時に、ランクのシステムについては説明されている。

俺はよくあるFランクスタートで、当然のようにAランクに向かつて登っていくわけだ。

そして、件の^{くだん}ゴリラ冒険者さんはAランクとか。

やってることが小物感満載なのに、これでAランクとか説得力がなさ過ぎて、逆に本当なのかも知れないと思える。

そのゴリラ冒険者さまには、ご丁寧に剣をこちらに突きつけて、ハッキリと殺意を提示して頂いている。

「覚悟は良いんだな、このクソ女……!」

「ハゲにクソ呼ばわりされる謂れは無^ねエんだよハゲ、判るか? ゴリラ語^ゴじゃねエと通じねエかハゲ?」

最早殺意しか無いゴリラの、やはり三下感満載の台詞に、俺は丁寧な煽りで礼を尽くす。

それにしても困ったものだ。

低ランク雑^ザ魚^コ冒険者だと思ったから真正面から喧嘩売ったんだが、Aランクかよ。

無然とする俺の様子にもプライドを刺激されたのか、ゴリラが動く。

無言で突き出される剣先。

だが俺はそれを躲しませず、真正面から受け止める。

俺が今なっている状態——ディアブロ3のウィザードと言うクラスは、防御が弱い。

所謂、紙^シって奴だ。

そんな俺が過酷なグレートリフト、只管深層を目指すストイックな世界で何となく戦えるのは、その防御をある程度、装備品に備わっ

ているスキルで補っているからだ。

大きな所で言えば、鷲座の胸当て。

これはプライマリ・リソース……要はMPが総量の90%以上を確保していれば、受けるダメージを50%軽減してくれるモノだ。

ウィザードなんて魔法使^{つか}ってなんぼ、MPなんて直ぐに90%を切る、そう思うだろう？

普通はその通りだ。

高威力の魔法はガンガンMPを使うのは、他のゲームと変わらな
い。

MP切れても戦う手段を確保するために、プライマリスキルなんていう、MPを使用しない魔法もある位なのだ。

しかし、そのMPの問題も装備品で解決出来る。

一緒に説明するとごつちやになりそうなので、今は「魔法を使い放題」になるスキルが有ると理解してくれたら良い。

要は攻撃し続けてもMPを90%以上確保することが容易で、つまりは気をつけてさえ居れば、常に被ダメージを50%カット出来ると言う事だ。

この条件を確保した上で。

「アッシュユナガールの血染めの腕甲」で障壁の力が90%上昇。

実はこの効果はキチンと検証したことは無いが、なんだか効果有りそうだからと言うだけの理由で採用。

そして、前にもちよつと説明した「カリニの後光」で、特定スキルで敵を感電させると5秒間被ダメージ80%減。

5秒とかすぐ切れると思っただが、試してみると、敵が居さえすれば効果が切れることは無い。

スタンさせる必要は、実は無いのか、或いは「感電」と「スタン」は別なのか、検証していないので不明である。

そして、夢の遺産の、エンシエントレジエンダリー1つにつき4%被ダメージ減。最大13個装備なので、52%減である。

薄^うつすらと思っ出した一つの適当な説明だが、俺ですらこの程度のダメージ対策は行っている。

だからこそ、化け物だらけのグレートタワーリフトを、ソロで100階層手前まで行けているのだ。

世界は当然のように広いので、俺なんかより余程硬い奴なんか山程いるし、全然自慢にはならないのだが、少なくともこの状態でダメージを受けると言う事は、俺の防御スキルを全部ぶち抜いてくると言うこと。

このゴリラにそれが出来たら、即謝ってトンスラである。

そんな攻撃、まともに食らったら死ぬ。

そういう意味で、テストとしては丁度良い。

俺はこの世界でどの程度のレベルなのか？

馬鹿げた理由で命懸けだが、どうせ夢だ。

失敗したら汗びっしりで目が醒める、それで済む。

そんな軽い気持ちで、全く現実感なんて持ち合わせていないからこそ。

俺は敢えて、正面から受け止めるのだ。

回避スキルが無いから、という理由もあるけどね。

「危ないッ！」

少年が叫ぶのと、俺の障壁がゴリラの剣を受け止めるのは同時だった。

少年、気持ちはありがたいが、警告はもっと早くなければ意味がないと思うぞ？

そんな事を思いながら、俺は微動だにせず。

ダメージどころか、俺の障壁を突破できずに空中で止められた剣を見つめ、ぼんやりと考えていた。

ダメだ。全く恐怖を感じない。

それは夢だからか？

正直、自分のスキルで空中に放り出されたり地面で摩り下ろされそうになった時の方が、よっぽど怖かった。

コイツ、Aランクって言ってたよな？ あれ？

ゴリラは攻撃が通用しなかった事で多少慎重になったようで、続げざまに攻撃してくるような事は無い。

思ったよりも考えている様で、なるほど高ランク冒険者というのは伊達では無いらしい。

だが、それじゃあ俺の障壁がどの程度のモノか、確認出来ない。もつとこう、キレまくりで躍起になって攻撃しまくって欲しい処なのだが。

仕方ない、もうちよつとだけ煽るか。

「少年……」

俺は少年の名を呼ぼうとして、名前を聞いていなかった事に思い至る。

なので、已む無く「少年」呼びだが、この場面では仕方ないだろう。

「え……う？ あ、は、はい！」

自分の剣が届かず訝しげだったゴリラも、俺が第三者に声を掛けた事に一層慎重になったようで、様子を伺うことにしたようだ。

隙だらけだとか斬りかかってこない辺り、意外では有る。

そんな感想は取り敢えず置いて、俺は湧いて出た疑問をなるべく簡潔に、少年に提示する。

「冒険者ランクAと言うのは……実はスタートランクの事か？ B、

Cと順番にランクが上がるとか、そういうシステムなのか？」

一瞬、目の前のゴリラですら、きよとんとした顔で俺に目を向けた。何を言ってるんだ、と言う処だろう。

一部で空気が凍った様にも見受けられるが、少年は比較的早く正気を取り戻し、答えをくれる。

「ち、違います！ お姉さんさつき登録してFランクだったでしょ！

Fから上がっていくんです！ 説明されたじゃ無いですか！」
だよね。

「なるほど？ 実は最大ランクがSで、Fスタートだけど依頼失敗が続いたり素行が悪かったりするとランクが落ちて、Aが最低ランクなんて事は無いんだな？」

そういう世界が有っても良いと思うが、俺の感想はそれこそどうでも良い。

「ちつ、違いますっ！ Aランクは、この街では最高ランクです！」

少年が慌てた様に答えてくれる。
なるほど了解。

というか、先にも言った通り受付カウンターのお姉さんに説明して貰っているの、実は理解出来ていたりしたのだが。

今のやり取りで目的を達成しつつ有る事が解り、ほくそ笑む。

(理解^{わか}った上で) 俺の発した質問が、ゴリラをそれなりに煽ったらしい。

でも、ちよつと足りないかな？

プルプル震えているが、まだ我慢出来て居るらしい。

思ったより辛抱強いね？

それじゃ、もうひと押しくらい行こうか。

「なるほど、先程のカウンターでの説明の通りで間違いないのか。このバカゴリラを見るに、俄には信じられないが。」

まずは、受付のお姉さんがちゃんと説明していたこと、仕事をしてた事を周囲に宣伝。

俺のせいで「ロクに説明もしてないのか」とか怒られたら不憫過ぎる。

「ふむ、しかし……Aランクの実力者、か。知性とか品位とか、そういう所もそうだが……。俺の障壁1つ破れない、傷1つ付けられないとは、随分な実力だな？」

仮面で表情が読める部位は口元だけ、そこを俺は意地悪く歪めて、せせら笑って見せる。

そして俺は、殊更にゆつくりと、ヘルメットを外して見せた。

ゲーム内では東洋系の、キツ目の美人だった。

これで仮面の下の素顔がリアルな俺の顔だったら笑いどころだが、まあ、どっかで鏡があったら確認しよう。

目的は、顔を晒すことじゃないのだ。

「ハンデだよ？　これで、俺の防御力は多少は落ちた。攻撃が届くかも知れないぞ？　非力なお前でもな」

防御効果4%ダウン。

こういうのを詐欺と言うが、一方で、こういう舐めた事する奴は大

抵口な目に会わない。

だが、態々防御力を落としてやったアピールはそれなりに効果が有ったらしい。

「……舐めやがってッ！」

これでもまだダメなら、もうちよつと煽んなきやと思つてたけど、この段階で乗っかってくれた。

正直助かる。

これ以上煽るとなると、どうして良いか正直思い付いてなかったのだ。

そんな俺の安堵に気付くことなど無く、ゴリラは狂つたように剣を振り回し、叩きつけてくる。

さて、どれくらいで俺の障壁が破られるか、確認させて貰おう。

障壁が破られた瞬間に発動できるように、スペクトラルブレイドを準備しながら、俺はのんびりとゴリラ乱舞を眺めるのだった。

10分程度殴られてみたが、一向に俺の障壁が割れる様子はない。

なんだこれ。

「く、クソッ！　卑怯者め……！」
ひきょうもの

10分間の全力攻撃で、息も絶え絶えに毒づいてくる。

「ハッ。こちらら歯牙ないウィザードだ。この程度の芸当も出来なければ、旅など出来やしないだろう？」

鼻につくように答えてみせるが、なんだか可愛そうになってきた。

悪いのはAランクのくせに三下感溢れるムーヴで人様の癩に障つて見せたこのゴリラなのだが、どうにもこう、いい加減弱者イジメしてる気分で居心地が悪い。

「もう良い。お前の実力は理解わかったから、もういちいち突っかかって来るような事が無ければ」

だから俺は、停戦を要求する。

いい加減面倒になったので、割と本心で。

「今回だけは見逃してやるよ」

……言い訳すると、飽きて来てて、すぐくどうでも良い気分で。

言葉の選別を放棄してしまい、思ったまま口にしてしまったのだ。あと、このゴリラの第一印象が悪すぎて、どうしても敬意を持つ気になれない、と言うのもある。

疲れ切っているのに、完全に激昂したゴリラは大きく剣を振りかぶり。

振り下ろすその右腕みぎうでに、俺は冷気を纏った数多の剣閃——スペクトラルブレイドを重ねる。

ただそれだけで、ゴリラの右腕みぎうでは細切れになった。

普通であれば血飛沫の舞うちよつとした地獄だが、「氷の刃」の効果で切断面を凍らせて出血を抑えている。

なので、見た目の凄惨さも、多少は抑えられている筈だ。多分。

また、今の俺の攻撃で、ある程度手加減出来ることが理解わかった。

あの狼に放ったのと同じく普段どおりに放っていたら、右腕みぎうでを狙ったとしてもそれだけでは済んで居なかつただろう。

一瞬で攻撃の要かなめを失い、床に蹲またって失くした右腕みぎうでだった物を掻き集め、絶叫するゴリラ。

汚い鳴咽が耳障りで、鬱陶しい、なんて考えるより早く、剣の柄つかでゴリラのコメカミ当たりを力いっぱいぶん殴る。

白目を剥むいて気を失うゴリラが床に崩れ落ちる前に、完全に興味を失った俺は仮面かぶを被り直し、少年達の方へと向き直る。

「さあ、腹が減ったし、何か食くいに行こうか」

声を掛けられた少年少女の顔色が悪いのは、きつと暴れるゴリラが怖おそかったからだろう。

まったく、困こまったゴリラである。

串焼きの肉を頬張り、パンに噛かりつく。

塩味の効いた、少し硬い肉だが悪くない。

あと、パンも硬いが、きつとこんな物なんだろう。

ちなみに、食事しょくじ時は仮面かぶを外している。

なぜなら、口元が開いてるとは言え食くいにくいのだ。

なまじ視界を塞がない謎技術なので、ともすれば仮面を付けていることすら忘れてしまう。

そうすると、仮面に串肉がべったり、とかありそうで、それを避ける為に外してあるのだ。

「あの……良いんですか？」

少女の1人が、恐る恐る問うてくる。

遠慮かな？

「あ、気にしないで食べて食べて。さっきの狼の報酬有るし、俺が奢るよ」

次の串に手を伸ばしながら、俺は少女にも食事を促す。

食わなきや大きくななんぞう？

セクハラ認定間違い無しの台詞なので、言葉にしたりはしない。

「あの、そうじゃなくて」

少女が慌てたように両手を振る。

おおん？

「あの、ノーラッドさんを……腕斬っちゃつて……」

ノーラッド？ それ誰？

と思ったが、腕を斬ったとなれば1人しか居ない。

いくら夢の中とは言え、通行人を斬りまくるとか、そんなデスペラードな事をしでかすような度胸はない。

「見た目で人を判断して横柄に振る舞うようなバカに、かける情けは無いよ？」

言いにくそうな少女に、俺は事も無げに言い放つ。

「アレはあのゴリラの自業自得だから、えーっと……うん、君が気にする事は無いよ」

名前を呼ぼうと思った所で、まだ4人の名前を聞いてないことを思い出した。

なんか、もう今さら聞きにくい。

まだ何か言いたげな少女に笑顔を向け、それから俺はわざと、ゆっくりと周囲を見回してみせる。

みんな目を逸らすが、さつきからコソコソこっち見てたの、気付い

てたんだよ。

「君達に何か手を出すようなら、今度はちゃんと殺すよ」

事も無げに言うと、少年少女よりも、周囲がざわつく。

なんだよ、このちびっこ……って程じゃないが、子供達を使って俺に何かしようって思ってたのかな？

この人数で？

舐めてるのかな？

思わず殺気が漏れてしまい、寧ろ少年少女が泣きそうになってしまった。

慌てて宥め、追加で串焼きを頼むと、俺は少年少女に断りを入れて席を立つ。

手近な人相の悪い男の襟首を掴むと、ソレを引きずってお外へ。

オハナシを終えて店内に戻れば、まるでお通夜のように静まり返った客達の視線に迎えられる。

わざとらしく見回してやれば、やっぱり誰も目を合わせてくれない。

同じ様にビクついている少年に「何が有ったか」聞かれたが、俺はニツコリ笑って一言。

「ちよつとオハナシしてきたんだよ」

それだけで、触れちゃいけないと思ってくれたらしい。

調子に乗って頼みすぎた串焼きを持ち帰り出来るようにして貰い、少年たちに渡す。

遠慮する少年たちに、そのうち立派な冒険者になったら、酒を奢れと言って押し付ける。

何度もお礼を言う少年少女に気を良くしながら、俺は彼らに案内された宿に意気揚々とチェックインし、手渡された湯桶ゆおけと手ぬぐいで簡単にからだ身体を清める。

異世界いせかいモノ名物、風呂の無い宿ってやつだ。

まあ、これも目を覚ますまでの付き合いだと、おおらかな気分で硬いベッドに横になった。

濃い夢だった。

きつと、此処で眠れば、現実で目が醒めるのだろう。

えつと、目を醒ましたらまず医者、か。

色々とストレスが溜まってたらしい、こんな妙な夢に逃避するくらいだから間違いない。

変にやせ我慢して入院沙汰とかになるなら、早めに医者に掛かっておくに限る。

大体、夢だつて言うのに妙に疲れた。

硬い寝床は寝付きが悪そうだと思つたが、俺の意識は特に違和感なく遠退いて行くのだった。

目を醒まし、備え付けのテーブルの上の仮面を眺め、窓に嵌った木戸を開け放ち、異国情緒溢れる通りを見やり、青空に視線を向ける。

うん、そんな気はしてた。

ただ、認めたくなかっただけだ。

妙に連続した長い夢だと思つたんだよコンチクショウ！

これはアレか、所謂異世界転生とかいう奴か？

いや、なんか違う感じもする。

まず、俺が本来の俺の姿ではない。

というか自分の顔が判らない。

その事に思い当たった俺は、室内を見渡す。

そして、壁に掛けられた小さな鏡を見つけ、歩み寄ると迷わず覗き込んだ。

そして数秒、言葉と思考力を失う。

ディアブロ3の女ウィザードの容姿は、アジア系の、大人のお姉さんだ。

いや、他の人は違う感想かもしれないが、俺はそう思っている。

それも、切れ長の目の、キツ目の美人さん。

なんか色々容赦の無さそうな見た目で、居た堪れなくなった俺は仮面を被せているのだ。

幾らなんでも気が弱すぎだろう、俺。

そんな美人さんが、今、鏡の中で。

なんか、面影は有るが、幾分……いや、随分幼気な、良く言えば……優しげと言うか。

将来は、あー言うキツ目の美人さんになりそうな、いいところ15〜6歳に見える、少女になっている。

これはどういう事だろうか。

昨日、まだ夢の中だと逃避していた俺は、自分の顔を見れなかった事から——仮面に反射して見えては居たが、曲面に映った顔は判断しづらいし——ディアブロ3のウィザード、あの見た目のままだと思いきんでいた。

ちなみにだが、ディアブロ3にキャラメイクなんて無い。

職業ごとにデフォルトで用意されているキャラクターを操り、モンスターとの殺し殺されを愉しむゲームである。

キャラクター？ 重要なのは装備だよ装備！

そんなノリなので、特にキャラメイクなぞ気にしたこともなかった。

それはさて置いても、この状況は不可解過ぎる。

まず、元の俺の姿でもなく、かと言ってディアブロ3の見た目ままではない。

だがしかし、現実の俺とゲームの使用キャラ、どっちの見た目に近いかと言われれば間違いなくゲームの方な訳で。

あのウィザードの娘とか妹とか言われたほうが納得出来る感はあるが、まあ、そのくらいには面影が有るということだ。

これはどういうことだろうか？

無い知恵を絞って考えてみる。

まず、1つめ。

ディアブロ3プレイヤーが複数転生してる関係で、見た目の変化が必要になった為に起こった現象。

つまり、転生？ 転移？ も含めて、世界側からの干渉でこうなった、と言う事。

これは色々と無理が有り過ぎる。

色んな無理をひとまず飲み込んで、その考えた通りの事が起こった

のだと仮定してみよう。

世界云々というより、もう神様とかそういうレベルの存在が意図的にやらないと、そんな事にはならないだろう。

少なくとも、俺はそんな存在に会ったこと無いぞ。

という訳で、この可能性は多分無いだろう、てき的な位置で保留。

保留にしているのは、俺だって少しは夢を見たいからだ。

で、もう1つの可能性。

こっちのほうがりそうので、かつ、俺にとって洒落になっていない可能性。

何らかの事故か病気かで、意識を失い、治療を受けている俺が見ている夢、という可能性だ。

事故にも病気にも思い当たるフシは無いが、事故なんてそんなものだろうし、病気だって大抵は急に発覚するものだ。

こちらの世界で目を醒ます直前の記憶は、部屋でゲームを始める直前だった。

そこで意識を失うなにかがあつたんだろう。

夢を見始めたのがその直後とも限らないが、夢を見れているという事は、誰かに発見されて医療施設で治療を受けていると言うことだろう。

……誰にも発見されず、失われる命が見せてる最後の楽しい夢、とかだつたら悲しすぎるから考えない事とする。

どちらも根拠がない。

なんでこの世界にいるのか、そもそもこれは夢なのか現実なのか、全く見当も付かない。

少なくとも、ディアブロ世界では無さそうだ、という事は判る。

だが地球だとしても、此処は何処かが判らない。

英語圏、ということだろうか。

そうなる意外と広いが、しかし。

文明の利器がないが、そういう文化レベルの地域なのだろうか。

窓から見た、通りを歩く人達の服装は馴染みの薄い格好だが、簡単なボロ布などでは決して無い。

鎧を纏った傭兵だか衛兵だかも見受けられるし、ソレより簡素な装備の者は、あれは冒険者だろうか。

文明レベルは俺の知ってる世界ほど高くは無いが、だからって無闇矢鱈と低くも見えない。

文字があり、服もきちんと身につけ、建物は石造りや木造、レンガ造りと様々だ。

……いやホントに文化レベルが判らないな。

街灯らしきはあちこちにあるが、電柱や電線は見当たらない。

地中敷設なのかと思ったりもしたが、それなら客を取る宿に電気を引き入れていない理由が理解^{わか}らない。

うん、昨夜は燭台でしたよ？ 寝る前に頑張って消したけど。

判らない。

夢か。

現実か。

どちらにせよ、この状況は長く続く可能性もある。

そう考えて行動したほうが良いらしい。

溜息吐いた俺は、この先の行動を決めるため、ひとまず昨日訪れた冒険者ギルドへと足を向けることにした。

無駄に持っている金貨50億枚、コイツの使い途が無いかも確認したいので、さり気なくチラ付かせて見ようとか考えながら。

第4話 日は醒めたけど醒めてない感じの新生活

意識不明で見ている夢なのか異世界に迷い込んだのか。

判断が付かないのでこの際、青空の下、昼間っから屋台の串焼きと蜂蜜酒^{ミード}を頂いております。

ミードって初めて飲んだけど、なんか薄くね？ 思った程甘くないんだけど？

俺、騙されてるとか無いよね？

宿を出てすぐ、真っ直ぐに屋台で酒を煽ってから、俺は冒険者ギルドに踏み込んだ。

居合わせた数人の冒険者に青い顔で道を譲られつつカウンターへ向かう。

何々どした？

俺、今日はなんもしてないよ？

「あの、あまり問題を起こさされては困ります」

カウンターに着くなり恐る恐ると言った感じで苦言を頂く。

だから俺は今日は、って放^ほつといたらこの件^{くだり}何回やることになるんだ。

「駆け出しの冒険者や子供に凄んで見せるのが模範的な冒険者の姿って意味か？ なら、俺も今後はそう振る舞うが？」

昨日の話だったら、アレは降り掛かる火の粉を払っただけなんだけど？

そう言いながら、これ見よがしに右腰の剣の柄に手を掛ける。

「い、いえ、そういう事ではなく」

カウンターのお姉さんは可愛そうなくらい萎縮して、慌てて否定する。

だが俺はちよっぴりムカついたので許してあげない。

接客の基本がなってないのはダメだ。

俺も接客は苦手だったけどな！

「んじや、どういう事かな？ 俺は売られた喧嘩を買っただけなんだ

が、喧嘩を売ったほうはお咎めなしなのか？ 俺だけ、頭ごなしに言われたら気分悪いんだが？」

意地悪く剣の柄を指先でコツコツと叩きながら、厭味つたらしく言う。

うわーい、もう、完全な八つ当たりだ。

自分でも判るが、妙な難癖を先に塗りつけてきたのは向こうだ。

八つ当たりだと理解^{わか}ってるが、この際だ、言っちゃえ。

「あ、あの、ええと」

受付お姉さんは、厄介者を完全に怒らせた、と、真っ青である。

……流石に可愛そうだな。

泣きそうになっちゃってるし。

「……もう良いよ、これじゃ俺が弱いものイジメしてる様にしか見えねエ。昨日のクズのマネしたって、面白くもねエからな」

俺は仮面を外しながら言う。

いや、日が高いのも有って、日中は暑いだよ、この仮面さん。

受付のお姉さんは俺の顔を見て更に顔色を青くしているが、なんだ？

そんなにマズいツラだったかな……自分で言うのも何だが、かなり可愛いと思うんだが……。

中身が俺じゃなければけどな！

「ちよつと真面目な話があるんだ。それなり偉い人、手が空いてないかな？」

そんな事は置いといて、俺は用件を済ましたい。

だけど、このお姉さんには話したくねエ。

端的に言えば気に入らないという、大人が使っちゃいけない理由。

いけないのだが、夢だかなんだか理解^{わか}らない世界で常識を云々するのも、時と場合に依るのだ。

面と向かって「お前じゃ話にならない」と言われた方は堪^{たま}ったもんじやないよな。

そうは思いながら反省の「ハ」の字も無い俺は、ちよつと真面目な顔でお姉さんを真っ直ぐ見る。

はよ呼んでこい、と。

お姉さんは「お待ち下さい」と言つて、椅子とか棚とか色々ぶつかりながら、奥へと消えていった。

「ハンスさん！」

午前中の冒険者ギルドは意外と忙しい。

朝イチで依頼を受けて、準備を整えて出かけ、なるべく早く戻つて酒にありつきたい。

そんな連中が意外と多く、そういった冒険者達で朝から冒険者ギルドは活気に溢れる。

ギルドの受付も、冒険者の実力が依頼に合っているか確認したり、任せられる仕事を吟味したりと、嵐のような忙しさに見舞われる。

そんな受付ラッシュが漸く収まりを見せ始めた時間。

副ギルドマスターのハンスは整えた髭を擦りながら昼食について熟考していた。

こないだの肉巻きパン、ありやあダメだったな。

味がどうの以前に、手がベタついて食い難にくいたら無かった。

オリバー自体は気の良い奴だし、あー言う突発的な思いつきメニューを出さなければ、腕も悪くは無いの……。

いつの間にか思考が昼食から屋台の主への心配事が変わっている。

「あ？ どーした血相変えて。オリバーの屋台が吹っ飛びでもしたか？」

そうだったら昼飯食えなくなるな。

そう面白くもなさそうに考えるハンスに、駆け込んできた受付役のラウラは青い顔のまままで告げる。

「あの、昨日の、例の冒険者が……」

「あん？」

すぐには思い出せないが、受付役が顔色を悪くする相手。

何が有ったのか、詳しく聞いてみる事にして、ハンスはその熊のよからだうな大きな身体をデスクに据え直した。

「……えー。お前、そんな事言っちゃったの?」

ハンスは溜息混じりに言うのと、額を抑える。

このトラブルメーカーは、何度目だ?

気が付くと冒険者を怒らせ、こうして事務所に駆け込んでくる。

とうとうつい先日には、怒らせちゃいけない相手を怒らせた。

その上に不正まで発覚した。

その件も話をしなきゃいけないのだが、先週からギルドマスターがまさにその件で出かけているので保留中である。

「ですが、問題を起こした新人の冒険者ですよ!! 今だって、仮面外して睨みながら……!」

自分こそがトラブルを引き起こしているとは微塵も思っていないラウラは、熱く力説する。

そう思うのならこっちに逃げてこないで、受付で追い返せばいいのに、毎回ビビって逃げてくる。

いや、出来ないのは、相手が悪くないと知っているからか?

ハンスはもう一度溜息を吐くと、ラウラに真つ直ぐ目を向ける。

「昨日のだったら、ありゃあ調子に乗ったノーラッドが悪いって言うただろうが」

Aランクにギリギリでぶら下がっていた、悪たれノーラッド。

でかい図体と馬鹿力で近所の鼻つまみ者ナンバーワンだったが、昨日登録したばかりの駆け出しに、いつものようにちよっかい掛けて返り討ちにあい、腕を失くして引退となった。

元より不正でAランクになったと噂のバカで、ハンスが何度注意しても態度を改めない。

しかも不正でAランクになったと言うのが事実であったため、ギルドマスターとも協議の上、近々冒険者登録を抹消する予定だったのだ。

協力者も共に。

「ノーラッドさんはこの街の数少ないAランク冒険者だったんですよ!」

妙にノーラッドに肩入れするラウラ。

ハンスは溜息しか出ない。

「Aランクねえ……」

彼女は知らない。

彼女が不正でノーラッドの冒険者昇格書類を偽造したことが、既にバレていることを。

そして、そのノーラッドの冒険者登録の末梢と同時に、彼女もまた、不正を理由に解雇される予定である事を。

寧ろ、解雇後の処分まで話が進んでいる事を。

Aランク冒険者は、往々にして街の誉れとして扱われる。

ちよつとした英雄という奴だ。

実力も問われるし、そうそう簡単に成れるものでも無いので、絶対人数が少ない。

そのAランク冒険者に認定されているとなれば、1目も2目も置かれようというものである。

さらに、そのAランク冒険者に気に入られ、専属に指名された受付は箔がつく。

Aランクの冒険者を指名で雇いたい者は大勢居るし、指名依頼を受けるのは冒険者が信頼を受けている証。

「そのノーラッドの指名依頼が、最近ギルドを通さずに請けられているんだが、何か知らんか？　なあラウラ」

勢い込んでノーラッドの肩を持っていたラウラが押し黙る。

「表立って依頼を請けたような記録は半年は無いのに、お前からは定期的なそこそこの依頼の達成が報告されてるよな？」

右手を軽く上げ、その動作で職員が数名動く。

2人が出口脇に構え、逃走を防ぐ。

更に2人が、ラウラの両側に立つ。

こういうタイミングとは考えていなかったが、これ以上はこの馬鹿を受付に立たせるわけにはいかない。

元より、ギルドマスターからの命令も出ているのだ。

ラウラが次に問題を起こしたら、直ちに拘束せよ、と。

「細かく全部調べたが、そもそもあいつが請けたような仕事の依頼は

入っていないんだよなあ。不思議なモンだ」

ラウラの両側に立った職員の1人が、わざとらしく書類の束をハンスに手渡す。

書類の一番上は表題らしく、「ノーラッド及び共謀のギルド職員の不正の証拠資料」の文字。

それがラウラにも見えるように、ゆっくりとハンスは受け取る。

「そ、そんなの言いがかりです！ 彼は、彼はこの街の英雄で、依頼もちゃんと達成して……！」

「その実績に疑問符が付いてるんだよ、ノーラッド専属受付さんよ」

ラウラが真っ青な顔で釈明というか、勢いで言えば逆弾効を試みようとして口を開く。

しかしその鼻先を、ハンスの静かな声を押さえつける。

「アルミールの山麓では、大型のフォレストボアの退治だったか？」

ひとつき
一月前の依頼だな」

紙束を捲り、比較的最近の「仕事」の記録を見る。

「おかしいな？ 確認に人を走らせたんだが、あの村じゃあここ半年程、そんな魔物が出たことなんて無いそうなんだよ」

手元の資料から顔を上げ、まっすぐにラウラの目を見据える。

「そんな筈はないです！ ちゃんと依頼があつて、報告も正しいものです！」

そう答えるものの、ハンスの視線から逃れようと視線が左右に泳ぐ。

「その依頼主いらいぬしに話を聞きに行つたんだが、そんな名前の住人が居なかったんだ。仕方ないから村長に話を聞いたんだが、そんな依頼なんて誰も出してないってハッキリ言つてたぞ。そもそも指名でAランクを呼べるような金かねなんか無いってよ」

ラウラの左隣の職員が頷く。

全く下らないことで、あちこち走らされたのだ。

ギルドの面汚しを糾弾する瞬間を、今いまか今いまかと待っていたのだらう。

「念の為に、村の人間、噂好きそうな子供にまで聞きましたかね。そも

そもフォレストボアなんて出てないし、Aランクの冒険者なんかが村に来た事も無いそうですよ」

だから、ハンスに報告する体でラウラの言葉の逃げ道を塞ぐ職員の声には、内容に反して薄っすらと棘が滲んでいる。

「指名の依頼となれば結構な額だ。Aランクとなれば尚更だが、その資金は何処から出たんだろうな？」

アルミールの山麓の村だけではなく、定期的に、ご丁寧に移動に馬車で半日以上掛かる村からの依頼を請けた記録が並んでいる。

その全ての村で、該当時期に依頼を出した所は無かった。

だが、ノーラッドの手には報酬が渡り、ラウラにも仲介料が流れている。

「それに、とある筋からな？ 最近は受付で指名依頼を請け負うかどうかを決めるか、と、問い合わせまであっちゃあな。調べない訳にはイカンのよ」

ハンスの目が鋭くなる。

本当なら2〜3日後に、ギルドマスターと一緒にノーラッドとラウラに処分を伝え、衛兵に突き出す予定だったのだ。

証拠も固まっている以上、予定が早まったが、変更ではない。

「そんな、そんなの言いがかりです。誰ですか、そんな事を言っているのは」

強がっているようだが、顔色は悪い。

元々気が弱く、気の荒い冒険者に手を焼く性格。

そのクセ思ったことをそのまま言ってしまう性分も災し、冒険者からの人気はゼロに等しく、依頼受付達成率がこのギルドでダントツに低い。

受付達成率は、受付役が冒険者の技量に応じて振り分けた仕事が、どの程度達成されたかを示す数字である。

冒険者は勿論自分の意志で依頼を選べるが、受付役がその冒険者のギルドカードの情報から依頼の適性を確認し、場合によっては冒険者に別の依頼を勧める。

実力不足等の原因で無駄に命を散らす事を失くすべく施行されて

いるシステムだが、分母となる依頼を受ける冒険者が居なければ、数字が上がるわけがない。

嫌われ者のノーラッドとつるんでいる上から目線の受付役、と目され嫌われていたラウラが居る受付には、人が寄り付く事は殆どなく、知らずに訪れた冒険者は手柄を焦ったラウラに無理な依頼を押し付けられ、当然のように依頼失敗も嵩んでいく。

少し考えればマズイことを繰り返していると解りそうなものだが、彼女にとって悪いのは常に周囲であり、依頼を失敗する冒険者だった。

「言いがかり、ね？ 侯爵閣下に直接言って貰えるか？

冒険者ギルドじゃもう、お前を庇えんよ」

ハンスはズバリと現状を突きつける。

この地方を治める領主の名がチラついた事で、ラウラの顔色が一層悪くなる。

突然の事——ラウラにしてみれば——に、咄嗟に返事ができず、過呼吸のように短いセンテンスを繰り返してしまう。

「侯爵閣下の使いに、随分横柄だったらしいな？ 俺もマスターもそんな話聞いてないから、釈明も数日掛かりだ」

実際には釈明ではなく、ただ只管頭を下げた。

単なる冒険者の依頼失敗なら事情の説明のしようも有るが、受付が領主の持ってきた依頼を門前払い。

挙げ句、「Aランクの冒険者の請ける依頼は私が決めます」と啖呵を切ってみせたと聞けば、平身低頭謝罪し倒すより他に、身の振り様が無い。

大方、ギルドにその依頼を流す前に、その内容を勝手に確認したのだろう。

前もって領主様に頼んでいた、これ見よがしに危険な依頼を見たラウラは、それをギルド側に届けること無く断り、突き返したのだ。

愚かにも、誰の依頼かを確認もせずに。

彼女だけが知るノーラッドの本当の実力では、その依頼の達成は絶対に不可能だったのだ。

多分そうなるだろうとは思っていたが、依頼自体は偽物ではない。だから、後日ノーラッドとラウラを呼び出し、ハンスかギルマスが直々にこの依頼を押しつけ、現地に向かわせる算段まで付けていた。監視付きで、である。

「実はノーラッドとお前の不正の調査はとつくに終わってて、近日中に逮捕、拘禁の予定だったんだ」

言いながら、ハンスはデスクの抽斗から、この地方の領主のものに加え、ギルドマスターと自分の署名も入った命令書をラウラに見せる。

それは、ノーラッドが反抗し暴れた場合に取り出すか、依頼現場へ向かう途中で逃走しようとしたら取り出す予定だったもの。

今はギルマスが不在の為、自分が代理で持っているもの。

「ホレ、逮捕命令書だ。さっき届いた」

ヘナヘナと崩れ落ちるラウラから視線を外し、ハンスは事務所内を見回す。

ハンスの視線を請けた職員2人がラウラの腕を両側から引いて立たせると、そのまま奥へと消える。

それを見送りながら、ハンスは目のあった、今手の空いていそうな受付役に声を向けた。

「アマンダ、受付へ行つて貰えるか？ 気の強いお嬢さんがお待ちらしいから、それなり丁寧にな。用件を聞いて、なんならすぐ俺に繋いで構わん」

直ぐに自分に繋げと言うのなら、最初から出れば良さそうなものだが、そこは冒険者ギルドとしての威厳が有る。

軽々しく頭か、それに近い位置に居る人間がホイホイと受付に立つ訳にはいかない、らしい。

急に話を振られた女性、受付役のアマンダはたまたま顔を出したただけだったが、仕事を抱えていた訳でもなく、急な仕事を厭うことも無かったので、直ぐに受付へと戻る。

先程のラウラと冒険者のやり取りを見ていたので、少なくとも誰を待たせているかは判っている。

ハンスは、本来はギルドマスターが居る時にやらせたかった衛兵への連絡の為に部下を走らせ、ラウラを押し込んだ商談用の小部屋に見張りを立たせ、一段と深い溜息を吐いた。

冒険者ギルドの問題児2名が昨日今日と連続で怒らせた新人冒険者。

……まあ、アマンダなら大丈夫だろ。

そこそこ人気のアマンダなら、上手いこと機嫌をとってくれるだろう。

それはそれとして、自分が出る事にはなるかも知れない。

いくら機嫌をとるとは言え、一度は怒らせているらしいからな。

ハンスは手早く今抱えている仕事を確認する。

幸いと言うべきか、急ぎの仕事は無く、今なら身軽に動けるタイミングだった。

「はいーいお待たせしました。ごめんなさい、今責任者がちよつと手を離せないものでして」

ありや。

お偉いさんは忙しいらしいが、さっきの受付のお姉さんまで別のお姉さんになっちゃった。

イジメすぎたかも知れんが、まあ、良いか。

アイツ、なんか嫌いだったし。

「あ、こちらこそ急に来てしまって。なんかすみませんね」

このお姉さんはなんか丁寧だから、ついこちらも丁寧に返してしま

う。やっぱり、のっけから挨拶ナシの頭ごなしは良くないよ、うん。

お姉さんはきよとんとした後、愛想笑いで答えてくれる。

うーん、可愛い系の大人なお姉さんだ。良いなあ。

「実は依頼クエスト請けようと思ったんだけど、その前に相談したいことが有って」

俺がちよつと情けない顔を見ると、お姉さんは不思議そうに首を傾げる。

あーもう、可愛いなあ。

「ご相談、ですか？ いちど、私が伺ってもよろしいですか？」

小首を傾げながら、お姉さんは相談に乗ってくれるらしい。

受付のお姉さんに話して、ここで解決する問題なら良いんだけど。

いやね、俺の持つてる金貨、使えないかなーってね？

だって無駄に50億枚もあるんだよ？

そのまま使えなくても、金として売れたりしないか聞きたかったんだ。

流石に50億枚出すような真似はしないけど、でも売るとなったらそれなりの数を出すことになるし、そうなるとそれなりに信用出来る所じゃなきゃ無理だろ。

とは言え、そもそも冒険者ギルドで買取して貰える訳でも無いだろうし、素直に相談して、上の人に繋いでもらうなりした方が良いか。

何処か、換金出来る店を紹介してもらえるかも知れないな。

そんな魂胆で、俺は懐から金貨を3枚取り出す。

「これなんだけど、この辺でこの金貨、使えますか？」

俺が机に置いた金貨を見て、そして手にとってしげしげと眺めるお姉さん。

あんまり驚いたりしてないのは、それどっちですか？

見慣れた金貨だから？

見慣れないからピンと来てない？

なんだかハラハラする俺に、お姉さんは事も無げに言う。

「はい、大金ですが、この辺りで出回っている金貨で間違いないです。でもこれがどうしたんです？」

おっと、確率が低いと思ってた方に当たったねえ。

ゲーム内の金貨だから、こっちで使えるか不明だったんだが、金で有るなら売れるかも知れない。

そう思ってたカマ掛けつつ相談しようと思ったんだが、普通に流通しているのと同じ金貨らしい。

それはそれで、一体どうなっているのか……。

都合が良すぎるのは、俺の見てる夢の続き、っていう可能性が跳

ね上がってすぐくイヤな感じなのだが……。

「いや、先日故郷くの金貨を商人に両替して貰ったんですが、金貨は中々使う機会がないですから……。なんだか日が経つに連れて不安になってきて……。騙されてたらどうしようって」

取り敢えず、こういう場合のために考えていた台詞を口にする。

とは言え、ホントにこの台詞を使うことになるなんて思ってた。た。

「あー、そう言う……。旅人さんなんでしたっけ？」

お姉さんは困ったように笑う。

「ええ、冒険者というのもし知らなかったんですよ。田舎の、小麦を作るばかりの村の出でして」

「あらあら、それはまた随分遠くから」

2人で笑う。

なんか良いなあ。

絶対、単なる接客スマイルなんだけども！

「じゃあ、お金の心配は当面ないんですが……。折角クエストですし、依頼クエストを受けてみようかな」

当面と言うか、物価次第じゃあ俺、働かなくても生活できる予感がある。

しかし、冒険者になったのに依頼クエスト受けないとか無いだろう。

良く理解わからんけど。

「なるほど、良いですね。今まで依頼を受けて頂いたことは無いんですよね？ でしたら……」

俺が軽い気持ちで言った事に、お姉さんはすんなり頷くと、低ランク用の依頼クエスト依頼書を幾つか提示してくれた。

それぞれの難易度、危険度と報酬など、色々教えてくれる。

愛想よく話を聞いて貰えるだけで、こんなにもスムーズに進む。

笑顔って、大事だね。

ハンスは報告を聞きながら、バカバカしさにまたしても溜息を吐く。

「じゃ、何か？ 商人に騙されてるかも知れないからって、金貨が使えるか確認しに来たと？」

今まで聞いた事が無い、などと言う事はない。

珍しくは有るが、前例がある事だ。

他国からの旅人が騙されてゴミを掴まされる、等も。

疑わしく思うのも当然とうぜんと言える。

「はい。話し方もどちらかと言えば丁寧でした。アレですね、礼には礼を、無礼には無礼を返すっていう、そんな感じですよ」

アマンダは見事にやってくれた。

問題児が絡んだとは言え、いきなりノーラッドの腕を切り飛ばす様な奴だ。

宥めて適当に話を聞き、自分に繋いでくれれば良い、そう思っていたが、和やかに話を聞き、最終的には薬草採りの仕事を斡旋したと言う。

いや、アマンダが見事と言うよりは、ラウラやノーラッドが相手を見下し、舐め過ぎたのだろう。

「と言う訳で、実は私も昨日の騒ぎは見てたんですが、話した感じはそんなに悪い人じゃないと思いますよ？」

アマンダの言葉に、ハンスは意外そうな目を向ける。

だが、考えてみればアマンダは受付としてそれなりに長いし、見て判断出来ても不思議は無い、そう思い直す。

「昨日も、ノーラッドさんには一応警告して、その上で、でしたから」

警告の仕方が、雑でしたけどねー。

そう付け足して笑うアマンダ。

「ただ……」

不意に、アマンダの笑みが消える。

「どうやってあんな細切れにしたのか、判りませんがね。私の目には、1回剣を振っただけにしか見えませんでした」

ハンスは頷く。

ハンス自身は見ては居ないが、居合わせた職員や冒険者の話を総合した報告は受けている。

剣の軌道と合わない、一瞬で咲くように広がった剣閃。
細切れにされ、凍りついた腕の残骸。

それは、まるで魔法。

「まあ、問題さえ起こさなきゃ、な？」

ハンスは自分に言い聞かせるように言うのと、何となく天井を見上げる。

もうじき衛兵が来る。

せめて今日は、これ以上の揉め事は勘弁して欲しい心境だった。

時間が経てば色々と落ち着くというか、諦めもつくわけ。

俺の現実が何処に有るかはさて置き、折角こういう状況だし？ の
んびりしてやろうじやないの、と意気込んだの草むしりである。

……のんびり出来て無くない？

「あ、リリースさん！ それ違うー！」

昨日の少年の1人、リーダー格のフレッドくんが駆け寄ってくる。

依頼を請けた俺とたまたま再会し……っていうか、お互い初級冒険
者だし、冒険者ギルドで顔を合わせるの不思議でもなんでも無い
か。

その流れで、一緒に採取に行くことにしたのだ。

あ、リリースってのは俺の名前って事になってる。

井原賢介、なんて名乗っても通じないとは思いますが、見た目女で男の
名前ってのも、という事で。

ゲームのキャラ名を名乗ることにしたのだ。

それにしてもあんまりな名前だけだな。

ニューゲーム時、名前に若干悩んだのだ。

「Surume Udon」と「Lilith」で。

まあ、こうなってしまうと、スルメうどんを選ばなくて本当に良
かったと心から思う。

まだしも、リリースの方が名前っぽいからな。

……だよな？

しかし、フレッドくんもそうだが、みんな薬草を見分ける速度が早

い。

なあにそれ、スキルか何か？

本人たちに言わせれば、単なる慣れなのだそうだが。慣れ過ぎだろう。

聞けばみんな12歳らしいが、何歳からこの仕事してるの。ていうか、12歳で働いてるのかよ。

おいちゃん恥ずかしくなってくるから、真っ直ぐ見ないでもらえるかな？

ポジション用の野生の薬草、最低10本6束、ポジション6個分からの出来高制。

初級の仕事って割に、要求数量が多くないです？

書き方で誤魔化されそうになるけど、60本って事よね？

俺がそう尋ねると、フレッドくんは苦笑いで答えてくれる。

「今は、ギルドの保管分がだいぶ少ないらしいんです。なんか、帳簿の数と実際の数が合わないとかで、急いで数を確保したいって話で」

おつとお？

事も無げに教えてくれるフレッドくんだが、その情報、ギルド内部の不正疑惑だよね？

気軽に話して良いのか以前に、なんでそんな話を知ってるのかな？それとも、案外フランクにそういう情報を開示してるんだろうか。

いや、幾らなんでも内部で不正が有ったかも知れないなんて話は、開示し過ぎだろう。

「なるほど、まあ、今だけ特別みたいな感じなのね」

キナ臭い話には近寄らないに限る。

俺は話を聞いていた体で話題を黙殺し、無理やり流す。

「そんな感じですか。普段だったら、10本1束が最低数ですから」
なるほどねえ……。

俺は素直にフレッドくんの話に感心しながら、他のみんなの手元を細かく観察して居た。

「フレッドくん、これは薬草で間違い無いのかな？」

そうして薬草の特徴らしきを覚えて足元の雑草の中を探り、らしい

物を見つけ出す。

根っこは残して、地面から3センチくらいのところから折り取る。こうする事で薬草はまた育ち、そのうち収穫出来るほどに戻るのだ。それで。

「こういうのが、生活の知恵なのだなあ。」

「あ、そうです、それです！」

フレッドくんが太鼓判を押ししてくれる。

よし。

アイテムを自力で拾った事で、その特徴を完全に記憶した。

……俺ではなく、アイテムボックスが。

理屈は不明だが、ディアブロッ3では同種の「消費系」アイテムは、1つ拾うと周囲数メートルの範囲の同じアイテムを自動で拾得してくれる。

きっと魔法なのだろうから考えても仕方ない。

重要なのは原理ではなく現象だ。

俺は意外と手近に有ったもう1本を、俺的に慎重に手折る。

それだけで、アイテムボックスの中に薬草が68本。

案外有るもんだな……。

つか、どのくらいの範囲の薬草を根こそぎにしたんだろ？

「あれ？ さっきまで沢山有ったのに、急に無くなっちゃった……？」

少し離れた所で、昨日狼に押し倒されていたカレンちゃんが不思議そうに呟く。

やっべえ。

そりやそうだ、固まって採取してるんだから、俺が一带の薬草採り尽くしたらこの子達の獲物はなくなるわけ。

俺は罪滅ぼしに、ちよつと離れた所で同じ事を数度繰り返し、大して時間も掛かって居ないというのに全員が納品してもまだ余る程度の薬草を掻き集めていた。

「山分けしよう」

そういう俺の声と、山と積まれる薬草に、採取姿勢の少年少女は声もなく俺を見上げていた。

1束銀貨1枚とは。

緊急事態故か、中々に太っ腹だと思うが……勝手な感想なので、当たっているかは理解^{わか}らない。

1人辺り6束納品、ジャンケンで勝ったフレッドくんとティアちゃん^{ちゃん}が7束づつ納品で、少年少女組はホクホク顔だ。

ピーク過ぎとは言え、(一応)午前中に出かけて昼過ぎに戻って来れたのはだいぶ早いと思う。

そういう訳で昼過ぎだ。
つまりご飯だ。

話を聞けば、銀貨6枚は1日の稼ぎとしては優秀なのだそう。

お昼と夜とを食べて、宿代を払っても余裕があるという。

「つて、宿？ え？ お家は？」

疑問をそのまま口に出してから、失敗したと思った。

だって、この年頃の子達が家じゃなくて宿で生活つて、それはつまり。

「あ……僕たち、孤児院の出で……」

あー。言わせてしまった。

つていうか、何？

孤児院出の仲間だけで生きて行くと決めての仕事で、昨日は死にかけて？

そんな境遇なのにハゲゴリラには絡まれて？

いや、アレに絡まれたのは俺か。

じゃあ良いか。

……良いか？

「そか。よし、そう言う事ならアレだ。お昼にしよう！」

なんか凄く触れにくい事に素手をつ突っ込んだんじやった感じ。

すごーく気まずい。

気分を変える為に、俺は手を叩いて宣言する。

何がどういう事かは判らずとも、腹は減っているご様子の育ち盛り達。

「仕事のやり方教えて貰ったから、今日は俺の奢りな！」
俺の宣言に、目を丸くして顔を見合わせる少年少女。
そんなに驚く事かな……?」

ギルド前の広場に並ぶ屋台の中に、「肉巻きパン」なるメニューを掲げた屋台があった。

屋号は……「オリバーのパン屋」?

パン屋にしちゃあ、なんか随分良いガタイだね?

戦士とMS乗りは引退するとパン屋になりたがるって言う、あれかな?

あと、ハゲが眩しいね? 輝いてるね?

それにしても肉巻きパン。

気になる。

食いたいと言う事ではなく。

見るからにベタついて食い難にくそうなアレを、誰が買うんだろうか?
想像するに、あの油、中に有るであろうパンにも染み込んでそう。
1個で充分、って気分になりそうだ。

……胃もたれで。

もつとキツチリ焼いて、切り分けておけばまだ……。

そこまで考えて、思考を停止させる。

深く考えてしまえば、アレを買うことになってしまっそうで。

興味が無くはないが、俺はなるべく普通のメシが食いたいのだ。

少なくとも、今日は。

いたいけな少年少女の視界から有害物を遮蔽し、他の屋台を冷やか
しつつ、俺達はワイワイと通りを歩いた。

なんだ、思ったほど悪くは無いね、異世界生活いせかいせいかつ。

夢かどうかの不安はあるけどな!

第5話 日常はいつも昨日の続き

若い子って良いなあ。

元気にいっぱい食べてる子を見ると、こっ、ふわあって気持ちで、見とれちゃうよねー？

あの、衛兵さん？　なんで構えてるんです？

さて、未成年者を不法に労働させている疑惑に巻き込まれ、なんとか疑いが晴れた俺です。

冤罪だと判つても頭を下げない衛兵隊にちよっぴりご立腹な俺は、ちよっぴり本気のデイスインテグレイドを直上に放射。

恐れ慄いた衛兵さん達に土下座を頂き、意気揚々と半壊の衛兵隊詰め所を後にした。

しばらくは青空を見ながら反省せよ。

子供達がびみよーに距離開けてるう……。

やめて？　おいちゃん子供だけに働かせるとか、そんな危ない人じゃないよ??

え？　そうじゃない？　街中で攻撃魔法使うのが怖い？

文句は俺を怒らせた人に言つて下さい。

そんなホンワカイイベントが有りつつ、午後からは完全無欠で暇になつた俺&少年冒険者達。

何となく色んな話が聞けそうな冒険者ギルド併設の酒場に足を向けつつ、気になつた事を聞いてみる。

「この街は……孤児は大きくなつたら、どういう仕事につくんだ？」
おちやらかなないように、少し声のトーンを落として聞く。

孤児、その生い立ちだけで負い目を感じる子も居るとか、よく聞く話だ。

産み落とされた子供に、罪なんぞ、無いってのに。

「え？　大工さんになつたり、読み書きができれば領主様の所で働い

たり。孤児院の手伝いをする人も居るよ？」

あれ？

俺が思ったより、なんというか色々仕事がありそうで、なんか悲観的な感じじゃないね？

「冒険者になって、将来は冒険者ギルドの職員、て子も結構いるよね」
「働いて、将来はお店を持ちたいって頑張ってる人も……」

「男の子は、冒険者とか衛兵さんになりたがるよねー」

衛兵隊も人気の職業ですか。

屋根吹っ飛ばしてごめんよ、衛兵のみんな。

でも冤罪だめよ？

しかし、話を聞く限り、なんというか暗い話は微塵も無いな。

昨日のあの……なんて名前だっけ？ ゴリラでいいか。

あのゴリラの当たりの強さは、アレはどっちなんだろう？

孤児に対するものか、新入りに対するものか。

「それはどっちもです、ノーラッドさんは、そういう乱暴な人だったの
で」

俺が聞くと、カレンちゃんがフンスと鼻息も荒く教えてくれる。

生粋のこの街出身の人は孤児に対しての偏見はないが、他所から流れてくる人が多い冒険者の中には、孤児を嫌う者も多いという。

「すぐ乱暴する人がいっぱい」

ティアちゃんも身に覚えがあるのか、嫌そうに言う。

「そういうのはアレだな。……舐められたくねエけど無闇に喧嘩売る
度胸もねエ三下が、確実に自分より弱そうな子供ビビらせて悦に入っ
てるだけだな」

殊更に声を大きくしたのは、目的地についてテーブルを確保したか
らだ。

なんでかって？

そりゃあ勿論。

無闇に喧嘩売る度胸もねエ三下が、確実に自分より弱そうな子供が
入って来たってんで、チラチラこちらを見てやがるからだ。

昨日の今日でアレだけど、子供に威張るしか能のねエ馬鹿に容赦な

んかしないよ？

「おう新入り、誰が三下だって？」

「お前だ馬鹿野郎」

何処かのテーブルから上がる声を、俺は叩き切るように遮る。

激昂したらしいそいつが立ち上がる音。

椅子が倒れる派手な音がして、直ぐに殴られるような音。

……え？ まだ俺何もしないよ？

「三下が凶星突かれてピーピー嘔くそってんじゃねえよ。捻り潰すぞ」

流星に驚いて振り向くと、熊みたいな大男がのっそりと立っていた。

状況を察するに、あの熊が三下を殴り飛ばした……らしい。

え？ 大丈夫？ あの冒険者、死んでない？

ていうか冒険者ギルドに熊が居るんですけど？

ちよつと冒険者、熊退治してー。

そんな事を考えて居ると、熊は静まり返った酒場の中を、まっすぐこちらに向かってくる。

なんで？

っていうかホントにだけエなおい！

本物の熊じゃねえのか？

なんだこの迫力!!

「……お前は、そつちの子供達とはどういう関係だ？」

熊が人語を喋った。

いや、さつきも喋ってたか。

俺は驚きもそこそこに、少年たちと顔を見合わせる。

少年たちも唐突な流れの変化に戸惑ったようだが、その質問には自信を持って答えられる。

頷き合うと、熊の方に顔を向け、俺達は同時に答える。

「友達だよ」

「仲間だよー」

まるで漫画のように、俺達は声を揃えられなかった。嬉しいけどなんだかショック。

でも仲間か。

それはそれで嬉しいね。

周りで見てた冒険者の中で、笑いが漏れる。

畜生、覚えてやがれっ。

「友？」

熊は、笑いもせず、俺の台詞を拾っていた。

そんな不思議な言葉だろうか？

「ああ。右も左も分からんこの街で、この子達が俺をここまで案内してくれたんだ。今日は俺のために、一緒に薬草採りにも行ってくれたしな。一緒にメシも食って、こんなモン、もう友達ダチだろうか？」

仮面メツトを外し、精一杯の笑顔で言ってる。

こういう時は、渾身のドヤ顔で決めるのが礼儀だ。

「一緒にメシも食って、こんなモン、もう友達ダチだろうか？」

ハンスは認識を改めることに決めた。

仮面を外しながら、あんな良い笑顔で言われては、妙な疑いを向けるほうが野暮に思えてくる。

子供達も、すっかり懐いてるようだ。

「そうか」

単なる無法者では無さそうだと聞いてはいた。

今さつき見掛けた小芝居こしばいは、子供達を守るために、敢えて自分ひとりに怒りを向けさせたのだろう。

無茶だし、考えも無い。

周囲の冒険者の実力も知らずに、下手すればこの場にいる全員に喧嘩を売る覚悟で。

そうでもなければ、ああも堂々と啖呵を切るなんて出来ないだろう。

自分より強い者が居たとしても、退ひかない。

早死にする馬鹿の考え方だ。

だが、それを自分のためでなく、友と定めた子供達の為を選ぶ。褒められたものではない。

だが、友として隣にいれば、これほど心強い者も居ないかも知れない。

「よく判った。だが、その友のためにも、無茶はするな」

子供達よりほんの少し年上と言ったところだろうか。

だからこそ、子供達も懐いたのかも知れない。

ハンスは思わず、その頭を強めに撫でていた。

「んぐあ!! 髪が、ていいうか痛^{いて}えよ!!」

ワタワタと、ハンスの手をどかそうと藻掻く様子に、たまらず隣のテーブルの女冒険者が笑い出し、笑いの輪が酒場中に広がっていく。

「俺はハンスだ。このギルドの副^{サブ}マスターをやっている。困った事があつたら呼べ」

頭を撫でる手を止め、握手を求めてそのまま突き出す。

しばし、ハンスの手を不思議そうに眺め、彼女はニヤリと笑うとその手に自分の華奢な手を重ねる。

「新人のリリスだよ。晩飯に困ってるんだ、助けてくれ」

ぬけぬけと言つてのける。

本当に、大した度胸だ。

「悪いが、厳しく接するのも俺の仕事の内だな。自分のメシは自分でなんとかしろ、新人^{ルキエ}」

「なんて厳しい社会だ、世知辛くて泣けてくるねエ」

ふてぶてしい受け答えは、既に中堅冒険者並だ。

ずっとこの街にいる気かは表情からは読みきれないが、この街に居てくれれば色々面白いことになるかも知れない。

それは、根拠のない予感。

実力次第では、色々仕事を振るのも良いだろう。

その前に、釘を刺しておこう。

そう思い、ハンスは心持ち居住まいを正す。

「まあ、程々にな。お前に暴れられると色々面倒だ。なにせ他所から流れて調子に乗ってる馬鹿はどの時間帯でも居るからな」

表面上、リリスは反応せず、笑顔のままだ。

「お前に腕を切り落とされるのは、ノーラッドだけで済ませて欲しい

もんだ」

ハンスにバカ呼ばわりされた、反応しかけた調子に乗っている自覚の有る冒険者の幾人かは、続く言葉に動きを止める。

Aランクの荒くれノーラッドは有名で、その有名人が腕を斬り落とされて引退したと言う事は噂として広まっている。

今のハンスの言葉は、ノーラッドの腕を切り落としたのがあの新人の小娘だと、そう告げたのだ。

その言葉を受けた新人は、表情を動かさずに応える。

「そいつは気分次第だね。腕だけで済むなら、ラッキーだと思って欲しいもんさ」

次にちよっかいを掛ける手合には、腕だけで済ませるつもりはない。

これで、それなりの釘になつてくれただろう。

新人だと思つて手出しすれば、タダでは済まない。

基本、冒険者というのは危険と隣り合わせの職業だ。

傭兵まがいの仕事もあるし、商隊の護衛ともなれば、野盗やとうの類たぐいと殺し合いになることもザラだ。

気の荒い者もそれなりに多く、酒の席での殺し合いは珍しい事でもない。

だが、余程でも無ければ、冒険者同士の殺し合いを裁く事はない。

それこそが、冒険者の自己責任の原則。

酒を飲むのも自由なら、酔つてケンカを売るのも自由。

返り討ちにあつて殺されるのも、お好きにどうぞ、という訳だ。

「まあ、幾らなんでも大量殺戮ともなれば冒険者ギルドちだけじゃなく衛兵も動くから、やりすぎるなよ」

リリスの胆力を気に入ったハンスがニッコリ笑つて言うが、言われた方は流石ほうに笑えない。

「アンタは俺を何だと思つているんだ……」

ハンスのハツタリだと思ひ込もうと必死な者。

注意が必要な実力者だと警戒を強める者。

俺おれっ娘っこという事実じじつにトキメキを押さえられないモノ。

様々な視線が、げんなり顔のリリスを凝視していた。

「はあく。なんか大変な訳ねえ」

隣のテーブルでヒトサマを思い切り、指差しまでして爆笑した金髪女冒険者のジエシカさんが少年たちの1人、おとなしいマシユークンの話を聞いて思う所があったのか、その頭を撫でている。

どうしても良いが、年頃の男の子の頭を撫でるのはやめたげなさい。結構恥ずかしいモンなのだよ。

「いえ、僕たち、どうせ成人したら孤児院を出なきゃいけないし、今から仕事するのも悪くないかなって」

割と、されるがままになっているマシユークン。

もしかしてアレか、君は年上のお姉さんが好きなのか。

……判る、判るぞー、その気持ち。

「んで？ ジエシカはんはこの街長い訳？」

エールを煽りながら、絡み酒チツクに俺は声を向ける。

というか、常温だつていうのに、エールつてなんだ、美味しいなコレ。

俺、ミードより好きかもしれん。

「長いっちゃ長いわね……もう1年か。色んなところ見たつて程生きてないけど、ここはいい街だと思うわ」

同じ様にエールを煽り、気持ちのいい笑顔で言い切る。

良い街……？

昨日からタチの悪い冒険者を結構見掛けたし、衛兵にも絡まれてあんまり良い印象無いんだが……。

フツ―はそんなモンなのだろうか。

「ジエシカ、お前は飲みすぎだ……全く」

ジエシカさんの隣で、真面目そうな金髪の青年、タイラーくんが苦々しげな顔で呟く。

タイラーつて名前の割に、真面目すぎやしませんかね？

コレでフルネームがジャステイ・U、とかだったら俺が爆笑する自信あるぞ。

「いやだつてさー、この子ら面白いじゃない？」

「否定はしないが」

酔って居るのか、ゲラゲラ笑うジェシカさんに、冷静に応えるタイラーくん。

ていうか、否定しろや。

なんだ面白^{おもしろ}いって。

「タイラーくんもあれかい？ ジェシカはんと一緒に流れてきたクチかい？」

俺だけが肴になるのも悔しいので、生贄を引きずり込もうと画策する。

こういうのは、寡黙だったりすると狙われやすかったりする。

マシユークン、君も気をつけようね？

「タイラーくんって……。いや、俺はこの街の出^でだ。ジェシカとは出会って1年になる、のか？」

その疑問形は俺には分からんて。

ジェシカさんを見れば、にっかりと笑っている。

「そうそう、私がこの街に来てすぐ出会ったから、もう1年だねー」

「ほうほう、その表情^{カオ}は、いい出会いだったみたいだねえ？」

ジェシカさんの笑顔を視界の端に収めつつ、真っ直ぐタイラーくんを見てニヤついて見せる。

タイラーくんは表情を動かささないで、しかしさり気なく視線を俺から外す。

おー？ 何だい初々しい反応じゃないのお？

完全なるオツサンモードでニヤニヤと、タイラーくんをイジる気満々な俺。

色々聞きたいことが有るよねえ？ ねえタイラーくん？

「タイラーは料理が上手くてね、外食を減らせて助かるんだよー」

ニコニコのジェシカさんは、上機嫌で口を開く。

「お前が無闇に外食をしたがるだけで、俺は普通だ。大して料理できる訳でもない」

対して、タイラーくんは冷静に応える。

うんうん、まだまだ序の口だもんねえ。

イイヨイイヨ。

「掃除も得意だもんね。お部屋が綺麗で助かるわあ」

おお、お掃除。

お部屋のお掃除する程の仲ですか。

いや、同じお部屋だから必然的にい？

ニコニコ顔のジェシカさんと、ニヤニヤツラの俺。

心底鬱陶しそうなタイラーくん。

どう反応して良いのかわからない子供組。

「お前は散らかし過ぎだ。服を畳むくらいしろ」

おお？

タイラーくんの反撃。

それは同棲を認めたに等しいが、面白いからもうちよつと突つっこ
う。

「おやおや。下着なんかもタイラーくんが畳むのかね」

質問がもう、セクハラのオツサンそのものだが、これは酒の所為だ。

俺はあんまり悪くない。

「そうだ」

だが、短く答え、タイラーくんは少し大きめの音と共に木製の
ジョッキをテーブルに置く。

つていうか叩きつける。

あれ？

「コイツ、毎度毎度人の部屋に勝手に入ってきて、好き放題散らかして
居るんだぞ？ 自分の部屋に帰れって言っても、今日は部屋を取って
ないとか、信じられるか!？」

あ、あれ？ なんか風向きがおかしいぞう？

「毎回1人分で取ってた部屋に押しかけられて毎朝注意されつつ違約
金払って、最近じゃ最初から2人分だ！ 無駄な金かねを使っているの
に、コイツは酔って帰ってくるわ宿代は払わないわ……!」

「お、おう」

ヒートアップするタイラーくんの勢いに押されきって困り果てる
俺。

ジェシカさんはニコニコ顔でエールのお代わりである。つていうか、ジェシカさんや、アンタ何してんの。

色んな意味で大物すぎるでしょ。

「大体お前は……！」

タイラーくんが俺への愚痴から、短いステップで本人への口撃に移ろうと、身体からだごと向きを変える。

おい、言つたれ言つたれ。

そういうのは本人にキツチリ言わないとダメよ。

俺はジェシカさんにはそういうの効かない方に賭けるけどな。

だが、彼の文句が口から飛び出すより先に、ギルドの扉が荒々しく叩き開けられた。

反射的に視線を入り口に向けた俺達、いや、その場のほぼ全員の前で、その男は荒れた呼吸を強引に整え、そして声を発した。

「魔獣まじゅうが！・魔獣まじゅうがこの街に現れた！」

俺を一時捕縛した衛兵と同じ装備のその男は、汗まみれの顔を拭おうともせず、それだけを叫ぶと、そのままカウンターへ向かい、案内係に率いられて奥へと向かって行く。

あの熊、ハンスと話をするのだろう。

魔獣まじゅう、ねえ。

随分と急なイベントじゃない？

俺はポーシヨンを空からになった自分のジョッキに注ぎ、残りを少年達と大人組に少しづつ分ける。

「酔い醒まし。これから仕事っぽいじゃない？」

言つて、俺が率先して飲み干す。

毒にも効くと思うから、アルコールも分解してくれるだろう。

勿論、試したことなんかないけどね！

子供組は酒飲んでないけど、なんかまあ、気分的な？

ともあれ、顔を見合わせた都合6人だったが、振る舞った俺が率先して飲んだのが効いているのか、割と迷いなく飲み干していた。

取り敢えず熊ハンスさんが出てきて指示を飛ばすだろう事が予想できたので、俺達は装備を確認しつつその登場を待つのだった。

案の定、すぐに熊の化身、副マスターことハンスさんが皆の前に姿を現す。

「おう、昼だつてのに飲んだくれがそれなりに居るな？ 結構結構」

流石にギルドの副マスター、魔獣まじゅうが迫る中、流石の胆力。

つていうか、魔獣まじゅうが何匹なのか判らないから、少なくとも俺は慌てようが無いのよね。

少年たちは不安そうで、カレンちゃんとティアちゃんは両側から俺の手を握っている。

かわええ……。

「魔獣まじゅうの群れがこの街の外に陣取っているそうだ。北門の先、ほぼ真北からこちらへ南下して来たらしい。大森林から出てきたんだろうな」

ほうほう？

「北門つてのは？」

小声で、ティアちゃんに聞いてみる。

「今日、薬草やくそう取りに出た門です。昨日、魔獣まじゅうが出たのも……なるほど、あっちが北ね。」

全然意識してなかった、ちゃんと方角は覚えておこう。

しかし、昨日のあの狼が出た方か……。

昨日の魔獣まじゅうも、その大森林とやらから出てきたんだろうか。いや寧ろ、今日出てきているのも同種なのか？

……アレがそのまま出てきたんだったら、正直全然怖くないんだが……。

折角、ディアブロ3では見なかった狼というか、4つ足系モンスターナーなのになあ。

え？ 居る？ フォールンなんか？

森のハンター？ ええ？

……いや全然記憶に無いんだけど……居たのか、4つ足。

無責任にどうでも良いことを考える俺を他所に、説明は続く。

「マトは大型の獣型、見た目は狼だが兎に角でかいんだそうさ。そん

で赤い」

衛兵から受けた報告を、そのまま俺達に伝えてくれているのだろう。

「数は、目測で20匹以上。薬草採りの新人と日銭稼ぎが相当数やられたらしい」

あまりにも淡々と続く報告だったので、普通にスルーしかけた。
は？

被害者出てるの？

こんな感想が即湧いた俺は、甘ちゃんあまで間抜けなのだと痛烈に思い知らされる。

そうだ、昨日この子らが襲われて、俺が通りかからなければ危なかった、かも知れないのだ。

今日は俺達は、たまたま薬草採取を即終わらせて、昼過ぎには帰ってこれたから魔獣まじゅうを見る事も無かった。

しかし、普通に採取してたら、60本なんて時間が掛かる。

「ハンスさんや」

俺は優しくティアアちゃんの手を外し、一度ティアアちゃんに笑顔を向けてから前に向き直る。

「どうした、新人ルーキー」

話の途中だと言うのに、ハンスさんは律儀に俺の声を拾ってくれる。

「聞きたいんだ。魔獣まじゅうってのは、こども度々街の近くまで来るものなのか？」

離れた位置からとはいえ、その目が真っ直ぐ射抜くように、俺の目を捉える

何かを考えるように少し押し黙った後、ハンスさんは口を開いた。

「そうか、お前だったな。昨日、アレを倒したのは」

一度頷いて、ハンスさんは言葉を続ける。

「正直に言う。昨日今日報告された狼モドキは、初めて見るモノだ。昨日の段階ではその強さは疑問視する向きも有ったが、今日の被害規模を聞くと、厄介なモンだ」

疑問視、ね。

不快な苛つきが、小さな火種になって胸中に咲く。

まあ確かに、こんなチンチクリンな俺が、単身で倒せたんだ。

話を聞くだけだったら、まあ大した魔獣じゃ無かったと思ってもしょうがない。

なにせ、立場が違ったら、俺だってそう思っただろうから。

しかし、それでも昨日の時点で、魔獣出没の情報は衛兵や冒険者達の間で共有されていた筈だ。

軽くでも、注意喚起は出来なかったのか？

それが有るだけで、少しは違った筈だ。

勿論、それでも舐めて掛かる馬鹿は必ずいる。

特に、現物を見て相手した訳ではない他の連中は、俺より楽観視しててもおかしくない。

狼の魔獣と聞いても、それがバカでかいと聞いても。

「言っても、新人が1人で3匹殺ったんだろ？ 余裕じゃねえかなもん」

そう言っって鼻歌交じりに出かけて行くのが目に見える。

拳を固く握る。

どうしようも無く、苛つきが募る。

キツチリと情報が上がっていて、その上での話なら、と注釈は付くが。

俺と魔獣、どっちの実力も知らずに勝手な判断をしたのが、個人だったら正直知ったこっちゃない。

まあ、自殺志願者を止めるほど俺は優しくないし、見掛けても放つといったと思う。

だが、そもそも注意喚起する立場の者が、それを怠っていたら？

若しくは、その情報を出す方が俺の報告を軽視して、舐めていたとしたら？

俺はどうするべきだ？ どういう態度で居れば良い？

「被害はどんな程度なんだ？」

今だけは感情を押し殺して、冷静に問う。

他の冒険者達と連携して、被害を押し返してくれているかも知れない。

怒るにはまだ早い。

そう、自分に言い聞かせている俺の耳には、聞きたくなかった現実が流し込まれる。

「被害は、惨憺たるもんだ。子供を中心とした採取組は……全滅だそうだ」

左手を掴むカレンちゃんの手には、力が籠もる。

子供。カレンちゃん達と同じ、孤児院組なのだろうか？

親の手伝いをしたい、そんな市井の子供だろうか？

どっちでも良い。

どっちでも同じだ。

どっちだろうが、守るべき、これからを担うはずだった命だ。

「そもそも、俺が昨日報告した筈だよな？俺も午前中に薬草採り受けて出たけど、その時も特に注意なんか受けなかった。こりやどういう事なんだ？」

思わず漏れ出した俺の声は、まだ冷静で居てくれている。

内心は煮え始めているが、まだ、声だけは。

そう。思い返せば、俺は依頼を受ける時も、出かける直前でさえ。

魔獣ましゆうが出たから注意してくれとか、そういう事を言われていない。

実は引つかかっていたのだが、昨日報告したのは俺だ。

だから敢えて、言わなかった可能性も有る。

知っている筈だから、と。

だが、そもそも誰も、そんな情報渡されてなかったら？

注意すべき情報を持ってなかったら、普段どおりの単なる薬草採りと同じ気分で出掛けるだろう。

そんな子供の犠牲は、本人の不注意と言えるのか？

「今朝、俺は訓示を出した。魔獣ましゆうの出現報告があった、些細な事でもいつもと違うことがあったら留意し、身の安全を守ることを第一とするように、と」

ハンスは髭の下の口を歪め、拳を握りしめている。

俺と同じか。

押さえているのか。怒りを。

それは誰に対しての怒りだ？

「その指示を、勝手に解除した馬鹿が居る」

ハンスの声が罅割れて聞こえた。

限界まで感情を押し殺しているのか。

聞いた俺の方が、怒りで聴覚がおかしくなったのか。

沸々と煮えたぎり続ける俺の前で、ハンスもまた怒りを抱えて言葉を続ける。

「1人の受付役だ。面倒だし、魔獣まじゅうなんてそうそう出ない、そう言つて。俺にそう進言して、許可を得たと嘘をついて。他の受付にも注意喚起をさせ無かった」

続けられた言葉で、その内容で。怒りに震えるのは俺とハンスだけでは無くなった。

冒険者の幾人かが、ある物は表情を消し、ある者は分かりやすく表情を憤怒ふんぬに染めて。

「おかしいと思つたんだよ。なんで昨日魔獣まじゅうが出たつて報告が有つたつてのに、今日その警告が無えんだつてな」

ベテラン風の冒険者が進み出ると、ハンスの胸倉を掴む。

「その巫山戯た受付、ここに連れて来いや。どう責任取るつもりか、聞かせて貰いてえもんだぜ！」

事と次第に依っては、タダで済ませない。

いや、あの怒り様では、そもそも言い訳を聞き届けることが出来るかも怪しい。

俺も同じ心持ちだから、良く分かる。

顔を見た瞬間に、八つ裂きにしかねない。

「……そいつは今、別件で……ノーラッド絡みの不正で勾留中だ。近々、侯爵閣下の所へ送られる手筈だが」

ハンスはそこで、一度言葉を切る。

受付役の名前は出さなかったが、ノーラッド絡み、と聞いてピンと来た冒険者もかなりの数居るようだ。

直ぐ側そばに居るジェシカやタイラーの表情も厳しい物になっている。
ハンスは受付の名前は最後まで出さなかった。

冒険者は、あくまで、勝手に当たりを付けただけだ。

ハンスがそこで、居合わせた冒険者の、様々な怒りの相を、目に焼き付けるように見渡す。

一人ひとりの怒りを受け止めるかのように。

その目が、俺とぶつかって止まる。

「今回の件も、侯爵閣下に報告せねばならん。そいつは、いよいよ覚悟が必要な状況になった」

随分と、上品な言い回しをしたもんだ。

受付が手を抜いて大惨事、その責任を取って死罪。

今回の件だけじゃなく、色々やらかしてるらしい口ぶりだが、そんな事あどうだって良い。

罪には罰を、その原則は守つてると言いたいんだろうが、心底どうだって良い。

馬鹿1人縊くびり殺した所で、子供達は帰って来やしない。

だが、腹の虫は収まらない。

収まる筈がない。

「……で、現状は」

仮面を被かぶりながら、手短に問う。

返事を待たずに、暑さに外していた左腕のガントレットを再び纏まとう。

スキル構成から遠慮を取り去り、いつものゲームで見慣れた構成に戻す。

地形がどうか、周りの被害とか、知ったことか。

この時点で、俺の行動指針は決まった。

1人で出れば、何も問題ない。

「どうにか逃げてこれた連中は、必要なものは手当を受けて、ほかは衛兵隊と共に門で魔獣まじゅうの侵入を防いでいるそうだ」

当然、その程度は出来ていて貰わなきゃ困る。

冒険者側は不意打ちを受けた格好だろうが、衛兵隊は魔獣まじゅうの情報を

持っていた筈だ。

当然、備えはしていなければおかしい。

「門扉を閉じる事も視野に入ってるらしい、というか半分閉じてるぞうだ」

だが、どうにも半端な対応に思える。

随分と、お粗末な対処じゃねエか？

情報を持つての、余裕の対応にはどうにも見えない。

昨日の時点で、魔獣まじゅうの出現報告は、俺達が間違いなくしてあるのだ。ハナっから、防衛戦力を増強しておけば良かった話じゃねエのか？

「……昨日、衛兵の方にも報告した筈なんだが？ 衛兵は俺の報告無視して遊んでやがったのか？」

声に殺意が乗るのを止められない。

ここで殺気を放った所で、何もならない。

誰も助けられない。

だが、それでも言わずに居られなかった。

「流れの旅人の話は信用出来なかつたか？ それとも、ただの旅人ごと如きに倒せたケモノを、舐めてたのか？」

誰も、ハンスすらも応えない。

「舐めて掛かった挙げ句、子供見殺しか？ 随分ご立派なモンだな？」
振り返った数人が、俺の姿を見てすぐに視線を逸そらした。

「落ち着け。今から押し返す。ここにいる全員で——」
「うるせえよ」

ハンスの言葉を、俺は断ち斬る。

「まともに働く気もねえ部下を、事が起きるまで切る事も出来無かつた馬鹿に、今更何が出来るんだ？」

苛いらつきが、どうあっても収まらねえ。

俺は左右の手に、愛用の——この世界に来て、初めて実物に触れるというのに、不思議なモンだ——剣と魔力の源を手に、身を翻すと単身出口へと歩き出す。

大人は別に良い。

自己判断で、舐めて掛かったんだとしても自己責任だ。

死んだ所で同情すら無い。

俺自身にすら、それは当然のように適用される。

だが、子供は？

俺の報告を真剣に受け止めた大人が止めるなりすれば良かったのではないのか？

俺が、もつと危機感を持つて、外で見掛けたガキどもに声を掛ければ良かったんじゃないのか？

俺が街の外で警戒してたら、それで済んだんじゃないのか？

「これからするのは、タダの八つ当たりだ。ガキどもに注意喚起ひとつしなかったギルドと、まともに人の話も聞きやしなかった衛兵どもと、ガキを殺した獣どもに、文句なんざ言わせねエ。巻き添えで死にたくなかったら、大人しくすつこんでろ」

自分でも理解^{わか}るほど頭に血が昇った俺は、赤く染まりつつ有る視界の中で、思考はそれなりに冷酷だった。

冷静では無い。

いつも通りなんて、とても言えない。

理解^{わか}っているが、止める気もない。

背中に向けて言葉を発していた俺は入り口で一度止まると、肩越しに振り返り、仮面越しにハンスの目を見据える。

「副^{サブ}マスターさんよ。全部殺して戻ったら、キツチリ侘びてもらうぞ。俺にじゃねえ、顔も知らねエガキどもにだ」

それも含めて八つ当たり。

一番許せないのは、人任せにして安心しきった、俺の間抜けさ加減だ。

俺は自己嫌悪を抱えつつそれだけ告げると、後はもう振り返らず、昼前にも一度出た北門へ向かって走った。

渦巻く殺意に押しつぶされそうだった。

ハンスは浮いた冷や汗を拭う。

成程、怒らせてはならない手合であることは間違い無いようだ。

「おい。おいハンスさんよ。良いのかよ、新人^{ルーキー}にあそこまで言わせて

よ？」

見知ったベテラン冒険者のグスタフが、ハンスの胸倉を掴んだまま
でせつつく。

「事実だ。それに、あの怒り様よ。お前、アレの前に立って止める自信
あるか？ 多分、ノーラッドより酷い目にあうぞ？」

多分、殺されはしないだろうが。

生きてるだけ、と言う状態が、果たして幸運と言えるか理解^{わか}らない。

「冗談だろ。魔獣^{まじゆう}だつてあんな殺気出しやしねえよ」

グスタフがハンスを解放しながら言うと、周りの冒険者も文句を言
うのを辞めた。

この男は口は悪いが、面倒見もよく、他の冒険者にも1目置かれて
いる。

そんな男が言うのだから、黙るしかなかったのだろう。

それに。

「それは良いんだよ。寧ろ、俺達だつて怒ってる。だから俺達も早く
向かうべきだろうが！」

この男も、頭に血が登っていた。

リリスも子供が襲われたと聞いてから、明らかに殺気を押さええてい
なかった。

それは、グスタフも同じだったのだ。

昨日の魔獣^{まじゆう}出現の件を知り、昼から他の冒険者に注意する様に話し
て居た。

だが、グスタフがここに来る前に出た連中は、そもそも注意喚起す
らされていない。

ここで昨日の魔獣^{まじゆう}の件を知った時には、グスタフは直ぐにハンスを
を呼びつけ、怒鳴り散らした程だ。

子供が危険な目に有っているというのに、なぜ昨日の今日で警告ら
しい警告を出さないんだと。

ハンスはハンスで、警告を出すように職員に指示を出していた。こ
こで初めて、お互いの認識に齟齬^{そご}があると発覚し、ハンスは職員を問
い質した。

その後の顛末は既に話した通りである。

この一件で、ギルドは冒険者達の信用を少なからず失うだろう。

だが、それも仕方ない。

反省も後悔も、今はしている場合ではない。

今は兎も角全員で協力して、魔獣まじゆうを追い払わねばならない。

「その通りだ。新人ルーキーに遅れを取るな！ ただし！ 子供はここで待て！」

ハンスはハルバートを手に、大きな動作で声を張り、冒険者を鼓舞する。

「衛兵は街に獣を入れないように、門に張り付いて動けまい！ 俺達が斬り込む！」

リリースの殺気に当てられて居た冒険者達が、ガチャガチャと音を立てて身支度を済ませ、今はそれぞれが怒りの火を内に灯して次々にギルドを飛び出していく。

「おうハンスさんよ。全部終わったら呼んでくれ。俺もあの嬢ちゃんに、説教受けなきゃ気が済まねえ」

グスタフは一抱えも有るような大剣を軽々と背負い、出口からだへ身体を向ける。

「ああ。ぜひ頼む。俺一人じゃあ、怖くて仕方ない」

割と軽口でも無い事を言いながら隣に立つハンスの背中を、グスタフのベテランらしい力強い平手が叩く。

こうして、冒険者ギルドからの戦力が、北門へ向かって駆け出していた。

第6話 前略、救えませんでした。追伸、救われました。

ディアブロ3には、移動用のスキルが有る。

ウィザードで言えば、「テレポート」がそれに当たる

だがしかし、移動用として使用するには少々難があるのも事実で、その理由の最たるものがクールタイムの存在である。

その再使用待機時間は11秒。

それほど待たないと思えるかも知れないが、これが意外と長い。

本来は半画面程の距離を、緊急回避的に移動するものだが、ウィザードには——他のクラスは触ったこと無いので判らないが——そのクールタイムを「0」にする装備が存在する。

それが、エーテルウォーカー。

なんとも可愛らしい見た目のワンドだ。

そして、斜め見下ろしのディアブロ画面と違い、今俺はリアルな……いや、夢かも知れないんだよな、意外と深刻な……視界の中でその魔法を使用して気付いたことが有る。

視界が切れていない限り、任意の距離、任意の場所に跳べてしまうのだ。

気付いたのは今さっき。

エーテルウォーカーに持ち替えて飛ばうとした時に、飛べる距離が何となく、感覚で理解ってしまった。

だって、マーカっぽいナニカが出るんだもん。

上空のような、遮るものがないところでは流石に制限がありそうだが、今見合わす街の中では、俺は届かないと思える所がない。

これ、ディアブロが3Dとかになっても、こんな便利には使えないんだらうなー、と思いつつ、夢ならではの？ 仕様変更に使いながら慣れるように務める。

まず、使おうと思えば、跳ぶ先の予定ポイントにマーカが浮かんで見える。

改めてそのマーカーに意識を向ければ、跳躍完了。

なにせ今となつては真・リアル視点なので、3D画面どころの騒ぎではない。

感覚で掴めるので助かる。

あと、ゲームが違うが、「いしの なかに いる」を避けることが出来るのは大きい。

死因が物体融合とか、ゾツとしないものである。

……怒ってギルドを飛び出した割に、随分余裕だなつて？

この部分は後付だよ！ リアルタイムでこんな事考えながら激怒出来てたら、もう別の理由で医者に行かなきゃだろう!!

え？ 並列思考？ そんな人いるの？ 凄いな……。

というか、この時の俺は、もう本当に、感覚でテレポートを使ってたんだ。

目につく建物の屋根の上に飛び、建物の上から上を次々に渡っていく。

なるべく高く、なるべく遠くに。

こうして後付で文章を足さないと足りないほど、シンプルな思考で、淡々と。

ハッキリと脳裏に残っているその時の感情は、もう、あんまり言いたくないけど。

殺意、それだけだった。

数度のテレポートの果に、俺は防壁の上からそれらを見下ろす。

そうして、舌打ち。

何が20匹だ。

見る限り、その倍は居るように見える。

まあ、後から増えたのか。

忌々しいその獣共の群れの一角、何かを漁っている連中を見て、俺は迷いなくそこに跳んだ。

ゲーム内でのモーションと少し違うが、俺は跳んだ先に居る獣をテレポートの勢いで弾いて怯ませ、無防備な胴体をスペクトラル・ブレ

イドで細切れに斬り飛ばす。

その一撃はスキルの上乗せこそ無いものの、手加減はしていないので数体すうたいを巻き込み、纏めて肉片に変える。

そりゃあ、曲がりなりにもレベル70カレスト、パラゴンレベルPも1200超えだ。

ノーマルに出るかどうか程度の雑魚ザコ、相手になる訳が無い。

俺は続けざまにレポートからの体当たりを、或いは蹴り——本来こんな挙動はないが、スキルの現地改修って事にしよう——を数度繰り返し、狼どもを文字通り蹴散らしながら、ある物をアイテムボックスを駆使して拾い集めていた。

子供達の、無残な遺体。

食い散らかされ、バラバラにされているものも多い。

狼どもの餌にくれてやるには、俺の度量は小さすぎる。

せめて、街の中で葬ることが出来るように。

あらかた集めた所で、俺は上空経由で防壁の中へ戻る。

「貴様！ いや、どうやって外へ出た?! どうやって戻った!」

お偉いさんらしい衛兵が俺に駆け寄りながら怒鳴る。

それが、酷く癪に障った。

「うるせえな。人の話もロクに聞けねえクセに、質問の仕方も弁えねえのかよ」

仮面は外してない筈だが、その衛兵は明らかに気圧された。

それすらも、気に入らない。

ビビって狼狽える位なら、絡んでくるんじゃないよ。

「……子供の死体を回収してきた。今から広げる。手を集めて、弔う手配をしろ」

もう、丁寧に説明なんてする気分じゃない。

何か言いかける衛兵を無視して、俺は地べたに遺体こどもたちの欠片を並べていく。

酷く気分が悪いが、そのパーツの、どれとどれが組みなのか、「アイテム」として収容してしまった俺にはよく理解わかってしまう。

その凄惨な遺体をそれぞれまとめ、地面に、判明した名前を魔法で

刻んでいく。

デイスインテグレイドの応用だ。

並べた遺体は12人分。

回収できた部位はまさしく断片で、それぞれが人1人を構成するには圧倒的に足りない。

「こ、これが……」

衛兵が息を呑むのが分る。

「犠牲者で、死体の部分が残ってた者だ。他に居たかもしれんが、回収できる死体はなかった」

俺は、本来会った事もなく、名前すら知らないはずの子供達の死体の欠片を前に、簡単に説明するので精一杯だった。

そう、会ったことが無いから、「アイテム」として名前を知ることが出来ても顔は判らない。

これも、俺を含め、衛兵隊、冒険者ギルド、幾つもの重なったミスと油断が奪い去ったモノだ。

12人の名前を、俺は刻み込む。

「俺は昨日来たばかりの旅人だ。この街の人に、彼らを葬って欲しい」感情を漏らさないように苦労しながら、俺はそこまでを告げて、背を向ける。

「お前が……昨日の魔獣の報告をしたという旅人か……？」

その背に、衛兵の声が貼り付く。

どんな顔で、衛兵は俺を呼び止めたんだ？

「……だったら何だ？ 文句を言われる筋合いはないぞ」

振り返って顔を見たら殴りかかってしまいそうで、俺は姿勢を変えず、罅割れた声を絞り出す。

今は耐える。

直接的な仇は、今その防壁の向こうに居るのだから。

「済まなかった。報告は聞いていた」

反射的に、ワンドを強く握りしめる。

「……謝罪の相手が違うだろう。間違えるな」

それだけ言うと、俺は今度こそ、返事を待たずに防壁の上に跳んだ。

防壁の内側には、どうやら冒険者どもが雁首揃えて集まってきたようだった。

防壁にたどり着いた時には、外は戦争の有様だった。連なる閃光と爆発と衝撃。

まるで戦役で呼び出される魔道士隊が列を組んで大火球の魔法を放っているような有様。

それを、たった1人、単身で。

「ハンス殿！」

知らずに見とれて、いや、圧倒されているハンスの耳に、名を呼ぶ声が響く。

振り返れば、北門の監視と防衛を任されている衛兵隊の隊長が沈痛な面持ちで走り寄って来るところだった。

「これは……これが……そうか、リリースが」

ハンスは地面に並べられた死体群の前に跪き、僅かに祈りを捧げる。

全てが終わったら、その時に謝罪を。

「……警告を受けていたのに、活かせなかったこちらの落ち度だ」

衛兵隊長がハンスに頭を下げる。

しかし、ハンスはそれを偉そうに受け取ることは出来ない。

「いや、頭を上げてくれ。冒険者ギルドも取り返しのない失態を犯している。だが、その話は全てが終わってからだ」

少しづつ離れていく爆音が、押し上げられていく戦線を表していた。

ハンスはハルバートを抱え、門扉を抜けて防壁の外へ立ち、そして見る。

絶え間なく降り注ぐ幾つもの火球が魔獣ごと大地を叩き、砕く。

決して大きくはない体躯のリリースが、その剣を右手に掲げ。

大魔法を行使するその姿、その背はまるで泣いている様で。

ただ見ている事さえ、辛かった。

都合50頭、つてところか。

俺はアーケイントレントの発動を停止し、一息吐く。

アーケイントレントを止めたことで、流星雨メテオの発動も止まる。

魔物と戦っていたのは、時間にして、1分ちよつとだったろうか。

感情に任せて獲物武器を持ち替え、目につく端はしからトレントを叩きつ

け、メテオが降り始めてからは視界も緑に効かない為、ただただ撃ち続けた。

多分、実際にはもつと早い段階で敵の殲滅は終了していたと思う。

だがその程度ではとても心は晴れない。

憂さ晴らしの様に魔力を放出し、10分近くもの間、俺はトレントを放ち続け、メテオを落とし続けたが、それでも気持ちは一向に晴れなかった。

魔獣共は蹴散らして、だが俺の心は何も掴み取れなかった。

得る物の無かった思考で、ぼんやりと考える。

報告では20頭。

来てみればその倍以上。

数の確認も出来ない……訳はないだろう。

ということはつまり、増えたということ。

今まで、冒険者ギルドが把握していなかった魔獣が突然現れた。

北の大森林、と言ったか？

キナ臭い。

どう考えても人為的だ。

人かどうかはさて置き、意図的な物を感じるのには、俺が見もしない「そいつ」に罪を擦り付けたいからだろうか？

剣を強く握り、モヤついた気持ちに任せて北へ踏み出そうとした俺の背に、声が掛かる。

「もう良い。大森林は、改めて調査を入れる」
ハンスの声。

彼は、彼自身は出来る事を確実にしていた事は理解した。

だが、心の奥がザワつくのは止めようがない。

「人の話を聞きもしねえであれだけの死人を出して、お前の何処を信じりや良いんだ？ ああ？」

酷い八つ当たりだ。

自分で判るから、余計に苛つきが募る。

「今、森ごと消して来てやる。それで万事解決だ、そうだろうか？」

振り返ることはしない。

今振り返れば、気持ちが悪えそうで。

他人の所為にして楽になりたいが故に。

「森に生き、森に糧を得る者も居る。森でしか採れない種類の薬草類も有る。お前なら森を焼き払うことも容易いだろうが、許可出来ん」
声の調子から、近づいて来ていることが判る。

だが、俺は動かない。

動けない。

「簡単な警告ひとつ出せなかったギルドの副マスターさんが、誰にあなたの許可だよ。寝言はガキどもの赦しを得てからほざけ」

口が、まるで勝手に動いているようで。

確かに憎しみは有る。

だが、それは、ハンスに向けてのものではない。

向ける相手が違う。

「……確かに、俺は判断ミスをした。職員を信じたつもりで任せきり、確認を怠った結果がこの惨事だ」

ハンスは、俺の真後ろに立っている。

「だからこそ、もう間違えることは出来ん。お前が怒りのままに暴れる事は、許さん」

振り返った俺は、ハンスの腹筋に拳を叩きつける。

肉体的には非力とは言え、それなりのレベルの俺の拳は、だがハンスを巨体を揺らす事さえ叶わない。

「お前の許可なぞ居るか！ 子供を死なせたお前の！」
「そうだ」

悲鳴にも似た叫びが俺の喉から上がる。

それを受け止めたハンスの声は、悲痛だった。

「俺が殺した。だからこそ、もうこれ以上の失敗は出来ん。お前を含め、この街の冒険者に俺の失敗を押し付ける事は出来んのだ」

多分、きつと、ハンスはそんなつもりでは無かったのだろうけど。それはきつと、俺の聞きかただった言葉。

俺は間違っていないのだと、そう言っただけで欲しかった俺への回答。

それが解って、俺は。

酷く、気分が悪かった。

「宿に戻る。気分が悪い」

俺がそれだけ言うと、ハンスは道を開けてくれた。

「明日、ギルドに顔を出せ」

ハンスの声が聞こえたが、もう俺は返事を返す気力も無かった。

冒険者達が北門に着いた時には、街の外は聞いた事が無いような爆発音が連なっていた。

それも直ぐに収まり、フレッド達は門扉に走り寄ろうとして、地面の「それ」に気付いた。

バラバラになった手や足。

頭の一部、胴体の一部。

その地面に刻まれた名前。

それは、昨日、カレンが、そして自分になっていたかも知れない姿。胃の中味がせり上がってくるのを感じた時には駆け出し、少し離れた所で吐いていた。

涙がこみ上げる。

改めて自分の運の良さ、リリースが通りかかってくれた幸運に感謝する。

恐らく自分も気持ち悪くなっただろうに、追いかけてきてくれたカレンが背中を擦り、マシユーとティアも直ぐ側そばに居てくれる。

「ごめん……友達の名前だったんだ」

フレッドは消え入りそうな声で呟く。

彼が目にしたのは、彼らと同じ孤児院の子供の名。

地面に刻まれた名前と、転がっている右手、それだけで、間違いな

く本人だと理解^{わか}ってしまった。

意識して見ていた事なんて無いはずなのに。

その手のひらは、何故か妙に小綺麗で。

思い出すその背中を、カレンが抱きしめる。

言葉もなく。

他の仲間も、言葉もなく、ただフレッドの側^{そば}に居続けた。

ジェシカとタイラーもまた、他の冒険者と同じくその光景を目にしていた。

並べられた死体の断片と、その持ち主の名前。

今や開け放たれた門扉から覗く、連続して止まない爆発の連鎖。

吟遊詩人の歌う悪魔の、魔王の所業にも思えるその轟音は、ややあつて収まる。

聞いたところでは、冒険者たちが集まる前には魔獣は数を増やし、50に届こうかという程に膨れ上がっていたらしい。

その群れの中に飛び込んだ小柄な、仮面の女冒険者。

あまりにも華奢な見た目に衛兵が止めようとするも、彼らが動き出す前に魔法を放ち、数え切れないほどの火球を次々と撃ち放ったのだという。

俄には信じがたい話だが、衛兵がそんな嘘を並べる理由もない。

「ただの小生意気な小娘だと思ってたんだがな……」

タイラーが眼鏡を押し上げ、呟く。

「……あんなに怒るようには、見えなかったのにね」

ジェシカが、笑顔を少し曇らせて、その呟きに応える。

ただの口の悪い、見た目と年齢の合っていない感じの、不思議な冒険者。

飄々としていて、ケンカを売ってくる相手には容赦しない癖に、冒険者が魔獣に殺されたと知るや、誰よりも激昂した新人冒険者。

どこかバランスの悪い、目を離せない後輩。

「あ、戻って……来……た……」

自分でも、あまり物事に動じない方だと思っているジェシカだった

が、門の内に戻ってきたリリスの姿に言葉が詰まる。
いつも仮面のように纏っている、自分の笑顔が消えていることを自覚する。

痛い。

傷だらけの身体で、止血もせず。

千切れそうな両手を抱え、両足を引きずるように。

血のように紅い瞳を、血の涙で濡らして。

そんな姿を幻視してしまった。

ハツとして見直せば、武器を収め、俯き加減で歩く小さな姿。

「何だ……今のは……」

自分のではない声に視線を向ければ、驚愕の相を浮かべたタイラーがリリスを目で追っている

何が視えたのだろう。

自分と、同じものが視えたのだろうか？

「タイラー……貴方、何が視えたの？」

恐ろしかったが、自分だけが視えた幻ではないと思いたかった。

だから、意を決して尋ねる。

「血まみれで……泣いている子供だ……」

短く応えるタイラーの顔をしばし見つめ、そして歩き去ろうとするリリスの姿を視界に収める。

最悪な気分だ。

宿に戻り、今日の分の支払いと、多分動きたくないだろうと、明日の分まで支払いを済ませる。

湯桶の手配をして、部屋に戻るが、ベッドに飛び込むともう動く気が切れた。

俺が悪いんじゃない。

俺が殺した。

俺は戦った。

俺が見捨てた。

俺が。

俺は。

ぐるぐると頭の中で文字が踊る。

声が木霊する。

頭が割れそうだ。

俺が何をした。

何もしなかった。必要な事を、ひとつも。

いい歳だと言うのに、涙が溢れてくる。

面白可笑しい冒険生活、その夢なのだと思い込んでいた。

だと言うのに、これはなんだ。

夢に牙を剥むかれた不快感。

現実なのか？

夢ではないのか？

現実ならば。

俺は、子供を見捨てたのか？

判らない。

理解わからない。

今こうして悩んでいるのも、きつと誰かに「違う」と言って欲しい、

浅ましい俺の心の動きだ。

情けない。

何も違わない。

俺はもう動く事を諦めて、泣きながら意識を手放した。

冒険者ギルドに集まったのは、朝になってから。

昨日、宿に帰ってからみんなで決めた。

リリスさんの所に行こう、と。

「リリスさん、泣いてた……」

ティアがそう言っていた。

マッシュにはその様には見えなかったが、酷く落ち込んでいるのは

よく理解わかった。

「僕たちは助けられたのに、助けることが出来ないのは嫌だ」

フレッドの言葉は、全員の気持ちだ。

冒険者ギルドには、やはりというか、リリスの姿はなかった。

念の為受付で聞いてみるが、今日はまだ姿を見ていないという。

来たら、副マスターが用事があるから教えて欲しいと、伝言を頼まれる始末だった。

テーブルのひとつに陣取り、フレッドが口を開く。

「リリスさんの宿に行こう」

残る3人は同時に頷く。

待っているのが辛い。

迎えに行つて、一緒に屋台でなにか食べよう。

「あら、お嬢ちゃんの宿、知ってるの?」

不意に掛かる聞き慣れた声に、4人は振り返る。

金色の髪を無造作に纏めた、それなのに美しく思える姿で、ニコニコと佇むお姉さん冒険者がそこに居た。

「……お前も宿に向かう気か。そこはこいつ等に任せようが良いだろう?」

眼鏡に短髪で難しい顔のお兄さんが、そのお姉さんに釘を刺すが、見る限り手応えは無さそうだ。

「お姉さん達も、リリスさんの所に行くの?」

ティアが警戒心もなく、見慣れた笑顔のジェシカに駆け寄る。

その頭を撫でながら、ジェシカは笑顔を崩さず応える。

「まあねえ。私も心配なのよ、あの子」

マシユーは無言で、ジェシカの隣で仏頂面のタイラーを見上げる。

「……昨日のアレは、アイツが悪いわけじゃない。明らかに悪い奴は1人居るが、他は『まさか』の重なりだ。誰にあんな被害が予想出来たと言うんだ」

無表情で言いながら、マシユーの頭を撫でる。

「アイツが自分を責める理由はない。少なくとも俺達は、礼を言わねばならん」

不器用な撫で方だが、マシユーは、いや、それを見ていたフレッドもカレンも、顔を綻ばせる。

そうだ。

僕たちは、リリスさんにお礼を言いたいんだ。

今ひとつ、リリスに対してどうしたいのか、助けると言っても何をすれば良いのか掴めず、勢いに任せて行動を起こす事で突破口が見つかればと、闇雲に動き出した所だった。

そこに大人な冒険者の言葉は、確かな指針となった。

「じゃあ、行きましよう？　ここに居ると、相談とか言って飲み始めちやうから」

「それはお前だけだ」

ジェシカがのんびりとした口調で急かす様な言葉を発するが、受けるタイラーは容赦ない。

2人のやり取りに、少年たちの笑顔はますます深まる。

この人達が居れば。

みんなでなら。

きっと、リリスさんも元気に出来る。

「おう、坊主共」

不意に掛かる声。振り返った胸元に何か投げ込まれて、フレッドは反射的に受け止める。

そこに居たのは、いつも何かと助けしてくれる、グスタフが笑顔に髭を歪ませていた。

「あの嬢ちゃんトコに行くんだろ？　そいつ持ってけ、なんか旨いもん食って、ここに嬢ちゃん引っ張ってきな」

機嫌の良い笑顔で、豪快に笑う。

「良いのか？　受け取った以上、遠慮はしないが」

フレッドの頭に手を乗せ、タイラーが問いかける。

「当たり前だ。それに、それしきの端金はしたがねじゃあ礼にならん。冒険者おれたちの礼はコイツだと決まっているからな」

言いながら、ジョッキを掲げてみせる。

グスタフの周りでは、やはり気のいい笑顔を浮かべた数人の冒険者が、同じ様にジョッキを掲げていた。

「……恩に着る。では、早速向かうとするか。金かねまで受け取ってグズグズしていたら、ジェシカがエールを飲み始める」

「ちよつと、幾らなんでも酷くない?」

「お前がきつき、自分で言つてた事だろう」

真顔なので冗談か本気か判らないタイラーに、頬を膨らませて食つて掛かるジェシカ。

笑うグスタフたち。

上手く行きそうな、そんな気持ちは膨れ上がる。

「よし行くぞ、リーダー」

少し強めに頭を撫でられ、フレッドは驚いて振り向き、顔を上げる。

「今は、お前が臨時のパーティーリーダーだ。頼むぞ」

咄嗟の事に、声も出ない。

「そーそー。さ、急いでパーティーメンバー迎えに行きましょ、おなかすいちやつたし、ね?」

ジェシカが、フレッドの額ひたいを突つく。

ほんの僅か、呆然と放心したフレッドは、直ぐに力強く頷いた。

行き先は知っている。

昨日、取っている宿の名は聞いていたからだ。

6人のパーティーは、揚々とした足取りで、目的地を目指す。

「ここに居るの?」

なぜだか、驚いた顔のジェシカと、やはり感情を読むのが難しいタイラーが、揃って宿を見上げる。

朝と晩の食事付きで、良心的な価格とサービスが評判の名店「銀の馬の骨」。

いい宿だが、妙な客が多いと言う噂もある。

「うん、僕たちがお勧めした宿なんだ」

誇らしげなフレッドに続いて、マシユーがタイラーを見上げる。

「昨日リリースさんが良い宿だつて言ってくれたんだ。ここ、2階の角部屋に居るんだつて」

ジェシカとタイラーが顔を見合わせる。

「……………どうしたの? お姉ちゃんたち……………」

ティアが、不思議そうに見上げる。

その顔を見下ろし、少しかがみ込むようにして視線を合わせると、
タイラーは静かに口を開いた。

「ここは、俺も使っている宿だ」

ティア始め少年たちは、驚きに目を丸くするしか無かった。

ドアがノックされている。

意識はとつくにハッキリしているが、今は全然動きたくない。

悪いが、居留守にさせて貰う。

宿代は昨日払っている。

何の問題もないだろう。

「寝ているのか？ 鍵は開いているか？」

聞き覚えの有る声がドアの向こうから聞こえる。

踏み込む気か？

「開いてるみたいだけど、男どもは此処で待ちなさいな」

押し留める声。

……いや待て、あれは「男」を止めてるだけで、自分は入ってくる
気じゃないのか？

面倒くさい。

だが、この女の声も聞き覚えが有る。

ややあつて、扉が開けられる音が聞こえた。

おいおいおい……俺は今、手加減出来る気分じゃないって……。

少し物騒な考えを始めた俺の耳は、その時、小さな細い声を捉えた

「リリースさん……？」

カレンちゃんの声？

「リリースさん、起きてる？」

続いて聞こえたのは、ティアちゃんの声か。

もそり、と、俺は身体からだを起こす。

「あらあらあら、暗いのに判るくらい酷い顔よ？ ほら、桶借りてきた
から、顔洗っちゃいなさいな」

テーブルの上に湯桶を置いて、窓を開けるのはジェシカさん。

差し込む光を反射して、金色の髪が眩しい。

「な……なんなの……」

動こうにも、泣きそうな顔のカレンちゃんとティアちゃんに飛びつかれ、身動きが取れなくなった。

え、なにこれ。

俺の捕縛命令でも出たの？

鬱々と考え事をしていた俺は、寝起きの比にはならない程度には脳が動いていた筈だった。

だが状況の変化が急すぎて、脳が着いていかない。

身支度が整う前に部屋に踏み込んできた男ども——タイラーの顔面に、枕を投げつけるのが精一杯だった。

扉を開けた先は薄暗く、カレンは心臓が掴まれたような気持ちで立ち尽くした。

この部屋は、悲しい。

違う、悲しいのはリリースさんだ。

カレンは勇気を出して一步踏み出し、それにティアとジェシカが続いてくれた。

ジェシカさんは機転を効かせて借りてきた湯桶を、テーブルに乗せている。

リリースさんは声を掛けたら起きてくれたけど、その顔は。

泣きはらした、酷い顔だった。ジェシカさんは顔を洗うように言つて窓を開けてくれていたけど。

カレンとティアは、悲しくて、辛くて。

迷わず駆け寄り、リリースに抱きついていた。

「あー。で、何。心配で押し掛けたって？ キミたちはオカンか何かね？」

顔を洗って身支度を済ませ、俺は正座させた男どもに事情聴取中である。

男どもに向かつて「オカン」呼びはアレだが、なんとというか、お節介加減が同レベルである為、これは致し方のない表現だ。

ちなみに仮面は付けてないし、髪も下ろしている。

ウィザードと言えばあのポニーテールなイメージだが、実は装備に依っては髪型も変わる。

この程度でおしゃれ云々言うつもりは無いが、まあ、気分だ。

面倒臭いだけとか、そういう事ではない。

きつと。

「それにしても、リリースちゃんも此処に泊まってたなんてねえ」

ジェシカさんが露骨に話題を逸らす。

見え見えすぎてそんな……え？

「え？ 何？ ジェシカさん……じゃねえな？ タイラーくん、君、此処に？」

ジェシカさんも宿を取っているのか確認しようとして、昨日の話からそれは無いなど思い至る。

目を向けると、案の定、タイラーくんは眼鏡を直しながら頷く。

格好つけてるけど、お前今正座してるからな？

「そうだ。俺はこの上の部屋だ」

上^{うえ}って……。

何となく天井を見上げ、俺は溜息を吐く。

「人が落ち込んでる時に、夜中^{よなか}までドツタンバツタンうるせえなあと思ったら……」

ありやあ、よく分からんが、なんか色恋沙汰の音じゃねえ、まるで喧嘩の様相だったぞ？

いやまあ、野暮だし聞かないけどね？

「それは済まない。昨日の夜から、お前を励ましに行こうと、お調子者が息巻いててな」

そういう事言われたら怒れなくなるだろうが。

いやまあ、もう怒るも何も無いけど。

「部屋がバレてたら、昨日の内に来^きかねない勢いだな……」

照れ隠しに口にしたのは、割とどうでも良い思いつき。

「そうだな。こう見えて向こう見ずの世話焼きだ。部屋が理^{わか}解^かっていたら、昨夜の内に急襲していただろうな」

おい。

お前、冷静に言ってるけど、それお前。

お前の相方が、夜中よなかに女の部屋に襲いに行くって言ってるんだぞ。ちよつと言葉選べ。努力しろ。

「だが、事実だ」

タイラーくんはブレない。

だけどなんだろう、ちつとも眩しくない。

ジェシカさんと並んで、変人枠で良いと思う。

すっかり毒気を抜かれた俺は、両側から美少女に抱きつかれるという大変な栄誉に預かりながらも、非常に釈然ツラとしない微妙な表情で、だけど立ち上がれる程度には心が軽くなっている事を確認して。

「まあ、なんだ。素直に礼を言うけど、でもなあ」

溜息混じりに、憎まれ口を叩く。

「お前ら、心配しすぎ」

だが、真面目顔のツツコミ役は怯むこと無く、言葉をあんまり選ぶこともしない。

「あんな顔ツツでとぼとぼ歩いて帰られて、心配するなって方が無理だろう。なんで街を救ったお前が一番傷ついているんだ」

まつすぐの度どが過ぎて、すぐには反応が出来ない。

俺に抱きついてる2人の手に籠もる力が増した。

「言わせて貰うが。なんでお前があんな顔していたのか、本気で理解わからない。まるで抱えきれない責任に押しつぶされそうな顔だったが」

正座の姿勢を崩さず、タイラーは真つ直ぐに俺の眼を捉えたまま言葉を紡ぐ。

タイラーだけではない。

その両隣で、フレッドとマシユーも真剣な顔で、真つ直ぐに俺を見ていた。

まるで……。

やめてくれ。

俺は、俺には、その視線はキツイ。

尊敬するような眼で俺を見るのは辞めてくれ。

俺は、誰も救えない出来損ないなんだ。

「お前が責任を感じる理由が何処にある」

子供達の視線に耐えきれなくなりそうな所で、タイラーの声が耳に滑り込んできた。

何処に有る、つて、お前……。

唐突な問いに虚を突かれ、漂白され掛けた思考だったが、直ぐに影がさす。

自分の中に蟠^{わだかま}る思いと、タイラー達の真っ直ぐな視線に耐えかね、俺は俯く。

「俺が、街の外で張つてりや、それで救えたんじゃねえのか？ そうしたら」

「自惚れるな」

漸く絞り出した言い訳じみた自傷^{じしょう}の言葉を、タイラーがあっさり打ち壊してくる。

「お前は強い。圧倒的だろう。だが、それだけだ」

何を言われているのか理解^{わか}らない。

俺は再び顔を上げる。

「お前だけじゃない。完璧な人間など居ない。強かろうがなんだろうが、1人で全てを、なんて言うのは傲慢が過ぎる」

俺は、ぽかんとタイラーくんを見る。

「お前は、衛兵に報告もしたし、冒険者ギルドにも報告している。どちらにも、魔獣の死体を見せて。お前は出来る事を、迅速にしていたんだ」

何を、言ってるんだ？

そんな事は、それは、だって、俺は誰も救えなくて。

うわ言のように、それは唇から零れ落ちる。

「だから。お前は出来る事はしていたんだ。後は上が動く問題だ。冒険者ギルドは受付の身勝手で、衛兵隊は情報を軽視して、結果あんなっただけだ」

真っ直ぐに、タイラーくんの瞳^めが、俺の眼を捉える。

「お前は、悪くない」

俺が聞きたかった言葉。

気がついた時、俺はボロボロと涙を零していた。

人前で泣くなんて、なんて格好悪いんだろう。

だが、俺は涙を止める事が出来ず、釣られて泣いている12歳の少女2人に頭を撫でて慰められるという状況に陥ったが、そんな事に気付く余裕もなく只管涙を零すのだった。

今更気を利かせたタイラーくん率いる男どもは先に宿を出て、表で待っているらしい。

何でも、ギルドで呼ばれているとか聞かされ、昨日のハンスとの別際のやり取りを思い出した。

その前に、何やら食事にもお誘いらしい。

ギルドに行けば、酒の海で食事どころでは無いとかで、昼くらいは飯を食っておくとの事だ。

それは良いのだが、「表へ出ろ」は使い所を間違っているぞ、タイラーくん。

どうも俺はお節介で、気の良い——俺には勿体ない仲間が出来たらしい。

それは良いんだが、そう言えば俺、ギルドの副マスターに「説教する」宣言してたような。

なんか、急にギルドに行きたく無くなって来たな……。

そう言ってもどうせ、あいつ等はお構い無しで俺を引っ張っていくんだろうなあ。

調子に乗って啖呵を切るのは、もうコリゴリだ。

溜息を吐く俺の顔は、きっと泣き笑いだったと思う。

第7話 夢と居場所、現実と仲間

えーと、何ていうか。

お見苦しいところを何か色々お見せしてすみませんでした、俺です。

まだ出会って2日？ ジェシカさんとタイラーくんは1日しか経っていないと言うのに、俺はもう既に引つ張りまわされてます。

何だよもおう！

もう既に頭の上がない人が着々と増えてるんですけど!!

昼飯は落ち着いて食いたいと言う俺の希望で、冒険者ギルド近くの食堂に連れて来られました。

大丈夫だろうなここ？

熊のハンスさんとか来やしねエだろうな!!

どうせ顔を合わせなきやいけないんだけど、せめて飯食って落ち着いてからにして頂きたい。

あと、よく分かったのでパスタっぽいモノを頼んだんだけど、思った以上にパスタだったわ。

普通に美味しい。

飯が美味いと、それだけで幸せだよね。

「うんうん。ホントに、幸せそうに食べる子ねえ」

ジェシカさんが、飯を食う俺を見て、しみじみと呟く。

いやだつてさ、ていうかジェシカさんだけじゃなく、他の連中にも言えないけどさ。

異世界転移ものつてさ、飯がマズイつてのがなんか、デフォっぽくね？

それがさー、俺、この世界の食事が合ってるだけなのか、妙に美味しいんだよ。

「美味しいよ？ コレ」

返事代わりに感想を述べて、俺はパスタをがつつく。

仮面は外してるけど、テーブルマナーとか知らんし。

「食いつぷりと普段のふてぶてしきはベテラン並だな。女にしとくのが勿体ないから、俺はこれからは悪友の1人として接する」

おおん？

随分静かに食事してるかと思えば、上品なお作法の割には随分な口つぷりじゃないの？

「なんだよ、恋人にしたいとか、思った事は素直に言っただけでいいんだぞ？
らん？」

無論俺の方にそんなつもりは毛頭無い、と言うか俺は何度でも言うが女が好きなのだが、嫌がらせの為ならこの程度は言えるのだ。

俺が言うのと、タイラーくんは照れる様子を微塵も見せず、心底嫌そうな顔で動きを止める。

おう、なんだコラ？

お前、普段殆ど表情変えない癖に、なんで今だけマツハで嫌そうなんだ？ ああん？

「……無いな。無い。無さ過ぎてもう、うん、無いな」

「無いは1回だコラア！」

単純に4回も並べやがって！

少しはヴァリエーション豊かに言ってみせろや！

少年冒険者達は、俺達の漫才に笑っている。

……そんなつもりはないんだけど、まあ、子供が笑ってるなら良いか。

子供達の笑顔ってのは、基本癒やさされるもんだ。

悪くないね。

「笑われてるんだがな」

ツそういうトコだぞメガネエエ！

食事も終わろうかってタイミングで、フレッドくんが俺に小袋を差し出してきた。

「うん？」

理解^{わか}らないなりに手を伸ばし、手のひらに乗る重さと金属が擦れる音に、中味の大凡を知る。

中味は何となく理解^{わか}ったが、理由が分からん。

「フレッドくん？ これは一体？」

金を貸^かした覚えもないし、借り^かる予定もない。飯代のつもりなら、だいぶ多いと思うぞ？

あ、ちなみに中味は銅貨か銀貨だと思う。

「ギルドの、グスタフさんから。コレで何か食べるって！」

何処か誇らしげに、フレッドくんが言い切る。

グスタフ……？

名前に覚えがなく、戸惑う俺の動きが止まる。

受け取って良いものか、迷ってしまったのだ。

「……受け取れよ？ ベテランが態々気を使ってくれた物だ」

そんな俺の内心を見透かしたように、タイラーくんがボソリと言う。

ああ、そうだな。

俺は小袋を握りしめ、小さく頷く。

「理解^{わか}った、ありがとよ……。フレッドくん、態々^わありがとな！」

前半は小さく、タイラーくんに向けて。気を取り直してフレッドくんには笑顔で礼を言う。

嬉しそうに笑うフレッドくんの頭を、思わず撫でてやる。

かわいいやつめ、うははは。

「ご機嫌なところ悪いが、笑顔が汚い……じゃない、食事が終わったならギルドへ行くぞ。ベテラン連中にも、お前を持ってこいと念を押されてるからな」

誰の笑顔が汚いだとあアン!!

って言うかさらつと何か言ってるけど、なにそれ。

特に最後のやつ、俺何も聞いてないんだけど？

食後の余韻^{ゆゑん}ってさ、大事だと思っただよね？

例えばさ、こう、砂糖をたっぷり入れたコーヒーとかさ？ 欲しいじゃない？

「うはははははは！ 呑めコラァー！」

「うるせえ！ 抱きつくな髭が痛え！」

なにコレ？

昨日見掛けた気がする冒険者達に囲まれたかと思えば、あつという間にテーブルまで拉致され。

嬢ちゃんはミードがいいだろ？ とか勝手にオーダーが決まり。

この髭で眼帯のオッサンが、グスタフとか言うベテランらしい。

言われてみれば昨日見掛けた気はするが、しかしそれだけだ。

特に絡んだ記憶はないんだが、なんで俺はこんなオッサン達に囲まれて酒吞まされてんだ？

用事があつて呼び出された筈じゃ？

「そうじゃねえんだよ！ アレだろ、ハンスのオッサンに呼ばれてるんじゃないのかよ、俺ア！」

ミードのジョッキをテーブルに叩きつけるも、この酔っぱらい共、笑うだけで聞きやしねえ……！！

「呼んだか？」

魅惑の低音に視線を転がせば、出たなギルドの熊さん。

つていうかいつから居たんだよ？

「呼んだか、じゃねーよ！ なんだよ、用があつて呼んだのはそっちだろうがア！」

もう、俺の落ち込みとか反省とか立ち直りとか、その辺の諸々の俺の心情を返せこの野郎ども！

「明日、葬儀だ」

やんややんやの宴会ムードの中、ハンスの低い静かな声が、ジョッキを傾ける俺の鼓膜を叩いた。

一瞬、何を言われたか判らない。

数秒、間拔けな顔を晒してから、思い当たってジョッキを静かにテーブルに戻す。

「……そっか。もつと時間掛かるかと思っただけど、案外早いのかな？」

「ああ。教会に話をつけて、本当ならもつと掛かる筈なんだが、手を尽くしてくれたらしい」

へえ……。

昨日あんな事があって、中1日^{なかいちにち}で。

この世界の常識なんて知らないが、思っていたよりだいぶ早い。

冠婚葬祭で、急に発生し、待ったが効かないのが葬儀とは良く聞く。
色々^{いろいろ}便利な世界でも手続きやら色々^{いろいろ}大変なのに、この世界は……いや、意外とシンプルなのかも知れない。

システムも含めて、色々。

「何^{なん}にせよ、それで一旦は気持ちの整理も着くかな」

「……さあな。残された方が、歯を食いしばるしかない部分だ」

この世界の人間も、案外厳しい。

欲しい答えは、簡単には届かない。

世界が違えど、そこは変わりが無いらしい。

「違うない」

俺は追加で頼んだエールを煽り、呟く。

そう、俺が歯を食いしばり、生きていかなきゃいけない。

「昨日の説教は、しなくて良いのか？」

ポツリと、そんな声が耳に転がり込む。

「ハッ。暴れて全部吹っ飛んで、忘れちゃったよ」

せいぜい仏頂面が作れている事を祈りながら、俺はエールを煽ろうとして、ジョッキが空^{から}になつてる事に気が付く。

通りかかったウエイトレスのお姉さんにジョッキを掲げ、お代わりをアピール。

「そうか。じゃあ、勝手に反省させて貰おう」

俺はハンスの声が聞こえなかったフリで、受付カウンターの方へ目を向ける。

昨日親切に対応してくれたお姉さんが、他の冒険者に依頼^{クエスト}の案内をしているらしい。

「今回やらかした受付は、これから処分が決まるが」

殊更声を押さえて、ハンスが呟くように声を寄越す。

俺はそれにも興味なさげに反応せず、手持ち無沙汰に指先でテーブル^{はじ}を弾く。

「……つまらん余罪が有る所に、洒落にならんことを仕出かした。まあ、死罪だろうな」

俺はすぐに反応する事をせず、ウエイトレスお姉さんからジョッキを受け取ると、一度それを煽ってから、ジョッキをテーブルに置く。

……お姉さん、これミードだよ。エールの方が欲しかったよ。

「正直知ったこつちや無エな。無罪放免だつてんなら、探し出して殺してやらんでもねえが。法に則ってきっちり裁かれるんだつたら、俺の出る幕じゃねえ」

不思議なもので、このミードは妙に甘つたるくて、妙に重い。

口当たりも違う気がするが、同じなのは、あんまり美味いと思えない事だ。

「でも良いのかい、新人冒険者にそんな話聞かせて。萎縮しちゃうかも知れないぜ？」

俺が言うと、ハンスはジョッキを大きく傾け、中味を一気に呷る。

「萎縮して大人しくなるタマが、あんな啖呵を切れるものか。それに、あの馬鹿の事は、もう全員気がついてる」

ハンスもウエイトレスさんに向けてジョッキを持ち上げ、アピール。

コレでこのオッサンにもミードが来たら面白エな、とか無責任に考える。

「まあ、そこに関しては俺が言う事あねえな。今後同じ事は無いんだろ、副^{サブ}マスさんよお」

「ああ。二度と舐めた真似はさせん」

お代わりのジョッキを受け取ったハンスはエールを、俺はミードを。

2人同時に呷り、喉を湿らせる。

テーブルの向こうでは、こちらの様子を伺いつつも冒険者のオッサン共^{ども}に揉みくちやにされてる少年たちと、変わらぬ笑顔のジエシカさん、これも変わらぬ仏頂面のタイラーくんが見える。

この世界で、たった数日でこんな所で冒険者なんてする事になって、気がつきや慕ってくれたり、イジられたり、なんか良く分からん

扱いされたり。

……仲間が、友達が増えたもんだ。

「なあ、オツサン」

特に考えもなく、ハンスに声を掛ける。

「オツサンはよせ。俺はまだ27だ」

ハンスの思いがけない反応に、虚を突かれた俺は馬鹿みたいな顔でハンスの顔を眺めて、そして爆笑した。

27？ コイツ、同じ年なのかよ。

見た目と釣り合っているとかいないとか、そういう話と別の所で、俺は可笑しくて堪らず、涙まで零して笑う。

「27でオツサンだと思ってねエのは、本人だけだよ」

俺にしこたま笑われても、ハンスは特に変わることもなく、しかし溜息を吐いていなす。

「同じ年の俺が言うんだ、間違いねエよ」

「お前な……流石にそれは笑えんぞ。そんな30手前が居てたまるか」

可笑しくて仕方がない俺の視界で、ハンスは懽然としてジョッキを叩く。

「ああ、そうだ、説教代わりだ、これだけ聞いてくれ」

笑いで誤魔化してから、俺はハンスに囁く。

「死んだガキどもの名前を、せめて忘れねエでいてくれ」

ジョッキを少し大きな音でテーブルに置くと、ハンスはやおら立ち上がる。

その眼を俺に向けること無く。

「任せろ」

だが、しっかりと力強くハンスは頷き、歩み去った。

「なんで昼過ぎだったのに、俺はあんなに吞まされたんだ？ ていうか、俺が呼ばれた理由はアレだけか？」

留まれば吞まされ続けるだけだと気がついたのは、ハンスが仕事に戻ってしばらく後だった。

ってーか、仕事中に酒飲んでんじゃねえよ副マスよ。

「あらあら、まだまだ飲めるんだけどなあ」

表情どころか顔色も変わっていないジエシカさんが怖いよ。

この人、見る限りでジョッキ手放してたタイミングが無かった。

ついでに言えば、タイラーくんも同様だ。

当然、顔色が変わってないところまで同じ。

なんなの、実は酒じゃなかったとか？

「正真正銘のエールだ、当然、まだまだ呑める」

キリリとした表情で言うことじゃねエよ。

ただの呑兵衛宣言じゃねえか。

少年少女組はお茶と果汁飲料ジュースだったらしいが、飲みすぎてちよつと気持ち悪いらしい。

ギルド前のちよつとした広場で、少し奥まった所に有る屋外のテーブル付きの椅子に座り、ぐったりとした俺は絶賛愚痴真つ盛りである。

俺が愚痴って、タイラーが混ぜっ返して、ジエシカさんが笑って。子供達は時々オロオロしつつ、でも結局は笑って。

軽口の合間に、また愚痴が出て、ほんでちい小さな夢みたいな事を話して。

何か、このメンツを眺めていると、唐突に脳裏に閃く物があつた。俺が欲しかったもの、もしかして此処でなら届くのでは？

実行するかは別として、ちよつと話を振ってみよう。

「なあ、あー……こういう相談は無愛想メガネが適任ほいな」

「誰が知的メガネだ」

「言ってねエよ」

……コイツ、実はかなり酔ってねエか？

なんだ今の切れ味バツグンの返しは。

ほんで、なんだそのドヤ顔は、この野郎。

そんな俺とタイラーくんのやり取りを、ジエシカさんと少女組が笑って眺める。

「実はな、こういう物がそれなり余ってるんだが」

殊更興味を引くように心がけ、俺は懐に手を入れ、実際には何も持っていないその手をテーブルの上に広げ、滑らせる。

タネも仕掛も勿論ある、だけど余人よじんにやちよつと出来ない、そんな手品。

空っぽの掌たなごころが通り過ぎたテーブルの上に、ちやりんと響く澄んだ音。

そこには、金貨が12枚。

金貨これは俺がゲーム内で入手し、そのまま持っていたものだが、こちらで使えることは昨日確認している。

俺の動作に釣られて俺の手元を覗き込んでいた一同は、すぐには反応せず、それぞれ顔を見合わせたりしている。

さしものジエシカさんも驚いたように表情を変えると、金貨を1枚手てにする。

「普通の金貨だけど、どうしたの？ ……危ないお金じゃないでしょうね？」

うん、まあ、割と普通の反応だと思う。

「……なんだ、礼のつもりか？ まあ、そういう事なら受け取るのも吝かでは無いな」

なにが吝かでは無いんだこの野郎。

間違いねえ。コイツは酔ってる。

「違ちがえよこのスカタン。……いや別に、欲しいならやるけども」

ツツコミの後の言葉にはきっちり反応して、全員に2枚つつ金貨を分けるタイラーくん。

分ける前に礼のひとつも言えよ馬鹿。

「あ、あの、リリスさん、良いの？」

カレンちゃんが凄く申し訳無さそうに聞いてくる。

普通はこうだよな。

「ああ、良いよ良いよ。大事に使いなよ？」

ひらひらと手を振って見せると、カレンちゃんとティアちゃんが顔を見合わせ、輝かんばかりの笑顔をこちらに向ける。

「ありがとう！ リリスさん！」

ほら。

コレだよ、判るか？

何か貰ったら「ありがとう」、基本だろうが。

今度は俺がドヤ顔でタイラーくん顔を向ける。

「なんだ？ 受け取った事に礼など要らんと、気にするな」

「そうじゃねエよ酔っぱらい！ 馬鹿じゃねエのか!!」

酔っつていようがいまいが、ホントに……！ コイツは……！

一瞬、相談するのは辞めようかと思っただが、まあ、反応を見たいだけと言う部分もあるし、ネタとして話を聞いておくのも有りだろう。

俺は気分を落ち着け、殊更咳払いをしてみせると、切り出した。

「毎回宿の手配が面倒臭いし、纏めて払うのも、その間に遠出の依頼受けちまうと勿体ない」

俺の言葉に、何を言い出すのかと、全員が顔を見合わせる。

「いやまあ、今の俺は新人だし、遠出の予定どころか、そんな依頼請けられるかも判らんけど。それこそこんな商売だ、何が有るかは判らん」

「まあ、それはそうよね？」

ジェシカさんが頷いてくれる。

少年少女組はピンと来ていない様子だが、不思議そうながら黙って話を聞いてくれている。

「それでな？ いっそ、家でも買おうかとか、考えたわけだが」

ジェシカさんとタイラーくんが顔を見合わせ、そしてジェシカさんは爆笑し、タイラーくんはやれやれと首を振る。

だが俺はノーリアクションだ。

この2人の反応は、予想出来ていたのだ。

「あのね、リリスちゃん、金貨が10枚20枚あっても、家を買うには流石に足りないのよ？」

うんうん、そう来るだろうね。

ジェシカさんがそっちに行くとなると、タイラーくんが舵を切る方向も概ね予想出来る。

……シラフだったらだが。

頼むから今だけでいい、まともか、せめて俺の意図する方に転がってくれ。

「子供の小遣いにしては破格だが、家を買うとか、少し夢を見すぎだな。そもそもお前は予算をどれくらい持っているんだ？」

よし。

なんか人を小馬鹿にしたようなドヤ顔が微妙に苛つくが、今回は我慢してやる。

今回だけな！

ところでディアブロ3と言うゲームは、貨幣の価値が本当に掴み難い世界だ。

宿屋とかが有る訳で無し、どうにも比較対象が少なく、お金の価値が解りにくい。

そもそもハクスラと言う事で、武器は敵がドロップするのを拾い、そこに付与されたステータスで一喜一憂し、レアを拾ってレジエントを掘り、エンシエントを狙い、プライマル・エンシエントの夢を見るのがディアブロ3だ。

じゃあお金を拾っても使わないのかと言うと割とそうでもないから困る。

拾った武器や防具で「この特殊能力が○○じゃなくて□□だったら……！」と悶絶する場面が結構ある。

何しろハクスラで入手できる武器は、付与される特殊能力が膨大且つ多岐に渡るため、目当ての武器を入手したと思っても、理想の特殊能力・数値で有る事は少ない。

どれくらい少ないかと言えば、そんな理想の武器なんか出やしねエ、ゼロだゼロ！ っていうレベルである。

なので基本は妥協して使うわけだが、救済が無くもない。

ディアブロ3では、各装備1つにつき、特殊能力を1つだけ変更出来る。

それが、NPCミリアム、秘術師による「特性の変更」だ。

ここで、各種装備に付与されている内から、プレイヤー各々が不要

と判断した特殊能力を、ランダムで他の能力に付け替えることが出来る。

ランダムである、という事が肝である。

ほしい能力・数値を求めて、只管にチャレンジを続ける。

能力が合致しても、数値が足りなければどうするか？

回す。

納得できる数値が出るまで回す。

このシステムの絶妙にいやらしいポイントは、チャレンジ後、変更前の特殊能力が「残る」ため、変更候補が気に入らなければ変更しない、と言う事も出来るという点だ。

変更候補は3枠に見えて、ひとつは変更前のものと同じなので、実質新規の候補は2枠。

毎回全てが入れ替わるシステムだったら、数値はある程度妥協の幅が広がってしまうが、このシステムは「まあ、コレでも良いけど」レベルの数値・能力の物をキープしたまま、チャレンジ出来る。

失敗しても「悪くない」能力を確保できている為、どんどんチャレンジ出来てしまう。

これに必要なものが、素材アイテムだけだったらまだ良い。

拾って来さえすれば、何度チャレンジしようとも必要個数が変わることがない。

……俺の「カリニの後光」は、結局クリティカルダメージが49%のまま、50%には上がってくれなかったな……。

もとい。

チャレンジに必要なものが、素材プラスお金だった場合が、極限に上げつない旅の始まりとなる。

お金の必要額が、恐ろしい勢いで増えていく。

金貨5万枚とかから始まって、気が付くと1千万枚を超え、それでも納得する数値・能力が出ない。

気が付くと、手持ちのお金がすっからかん、という訳だ。

なまじ宿とかで使う金かねがなく、武器の修理で使う程度だったりすると、資金全部使っても直ぐに回収できたりするので、調子に乗って回

してしまう。

グレーターリフトの報酬が狂ってるしな!

今手元に有るのも、一度破産レベルで散財して、その後グレーターリフトを回して居たら回収できた資金だ。

その枚数は、こちらに来て何度か言及している、そう。

「金貨で言うなら、50億枚ちよつと、かな」

正確には、51億1951万3046枚。

1億枚以上の端数はちよつとは言わないな、うん。

俺が事も無げに言うのと、ジェシカさんは言葉を失くし、タイラーくんは小馬鹿にしたように首を振る。

「リリス。お前が見栄っ張りなのは良く理解^{わか}った。だが、夢と現実を
ごつちやにするのはどうかと思うぞ?」

うんうん、そりやそういう反応になるわな。

俺に言わせりやこつちが夢なのだが、まあ言っても仕方ないし、俺としても夢は見えていたのでそこは口を噤む。

「まあ、見せないとそうなるよな。うし、一度宿に帰ろう。着いてきてくれ」

俺は余裕の態度を崩さず、椅子から立ち上がる。

「帰る? 帰ってどうするんだ?」

言いたいことが理解^{わか}っているくせに、ニヤニヤとタイラーが問う。

コイツ、酔ってるホントにヤな奴だな!

いや、酔って無くてもあんまり変わらないけどな!

「全部出すわけじゃないが、此処で大量の金貨出したら目立つだろうが。部屋で一部を見せてやるよ」

自信満々の俺に、タイラーくんは肩まで竦めて「一部ねえ」とかほ

ざいてやがる。

金貨^{ゴールドジャズブラスジャック}をみっちり詰めた靴下でぶん殴ってやろうかと思っただが、ぐつと堪^{こら}えて俺は先頭で歩き出した。

少年少女組がなんだかオドオドし始めた気がするが、きつと気の所為だ。

銀の馬の骨に戻り、一度俺の部屋に。

その前に、タイラーくんが今日の分の宿代を払ってから。

俺？ 俺は昨日のうちに、2日分払ってる。

「よし、念の為鍵掛けてくれ」

俺はそう言うのと、何も載っていないテーブルの上に手を翳す。

そうして無制限に出そうと思ったが、少し意地悪を思い付いた。

「じゃあ、出すから、タイラーくんは確認してくれ」

挑発気味にそう言うが、タイラーくんは面倒くさそうに欠伸する。

「俺1人じゃ時間がかかるだけだ。全員でやるのが良いだろう？ なにせ、50億枚だったか？」

良いねえ、知らないってのは怖いもん無しだねえ。

「良いぜ。じゃあ、みんな数えてくれよ？ 10枚ずつ纏めて、数えやすく並べてくれれば助かる」

そう言うってから、まずは机の上いっぱい広がる程度を出す。

綺麗に重なるわけでもなく、何枚かはテーブルからこぼれ、床に落ちる。

「どした？ こんなもん、全然総数に足りてないぞ？ ほら、早く数えてくれ」

眼を見開くタイラーくんに、俺は此処ぞとばかりに挑発を繰り返す。

「お前、こんな枚数何処から……？」

突如広がる金貨の小山に、タイラーくんは酔いが醒めかけのようだ。

少し、余裕が失われている。

「おいおい、理解わかってると思うけど、これまだ全然少ないからな？ 早く数えないと、終わらないぞ？」

ドヤ顔返してニヤついて見せるが、タイラーくんはもう俺を見ていなかった。

6人が、それぞれ10枚数え、纏め、10回繰り返して。更にそこまでを5回繰り返して。

1人が500枚で、6人分。

「3千枚、丁度だ……」

俺はそれを、一度ベッドの上に移動させる。

キツチリ3千枚、キリ良く出るもんなのかって？

収納されてたのは俺のアイテムボックスだよ？

任意で枚数指定して引き出せるのは、何回か試してる。少ない枚数だけどね。

そう、今回は「3千枚」を指定して出したんだ、最初から。

「よし、続きだ」

俺が言うと、タイラーは目を見開く。

「なんだよ？ 50億分の3千枚でしか無いんだぜ？ まだまだ有るんだ、急がないと今日中に終わらないぜ？」

挑発しつつ、俺は再びテーブルの上に手を翳す。

「……充分だ」

タイラーくんの押し出したような声が、俺の動きを止める。

「3千枚も有れば、かなりの屋敷が買えるだろう。50億枚有るかどうかなんて、確認する意味が無い」

おやおや。

さつきまでの元気は何処へやら、タイラーくんは底知れない物を見る目を俺に向けている。

「そうなのか？ 3千枚で充分だったら……」

言いながら、金貨をテーブルの上に溢れさせる。

全員が実際にその手で数えて、染み付いてしまった、その枚数。

「もう3千枚とか」

更に、テーブルに収まり切らなくなり、床に流れ落ちる。

「更に追加とか」

溢れた金貨が、床を埋めていく。

「もう3千枚出してみたりとか」

もう言葉もない一同を見回して、改めてタイラーくんに視線をロツクしながら口を開く。

「取り敢えずこれで、都合1万5千枚の筈だけど、確認するか？ 1万

5千枚有れば、まあそこそこのお屋敷が買えたりするのかな？」

いつもマイペースなジエシカさんも、金貨の海にどう反応しているか理解わからない様子で、口をパクパクさせている。

「あ、回収するけど、幻術とか疑われたらつまらんから、何枚か拾って良いよ？　急がないと、全部回収しちゃうぜ？」

宣言。

この宣言により、彼らは知らないだろうが、この金貨は俺の物、という扱いを離れる。つまり、拾った枚数だけそいつの物、という、ごく当たり前の状態になる。

そして俺は、1枚拾えば、一定範囲内の持ち主の無い金貨は全て取得できる。

そういう便利機能が無ければ、後片付けが大変なパフォーマンスなんかしないよ。

「拾って良いって、お前、これ金貨だぞ？」

酔も醒めたのか、常識人振りが戻ってきたようだ。

思ったよりも効いたのかな？

だったら良し。

「だから、コレが幻覚とか幻術とか思われる方が癪ほうなんだよ。俺の面子メンツの問題さ。拾って、確かめてくれ」

俺が促すと、全員、数枚の金貨を手取る。

みんな、思った以上に善人である事よ。

「そんなんじや証拠にや足りないだろ？　両手で持てる分だけ取っつけて！」

俺は無造作に金貨を握ると、まずはフレッドくんの両手に押し付ける。

「わ、わあ!!」

驚いて取り落しそうになるのを何とか回避。

ついでマシユークン、カレンちゃん、ティアちゃんに押し付ける。

「ホレホレ、大人組。何なら大人の汚さを、子供に見せつけてやんな」

なんだか楽しくなってきた俺は、余裕顔で2人を煽る。

顔を見合わせるジエシカさんとタイラーくん。

まず動いたのは、綺麗な汚いお姉さん、ジェシカさんだ。

「おつとお、零しちやったあ♪」

狙いすましてブーツの中に流し込んで、零したも無いでしょうよ。

こんなモン立派に拾得扱いだし、そのブーツの中の金貨も当然ジェシカさんの物である。

「お前は……恥ずかしげもなく堂々と、良くもそんなマネが出来るな？」

苦々しい声のタイラーくんは、いつそ清々しいほど堂々と、机の上の金貨を懐に放り込み、掴んでは放り込みを何度か繰り返している。

自分が相方に吐いた台詞の意味を、じっくりと良く考える事をオススメする。

子供達が、大人の汚さに引きながら、金貨を大事に抱えている様子を微笑ましく思いながら、残りの金貨を全て拾得し、収納する。

「……なるほど、確かに幻では無いな」

床やテーブルからは金貨が消えたのに、懐に残った金貨を確認して、ニンマリ笑うタイラーくん。

お前さん、ちよくちよくキャラ変わんのやめろ。

「ホントよねえ。こんな重いブーツ、私持ったこと無いわ。あ、なにか袋とか無いかしら？」

ジェシカさんは、あんまり変わった気がしない。

というか、最初は「履いてるブーツの隙間に流し込む」程度だった筈なのに、ちよつと目を離れた隙に、脱いだブーツいっぱい金貨を注ぎ込んでいた。

まあ……うん。マイペースで結構なことである。

ジェシカさん本人は変わらないが、子供達がジェシカさんを見る目は確実に変わっただろうな。

その少年少女組は手にした金貨をどう扱って良いのか判らず、しかしテーブルとかに置いたら消えるとも思っているのか、混乱の度合いを深めていく。

面白いから見ていたかったが、そういう場面でもないの、落ち着かせるためにキチンと説明し、安心させてあげるのだった。

どういう訳か俺が近所の道具屋で金貨を収納する為の革の鞆を人数分購入し、全員に振る舞うという良く判らない目に遭いながらも、このメンバーに「俺が金を持っている」事実を認識させた。

50億枚はまだ半信半疑、というかハッキリと信じられなくても、少なくとも1万枚は持っている事は知っている。

「つつー訳で。まあ、家は買えそうって事で、宜しいか？」

何を考えて全員無言なのかは不明だが、話が進まないのは困るので、思い切つて問いかける。

「問題ないだろう……1万枚の屋敷となると、ほぼ城なんじゃないのか……？」

この街で育つたというタイラーくんが、OKをくれる。

……そういや、タイラーくんはこの街の育ち、というか生まれなんだよな？

「……タイラーくんや、そう言えば君、実家はどうしたの？ この街の生まれって……」

少し呆然とした様子のタイラーくんに声を掛けると、ハツとしたようにこちらに顔を向ける。

「あ、ああ、俺は孤児院の出だ。家なんか持っていない」

お前も孤児だったのか。

なんだか急にどう声を掛けた物が判らなくなり、照れ隠しに頬を掻こうとして突き指しそうになる。

まだ仮面に慣れていない。

まあ、兎に角気分を変えて。

「よし、それじゃあ不動産屋に行きたい、誰か案内してくれるかな？ 残りは解散で！」

ふふふ。

日本人ライフでは家なんてとても手の届く物じゃ無かったが、この世界でなら、どうやら余裕っぽいな！

こんな都合の良い展開、絶対夢だ。

でも、どんな原因で見てる夢か判らんが、夢ならば醒めるまでは愉

しむのが礼儀よ！

宿で毎回チエツクインするのが面倒、たつたそれだけの思いつきから始まったマイホームゲット作戦は、ここから本格始動する。

実はタイラーくんの予想を超えた超高額がデフォで、思い付いたその日の内に頓挫するとかそういうオチが無い事を、俺は心の底から願いつつ、でもちよつとだけ期待しちやうのだった。

第8話 そうだ、不動産屋へ行こう

夢であることを良い事に、マイホームゲットしちゃおうぜ計画。
略して夢の自宅購入計画。

予算的には問題無さそうだったので、不動産屋への案内、それか場所だけ聞いて俺だけ向かうつもりで、解散を宣言。
したのだが。

「うん、流石に金貨が重いから、一度お部屋に置いてくるわ。此処か、表で待っててね？」

「そのお部屋は俺が支払いしている部屋だ。ああ、俺も荷物を置いてくる。少し待ってろ」

「僕は、鞆で持っても邪魔にならない重さだし、この鞆肩から下げられるから、このまま一緒に行けるよ」

「私も」

「私も！」

「うん、僕も」

誰一人、解散の意味を理解^{わか}ってくれない。

いやまあ、別に着いて来てくれる分には心強いし良いけどさ。

俺、この街の地図とか、全然頭に入っていないしな。

結局、また部屋に集まってもグズグズしそうな気がして、表^{おもて}で合流する事に。

仮面は昨日までと同じで、服は気分を変えて一新。

- ・ 胸当て：翡翠採集者の平和
- ・ 手袋：メイジフィスト
- ・ ズボン：火鳥の尾
- ・ ブーツ：翡翠採集者の迅速

こんな感じの、見た目だけはセット系レアを中心に組み上げる。

戦闘予定は無しというか、これから行くのは商談、と言うより相談だ。

なるべくシツクというか、まあ、落ち着いた雰囲気「見える」見

た目にしてある。

妙に露出の多い服を選んだ所で……その、言い難いのだが。

今まで頑なに「自分の体型」について語ることは拒んでいた。

その理由は、まあ、顔が幼気に見える、って所で察しはついたと思うが……。

ただでさえ見た目的にインパクトが有るとは言い難いウイザードさんのボディが、より小柄に、慎ましくなってしまったと、想像して頂きたい。

出るトコ出てはいるけれど、ジェシカさんと比べられると泣くしか無い、つまりはそういう事だ。

肌を露出させた所で、風邪を引かない様にと、心配されて終わりそうである。

出るトコって腹の事か、だと？

よし、表に出ろ。

髪は下ろしてある。

さつきはそこまで手が回らない、お急ぎ準備での外出だった。

今回は余裕が無くもないので改めて鏡を見て、なんだか新鮮で可愛かったのも、そのままにしてある。

自分の顔を可愛いか、って思うかも知れないが。

中味は27のオツサンだぞ？ 言う可悲しい事実では有るけれど。

27年付き合った自分の顔に比べたら、この顔は可愛すぎるわ。

何処の馬の骨とも知らん男には触れさせんよ、触れさせられませんよ。

可愛いと言えば、カレンちゃんとティアちゃんがきやいきやいと騒ぎながらくるくる追いかけっこしてるのを眺めているところ、心が癒やされる。

「待たせた……なんでコイツはこんな面白い顔でニヤついてるんだ？」

「誰が面白顔だ！」

コイツは全く癒やしとは無縁の所にいる。

タイラーくんを見てそう思ってしまった俺に、非はないと思う。

ジエシカさんはいつも通り、クスクス笑っているだけだった。

ジエシカさんもタイラーくんも、宿暮らしが長い。

この世界では賃貸物件という概念が無いのか、と思ったが、職業が冒険者という事がその生活に関係しているらしい。

先に少し触れているが、冒険者として依頼クエストをこなして生活している関係上、例えば護衛任務で街を離れる事も有る。

魔獣や魔物の討伐の依頼クエストでも、日帰りで終わる様な仕事は少ない。そんな仕事で、ともすれば野営の方が多い生活スタイルになりがち。

決まった住処に憧れはあれど、賃貸で部屋を借りても禄に帰れないのでは資金が勿体ない。

街に帰って来たタイミングで宿を借り、そこで寝泊まりして仕事を請け、また街をしばらく離れて、というサイクル。

冒険者ギルドを中心にして、宿が多い理由もここにある。

「過酷なんだな、冒険者生活」

感心して他人事のような感想を漏らす俺だが、

「お前もその冒険者だよ」

タイラーくんは見逃してくれるつもりは無いらしい。

「……なんでまた唐突に、家を買おうなんて思ったんだ？」

歩きながら、タイラーくんが今更な疑問を投げってくる。

今更だが、確かに俺はきちんとした理由を話していない。

と言っても、大した理由じゃあない。

ひとつは単純に、夢の中でくらい家を持ちたいと思った、っていう軽い理由。

現実ではこんな理由で買えやしないが、夢の中で——あつて欲しい——くらい、好きにして良いじゃない。

もうひとつは、明言した通り、いちいち宿のお支払いがかつたらいから。

そして、更に。

「まあ、あれだ。折角会った仲間が集って、グダグダ出来る場所くらい

は有っても良いだろ？」

たまに酒持って遊びに来るくらいの距離感は、好ましいくらいだ。そう言って笑う俺に、タイラーくんが肩を竦めて見せる。

「ああ、確かに、そんな事も言ってたな」

……あれ？ 俺、こんな事、今初めて言った筈だけど？

ジェシカさんを見るが、俺の不思議そうな顔を見て不思議そうにしているだけだ。

うーん？ アレかな、さっきの広場で？ それか、酒呑んでる時

……は無いはずだ。

じゃあ、やっぱ広場か。

全然覚えてないな……。酒入ってたしな……。

「それにしても、お家かあ。楽しみだね？」

楽しそうに弾む声に、振り返った俺はカレンちゃんと頷きあうジェシカさんを見る。

あれ？

なに、この違和感。

いやまあ、今まで縁のなかつた事に触れられるのは、案外楽しいし興味深いのかも知れない。

ずっとニコニコ顔の子供組と引率のジェシカさん、これは意外と絵になるな。

ブーツいっぱいのお金をぶんどる度胸の持ち主には見えない笑顔は、ポイント高いと思います。

「おい」

そんな事を考えていると、タイラーくんが俺に声を掛けてきた。

「この辺は商業区だ。なにか商売する気なら、この辺も有りかもな」

言われて顔を上げれば、活気あふれる商店街の入口。

生活には便利そうだが、出来る商売は俺にはない。

「商売の種がねえよ」

「そうか。俺もだ」

2人して顔を見合わせて、肩を竦めて歩く。

「目的の不動産屋はこの通りの中だ。スラム方面と貴族様のお屋敷街

の近くを避ければ、どこでもそんなに変わらないと思う」
そんな事を言いながら、先に立って歩くタイラーくん。

「そっか。まあ、立地もそうだけど、必要な資金次第だけだな」
思ったよりも色々と考えてくれていているらしい。

ちよつと意外な思いで前を歩くその後頭部を眺める。

時々引つ叩きたたきたくなるその頭は、まあ、時々は頼りにして良いらしい。

ヘンリー不動産。

看板の下、「OPEN」の札ふだの掛かったドアの前で、俺達は腕組みで立ち並ぶ。

「……いや、入れよ。お前の用件だろうが」

ここまで来てちよつと気後れしてしまった、ていやかなんか思ってた不動産屋と違うんだもんよ。

もうちよつと親しみやすい所っていうか、えっと、これ。

ものすごい立派な店構えで、凄く入りづらい。

とまあ、そんな事も言っていない。

深呼吸して、俺は扉に手を掛けるのだった。

正直、圧倒されてます。

びっくりするほど小市民、そんな俺だが、まず店内に入るなり用件を聞かれ、家の購入検討と伝えると少し奥まった一室に案内された。

綺麗に整頓された、白くて明るい部屋。なんか、買わなきゃ帰れない気がして冷や汗が流れる。

「おい。おい。ホントに俺の手持ちで予算足りるんだよね？」

不安になった俺が、担当さんを待っている間にタイラーくんに小声を向ける。

「幾らなんでも心配しすぎだ。1万枚は有るんだろう？ それとも、城でも欲しいのか」

呆れたように、しかし小声でタイラーくんが返事をくれる。

呑まれそうな状況だと、こうやって返事を貰えるだけで有り難い。

「城か……悪くないね、掃除の手間考えなきゃな」

「言ってる」

小声で軽口のやり取りをする俺達、というか俺をチラチラ見て、なにか言いたそうにしているティアちゃんに気が付く。

どうしたの、そう聞こうとした所で担当者さんが入室。

なんかごめんよティアちゃん、帰りに串焼き買って帰ろうね。

「お待たせしました、本日は……」

担当さんが畏まった挨拶をしようとするのを、俺は右手を翳して制する。

「失礼。あの、あまり堅苦しいのはご容赦頂けますと助かります。俺……私達はただの冒険者ですので、気軽に接してもらえると、とても助かります」

翳した手を口元に運び、笑う口元を隠して見せる。

初老の担当者さんは、少し驚いた顔をした後、メガネを直しながら笑顔で頭を下げ、対面のソファに腰を下ろす。

「これは驚きました。冒険者の方に邸宅の購入にご来店頂いた事も、ご丁寧に接して頂く事も」

ニコニコと笑顔を絶やさない、接客の見本の様な担当者さん。

話しやすそうで、なんか安心できる。

「丁寧な冒険者なんて、現場じゃあ論外なんだけどな」

メイドさん風の従業員さん……従業員さんだよな？ が淹れてくれたお茶に口を付け、タイラーくんが混ぜっ返す。

「時と場合を弁えておりませんと、冒険者そのものが軽んじられる事にも成り兼ねません。礼には礼を尽くすのは、冒険者であろうとも守らねばならぬものと存じます」

そんなタイラーくんに当てつけ気味で言っただけのける。

言われた方は、何故かほかんとした顔で俺を見ている。

何だその顔。

予想外過ぎて俺がびっくりするわ。

「お前、そういう口の聞き方出来たんだな……ただのガサツなバカ……失礼、粗忽な考えなしの女だと思っていた」

この野郎。

言い直した意味無いどころか、お前の言いたいことが明確に伝わりすぎてキツイわ。

担当さんが笑って良いのか困ってるだろうが。

っていうか笑い堪こらえているのかもだけど。

「あとで後程、覚悟えなてさやがれいませ」

出掛けに鏡を見てたのが効いてる。

まだなんとか、丁寧な口調はキープ出来てると思う。

内容は兎も角として。

「改めまして、本日ご案内させて頂きます、当館の責任者のヘンリーと申します。お見知り置き頂きますよう、宜しくお願い致します」

素直に驚いて、多分表情を繕うことを忘れ、そこで初めて仮面を外してない事に気が付く。

いや、仮面は着けたままの予定だったし、うん。

このままでもお茶は飲めるし、ね。

いやそんな事はどうでも良い。

初老の担当者さんは、物腰から、このお店でもかなりの地位の人だろうなって思っていたんだけど。

まさか、責任者さん、っていうか名前からしてオーナーさんだよね？

そんな人が出てくるとは思わなかった。

何か、心の何処かに引っかかる名前、そんな気がするが、当然知り合いなんかじゃない。

どういう事だろうか。

少し、考えてみたほうが良いかも知れない。

「これは、丁寧づに、責任者様にご案内頂けて、大変嬉しく思います」
ちよつと驚いて、受け答えがしどろもどろになってしまった。

気合い入れ直さないと駄目だな、これは。

多分後あとで、タイラーくんに笑われる。

それだけは覚悟しておこうと決めた。

地図を見せて貰いながら、こちらの希望を聞くと言うスタイルらし

い。

「お勧めは、こちらの商業区の北側、それと貴族様方の邸宅近くですが、こちら。冒険者ギルドから見て南側で、少し距離はありますが、静かで住みよい環境と思います」

指差して示される2エリア。

ちらりと視線をタイラーくんに向けると、小さく頷き返される。判らん。

いや、なんか判る気はするけど、なんだそのドヤ顔。

「そうねえ。貴族様のお住まいに近いのは、ちよつと気を使いそうで、リリスちゃんは窮屈な思いをしそうねえ」

「それはどういう意味……かしら？」

不意打ち気味のジェシカさんに、素^すが出かけたが辛うじて堪^{こた}える。

「えー、だつてリリスちゃん、絶対貴族様と揉^もめるでしょう？」

「絶対って……」

何とかそれだけ答えて、今は漫才してる場合じゃないとヘンリーさんの方に顔を向け直せば、何故か驚いた顔で俺をまっすぐに見つめている。

え？

「あの……ヘンリー様？」

俺がちよつと驚いて思わず声を掛けると、ハツとした顔で、我に返った。

「いえ、大変失礼いたしました。それでは、こちらの地域の方が宜しいということだ」

ヘンリーさんは呆^{ぼう}けていた事など無かった様に、冒険者ギルドの北側、商業区近くのエリアの拡大図を広げてくれる。

ここから空^あき物件を案内してもらおう手筈だ。

ちなみに、新築という選択肢は無い。

防壁に囲まれている関係上、土地は当然有限である。

土地は領主様が治めているので、土地を買うと言うのがまず難しいというか、無理だ。

それに加えて、余程老朽化していないと、建て替えも難しい様で、そ

の建て替えも許可制。

一方で空き家はそこそこ有るらしく、無理な新築を望むくらいなら、中古の家を修繕した方が容易で、何より安いとのこと。

俺は別に新築に拘りこだわはないし、依頼クエストの合間で帰ってきてぐーたら過ぎれば中古であろうと全く気にしない。

そんな訳でヘンリーさんのお勧め物件を伺うわけだが、ここから予想してなかった問題が発生した。

「ふむふむ、なるほど。排水関係がしっかりしてるのは良いですね。お風呂も有るのですか？」

「はい、こちらの住宅は入浴設備が整っております。勿論、手直しは必要ですし、必然費用も掛かりますが」

幾つかの物件を、まずは書類上の話を聞いて選別して行く。

現場にいかなきや判らない、というのは物件を絞った後の話だ。

こちらの希望と向こうの持ち駒、そのすり合わせの果てに候補を絞り……。

うん、こんなみんな知ってる話だね。

「おい」

物件を見て、あれこれはなしと話を進める俺に、タイラーくんが声を掛けてくる。

なんだ？ トイレか？

「なんでそんな狭い物件しか見ないんだ？」

真顔のタイラーくん。

コイツは何を言ってるんだ？

「なんでって、俺……私1人で暮らす家で、無闇に広くてもしょうがないでしよう？」

俺に管理出来る範囲なんて決まってるんだから、無駄に広くてもしょうがないだろう。

そう、思ったままを答えると。

「はあ？」

心底驚いた顔のタイラーくんが間の抜けた声を上げる。

「え？」

俺は反射的に答えて、ハツとして周りを見渡すと。
タイラーくんだけじゃなく、こつちサイドの全員が心底驚いた顔で俺を見つめていたのだ。

仲間たちの様子に、流石に口調を繕う余裕も失くし、話を聞いてみれば。

「リリースさん、一緒に暮らすのかって、楽しみにしてたのに……！」
カレンちゃんに泣かれ。

「……………!!」

声を殺して泣きじやくるティアちゃんにぽかぽかと叩かれ。

「驚くほどの薄情さだな。お前はそういう奴か」

タイラーくんの言葉のナイフで理不尽に斬られ。

フレッドくとマシューくんは何も言わないが、目はしっかりと俺を非難して。

「あああああら。意思疎通できてない風だったから、もしかしてと思ってたけど」

ジェシカさんだけは変わらず、笑いながらそんな事を言っていたが。

要するに。

こいつら全員、俺の買う家に一緒に住むつもりだったのだ。

なんでそうなったん??

泣く少女2人を宥め、タイラーくんは無視して、俺はヘンリーさんに向き直る。

「……あの、すみません。申し訳ないんですが、この人数で住めそうな屋敷って、お幾らくらいなんです？」

聞くしか無いじゃん、こんなの。

いや、理解る。理解るよ？

外野の声なんか無視して良い、金出すのは自分だし、他人を住ませる理由なんか無いだろうって。

当然俺もそう思うんだけど。

視線を転がせば、非難の目を向ける子供達。

一昨日出会って、それから何だかんだと一緒にいる時間が長い。
タイラーくとジェシカさん。

この2人は昨日から、だけど甘つちよろい俺に喝を入れ、立ち直らせてくれた恩もある。

それを言えば、子供達だって俺のために泣いてくれもした。

そんなもん、理由にするには弱いけど、でも、なんというか。

ホントの事を言えば、一緒に暮らすものだと思っていた、そんな風ふうに言われて、少しも嫌じゃなかったんだ。

寧ろ、妙な言い方だけど、ホツとしたと言うか。

無粋なことを言っちゃえばどうせ夢なんだし、これくらい無茶でも悪くないじゃない

それに、こつちは打算的な部分の話だけど、多分そんな大邸宅買えないよ。

7人で住む、今は子供は同じ部屋へやで良いかもだけど、もうちよつとしたらキツくなるだろう。

それを見越して全員個室で、となると、最低でも7部屋。プラス諸々。

そんなの、予算が足りる訳無いじゃない。

みんなも、あんまりな価格を聞けば、流石に諦めるだろう。

そんな打算。

俺は頑張ったんだけど、予算がね？ 的な逃げだ。

50億枚？

いざとなったらそんなもん、見栄を張ってました、で何とでも逃げられる。

「はい、そのご条件ですと……」

ヘンリーさんはこちらの悲喜こもごもものちっさい修羅場を華麗に無視し、プロの接客技術で地図上の3箇所を順に指差してから、それぞれの間取り図を取り出してくれる。

「こういった所になります」

その間取りに添付されている金額に、俺は驚き、覚悟を決めるしかないと悟る。

かなり広めの邸宅が、多少上下は有るものの、金貨5千枚程度とあつては。

見せつけた金貨いちまんまいので買ってしまうのは、この空間ではヘンリーさん以外、全員が知っている事だったからだ。

逃げ場を探して袋小路に飛び込んだ感じの俺は、全員を引き連れて、ヘンリーさんの部下の人の後ろを歩く。

まだちよつとご機嫌ナナメのカレンちゃんとティアちゃんに両手を取られ、逃げられないポジショニング。

「こちらで御座います」

そんな俺の様子に小さく苦笑を浮かべ、まずは1軒目の邸宅へと案内してくれた。

現地で見ないとわからない事は多い。

1軒目は思ったより痛みが激しく、要修繕。

痛みが激しいとは言え、建て替えの許可は出ていないので修繕で対応するしか無いらしい。

修繕に金貨2千枚と、時間を一月ひとひは見て欲しいと言われれば、そりゃあ、誰も手出ししないよね。

「——だそうだけど、どうする？　ハニー」

念の為尋ねるが、全員首を横に振る。

まあ、見た目が陰鬱だし、修繕すると言ってもねえ……。

修繕中は、当然住めないだろうし。

続く2軒目は綺麗で、大きな建物に係員さん曰く小さな庭が有る。

「扉もしっかりしているし、建物に目立つ痛みは見えないな」

しっかりした作りの門を手のひらで叩き、門の中へ踏み込む。

小さい庭と言われたが、そこには東京の一般的な1軒屋を、二棟は余裕で建てられそうな広さは有る。

手入れの問題か、今は剥き出しの土肌だが、芝生を張つても良いだろうし、何なら畑を作るのも有りかも知れない。

ジェシカさんと少年少女組は係員さんに連れられて屋内へ。

俺もタイラーくんくんに声を掛け、庭を離れて建物へと入る。

派手すぎない玄関のホールで俺は早速立ちすくむ。

広い。

このホールで生活できそうなくらい広い。

「俺、こんな広い家で生活できる気がしねえんだけど？」

「じゃあ、お前は狭い部屋を選べば良いな？」

しれっと人を納戸か何かに押し込もうとするタイラーくんに睨みを利かせるが、全くどこ吹く風で螺旋階段を昇っていく。

コイツはいつか面白可笑しい目に遭わせてやらねば気がすまん。

俺は固く心に誓った。

1階8部屋、2階12部屋。

住むのは7人。

明らかに過剰なので、既に乗気味の6人を宥め、3軒目を見に行く。

こうして徒歩で回れる程の近場に大きな邸宅が犇めく様に立つこのエリアは、クラスで言えば中流階級と言った所らしい。

俺の知ってる中流と規模が違うわけだが、どうなっているんだ。

あれか、中流貴族か、と笑いながら聞くと、似たようなものとタイラーくん。

嘘でしょ、ご近所貴族さんとか、絶対なんか問題起こすよ、主に俺が。

そんな事を思いながら到着した3軒目。

結論から言えば、2軒目の邸宅を買う事で話がついた。

3軒目、ヤベエくらいでかい。

庭に、2軒目の邸宅が3棟建つレベル。

当然、母屋はそれ以上のデカさの3階建て。

そんな規模が違うデカさの建物、同じ値段なんて絶対訳ありだと思っただけ聞いてみれば、案の定だった。

まあ、ありきたり？ な、お家騒動、乱心ご亭主の家族&使用人虐殺パニック。

その後幾人かの手に渡った物の、お約束の幽霊騒ぎで新ご主人ご乱心。

話を聞いたタイラーくんが「ここがああ……」なんて言ってる当たり、有名な話だったんだろう。

正直、曰く付き物件と聞かされて俺はテンション上がったのだが、他のメンバー、特にカレンちゃんとティアちゃんが泣きそうな顔で反対だったので断念。

そういう訳で、当初は「最悪、掘っ立て小屋でも」なんて思っていた俺の家探しは、話の振り方を間違えた俺のせいで「俺達の家探し」になり、結実を迎えたことになる。

……いつ何処で俺、間違ったのかな……。

購入意思を伝えると、心底驚く係員くん。

そりやまあ、見て即決つてのは今まで居たかも知れないが、冒険者でこのレベルの屋敷を、となるとそうそう居はしなかったのだろう。

他所様の異世界転移／転生モノで、ご自宅購入系の話は素直に羨ましかったのだ。

夢か現実か判らんとは言え、購入できたのだからどうでも良し。仮に夢だった所で、目が醒めたら俺が泣き崩れるだけだ。

被害者は居ない、じゃあ問題ないね。

ヘンリーさんのお店に戻り、購入手続き。

簡単な修繕に時間がかかるのと、1週間後に引き渡しとなった。

修繕ということで金額を上乗せで千枚プラスすると伝えて仰天され、その場で全額払うと伝えて更に驚かれる。

従業員さんの応援を呼び、金貨6千枚を人海戦術で数える。

それらの作業が終わったのは、夕日が赤くなりつつ有る、17時くらいのことだった。

ダイジェストでお送りしたが、これが俺が家を手に入れた顛末なのであった。

「来週から、新しいお家なんだね？」

マッシューくんが楽しそうに俺の手を引く。

うんうん、可愛いもんだ。

可愛いのは良いんだが。

「君たちはホントにそれで良いのかね」

問わざるを得なかった。

今回のこれは、あまりにも皆、勢いに任せすぎだ。

元々仲間だった少年少女組。

ペアで活動していたであろうジェシカさんとメガネ。

……あれ？

ソロ、俺だけじゃん？

だ、だってまだこの世界に来て3日目だし？

い、いつ目を醒ますかも判らん夢の中だし？

なんか仲間が出来てほっとなんて、してねーし？

「だって、秘密教えてくれて、一緒に住もうって誘ってくれたんだと思っただし」

ティアちゃんが、俺の正面に立って見上げながら言う。

秘密？

「金持ちだって事だろ。無駄に見せつけられたしな」

タイラーくんが事も無げに言う。

「それが秘密って……いやまあ、確かに吹聴はなしされたい話じゃねえけど……」

実はそんなに重要にも考えてなかったので、複雑な心持ちでは有る。

というか、俺が気にしてるのはそういう事じゃなくてだね……。

「お前さんはどうなんだよ、タイラーくんよ。話の流れから、お前さん達も引越すんだろ？」

察するとか慮るとか、そういうのが割と苦手な俺は正面から問いかける。

あんまりにも勢い任せなんじゃないかと思っただら、なんだか心配にもなるというものだ。

「なに、宿代の負担が無くなるのは良いことだ」

事も無げに言い切りやがった。

啞然としてジェシカさんを見れば、同感と言うように頷いている。気が抜けるくらいに即物的な理由そくぶつてきだったが、そこまで明け透けに言われれば寧ろ心地よいくらいだ。

溜息と苦笑を同時になんて、俺、人生で初めてだぞ。

「あー……取り敢えず、良く理解わかったよこの野郎。飯は全員で相談すつか。他所で食ったほうが早い、料理した方が安く上がりそうだし」

こんなにすんなりと、しかも凶々しく人様のマイホーム計画に便乗できる奴なんて、居る訳がない。

やはり夢の中なんだなあ、と、こういう時に強く思わされる。

きつと、俺は寂しかったんだろう。

目を醒ましたら、寄り付かなかった実家にも顔を出そう。

それで、仕事がんばりながら、新しい出合いを、彼女と呼ばせてくれる女性ひとを探そう。

「ほう？ お前、料理出来るのか？」

心底意外そうに、タイラーくんが声を上げる。

失礼な奴だと言いたい所だが、残念な事にそう問いたい気持ちは良く分かる。

俺の言動を見て、料理が出来できそうなんて思う奴は居ないだろう。

俺ですらそう思う。

「簡単なもんしか出来ねえよ。パンすら焼けんし、肉とか野菜を焼いたり炒めたり、その程度だ」

変な見栄を張っても絶対に良い事がない。

素直に料理出来ない属性の人間ですよアピール。

「ま、旅暮らしだったらしいし、そんなものだろうな。俺達だって似たようなもんだ」

そう言うタイラーくんに、ジェシカさんが頷いてみせる。

遠征中の食事なんて干し肉と乾パンがデフォで、たまに獣を捕まえられるれば、その焼いた肉はご馳走なんだとか。

そりやそうよな。

フレッドくん率ひきいる少年少女組も、料理は苦手なご様子。

孤児院では料理が出来る子も居るらしいが、強制で当番が回つてくるとか、そういう事はないご様子。

今は一端いっぽうの冒険者として、宿暮しゅくぼらしいいな。

「……フレッドくん達は、明日あしたっから一緒の部屋にすつか。銀あの馬の骨やど、大部屋あるかね？」

提案しただけで、輝く4つの表情。

あまりの判り易さに、手近なマシユークんの頭をぐりぐりと撫で回してしまふ。

「ああ、パーティ用の大部屋が有る。7人でも、なんとかなる筈だ」
すぐにタイラーくんが教えてくれる。

伊達に銀あの馬の骨やどを常宿じょうじやくにしている訳ではないという事だろう。

……んん？

「なんでさらっとお前まへらも同室の予定なんだよ。つか、それで良いのかペア冒険者」

色々と問題ありそうな予感しかしないぞ。

そんな俺の心配を気にする様子もなく、タイラーくんは涼しい顔で言う。

「金かねが浮くからな」

「お前まへらは払え！」

なんで押し掛けといて宿代払わなくて済むと思っただこの野郎。

「大体アレだ、お前等まへら、アレだろう!! 子供達の前でいかがわしい事とか、させられねエぞ!!」

教育に大変宜しくないからな。

羨ましいからじゃ無いぞ!

ちらりとジエシカさんに目を向ける。

俺と目があつて、ニツコリ笑いながら手を振ってくれる。

……羨ましいからじゃ無いんだぞ!!

「お前はバカなのか？」

言外に否定しているのは判るが、口にしたのは選よりにも選よって馬鹿呼よばわり。

案外しつくり来るのが頭に来る。

よおし上等、いかがわしい行為に及ぼうもんなら、お前は宿の軒先に吊るしてやる。

何ならDbD方式も視野に入れてやる、良かったな！

そんな、今後の予定では有るものの、分類で言えばどうでも良い話をしながら歩く内に、冒険者ギルドの前を通りかかる。

その建物の前で、見慣れた街の熊さんことハンスさんとグスタフさん、それに見慣れない冒険者が何やら話し込んでいる。

「ん？ おお、なんだお前ら。雁首揃えて飯でも食ってたのか？」

こちらに気付いたグスタフさんが声を掛けてくる。

「ああ、家買いに行ってた」

飯食ってきたレベルの軽さで言うと、グスタフさんは「おう」と答えてから、少し変な顔をする。

「家だあ？ また随分急じゃねえか、なんだ、この街に腰を落ち着けるつもりなのか？」

言いながら俺達を見渡す。

驚いているようだが、資金とかの疑問は無いもんなか？

いやまあ、問われても誤魔化すけども。

「ああ、好き好んで旅してた訳でもないしな」

適当にそれっぽいことを言ってみる。

グスタフさんもハンスさんも俺の言葉に頷いている辺り、それだけで納得してくれたらしい。

まあ、ハンスさんは受付さんから、俺が金貨持つてくることは報告行つてそうだし、ローン組んだとか思つてくれたんだろう。

ローンとか有るか知らんけど。

「冒険者ギルドとしては、この街に居てくれるだけで随分助かるがな」

ハンスさんの台詞から、特に何か疑問を持つては居ないご様子。後ろ暗い所は無いものの、それでも変な追求が無いのは助かる。

「所で、お前ら暇か？ なんか仕事抱えてたりするか？」

グスタフさんが、ふと思いついたようにこちらに話題を振る。

随分急だが、俺は当然フリーだ。

手を繋ぐマシューくんを見るが、首を横に振っている。

タイラーくんを見るが、そちらも同様。

「全員暇だよ。今日はもう、帰って飯食って、酒飲みに来るくらいかな」

俺の返事に、オッサン3人は顔を見合わせて頷きあっている。

……1人は知らない人だけど、この2人と顔つき合わせてなんか話し合える間柄のようだし、それなりベテランなのだろう。

そう思ってみれば、なるほど風格が有る。

「明日から、少し遠出してもらえるか？　なに、行って来いの3〜4日の仕事だ」

ハンスさんの言葉に顔を見合わせる俺達。

いや、多分そんなトコだろうなーって予感是有ったし、俺自身は別にイヤじゃない。

仲間も、困惑とか嫌悪の表情ではない。

「良いぜ、全員問題ない」

「あー、待って待て」

事も無げな俺達の返事に、仕事を振った当のハンスさんが待ったを掛ける。

「討伐が絡むかも知れん依頼だ。子供は危ない」

ハンスさんの言葉に、俺はなるほどと納得。

子供扱いの子供達は不満顔で口々に文句を言い募るが、ハンスさんの一言。

「お前たちの同行の許可を出すと、俺がリリースに説教される。勘弁してくれ」

俺の説教、と言うワードにピタリと不平が止む。

下手に文句を言えば、自分たちも説教コースだとも思ったのだから。

人様に説教出来るほどご立派じゃない訳だが、聞き分けてくれて居るんだからそのままにしておこう。

取り敢えず、明日、昼前には俺・タイラーくん・ジェシカさんの3

人でギルドに顔を出し、詳しい説明を受けて出発する事に。

行き先は大森林の指定地域の調査。

今回はあくまでも入口付近とも言える部分の調査、数隊すうたいがかりで手分けしての依頼シゴトとの事。

大森林と聞いて、ざわりと心が揺らぐが、焦らないように抑え込む。いずれ、明日の話だ。

一旦オツサン3人衆と別れ、屋台村で串焼きなんかをしこたま買って子供達に振る舞ってから、俺とタイラー・ジェシカ組は「銀の馬の骨」へ、子供達は自分達の宿へと向かう。

「なあ、提案なんだが」

宿へ向かう道すがら、タイラーくんが口を開く。

思ったよりも考え込んでそうな声色に、興味が湧く。

「あん？ どした？」

返事しつつ先を促す。

「いや、何でも無い」

……じゃあなんで声掛けたん？

とは言わない。

まだ考えが纏まって無かったんだろう。

あれか、明日からの大部屋生活のキャンセルとかか？

まあ、便利な半面色々不都合とか出てきそうだしな？

俺は野暮な事を言わずに前を見て歩く。

だから、この短いやり取りを、タイラーくんの相方であるジェシカさんが何を思い、どう満面の笑顔いう顔で聞いていたのかを知ることも考えることも無かった。

第9話 大森林調査隊・上

名物宿屋「銀の馬の骨」特製の晩飯が旨すぎる。

満足して部屋に引っ込もうとした所で、タイラー組に捕まった俺はそのまま冒険者ギルドへ連行される。

やーめーろーよー。

どうせ明日あした来るんじゃないよ、もう今日は良いって、昼にも散々呑んだんだぞ。

そんな俺の懇願は丁寧に無視されて、気が付くとハンスさんとグスタフさんに挟まれ呑まされるといふ地獄を味わう事に。

俺、そんな悪い事したか？ あ、もう挨拶なんだか愚痴なんだか、俺です。

翌朝、俺はだるそうな顔を仮面で隠して冒険者ギルドへ向かっていく。

タイラーくんを呼びに行こうかと思っただが、子供じゃあるまいしまあ、大丈夫だろう。

昨夜のギルドへの拉致事件の恨みは忘ワスレナイ。

今日は酒を見たく無かったので、ウェイトレスさんにお茶を頼んでぐったりとテーブルに突っ伏す。

だつるう。

出掛けにポーション飲んでくれればよかった。

軽かるめの頭痛は頭蓋骨を内側から叩くし、もう、最悪な気分だ。

今日の依頼は基本的にはDランク以上の冒険者向けのものらしい。

その時点で俺は対象外なんだが、そこで熊さんが特例発動。

タイラーくんのパーティに俺が加わる形で、特別に参加OKとの事。

そんな訳で俺は茶を啜りつつ、タイラーくんとジェシカさんを待つて居た。

あ、ハンスさんに聞いたんだけど、タイラーくんもジェシカさんも、

Bランクなんですって。

俺、あの2人にすつげえ生意気な口聞いているけど、まさかの高ランク冒険者だった。

あの見た目で強いとか、実はあの2人が主人公なんじゃないかな？

まあ、仲間が強いと気が楽で良いな、うん。

「なんでお前は先に出てるんだ。部屋に踏み込んでしまっただろうが」

そんな俺の後頭部に、その高ランク冒険者が言葉の棘玉をぶつけてくる。

登場から騒がしいとか、珍しい事もあるものだ。

「てつきり迎えに来てくれると思っただから、待ってたのよ？」

ふわっと、ジェシカさんが後ろから俺の首に両腕を回してくる。

「うお!!」

美人さんの柔らかな双丘の感覚が……俺のヘルメットに！

畜生なんで俺こんなけつたいな仮面メット被^{かぶ}ってるんだコンチク

シヨウ！

「ちよつとまって、ヘルメット外すから改めてもう1回！」

「……お前は何を言ってるんだ？」

心底呆れ顔のタイラーくんが、俺の右手側の席に着き、ジェシカさんが左手側に。

そしてふたりとも当たり前の様にエールを頼んでいる。

え、なに？

冒険者って、飲み物はアルコール以外は呑んじゃいけないの？

そういう契約なの？

生體なの？

「あー、うん。取り乱した。っていうか子供じゃ無エんだから、ンなこと言われてもなア」

茶を啜りながら、2人の苦情に漸く答える。

一応言わないけど、俺なりに気を使った面も有るんだぞ？

こつちから迎えに言っつて、もし朝から盛^{さか}つてたらどうすんだ、俺が居た堪れないだろうが。

そんな事をぼんやり考える俺の脳天、ポニーテールを解除しているのただ無意味に開あいているヘルメットの頭頂部に、タイラーくんの一撃。

このメット、根本的に構造に問題が有ると思う。

茶を吹き出し、俺はテーブルに沈む。

「テメエ何しやがる！」

涙目で食って掛かるが、タイラーの野郎は少しも感情を感じさせない声でしれつと答える。

「今、殴っておかないといけない気がした」

何だそりゃあ、オカルトか!?

しかも理由は下劣過ぎて言えねえが、その勘は当たってやがるし！

これが主人公補正って奴か……野郎……！

「よく集まってくれた。今回は事情が事情だ、参加者は準指名依頼となる。指名基準は最低限、自分の身を守れるところが判断した者だ」

熊のハンスさんの声が受付前の広間に響く。

「——目的は、本格的な調査の前の予備調査。なにせ広い森だ、あの魔獣共がドコから出てきたか、まずはそこからだ」

大森林の、この街に面する広範囲をまずは調査し、出てきた経路を探す。

それらしい形跡を見つけるか、魔獣そのものが出たら対処しつつ地図にマーク。

何箇所かになるだろうそれを見つけ、その規模によって、今後行われる本格的な調査隊の規模や編成が変わるのだろう。

頭張っていると、色々考えるもんだなあ。

飛び出して暴れりや良いと思ってる俺にはピンと来ないが、まあ、要するに。

黒幕が居るのかの調査と、居た時はボツコボコにする為の準備、つてことだろう。

まだるっこしいと思わなくも無いが、「大だい」なんて付くような森の中

を、何の当てもなくふらつくとか、いつまで経っても見つけられる気がしないのは理解^{わか}る。

焦らない。焦って大暴れしてる間に、黒幕に逃げられたら目も当てられない。

名前しか知らない12人の仇を取る、その為にはハンスさんを信じ、他の冒険者の手を借りなければならない。

「——と言うことだ。不意の魔獣の襲撃も考えられるため、余程の事情がなければ、今回は出来る限り複数^{パーティ}人で行動して欲しい」

パーティという単語に、俺はタイラーくんを目を向ける。考えてみたら、俺、ディアブロ3でもソロだったわ。

シーズンとか興味無かつたし、ずーっと「Lilith」の育成しかしていない。

装備整えなきや恥ずかしくてオンライン行けない、とか思っつて、結局こっちに来るまでソロ。

こっちに来てからまだ4日目なんだが、パーティ経験は子供達との薬草採り。

集団戦の経験は無い。

ホントに大丈夫なのか、俺……？

とりあえず、スキル構成からメテオを外しとこう。

「なんだ？ 置いて行くようなことはしない、安心しろ」

「んなこた心配してねェよ」

目の合ったタイラーくんが溜息混じりに言う。

なんで溜息吐いたんだこの野郎？

「依頼^{クエスト}で出掛ける準備は、旅の準備とはまた少し違うんだらう？ 色々教えてくれ」

ハンスさんの話が終わったことで駆け寄ってくる子供達にじゃれつかれながら俺が言うと、タイラーくんが目を見開く。

「お前が……素直に俺に教^しえを請^こう、だと……？」

お前なあ……。

その認識は、俺だけじゃなくてお前自身にも失礼だろうが。

「言っても俺は駆け出しだぞ？ 経験者の話が有り難い立場なのは間

違いねエよ」

言いながら、カレンちゃんとティアちゃんに纏わり付かれながら、俺は立ち上がる。

少女2人の体重を物ともしない、そんな俺にしがみつきながら、実に楽しそうにはしゃぐ少女達。

……少女たちよ、喜ぶでない。俺はアトラクションじゃないぞ。

「あー、まあ、あれだ。宜しく頼むぜ、先輩」

こういう台詞はなんとというか照れくさい。

「面倒だし気も乗らないが、仕方がないので面倒見てやる。酒くらい奢れ、後輩」

だと言うのにこの野郎。

こんな奴に照れたのかと思うと、感情を無駄に擦り減らした気がしてもものすごく勿体ない気分になる。

今日まで、何だかんだ自分のことに手一杯で、世界のことを殆ど考えた事がない。

例えば、俺自身が使っているが、一方で魔法使いが居るのかも知らない。

多分で良ければ、魔法はある世界、そう思っている。

根拠は、夜の街のあちこちに有る街灯。

曇ガラスに覆われている光源は揺らめくことがないので、松明や蝋燭の類ではない。

科学技術の線もあるが、何となく……魔法なんじゃないかと思っ
ている。

あれが科学技術、電気による物だったら、ちよつと色々バランスが悪い気がするのだ。

まあ、そんなあれこれの疑問を解消するのも、この世界で生活する事に繋がっていくだろう。

目が醒めるまでの間でも。

「という訳で、準備も含めて、出発前の買い物に行きまーす」

ジェシカさんの号令で、俺達は商業エリア……活気あふれる商店街

へと足を踏み入れる。

昨日も来たね、そう言えば。

「なあ、タイラーくんよ」

色々と必要な物を買って込む前に、俺はタイラーくんを呼び止める。

「どうした？ トイレか？」

「お前はデリカシーってやつを覚えろ」

幾らまだ出発前だつっても、緊張感無さ過ぎだろうがメガネ。

なんでお前とのやり取りがいつもこんな調子なんだよ、ジェシカさんも笑ってないでコイツなんとかして下さい。

「魔法道具屋ってドコだ？」

さも知ってる風ふうに言ってみる。

もしそんなもん無くても「ああ、この国には無いのか」くらい言つときや誤魔化せるだろ。

「ああ、何か必要なのか。ついてこい」

タイラーくんは事も無げに答えると、当たり前のように歩いていく。

……成程、普通に有るのね。

やっぱこの世界レ、俺の夢なんじゃないのか。

「おい、行くんじゃないのか。早く来い」

足を止めずに軽く振り返りながら言うタイラーくん。

そういう台詞は、足を止めてから言うんだよ。

「お前が進み過ぎなんだよ」

寧ろジェシカさんの方に着いて行く感じで俺は足を動かす。

少年少女も物珍しそうに店内を見回し、小さく走り回っている。

「危ないから、転んだりするなよー」

声を掛けると、各々返事をくれる。

元気なのは良い事だ。

「悪いね店主。で、マジックバッグは今、良いもの有るかい？」

パルマー魔法道具店。

タイラーくん案内されて訪れた店は俺のイメージに反して広い

店内に、俺では見ただけでは使用方法もわからないようなアイテムが並んでいる。

判らん眼から見れば、雑多に並べたてている様に見えるが、ごちゃごちゃした印象は無いのでキッチンと管理はされているらしい。

「元気な子供は良いもんさ。こつちも元気になれる。んで、マジックバッグってのは、アイテムボックスの事かい？」

店主の老婦人が子供達を眺めてから、柔らかい口調で対応してくれる。

「やつべ、フツーに名前間違えた。」

「あ、ああ、そうそう、アイテムボックス。珍しい物だから、言い慣れなくてさ」

不思議そうな顔で俺を見るタイラーくんの視線を無視しながら、俺は取り繕う。

「で、アイテムバッグだけど、どんなのが有るかな？」

冷や汗を笑顔で誤魔化しながら、まず欲しい物の確認をしようと決める。

アイテムボックスは、大まかに言って2種類有るそうで、その説明でもう、何となく理解わかった。

「時間停止のやつと、そうじゃないやつかな」

「そうそう。良く知ってるね」

話を聞く俺の両側には、何故かタイラーくとジェシカさんがついている。

「それは何が違うの？」

時間停止するかしないか、わかりやすい説明と言えば。

不思議そうな顔のジェシカさんの質問に、ちよつと頭を捻った俺だが、洒落た言い方が思いつかない。

「食べ物腐るか腐らないか」

なので、すぐく簡単にイメージ出来そうな事を挙げてみる。

「そんなの有るの!?!」

思った以上の食いつきに、圧されつつもタイラーくんを見れば、何やらコチラは考え込んでいるご様子。

俺がアイテムボックスを欲しいと思ったのは、ひとつには俺の持っているアイテムボックスとこの世界で流通してる物との違いがあったとき、誤魔化す為に。

予め仕様の違いを知っていれば、誤魔化しようも思いつくというものだ。

なんか誤魔化すことばっか考えてんな、俺。

それに、容量次第ではホントに予備として使える。

俺の手持ちは時間停止が有るとは思えないし、そもそも容量的な不安もある。

なにせ、グレーターリフトとかで拾ったウイザード向けのレジエンダリーアイテムがそこそこ入っているのだ。

金貨の総量の事を考えても、余裕が有るとは思えない。

そんな馬鹿な理由で依頼^{クエスト}お出かけセットが収納できなくなったら困るので、補助用に、なんならメイン収納として——存在するならば——欲しいと思っていたのだ。

アイテムボックスが存在しなかった場合、荷物を増やすしか無いので、切に願っていた部分である。

「今、ウチに有るのは時間停止系だと、100万リットルのが一番大きいかしら」

……単位リットルなのか、俺が翻訳されて理解しているだけか。

いや、夢だからなんだろうな……。こういう「自分に都合のいい話」とか「自分にわかる単位・言葉」が出てくると、コレが夢なんだといちいち意識させられる。

確かに便利だけどさー？ もう、目が醒めるまでどうしようもないし、苦笑いで受け入れるしか無いね。

「それってどれくらいの大きさなの？」

ジェシカさんが質問しているが、ちゃんと容量についての質問なのか心配になるな……。

「あー、ジェシカさん、1000立方メートル……10メートル四方で、高さ10メートルの部屋くらいだよ」

なんで俺に即答できたかと言えば、最近、仕事絡みで調べたんだよ。

リットルと平方メートルの関係を。

正直なんでこんなもん調べてるんだと思ったもんだが、こんなすぐに、生活に関わる形で生きてくるとは思わなかった。

ふーん、と呟いて店内を見渡すジェシカさん。イメージ湧かないんだらうな……。

「この部屋よりもでつかいよ、空間的には。奥行き足りないから、幅も当然足りてないし、天井もね」

あくまで目測だが、奥行きで8メートルくらいじゃないかな？ 10には届いていそうにない。

幅はもつと狭いから当然10どころじゃないし、天井は高いけど良いとこ3メートルってトコだろう。

多分、漠然とこの部屋くらいをイメージしていたのか、俺の言葉にジェシカさんは即座に振り返る。

「嘘?！」

目測が甘くても、10届いてそうなのは奥行きしか無いので、どちらにせよこの空間では1000立方メートルに届くことはない。

「お嬢ちゃんの言う通りだよ」

老婦人もニコニコと、俺の説明を補強してくれる。

「じゃ、じゃあ、それってこのお部屋よりどれくらい大きいの?」
当然の疑問。

ジェシカさんが驚いている様子が珍しいのが、子供達も集まってきた。

3メートルの空間を3つ積んで高さ9メートル。

横が概ね7メートルかな。

となると。

「あー。この部屋を縦にもう2個積んで、更にもうひと回りくらい、かな」

ジェシカさんは大きさに驚くこともなく、しかしそれなりに圧倒はされてくれたようで、呆然と天井を見上げている。

「それ、どれくらい有るの? あ、数ね?」

子供達はもう想像することを放棄しているようで、俺と老婦人の話

を黙って聞いている。

「そうねえ、数でいうと12個だけど……高いわよ?」

そりゃそうだよね。

家買うより高いようなら諦めるかな。

「まあ、物が物だしね。ちなみにおいくら?」

購入断念も視野に入り、却って聞きやすくなった俺は気軽に尋ねる。

気分は冷やかしだ。

「金貨54枚ね。あ、1個に付きだよ?」

4枚の端数感よ。

しかし、そうなると、掛けること12で、648枚か。

「じゃあ、それ全部。650枚出すから、なんかサービスしてくれる?」

事も無げに言う俺に、店内の大人組(含老婦人)が驚愕の相で言葉を失ってしまう。

子供達は何のことか判っていない風で、大人たちを不思議そうに眺めていた。

かなりの容量のアイテムボックスが手に入り、本当は時間停止系有り無しとの両方を買う予定だったが、必要無さそうなので「入れ物」購入はコレで完了としよう。

必要に迫られたら、また相談に来れば良からう。

用意してもらってる間に、俺、自分の特技的なモンに気付いたわ。

簡単な鑑定出来るぞ、俺。

鑑定というか、手に取るとアイテムの説明文……所謂フレーバーテキストとか、モノによってはそのアイテムが引き起こす効果なんかも理解する。

ゲームで、アイテムを確認してるあの感じだ。

老婦人が色々サービス品を見繕ってくれてる中から俺がそれを手に簡易解説、それを元にタイラーくんが要不要を判断、という流れで頂くサービス品を選定。

ちゃんと老婦人に「そちらが損をしない範囲内だ」と言っているの

で、多分、売値で金貨2枚分のを選んでくれているだろう。

アイテムボックスは、見た目はウエストポーチ。

コイツの容量が1000立方メートルとか、狂氣的だ。

使い方と注意点（特に大きな物の収納方法と、生き物入れない、当然自分が入ろうとしない）等の注意を受けて受け取り、サービス品諸共仕舞い込む。

おお、そこそこの大荷物が一瞬でスツキリ。

お支払いの金貨を数えている子供達やジェシカさんも、こちらの様子を見て歓声を上げている。

「あ、あと、コレもサービスしちゃう」

金貨の確認が終わると、老婦人がなにか巻物スクロールをそつと差し出す。

「効果不明のスクロールで、ずーっと売れ残ってるの。コレもあげちやう」

ご婦人、素直なのは好感持てるが、要はゴミの処分でしょ。

まあ、面白そうだし貰つときますが。

そしてスクロールの存在にハツとした俺は、小声で尋ねる。

「あの、身体からだを綺麗にする魔法を覚えられるスクロールとか、有ります？」

ダメ元で聞いてみる。

お風呂に入れなくても、身体からだを綺麗に保つ魔法は欲しい所だ。

「あら、洗淨クリーンだったら私達が使えから、大丈夫よ？」

ジェシカさんの提案は有り難い。有り難いのだが。

「今後の依頼クエストとかで、単独行ソロとかあり得るでしょ。それに、覚えとけば便利っぽいし」

ジェシカさんの反応のおかげで、身体からだを綺麗に出来そうだと期待は高まる。

じんわりとテンションを高める俺を置いて、考えながら売り場に出る老婦人。

ゴソゴソとスクロール類を掻き集め、一纏めに抱えて持ってくる。

「生活に便利な魔法、色々有るわよ？」

ニツコリ笑って、各種スクロールを広げてみせる。

この人は、俺のようなズボラの扱いをよく理解わかっている……！

「全部下さい」

「毎度あり♪」

都合金貨10枚を追加で支払い、此処での用は終了である。

実は1回切りの使い捨てのスクロールだったらヤだな。

そう思って、支払いの前に一応こっそり鑑定したら、ちゃんと「魔法を獲得できる」とあった。

一応俺、ウィザードだし、使えるよね？

不安はひとつ解消したと思っても次々出てくるので、俺はもう考えることを放棄。

店を出た所で、全員にポーチを1個づつ手渡す。

「ん？」

疑問顔ながら受け取るタイラーくん。

「俺1人で12個も使うわけ無いだろ、全員分だよ」

そう言うと、歓声を上げる子供達。

……ジェシカさん、子供に混じって喜ばないで下さい。

……可愛いけど。

「残りは」

「予備だよ。なんであわよくば2個みたいな期待持ってただよ」

タイラーくんの質問に食い気味で答える。

甘いんだよフハハハハ。

「というわけで、入れ物ゲットしたので、必要な物買い集めますか」

気を取り直したタイラーくんの案内で、4日程度の食料の買い込み。食料は各々買うということで、思い思いに選んでいく。

時間停止系のアイテムボックスなので、ある程度余分に買っても腐ることはない。

うっかり存在を忘れて1年後に発見しても、新鮮さそのまま！

問題は気分だけ！

そういう素敵アイテムだから、どうやら食料を選ぶのも楽しいらしい。

俺はオーソドックスに干し肉と、柔らかめのパンを選択。

柔らかいパンは環境ですぐ固くなるかカビが生えるから旅には適さないと言うが、そこはポーチ様様である。

タイラーくんに至っては果物とかも買っている。

森に行くの？ って、森の中に入るわけじゃないし、森だから果物が有るって訳じゃないか。

結局3人で色々買って、目を離れた隙に子供達も何か買い込んで、食材は完了。

その他、なんかキャンプ用品らしきをタイラーくんの指示に従い購入、せっかくだし金貨も全部持って歩くと言う事で、一度宿へ。

じゃあもう、今日から大部屋押さえちやおう、って事でついでに子供達に宿から荷物を持ってこさせ、全員で「銀の馬の骨」へ。

10人部屋と言う、普段は使っていないという部屋を7日押さえ、支払いを済ませて子供達に留守を任せる。

金貨はみんなそれなりに持ってるし、危ない依頼は受けなくて良いから、とか言ってる間に離れ難い気持ちに。

最終的には業を煮やしたタイラーくんが俺を引きずり、大森林の探索ポイントを目指す。

なんでも、地図とクリスタルを受け取っており、俺達の担当ポイントについたらクリスタルが光って教えてくれるらしい。

え、なにそれ、なんかハイテク？

そんな訳で大森林まで、間で野宿1泊を挟んでの移動。

歩くのは好きではないが、まあ、ひとりじゃないし。

買い物で思わぬ時間を使ってしまったが、マイペースな者しか居ない我がパーティーは、特に慌てもせず、移動を開始したのだった。

行軍は散々である。

歩くのはもうどうでも良いと思える程、俺に良い事がない。

ウサギを見掛けたが、狩ろうと思えば灰になる。

出力を、俺に出来る範囲で、そう、地面に文字を刻んだ時レベルで威力を押さえても、ディスプレイングレイドではウサギ相手には過剰

だった。

じゃあアーケイントレント、と思えば、こつちも思ったほど威力を押しさえられず、どうやっても爆散。

地面に当たって気絶を狙うと逃げられる。

俺、そう言えば偏差撃ちどころかエイム下手だったわ。

プライマリスキルなら、と試しても、ことごとく。

スペクトラルブレイドの低威力冷凍斬りで何とか？ というレベルである。

「この不器用女が。狩りもまともに出来んのか」

「うるっせえなあ。脆すぎんだよ、ウサギがよオ」

険悪になる馬鹿2人に、見かねたジェシカさんがスリングショットで狩り成功。

ジェシカさんの獲物はアレなのか……：そーいや、クラス聞いてなかったな。

「あれくらいの手際を見せて欲しいもんだ」

「俺アどうも、細かいのは苦手らしいんだよ。粉碎とか焼却が得意なもんでな」

コンチクショウめ、大物だったらなんとかなる、筈。

ちよーつと自信が無いけど、多分、きつと、大物だったらなんとかなる。

手加減の練習しとこう……。

以降、見かけるウサギはタイラーくんとジェシカさんが仕留めていく。

遠距離の攻撃手段をもつジェシカさんは兎も角、タイラーくんは肉体言語全開で、走り寄ってダガーで仕留める。

え？ おかしくね？

なんで走って追いつけるの？ なんでダガーなの？

「狩りとはこうやるんだ」

いやおかしいから。

ドヤ顔は良いけど、お前の狩りもおかしいよ!!

明らかにあのゴリラより強いぞコイツ。

なんでBランクなん？ コイツ。

冒険者ギルドのランクシステムに、盛大な疑問を抱える事になってしまった。

どこまでも平原、そんな場所でキャンプ。

多分そうなるだろうと言うタイラーくんの指示で、予めキャンプ用の薪を買っていたので、火の用意は簡単だった。

歩きながらウサギの血抜きと言う荒業？ 生活の知恵？ の成果を見せつけられ感心したり、おっかなびつくり^{びつくり}にウサギの解体を手伝ったり。

「お前、よく旅が出来たな？ ここまで」

と言われ、悔し紛れに移動はテレポートという魔法を使って居たから、野営は殆どしたことがないという、嘘^{うそ}だけど自慢できないトコだけホントという作り話をしたせいで、明日朝に実演する事になったり。

色々ともうでも良い系のイベントを重ねつつ、焼いたウサギの肉とパンを食し、思いの外ご満悦の俺。

キャンプグルメ？

今日のなんて、作ってもらったのと買ってきたのが中心だから、感想言うくらいしか出来ること無いよ。

そんな訳で、汗もかいたし、例のクリーンの魔法を始め、便利そうな魔法のスクロールを選び、使用していく。

使用と言うか詠唱と言うか、広げたスクロールに書いてある文字を目で追うだけなのだが。

何でも、魔法の才能がなければ幾らスクロールを広げても覚えることは無いという。

じゃあ、俺魔法の才能有るのね、とか得意に成りかけたが、ウィザードのクラスだし、当たり前かと思ひ至る。

うん、俺の「才能」じゃなくて、クラスの「恩恵」だった。

生活魔法と言う括り^{くくり}の魔法は、消費魔力も少ないので、余程の事がなければ誰でも使えるらしいし。

どうせそんなこつたろうと思いましたがよ、ええ。

覚えた魔法を試し、便利さにニマニマする俺。

洗濯クリーンは対象選択で食器から身体からだまで綺麗になる便利魔法だし、光明ライトの魔法でスクロールの文字も見やすい。

で、覚えた魔法に全力で魔力注いだらそれなり強力になりそうだとかいう話をした流れで種火スターターはそのまま火魔法の基本だ、と言う、この世界の魔法の話の聞けたり。

火起こしのつもりで覚えた魔法は、もしかしたら狩りに使えるかも知れないと小さな期待を持ちたりもした。

そんな事を話ながら、時にタイラーくんの混ぜっ返しを交え、スクロールを眺め……魔法屋店主、パルマーさんのサービス品、妙なスクロールも一応覚えつつ……何々、効果はフレーバーテキストF仕様？何のことが判らんので、ヒマな時にでも試してみようと思う。

今試したら、無駄に悩みが増えそうな予感がする。

そんな食事と雑談と、合間にスクロールでの学習を混じえ、夜は更けていく。

交代しながら周囲警戒。

均等に時間を配分すると言いながら、どうもこの2人は、俺の睡眠時間を多目に取ってくれたようだ。

有り難いけど、無理しないでくれよ？

最初に俺が見張りして、1順した所で、起こす頃には夜明け前だろう。

見上げる星空が深い。

当然のように知っている星座はない。

だからといって、広がる威容は褪せることなく、俺という存在の矮小さを思い知らせてくれる。

夜天に広がる星々は、傍らで燃え盛る薪の明かり程度で抗する事も出来ず、今にも降り注ぎそうな迫力を俺に見せつけていた。

さて。

俺は今、1人で考え込むという悪手を打っている気がする。

なぜかと言えば、こういう時の考え事は、あんまりいい方向に転がらないからだ。

この世界は、多分、俺の空想、夢だと思う。

こうして時間の流れを感じるが、そう感じるほどに俺が「信じたい」夢なのだろう。

だけど。もしも、万が一。

ここが、リアルなもうひとつの世界だったら？

馬鹿馬鹿しいとは思う、俺にとって都合のいい事が起こるこの世界が、現実なんて有り得ない。

ウサギの解体の生々しい感触を思い出して、しかしそれすらも脳が錯覚を起こしているだけだと、そう思う。

だけでもし、この世界がリアルなもので。

俺がこの先、元の世界に戻るのか、この世界に居続けるのか。選ぶ事になるとしたら。

夜が明けて、陽光が世界の輪郭をハッキリと切り分けていく時間になっても、答えは出てこなかった。

第10話 大森林調査隊・下

朝日が夜の気配を完全に振り払っても、俺は考え事の殻から抜け出る事が出来ていない。

夜警の役目を忘れはしないし、周囲の警戒を怠る事もない。

たまたま獣も魔獣も現れる事もなくて良かった。

あ、たまには真面目な俺です。

遮るもののない陽光に照らされて、先輩2人が目を覚ます。

「おはよお、リリースちゃんありがとうね」

大きく伸びながらジェシカさんが挨拶をくれる。

大きく揺れる豊かな丘陵の存在感に見とれていると、むつつりとした顔のタイラーくんが俺を見ていることに気が付く。

「……まだ成長するかも知れんし、あまり悲観するな。どんなに絶望的でも、希望を持つのは悪いことじゃない。」

仮面で表情が見えてない関係で、野郎には俺が羨んでいるように見えたらしい。

「やかましいわー！」

これは凶星を突かれた様に見えるかもしれないが、実際はお前を妬んでるんだよ！

羨ましいなこの野郎！

朝から考え込んだり落ち込んだり羨んだり妬んだり、我が事ながら忙しい事である。

朝食は干し肉のスライスとパン、それと水。

からだ身体が3周りくらい、上下左右全方位に小さくなった影響か、随分食事が減った。

燃費が良くなったんだと、喜ぶことにしよう。

ふと気付くと、タイラーくんが果物を俺に差し出している。

いや、なんか言えよ。

たまたま気付いたけど、お前さん、俺が気付くまで黙ってるつもり

だったのかよ。

「……なんだよ」

恐る恐る、問う。

「果物は、良いぞ」

真面目な顔というか、無表情で言われると怖えよ。

「あ、ああ、ありがと……」

受け取らないとずっとこのままっぽかったので、それもまた怖い。俺が受け取ると、何を納得したのか頷いて、自分も果物を食べ始める。

……あー、朝食には果物が欠かせない人？

意外っつーか、うーん。

受け取った薄紅色の果物は見た目を裏切らず、酸味の強いりんご、つて言う味で、さっぱりして美味かった。

朝食を終え、身支度を済ませ、薪に砂を掛けて、いざ出発。

あ、生ゴミは穴を掘って放りこみ、デイスインテグレイド（弱）で灰にしてから埋めました。

「んじゃー、行くよー」

出発準備完了の俺の合図に、タイラー&ジエシカがそれぞれ俺の腕を取る。

「方向は、このまま真っ直ぐでいいんだよね？」

「ああ、問題ない」

俺が確認すると、タイラーくんが自信を持って答える。

今ひとつやらかしそう感が漂うが、まあ良い、信じよう。

昨夜言い訳にうっかり使ってしまったテレポート。

魔獣撃退の時にも普通に使っていたが、激戦の中での見間違いか勘違いだと思われたらしく、特に誰にも咎められていなかったのだからと隠していたのだが。

うっかりとは斯くも恐ろしいのだ。

「んーじゃあ跳ぶよ？　まずは一回」

使う以上、移動時間の短縮に成らねば意味がない。

出来る限り遠く、マーカーが届く限界まで。

遠すぎるとマーカーが青くなり、跳べそうな気がしない。

赤くなるところを測ると、大体2〜3キロくらい、だと思う。

地平線の手前、くらいで、今の俺の身長が160有るかどうかだから、多分地平線までの距離は……あ、地平線は地形も関係してくるから一概には言えないのか。

今度、街の城壁とかを使って測ってみよう。

それは兎も角、あんまり大きく見積もるのも危ないな。

……どうせ連続で跳ぶ事になるし、1回でどれくらいとか、あんまり関係ないか。

そろそろタイラーくんが騒ぎ出しそうなので、跳ぶとしよう。

「よつとお。こんな感じだけど、あんま判らないだろ？ 跳んだとか」

言いながら振り向くと、青い顔で俯くタイラーくんが。

え？ と思う間もなく、逆側の腕ごと身体からだを引っ張られる感覚。

そちらに目を向けると、フラツフラなジェシカさんが俺の腕にしがみついている。

「え？ え、なに？」

「の……」

え？ No？

タイラーくんがなにか言おうとして詰まり、呼吸を整える。

「脳が追いつかん」

あんだって？

一度休憩ということ、フォーメーションを解除。

「急に切り替わる景色に、脳の処理が追いつかん」

タイラーくんが少し落ち着いたのか、それでも青い顔で言う。

あー。

俺も跳び過ぎるとなるかも知れないが、俺の場合は跳ぶタイミングを自分で決めている分だけマシだろう。

いつ跳ぶか決める事が出来ず、判断する事も難しい2人が、しかも事前情報無しで一瞬で景色が切り替わったら、脳が混乱して具体的な

失調を起こすことも有るのかも知れない。

「便利な方法だと思っただけだな……これはちょっとキツイわね」

タイラーくんより更に顔色の悪いジェシカさんがこぼす。

「お前は、これはどうやって克服したんだ？」

タイラーくんの問いかけに、俺は考え込む。

実際に使った時は、頭に血が昇ってた筈だから……。

多分、俺、気持ち悪いとかそう言うのは無視してたと思う。

んで、連続で跳んでたな……此処より景色が大きく変わりそうな、

街の……ああ、殆ど街の上だったか。

で、それをどう伝えるか？

うーん、強引に纏めると。

「比較的短い距離を、連続で跳んで慣れた」

端的に言うのと、そう言う事だよな？

「……慣れか……」

タイラーくんの途方に暮れた声というのも初めて聞く。

本人には悪いが、ちよつと面白い。

「もう、サクツと連続で跳んじゃって、有無を言わせない感じかな」

追い打ち気味に言ってみる。

流石に今のジャンプの直後に「じゃあ俺も」とはなるまい。

「……成程」

タイラーくんが立ち上がり、俺が嫌そうな顔をする。

「それで行くぞ」

嫌そうな顔が俺とジェシカさんの2つに増えた。

「成程、確かに。慣れる物だな」

距離を短めにしての、有無をも言わせぬ連続ジャンプ。

俺の時はある意味極限と言うか、気にしてる余裕もない緊急事態だったし、四の五の言ってる場合じゃなかったんだけど。

コイツ、単純に俺のドヤ顔が気に食わないとか、そういうレベルの気に入らなさで荒行に挑んだ。

プライド高い……じゃないな、これはアレだ。負けず嫌いだ、ただ

の。

「まだちよつと気持ち悪いけど、ちよつと慣れたかも。あー、でもこれキツイわあ」

巻き込まれたジェシカさんも、数度連続で跳ぶ事で慣らされたらしい。

キツイとか言いながら、もう顔色もそれ程悪くない。

「……」

一方で、一番慣れてるはずの俺はと言えば。

「よし、じゃあもう大丈夫だ。一気に行くぞ」

「……」

タイラーくんが手を引くが、大地にうつ伏せに五体を投げ出した俺は反応したくとも出来ない。

「いつまで寝てるんだ、行くぞ」

「うるせえ。プライマリ・リソースの枯渇の反動で、気持ち悪いんだよ。アホほど跳ばせやがってこの野郎……！」

ゲーム内でプライマリ・リソース……俗に言うMPが切れても、倒れたりするような事はない。

単に魔法が使えなくなり、スキルの関係で防御力が極端に落ちてしまふ程度である。

じゃあ今の俺のこの有様の原因は何かと言えば、ゲーム内の出来事と現実での事象の差、と言う奴だ。

リアルにテレポートで跳ぶことで、慣れてるとは言えノーダメージで済む筈もなく、負荷が蓄積した所にMP切れ。

この身体からだになって初めてのMP切れだったので、ちよつとハードにその結果を突きつけられた感じに。

MP自体は回復出来て居るのだが、キツめの二日酔いに似た頭痛がガンガンと響く。

多分、跳ぶ事は出来ると思う。

心底跳びたく無いだけで。

「はい、リリースちゃんも元気に行ってみようねー」

タイラーくんが引いてる、その反対の腕をジェシカさんが引つ張

る。

ちよつとまつて、元気に逝けつて、酷くないです？

この、上級冒険者共が。

「現地についたら休んでるからな、俺」

ホントは「感嘆符！」付きで強めに言っているつもりなのだが、頭痛の所為で勢いが出ない。

両側から抱えられると言うか、引っぱり上げられている形になって地味にキツイので、観念して立ち上がる。

余裕が無いので跳べる限界までのテレポート数回で森林の縁へりに到達出来た。

タイラーくんとジエシカさんが慣れる為の連続テレポートが、何だかんだで距離を稼がせてくれていたらしく、思ったより大森林に近付いていた。

と、安心したのが間違いだった。

「もう一度だ」

「だからどれくらい距離だよ……！」

タイラーくんの指示で細こまかくテレポートしながら、担当エリアへ移動。

タイラーくんの手にあるクリスタルは反応が無い。

「通り過ぎてたりしてねエだろうなア！」

「む、その可能性も有るのか」

「お前なア！」

耐えきれなくなった俺はそのテレポート後の着地と同時に転倒。

ベテラン冒険者組は咄嗟の機転で俺の手を離し、転倒を回避。

俺だけが大地とお友達に。

……チクシヨウメ。

「む。この近くらしい」

もう起き上がるのが嫌な俺の耳に、タイラーくんの声が届く。

こんなによろしくない目的地到着も無い。

「近くだから、先に行くぞ。追いついてこい」

タイラーくんの無表情な声が俺の傍らを通り過ぎる。
はあ？

おいおいおいおい、この状態の俺を置いて行くんじゃねえ！

「あー、ホントに近そうだから、休憩してから来てね？」

ジェシカさんは気を使った風ふうに言葉ふうを置いて、歩いていくようだ。

気遣われてる風ふうの俺はと言えば、顔を上げる余裕も無い。

今魔獣が出てきたら。

手加減してやれる自信が無い。

色んな意味で。

10分程で、何とか立ち上がれる様にはなった。

しかし、テレポート酔いとMP切れが重なるとホントにしんどいな

……帰りは気をつけよう。

いや、言い慣れて来たけど、MPじゃねーし。

プライマリ・リソースだし。

見た目のんびり、実際は息も絶え絶えに歩いて、近くとか言いながら随分遠くのタイラーくん達の方へ歩く。

ポジションでも飲めば多少違うかと試すが、元々プライマリ・リソースの回復効果なんか無いし、アルコールを取り込んでの酔いじゃないから当然のように効かない。

寧ろ、無理に呑んだので胸焼けする始末。

急いだ所で、俺が細かい調査の役に立てるとは思えない。

開き直つてのたのた歩くが、妙に遠くのタイラーくんは、こちらに注意を払うこともしない。

大森林外縁の調査。

やることは予め決められた範囲で、不審な形跡か魔獣そのものを見つける事。

形跡は兎も角、魔獣そのものは難しいんじゃないかな？

森の中なら居るかもだけど、外側まで来てるもんかな。

まあ、ハンスさん含めた冒険者ギルドの幹部だって、その辺は織り込み済みなんだろう。

ここ2〜3日にさんにもちで付いた疵などの痕跡を探す。

地道な作業だ。

一応俺も、便利魔法シリーズに含まれていた「探索ディテクトとか言う魔法はある。

だが、ゲームはもちろん「向こう」でも使ったことがない、というか魔法そのものを使ったことがないので、これでホントに役に立てるか全く不明である。

試してみようかと思うが、まだこの辺りは他の冒険者の担当エリアだ。

勝手なことをしちやあいけない。

「酷い目に遭ったぜ」

せいぜい不満げな声と不機嫌な顔——仮面で見えないが——でタイラー組と合流。

「来たか」

見た目通りの無愛想さでタイラーくんが短くお出迎え。

「あ、もう大丈夫なの？ 無理しちや駄目よ？」

ジェシカさんは心配そうな顔をこちらに向けてくれる。

基本優しい人だし、良いなあ、と、思わなくもないが。

さつき、しれっと置いていかれたことは忘れないぞ。

「んで、調査はどうなってんだ？ 俺は火力系ウィザードだから、そういう作業苦手なんだよ。何をすれば良いのか判らん」

言いながら森の方を見るが、何が怪しいのか怪しくないのか全く判らない。

探索ディテクトがどの程度の範囲をカバー出来るのか判らないが、これは思った以上に地道で大変な作業になりそうだ。

「まあ、調査はクラスで向き不向きが出るのは仕方がない。こういう仕事は俺達スカウトの様な斥候スカウトクラスに任せろ」

さり気なくタイラーくんの職クラスが判明。

俺達スカウト、と言うのはジェシカさんもそうなのか、タイラーくんを含めた斥候スカウトに任せろ、と言う意味なのか。

ボケた振りして聞いてみるか。

「ん？ 俺達？ ジェシカさんも斥候スカウトなのか？」

言いながらジェシカさんの方に改めて顔を向ける。

地図を片手に、何やら色々書き込んでいる様子。

その佇まいと、ちよつと目を離れた隙に音もなくさつき居た場所から移動している辺り、間違いない気がする。

「ええ、私は純粋スカウトな斥候スカウトね」

ちよつとだけ作業の手を止め、ちよつといたずらっぽく微笑んでみせる。

うーん、あしらいの端々に見え隠れする大人感。

たまに子供と一緒ににはしゃいでるけど。

って、純粋スカウトな？ 私は？

「じゃあ、あつちスカウトは不純な斥候スカウトか……やらしー」

特に意味はないが、思い付いたまま口にするスカウトと、不意を突かれたように吹き出すジェシカさん。

「不純スカウトなつて……不純……ふくく……！」

変なツボに直撃スカウトしたらしい。

「お前スカウトらな……俺は暗殺者系アサシンの斥候スカウトだ。とは言え、基本技能は持つてる」

苦虫を噛み潰した様な顔をこちらに少し向けるだけで、タイラーくんは調査の手を止めない。

ソツがないのは良いけど、今キミ、なんか不穏な事言ったよね？

「暗殺者アサシンて……また物騒クワラスな職アサシンだな。俺の後ろに立つんじゃねーぞ」

「俺を後ろに回さないように気をつけるんだな」

肩を竦めて言つてやると、面白くもなさそうに答えてくる。

悪いやつじゃないが、なんと言うか、意外な職選択アサシンなのな。

そのうち、コイツアサシンが暗殺者アサシンなんか選んだ理由も、聞くことが有るんだらうか？

あと、そのうち言わなきゃいけないのだからか。

暗殺者アサシンだからって、ウサギを狩るのに走って近づいて斬るとか、しなくて良いんだよ、と。

「あ、俺も探索ディテクト使つてみて良いか？ 昨日覚えたんだけど、使つたら

どうなるのか判らんから」

本職に任せた方が良いとは思いますが、手持ち無沙汰で暇なので、多少なり手伝いが出るかと声を掛けてみる。

「使ったら何が起こるか判らない魔法とか、危険な予感しかしらないんだが」

すると、手を止めたタイラーくんがこっちに向き直った。

一瞬なんだこの野郎と思つたが、言われてみると確かに、禁呪感きんじゆが凄いな。

「探索は周囲の違和感を強調する感覚系の魔法だ。センス使い慣れないと、強調されてもそれが何か判らないこともあるぞ」

えー、なにその小難こむずかしい感じの魔法。

「唱えたら自動で怪しいところが光るとか、そういう魔法じゃないのかよ」

なんか思つてたのと違う、そう思つて口を尖らせると、タイラーくんが再び口を開く。

「効果はそんな感じだが、なんで怪しいのか、パツと見て理解わかるか？
つまりはそういう事だ」

タイラーくんの講義に、珍しく棘がない。

「あー、調べるトコは教えてくれるけど、なんでそこを調べるのかは考えろつて事か」

中々、楽させてくれない魔法らしい。

魔法とは一体。

「考えるにも、経験が必要になるということだ。まあ、より深く使えるようになれば、探索ディテクトで知ることが出来る情報も深くなる」

元来、この男は人に物を教えるのが好きなのかも知れない。

より深く、か。

それは熟練度と言う意味だろうか？

或いは、魔法に振り分ける魔力量的な意味で、とか？

「お前さんも探索ディテクトを使つてるのかい？」

「無論だ」

ふむ。

今の俺が熟練度をどうこうすることは出来ないから、じゃあ、使う魔力を増やしてみるか？

魔力って、プライマリ・リソースで良いのよな？

……どうやって増やせば良いんだ？

目を閉じて、魔法に集中してみる。

発動を直前で止めて、リソースを多く振り分けるイメージ。

ゲーム画面で見慣れた、プライマリ・リソースの残量を示す「左下のアレ」ことプライマリ・オーブ？ の容量の2割を使うイメージ。

レポートと違って「酔う」感じもなし。

魔法の効果が広がる様子をイメージしながら、ゆっくりと目を開ける。

「お前……何をしたんだ」

目を開けきる前に、タイラーくんの声が聞こえた。

ふわりと広がる緑色の光が木々を、葉の一枚一枚を、足元の草の表面を撫でる。

半径10メートルくらいか、思ったより広がった光が通り過ぎた後に、数カ所引っ張られるような「反応」に気が付く。

範囲が普通と比べて広いらしいことはタイラーくんの反応で、何となくだが理解した。

しかし熟練度が不足しているからだろう、「深い情報」等などというものは感じられなかった。

まあ、それは仕方がないのだが、あちこちに反応したポイントをいちいち調べるのが大変そうだな。

そう思った時に、なんとというか、一段と強く引っ張られるような、注意を引く感覚が俺に眼を向けさせた。

「今のは何だ？　そもそもその範囲が尋常じゃない……それに、他人の使った魔法に、俺が反応できるって……」

俺が目を向ける先に体ごと向き直りながら、タイラーくんが呟く様に声を押し出す。

「私にも理解したわ。何箇所か反応があるけど、1個強めの反応があるわね」

地図を手にしたまま、ジエシカさんもこちらに歩いてくる。

そう、ジエシカさんが今言った通り、俺の使った探索デイクエストの魔法は数カ所に反応したが、その中でも特に大きく反応した箇所があった。

外側に面した……この大木の。

「……魔獣と言っても、獣と言うことか」

これほど大きな跡なら、今オレが何かしてもしなくても、タイラーくんかジエシカさんなら見つけていただろう。

たださつき調査している位置から離れているので、もう少し後にはなつたと思うが。

「マーキング跡、ね。ホントにあの魔獣のマーキングか判らないけど、体毛も付いてるし」

恐らく、身体からだを擦り付けた跡。

体躯が巨大なので、必然力ちからも強く、木の表面を大きく削り、所々に体毛がこびり付いている。

地図に場所を書き込むジエシカさんとタイラーくん。

念の為、体毛もサンプルとして採取している。

「リリース。悪いが此処を起点に、もう一度探索デイクエストを頼む」

タイラーくんの指示に、俺は即座に目を閉じ、意識を集中させる。

さつきMP……プライマリ・リソースを2割も使っただろうって？

ディアブロ3出身ウイザードのリソース回復力、舐めないでもらおうか。

テレポートの時は、「酔い」の蓄積にリソース消失が止めとどめになり、動けない程の体調不良に苛まれた。

だが、本来は、プライマリ・リソースが空からになることは珍しい事ではない。

この世界に来て、感覚が色々変わった弊害でテレポートに副作用が発生したが、本来はそもそも「それほど多くもない」プライマリ・リソースをやりくりして戦うクラスでも有るのだ。

今のビルドにたどり着くまでに、何度リソース枯渇になったかなど、いちいち数えていない。

それで戦える秘密は——まあ実際は立ち回りが重要で、それがマズ

いと枯渴したら死ぬ訳だが——プライマリ・リソースの回復の速さに有る。

空からになった所で、放ほつといっても30秒程度で回復する。

しかし、プライマリ・スキルで敵を叩けば、もつと回復は早い。

しかもプライマリ・スキルはリソースを消費しない。

そんな特性を持っているが今はそんなスキルを使わずとも、俺はさっきの会話の間に、リソースの回復は完了していた。

2割程度の回復など、斯様に一瞬なのだ。

そして、さっきと同じ規模で広がる探ディテクト索。

この近く、少なくとも半径10メートルの範囲には、細かい反応は有るが大きな反応はない。

念の為に細かい反応の有った所を2人が確認していく。

流星にそういう実地の調査は、経験のない俺では判らない部分だ。

さっきのマーキング跡のように、わかりやすい痕跡とは限らないのだから。

出入りする場所を特定できれば、調査が楽になる。

俺は適度にリソースの回復を行いながら、タイラーくんやジェシカさんの指示に従って探ディテクト索を次々と使用し、痕跡の発見に全力を注いだ。

まさか、攻撃魔法以外の、しかも「この世界」の魔法で役に立てると思わなかったが、だからこそやりがいがある。

夢か現実かわからないし、夢の確率のほうが高いとは言え、この世界で俺に出来ることが有る、出来ることは喜ばしい事だった。

張り切りすぎてバテないように気をつけながら、俺は覚えたばかりの新しい魔法を使いまくったのだった。

3人で探ディテクト索を掛けまくり、昼までである程度の調査が済んでしまった。

結果、俺達の担当したエリア内で、出入り口と思しきマーキングが有ったのは2箇所。

一部か全部か判らないが、此処から出て街へ向かったということだ。

街へ向かい、街の外で薬草を採っていた子供達を。

ざわりと胸中に湧き上がりそうになる殺気を押さえつける。

無闇に暴れないと決めてある。

襲われ、殺されたのは冒険者ギルドの年若い冒険者。

仇をとるのは俺達の仕事だ。

そう、冒険者の。

血の気が多い冒険者達の仕事を、俺が1人で抱えちゃ悪い。

「意外だな。てつきり、森の中に駆け込むものかと思ってた」

森を眺めながら、簡単な昼食を摂る。

俺は朝と同じメニュー。

そんな俺に、タイラーくんがバナナそっくりな果物を突きつけながら言う。

っていうかバナナだコレ。

「暴走したらハンスさんがおつかねえよ。それに、暴れてエのは俺だけじゃないんだし」

ハンスさんを筆頭に、グスタフさんと気のいい仲間たちや、他の冒険者の顔が脳裏を通り過ぎていく。

バナナを受けとり皮を剥きながら、答える。

「出てきた分に関しては、全部纏めて灰にしてやるけどな」

そう笑うが、森から巨大な獣の気配は無い。

本心で言えば今すぐ、この森を焼き払ってやりたい。

だが、さつき考えたことをもう一度考え、知り合った中で気のいい冒険者達の顔を思い浮かべ、心を落ち着かせる。

子供達の顔を思い浮かべ、あんまり心配掛けられないな、と考えながらバナナに齧りつく。

普通にうまいな、うん。

魔獣が出てくるようなら即座に灰にするつもりで構えていたのだが、思ったよりも担当エリアの調査が早く終わったんで、タイラーく

んの提案で早々に引き上げることに。

曰く。

自然発生の魔獣だったら偶然の遭遇という線もある。

しかし、もしも黒幕が居た場合、ここで魔獣に出会うと言う事は、その魔獣は命令を受けて見回りに来ている可能性がある。

そいつを倒すことによつて黒幕が攻勢に出てくるのも面倒だが、守勢に回り、最悪住処を移動されると面倒くさい事になる、と。

成程もつともな話だけど、それで、他の冒険者が出会つても同じ事では？

そう思う俺に、タイラーくんが説明してくれる。

「他の冒険者は、運が悪くなければ勝てるか撃退出来るだろう。だが、お前は単身の癖に戦力が過剰だ。この森に居る奴が街へ侵攻しようとしてるかは不明だが、まあそう仮定するとして」

ふんふんと頷きながら、真面目に授業を受ける俺。

「仮にお前がその黒幕の立場だとして、だ。そんな、自分の手駒を1人で壊滅させるような化け物じみた相手と、まともに戦うと思うか？」
ふむふむ。言われてみれば、もしも俺がそういう立場で、敵にそんな化け物が居たら、逃げるわな。

だけでも。

「言つても、それは前提として、敵さんが俺の実力を知つてる必要があるんじゃないか？ こないだの魔獣は俺が全部塵ぜんぶちりにしたし、情報持ち帰った奴が居たとは思えないんだけど」

なにせ全力の攻撃を叩き込んだのだ。

そう易々やすやすと逃げられたとは思いたくない。

俺がそう言くと、タイラーくんはメガネを直しながら言う。

「本当に1匹も逃していないのか、と言う疑問も有るが。それ以前に、戦場の確認や必要な報告をさせる役割のものを、前線に置いとく理由は無くないか？」

……おお、なるほど、言われてみれば。

黒幕は後方も後方、下手すると森から出ていない可能性すら有る。だったら、あの狼型の魔獣をけしかけ、指示を出し、かつ場合によつ

ては前線の様子を伝えさせる者を間に置けば、まあ便利だろう。

万が一ヤバい敵が突っ込んできてその伝達役がやられたとしても、自分が直ちに危険になる可能性は減る。

「んじゃあ、俺の存在はこっさりあの戦いで確認されてて、マークされてる可能性は有るのか。そうなると、成程、俺が暴れちゃうと……」
なるほどね、と、俺は頷く。

そんな俺がここで魔獣の迎撃に本気出しちゃったりしたら。

「即バレルな」

それで逃げられて、どつか別の場所で悪さされても気分が悪い。

黒幕が居ても居なくても、この大森林でケリをつける。

そのために、今は過剰な刺激を与えるのを避けるという訳だ。

昼食と並行して地図の書き込みの確認をして、タイラーくんとジェシカさんは報告の抜けはないと判断、荷物を纏めて帰還することに。

「帰りはテレポートとやらが有るから、夕刻までは帰れるか？」

ごく簡単にコイツは何を言い出しやがるかな？

「途中で休憩させる。幾ら何でも、休憩無しで跳んだら死んでしまう」
プライマリ・リソースが尽きないように気を使いつつ、限界まで跳ぶ、コレが出来れば大丈夫だが、正直そんな器用な事ができる気が全くしない。

原因は目の前にいる2人。

こいつら、テレポートに慣れたら慣れたで急かすようになりやがった。

調子狂わされたらリソース管理が雑になる。

非常に嫌な予感がするので、跳ぶにしても毎回リソースを確認し、余裕の有無は見ておこう。

きちんと管理できれば、タイラーくんの言う通り、夕方くらいまでには帰れると思うが、余計なことを言うとはホントに急かさねかれない。

帰りは慎重に帰ろう。

結局帰りに4回ぶつ倒れ、その都度休憩をとり——しかし万全の体調には戻せず——街に付いたのは、すっかり夜であった。

「使えない……」

「ああ!? お前、言うに事欠いてこの野郎——」

夜間は門が閉まる。

門前の広場で、俺達は悪態を吐きあいながら野営の準備である。

野営だし、見張りも建てるのだが、すぐそこに大門があり、防壁の上では衛兵が警戒してくれている。

警戒っていうか、俺とタイラーくんの仲良しコンビのじゃれ合いを見て笑ってる衛兵も居る。

こっちは良いから仕事しろよう!

夜間は、余程やんごとなき方々の特使とかそういった証の有る者でもなければ、例えこの街出身の冒険者であろうとも中に入れないのがルール。

そんな感じで衛兵さんが眼を光らせてくれるので、半端な場所で野営するくらいなら門の前まで来たほうが安心して眠れる。

「あー、頭痛エ。悪いが先に休ませてもらう、交代の時間で起こしてくれ」

タイラーくんとじゃれて遊んでいたのだが、キャンプの準備も整い薪に火が入ると、俺は夕食もそこに横になった。

晩飯も朝昼と同じメニューだし、起きてから食おう。

そう思いつつ、簡単な寝床を地面に設え横になると、俺の意識は急速に深い所へ潜っていく。

タイラーくんの声で眼を醒まし、見張りを交代した俺は昨夜と同じ見張りで周囲を警戒しつつ。

やはり昨夜と同じ疑問を胸中に、朝日が星々を追いかけて、遠く稜線を浮かび上がらせる様を眺めて。

昨日に続いて答えを見つける事が出来ず、自分の立ち位置を保留することしか出来ないのだった。

第1話 急に言われても困るってこと、案外多いよね

太陽も出たし、衛兵さん達も門を開けたり交代していたりと動き出し、今日が始まるんだなあ、等と非常に他人事な感想を思いながら先輩方を叩き起こす。

後輩冒険者の鑑こと俺です。

4日分の食料を買ったものの、2、5日で帰ってきたので食料が余っているが、まあアイテムボックス？ バッグ？ どっちだっけか……。

兎に角、ソレのおかげで腐ることがないので安心だ。

服ごと身体を洗浄し、魔法の偉大さを感じながら心からサツパリとしつつ、冒険者ギルドに顔出す前に着替えたいと「銀の馬の骨」へ。タイラーくんが特に文句を言わなかったのは、ジェシカさんも同じく着替えを希望したのと、今ギルドに行っても時間が早すぎて、ハンスさんも来てないだろうという事で。

だったら、朝飯食ってから行こう、と、そう言う流れになるのは必然で、俺達は悠々と「銀の馬の骨」へと踏み込むのだった。

今日の格好は仮面以外は影一式。

当然のように見た目が変わっただけで中身は一緒なのだが、洗浄のおかげで隈なく綺麗。

便利は良いのだが、やはりこう、異世界モノお決まりの台詞は湧いて出る。

そろそろお風呂入りたいよ、魔法で綺麗になるって言ってもやっぱ風呂は大事だよ。

例の新居のお風呂がものすごく楽しみです。

「リリースちゃんって」

やはり「銀の馬の骨」の飯は美味い。

2日ぶりの子供達に囲まれ、そんな事を思いながら幸せに浸ってい

ると、ジエシカさんがニコニコと俺を眺めている。

「干し肉とパンが好きなのかと思ってたけど、ちゃんと美味しいご飯を美味しいって思えるんだねー」

酷くないです？

「あのね、ジエシカさん。外に出て、安全でもない環境で食べるのに、凝った物の用意なんかしないでしょ」

好きで干し肉齧ってた訳じゃないんだから。

嫌いでもないけれど。

歯ごたえが有るから、アレ噛んでるだけでお腹なかいっぱいになった気分になれるし。

「……意外と考えていたんだな」

スープを味わいながら、タイラーくんが心底驚いたように呟く。

「いい加減確認しとかなないといけないと思うんで聞くけどな？ お前、俺を何だと思ってるんだ？」

食事中なので仮面のない俺は、嫌そうな顔を隠しもせずに尋ねる。

「出来の悪い、口も悪い妹かな」

この野郎。

顔色ひとつ変えずに、人様を口も頭出来も悪いと言い切りやがった。

挙げ句にコイツの妹とか、どういう系統の罵声だ。

「リリスお姉ちゃんが妹だったら、タイラーさんは私のお兄ちゃん？」

ティアちゃんが澄んだ眼でタイラーくんを見上げている。

やめて。

うちの子がお前の妹とか、勢い余ってお前を灰はいにしちやうぞこの野郎。

「……ティアが妹になるなら、リリスあれは要らないかな」

自然にティアちゃんの頭を撫でるタイラーくん。

実に気が合うじゃねえか、この野郎……！

「お前なんかにはウチの大事なティアちゃんを預けられるかバアカ！

手エ出すんじゃ無ねエよこのメガネ！」

「いつもだが、お前の口調には品位がないな。しかも罵倒の語彙が少なすぎる。少しは本を読め」

「うるせえよバーカバーカ！」

最早いつもの光景となったらしい俺とタイラーくんのやりとりを、宿の女将さんや亭主、それにジェシカさんやウチの少年少女達までもが笑顔で眺めている。

なんか俺の扱い、悪いとは言わねえけどさ、何て言うか。

ポジションで言ったらペットじゃねえか？ これ。

釈然としない気持ちで食事を終え、冒険者ギルドでハンスさんの出勤を待ちながらのんびりとバーの一角を占領する俺達。

報告は完全にタイラー組に任せるので、報告の為の地図と書類をチェックしている2人を眺めて、俺はする事が無い。

子供達はすぐに薬草採りに行こうとしたが、俺も一緒に行くということで、一緒にハンスさんを待つて貰って居る。

「帰ってきたばかりだつて言うのに、マメねえ、リリースちゃん」

俺が薬草採取に行くこと知り、報告すべき事の抜けが無いか、説明に不足が無いかを再度確認しつつ、エールを呷ってからジェシカさんが口を開く。

……大丈夫なのそれ？ 呑みながらとか、ホントにチェック出来るの？

「確かに、仕事中の飲酒は褒められた物ではないな。特にジェシカは、呑みすぎるくらいが有るからな」

言いながら、ジョツキを傾けるタイラーくん。

……コントじゃねえか。

ツツコまねえからな？

そうこうしている間に、ギルドの入り口に熊さん登場。

手を振ってみせると、驚いた顔をしてからこちらに真っすぐ歩いてくる。

「まさかと思うが、戻ったのか？ 早すぎると思うんだが？」

一応礼儀として仮面を外した俺の、その頭を掴んで、ハンスさんは不思議そうに尋ねる。

待て。なんで頭を鷲掴みなんだ。

「俺が吐きそうになって倒れたり色々有ったんだよ」

俺が端折りすぎたダイジェスト報告をすると、熊のハンスさんよりもウチの少年少女達の方が驚いていた。

そう言えばその辺の話はしてなかったな。

なんかごめん。

「調査は出来たのか？ 治療師を呼ぶか？」

意外な事に、なんだか心配そうなハンスさん。

あれ？ なんかそれはそれで居心地悪いんだけど？

「もう大丈夫だよ。調査は終わってて、そつちの2人が報告の資料纏めてる。バカ犬共のマーキング跡を見つけたぜ」

取り敢えず、体調不良で帰還して、調査終わってないとか思われたらイヤだったので、そうではないよとアピール。

俺の報告？ に視線を巡らせるハンスさんに、資料を突きつける2人。

「ああ、すまん。確認させてもらうが、先に規定分の報酬を持ってこさせる。追加に関しては、内容を確認してからだな」

資料を受け取り、地図に書き込まれた内容を軽く確認し、そこで漸くハンスさんは俺を解放する。

そう。今までこのオッサン、俺の頭を掴んだままだったのだ。

「それと、ハンスさん。俺とジェシカは訳有ってコイツ等と一緒に暮らすことになった。それでって訳じゃないが、今後は緊急性の低い仕事は受けず、のんびりしようと思う」

頭を解放され安堵の溜息を漏らす俺と、資料を持って立ち上がろうとするハンスさんは、同時にタイラーくんへと顔を向ける。

いやまあ、暮らすのは事実だけど、報告要るのか？

特に後半、言わなくても良い気が……何かのケジメなのかな。

まあ、仕事減らすのは宿代かからなくなるし、臨時収入が有ったからだろうな。

二度と金貨つかみ取り大会はやらないけどな！

「あ？ ああ、いやそれは構わんよ、緊急時に力を貸してもらえるなら、犯罪以外は好きにしてくれて良いんだが」

きよとんとした風のハンスさんだったが、タイラーくんの表情を見ている内にその顔に笑みが広がる。

ねえ、俺には徹頭徹尾無愛想にしか見えないんだけど？

ねえ、ちよつと男子だんし、なあに通じ合っちゃってんの？

「随分楽しそうな顔じゃないか、何をするんだ？」

ハンスさん？

楽しそうに見えるの？ あれが？

なに、ミクロン単位の表情の変化なの？ 俺、そんなに眼が良くねえよ？

なんであの仏頂面みて楽しそうな顔とか思えるの？

「ちび共どもに稽古つけてやりながら、そいつ……リリースとな？」

あー、フレッドくんとかの面倒見る感じなのね。

そう思いかけた所で、急に名前が出て驚く。

しかも、思わせぶりに言葉を切りやがって、なんなの？

そう思う俺が、取り敢えず手近な文句でもぶつけてやろうと口を開いた所で、それを遮る様にタイラーくん自身が再度言葉を押し出した。きた。

「クランを結成しようかと思ってる」

……なんて？

クラン結成。

ハンスは久しい響きに僅かに耳を疑ったが、目の前の男は本気なのだど悟ると上げかけた腰を椅子に据え直す。

「詳しく聞こうか？ 特に、リリースと、という辺りをな」

ハンスの左隣では、急に名前を出されたと思しきリリースが、戸惑いからか動きを停止させている。

恐らく、今初めて聞いたのだろう。

そんな有様で血族クランとは、なんともちぐはぐな印象は否めない。

だが。

「詳しくも何も、言葉のままだ。クランマスターはリリース、その下に俺達」

初めて聞いたであろうリリースが、大口を開けてテーブルに手をつき、からだ身体を支える。

テーブルの向こうでは、やはり驚いているジェシカ。

その周りで、子供達が不安そうに成り行きを見つめている。

この男は、あれ程言っただのにまだ。

言葉が足りないクセが治っていないらしい。

「子供達はどうするんだ？ 随分お前たちに懐いているようだが？」

ハンスの言葉に、ハツとしたような顔でタイラーは4人の子供達へと眼を向ける。

「当然、クランのメンバーとして迎えたい。勿論、本人の意思を優先するが」

タイラーの言葉に、安心したように相好を崩す4人。

あの様子ならば、子供達は大丈夫だろう。

ハンスは1人小さく頷くと、視線を隣に向ける。

「……当のリリースが、話に着いてこれて居ないようだが」

言われて全員が向けた視線の先では、ハンスの言葉に、壊れたりリスが大口を開けたままコクコクと頷き続けていた。

思いつきで行動する奴とか、ホント困るよね。

何よクランで。

予め相談くらい貰わないときあ。

ほら、急に家を買いたいとか言われても、言われたほうは急には反

応出来ないじゃん？

そういう事だよ、うん。

うん？ 最近似た事例を目にした？

へえ、世の中には迷惑な人って居るもんだね？

「……当のリリースが、話に着いてこれて居ないようだが」

ハンスの声が不意に、明瞭に聞こえて、ハツとして周囲を見渡し、それから俺は事の発端に荒れた声を投げつける。

「おいタイラーお前この野郎！」

口調がどこかの芸人風になったが、そんな事は今どうでも良い。

「なんだ、黙り込んだり騒ぎ出したり、忙しいやつだな」

この野郎は自分が原因だとは、露^{つゆ}ほども思っちゃ居ない様子で溜息まで重ねやがる。

「誰の所為だと思ってるやがるんだコンチキショウ！ クランとか、ひとつも聞いちや居ねえぞ俺ア!!」

テーブルを強く叩いてから、指先をタイラーに向けて突きつける。

「……嫌なのか?」

顔色を変えるような可愛げなんか欠片ほども見せず、タイラーはそもそも悪びれない。

「嫌かどうかの話はして無^ねえんだよ俺は！ 勝手にお前が決めたことに、勝手に巻き込む言^いってんだよ！ テメエの常識はどうなってやがるんだ?! ああ?!」

今回^{こんかい}ばかりは言わなきゃならん。

そりゃあ、俺の家の件も、周りを振り回したのだが、俺的には勝手に勘違いされた感じだ。

基本は「俺が個人的に」住むための家を買う相談からのスタートだった筈だ。

そもそもクランってのが、俺の知ってる「クラン」と同じ^{おな}ものか判らんし、同じだったとしても、それは「個人で」決める事柄じゃないだろう。

「なんで『血族^{クラン}』って言うのか、良く考えろこの野郎……!」

単なる思いつきの事に俺や子供達を巻き込むなら、幾^{おな}らこいつでも、ちよつと許す訳にはいかない。

「子供達は元より孤児、身を寄せ合って必死に生きている。彼らはお前のクランに入ることに、抵抗は無いだろう」

勝手に話を進める様に見えるタイラーに激昂しかけるが、その俺の視界の端で、子供達が大きく頷いている。

視線を向ければ、不機嫌で酷いツラをしてるであろう俺に、精一杯の笑顔で頷いて見せている。

怒ってる俺が怖いのだろう、冷や汗が見え隠れしているのに。

……そんな顔されたら、怒れないじゃないの。

「俺もジェシカも、お前を気に入っている。すぐに暴走するし、目を離したらすぐ暴れるような危なっかしい奴だが、目を離せない部分も含めて、まあ悪くないと、そう思う」

少しも褒められている気がしないが、少なくとも「いつもの」軽口とは違うらしい。

タイラーの言葉に、今度はジェシカさんがのんびりと頷いて見せる。

「リリースちゃん、一緒にいると面白いからね。宛もなく旅から旅の冒険者も悪くないけど、落ち着けるならその方が楽だしね、それに」カラカラと笑い、大人の余裕でジェシカさんは俺の方へ歩いてくる。

「……大きくなりたいなら、相談に乗れるかもよ？」

「……身長の話だったら結構ですが、胸の話だったら是非」

お姉さんと禁断の関係に。

ちよつと期待しなくも無い下心丸出しで、俺は返事する。

ジェシカさんにそんなつもりは無いと、力強く断言できるけどな。

「で、もう一度聞くんが。嫌なのか？」

卑怯な野郎め……！

タイラーくんの、答えは判りきってる、てき的な表情も腹が立つ。

「……俺が怒ったのは嫌だからじゃなくて、勝手に話を進めるその態度に、だ。間違えんじゃねえぞバーカ」

せいぜい精々憎々しげに、つまらなそうに言ってる。

それで気が晴れる訳でもないが、言ってるやらかなきや気が済まなかったんだ。

深く大きく、溜息を吐く。

「運営はお前らに丸投げすんぞ」

「任せろ。組織の資金を食い潰すとか、やってみたかったんだ」

心底うんざり顔の俺と、全然楽しくなさそうなタイラーくん。

どうにか纏まった雰囲気、主に子供達がホッとした様に表情を緩める。

「ごめんよ、君達はひとつも悪くないんだよ。」

タイラーくんは、後程説教だ。

「やれやれ、纏まったか。クラン結成の届け出はキチンと手続きを踏めよ？ 人数は9人から、だ。後2人頑張れよ」

もういい加減頭に入れるべき情報が増えるのは勘弁して欲しい、そう思いながら歩み去るハンスさんの背中を見送り、タイラーくんの顔に視線を戻した俺は思わず吹き出していた。

「最低人数……いつ変わったんだ……」

心底驚いた顔のタイラーくんというのは、多分レアなものだと思う。

一度報酬を持ってきてくれたハンスさん——この人、意外とフットワーク軽いかるのな——に、クラン結成の最低人数について確認して、やっぱり打ちひしがれる様子のタイラーくんを指差して笑ってやってから、俺は子供達と意気揚々と薬草採取に。

今日は東門の方に行くというので、5人でワイワイと移動。

ワイワイ話しながら薬草を摂り、俺の能力……正確にはディアブロ3のシステムだけど、ソレによって薬草を採取した俺のアイテムボックスに、付近の薬草をこっそりと「回収」する。

子供達と薬草を探して俺が拾う、を何度か繰り返し、30分程度の時間で全員が12束納品できるほど採取し、ワイワイとギルドへと戻る。

薬草採りも、賑やかにやると楽しいねえ。

え？ 普通に採取しろ？

やだよそんな、腰きに来きそうな事。

ギルドで納品し、それぞれが報酬を受け取り、さてこれからどうすっかな、そう思っていると。

「リリース姉ちゃん、お家見に行こう！」

マシユークくんが手を引いてくる。

「おいおい、まだ修繕中だし、行いっても中には入はいれないぞ？」

空いてる手をカレンちゃんに引かれ、俺はよたよたとギルドを出る。

何人か人相にんそうの悪い冒険者が慌てたように俺を避けて行くが、中に混じってた人相にんそうが悪いのに気さくな冒険者がすげいい笑顔で挨拶してすれ違う。

……ああ！　ありやあグスタッフさんトコの若いのか。

ちよつとづつ顔が広がっていく感じで、なんだかこそばゆい気持ちを味わいつつも、子供達に急かされるままに俺は歩く。

商店街を抜け、急に静かになった通りを曲がり、俺達は絶賛作業中の建物を、門の外から見上げる。

2階建てなのだが天井が高いようで、俺の知ってる2階建ての建築物より上背が有る。

「ねえ、僕たちは4人でひと部屋なの？」

見上げてくるマシユークんの頭を撫でながら、俺は答える。

「いや、基本は1人1部屋だよ？　まあ、寂しかったら誰かの部屋に集まって寝ても良いし、なんなら俺んとこ来ても良いし」

カレンちゃんとティアちゃんに飛びつかれ、ほんわかした気分ではばらく工事の様子を眺め、ギルド前の広場に向かって移動する。

適当に串焼きとか果実飲料でも呑んで、のんびりしよつと。

ちよつと早めに宿に戻った俺は、難しい顔で腕組みしてベッドに腰掛けるタイラーくんを目撃する。

大変そうだねえ、なんか知らんけど頑張ってるね？

「待て。少し相談に乗れ」

ちっ。

逃げられなかったか。

「なんでい、相談って」

部屋だし、そもそも装備を外しても問題ない。

俺は仮面を外して、適当にタイラーくんの向かいのベッドに腰掛ける。

そんな俺とタイラーくんの周りには、子供達が腰掛けたり寝転んだり。

いいなあ自由で。

「あと2人だ」

真顔だし圧が強いし、もー。なんなの。

「言葉が足りないって、言葉が。もつと言葉を尽くせ、頑張って伝えて行こうぜ」

正直、言いたいことは何となく理解わかるのよ？

でもホレ、聞いているのは俺だけじゃない訳よ。

「メンバーがあと2人ってんだろ？ 伝ツテがなきゃ厳しくねえか？ 俺は兎も角、タイラーくんやジェシカさんが知らん相手なら、正直、信用して迎え入れるとか難しいぞ？」

俺が言うと、丁度部屋に戻ってきたジェシカさんが頷きながら続く。

「そうなのよねえ。まあ、最悪は適当なの2人誘ってクラン立ち上げちやつて、すぐに放逐しても良いと思うけど」

いつもの笑顔で、なんかとんでもねえ事言い出すジェシカさん。

駄目だよ？ そういう、禍根にしか成らないことは絶対駄目よ？

「考え方変えようぜ」

俺が事も無げに言うと、ポカンとした顔でタイラーくんが俺を見る。

「ウチのクランって、どういう集まりだい？」

俺が楽しみに質問を投げると、タイラーくんとジェシカさんが顔を見合わせる。

「仲間ー！」

「仲間ー！」

フレッドくんとカレンちゃんがほぼ同時に、手まで挙げて答える。純粹なその意見は眩しいし羨ましい。

俺は2人の頭に手を載せ。優しく撫でてやる。

「だ、そうだぜ？ 結局クランに何を求めるかなんて、人それぞれな訳だ。小難こむずかしく考えてもしょうがないじゃんよ」

俺にとつてはどうなのか？

正直判らない。

なにせ、クランとか結成するなんて、考えてなかった。

俺は少し背を反らせ、上体を両腕で支えるようにして軽く伸びをし
て、2人に改めて向き直る。

「別に躍起になって依頼クエストやらんでも、資金はしばらくは有るし。何と
なく貯金できてる、って程度で依頼クエスト回してたら問題ないさ」

つまり、ガンガン依頼クエスト受ける様な、根っから冒険者です、っていう
タイプは今はいらない。

そういうタイプは、現状で充分だから。

「俺が今仲間に欲しいのは、料理作れるやつと魔法道具を作れるやつ。
こんなトコかな」

虚を突かれたのか盲点だったのか、タイラーくんが目を見開いてい
る。

珍しく考え込み過ぎなんじゃないの？

普段のタイラーくんだったら、絶対気づいてると思うんだ、こんな
の。

「んで、そういう連中って、研究やら開発やらが軌道に乗るまで、色々
大変なんじゃないかな？ 具体的には、資金とかさ」

俺が言いたいのは気楽な仲間探しのアイデア、なんてもんじゃないやな
い。

そもそもがクランに求める事は違うが、結局どういう形であれ、メ
リットが有るからこそ参加するんだろう。

冒険者しながら錬金術を研究してたり、魔法道具作ったり。
料理人として身を立たい奴も居るかも知れない。

そういうタイプの連中は当然努力を重ねるが、必ずしも上手くいく
訳でもないだろう。

例えば、実力は有るが、スポンサーが付かないとかね。

あとちよつとの資金で上手くいく、そう頑張ってる連中を取り込む
のはある程度判り易いんじゃないかな？。

だから、そういうのを、即物的なメリットを目の前にぶら下げて餌
で釣れと、そういう現金な話をしているのだ。

具体的に、俺が欲しいと思える人材を指定しつつ。

こっちは食材やら資金を提供し、特に魔道具関連は商売にも出来

る。

異世界モノの定番、地球製品の異世界開発なら、アイディアは出せない事もないのだから。

んで、そう言う事になるのなら、欲しい人材もきちんと明言する必要が有るだろう。

欲しいと言えば、屋敷の管理を任せられる人も欲しいね、いずれは。「後は、まあ、3人程度で、あの屋敷を維持できる人材が欲しいな。毎日掃除しろとは言わんけど、まあ、全体がそこそこ綺麗に保てるようにさ」

俺の話を、いつの間にかメモを取りながら聞くタイラーくん。

「成程……魔道具作成のスキル持ちに『商品』を作らせるとは、考えたな。どういった物を作らせるんだ？」

ありや。乗り気なのは良いけど、出来るかは別問題だぜ？

まあ、言うだけならタダだし、良いけどさ。

「そうだな。例えば、食材やら酒やらを冷やして保存できる箱とか」俺の言葉にピンと来ないのか、今ひとつな反応のタイラーくん。

「それはアイテムボックスでは無いのか？」

ジェシカさんもタイラーくんの隣で、同じ用に訝しげだ。

「いや、単純に保存するんじゃないくて、能動的に『冷やして』置く物さ。冷やすつてのは、実際に出来ると馬鹿に出来んもんだぜ？」

例えば今はそういうアイテムが普及してないから、どうしても常温で飲むのが普通なエールが主流だが。

冷やすことが普通にできるようなれば、冷やして美味しいラガーが台頭することになるだろう。

コレばかりは完成したもので体感させないと、言葉での理解は難しいだろうなあ。

「ゆくゆくは開発は2人とかに増員しても良いだろうし、料理人も2人体制にしていると思う。屋敷のメンテ役は他の人数が増えたら必要に応じて増員で」

使う部屋の掃除をメインに、使っていない部屋は最低でも週1で掃除しとけば、急な来客が続かない限り大丈夫だろう。

「お掃除は、僕たちも手伝えるよ！」

マッシュローくんが元気に手を挙げる。

良いね、頼もしいぜマッシュローくん！

「というわけで、最低でも欲しい人材が5人は居る訳だ。どうせあれだろ？ あの家に住まわせるとか言うんだろ？ だったらあの家に俺達が引越してから探しても良いし、焦ることもないだろ？」

俺が言うと、タイラーくんが大きく伸びをする。

「フン。一瞬は殺気を撒き散らすほど怒ってた癖に、案外前向きに考えてくれるじゃないか」

え、嘘。

やだなあ、殺気なんて出して無いっすよ……え、マジで？

「正直、タイラーくんが下手打ったと思ったわね。暴れだすんじゃないか心配したもの」

ジェシカさんまでそんな。

なんか怖くて子供達にその話題を振れない、聞けない。

「俺が怒ったのは内容じゃなくて、ちゃんと相談しろって事だからな。相談を持ちかけられてたら、混ぜっ返しはしても怒りやしねえよ」

だから、一応言い訳。

俺が言うと、タイラーくんが肩を竦める。

ホントに理解わかってるんだろうな、コイツ。

……まあ、良いけどさ。

「敢えて言うなら、急いで欲しい人材は料理人だな。クランを立ち上げる事を説明して、その上で力貸してくれる様な奴が良いね。引越してすぐ、家で美味しいもの食くいたいじゃない」

誤魔化しに、話を戻す。

誤魔化しの話題だけど希望しているのは本当。

腕が良ければ尚良し。

「成程、クランマスターの直々の指定だ、早速今晚にも調査に行くか」
調査？ 今晚？

何やら晴れ晴れとした顔で、タイラーくんがメモを閉じる。

何やら悩みはある程度晴れたのか、良かった良かった。

……ソレは良いんだけどね？

なんでだろうね？ 今晚にも、つて辺りに、すつごく嫌な予感がするよね？

もうさ。

飯食ってから移動するんだったら、飯も冒険者ギルドで食べれば良いじゃん。

「飯は素直に、『銀の馬の骨』のが美味しい」

エールを水代わりに、タイラーくんが事も無げに言う。

あのな、飯も出してる店でそういう事を普通に言うんじゃないよ。

「んで、料理出来るやつを探してるんだって？」

何やら理由は判らないが、妙に上機嫌なグスタフさんが俺の隣でジヨツキを抱え込んでいる。

アンタはいつから此処で呑んでたんだ？

というかホントに冒険者か？ 酒樽の妖精なんじゃないだろうな？

「うん、とは言え都合よく見つかるとも思えないけどねえ」

タイラーくんにはああ言ったが、実はコレが本音。

そうそう理想の人材が見つかるはずないじゃないの。

クランを立ち上げるのはこの際良いけど、急ぐ理由もないし。

もっと言えば、俺は別にクランを必要としてない。

……寧ろ、なんでタイラーくんが強引とも言える程の勢いでクランを欲しているのが理解らない。

居場所が欲しいとか？

いやまさか、コイツがそんな感傷的な理由で動くもんかよ。

まあ、仲間だと思ってくれてるなら、そのうち話してくれるんじゃないかな？

「まあ、話は理解ったぜ。そういう話をどこかで聞いたら、覚えとくようにするぜ」

「ああ、助かるよ。頼みます」

グスタフさんは顔が利く予感が有る。

そうでなくても既に世話になりすぎて、ちゃんと礼はその都度伝えねば。

「料理スキル持ちの冒険者か。それだけだったら該当は居るが、素行やら何やらに問題があると面倒だからな。慎重にもなるか」

そしてグスタフさんの反対側、俺を挟む位置にいるのはハンスさんだ。

最近ここに来ると、なんかこのポジションだよな？

何？ 俺、なんか悪い事した？

オツサンに挟まれると、俺、オツサンに戻っちゃうかも知れないぞ？

「まー、急がずのんびり構えとくさ。こういうのは、慌てるとロクな事がねエ」

既に飽きるほど言った気がするが、どうもタイラーくんがコレに関しては焦り気味な感がある。

事あるごとに言うくらいで丁度良いだろう。

焦らなくても、そのうち見つかるだろ、多分。

タイラーは焦りを隠せない自分に、微かな怒りを覚える。

ことこの件に関しては、リリスの言う通りだ。

慌てても良い事が有るとは思えない。

それが理解^{わか}っているのに、どうしても気が急いでしまう。

自分が捨てられたのだと知った幼いあの日から、ずっと探し続けていた。

1年前にジェシカと出会い、手に入れたと思っていたモノ。

だが、お互い冒険者だからと、何処か冷めている部分は有った。

そんな半端な満足感に浸っていた日々、そして今。

考えられない程賑やかになった日常が、ジェシカと違う反応で正面からぶつかって来る新人が、何故か慕って懐いてくる子供達が。

タイラーの中で諦めかけていた、幼い頃の夢に光を当てていた。

家族。己の居場所。

それが手に入るのかも知れない。

そう思えば、柄がらにも無く焦りが生まれる。

そんな事は、この仲間たちには——恥ずかしさから絶対に伝えることは出来ない。

特に、出会ったばかりの、まっすぐな瞳で、まっすぐに感情を向けてくる、その感情のままに走り出す妹分には。

どんな間違いが有っても、伝える訳にはいかない事だった。

第12話 結成！ クラン、その前に

あー、なんかクランとか言うの、立ち上げるらしいですよ？
俺は特に何もしなくて良いらしいですが。

そもそもクラン立ち上げて何がしたいのか、皆目見えてこない俺です。

家を購入して1週間。

元々管理はきちんとされていたが、住むに当たって不具合の無いようにと、万全を期して1週間の点検と修理作業が終わり、俺達は無事引き渡しを終えた。

色々買い揃えなきゃなあ、そう思いながら屋敷の中をぶらつき、各部屋を見て回って気が付く。

家具がある程度揃ってる。

細かいものとかは別として、簡単な、寝て起きてに困るような事は無さそうである。

下見の時に、こんなの有ったっけ？

「下見の時には無かったぞ。恐らく古くなったものは処分して、邸宅だけの販売の予定だったんだだろうな」

俺の疑問を受けて、タイラーくんが教えてくれる。

教えてもらったのは良いが、それは疑問が1個減って1個増えただけだ。

「じゃあ、なんで新しく設置されてるのん？」

いや、別に気に入らないとかじゃなく、本当に純粋な疑問。

少なくとも俺、サービスでこんな事されるような覚えが全然ないよ？

「いやー、サービスじゃないと思うなあ」

マットレスのスプリングの具合を確かめているっぽい動きのジェシカさんが、ベッドに腰掛けながら言う。

「金貨1000枚も追加されたら、やらざるを得なかったとか、そんな感じじゃない？」

はて？ それは俺、修理代として支払ったつもりだったんだけど。首を傾げる俺に、タイラーくんが溜息を吐く。

なんで溜息なんだよこの野郎。

「元々の価格に、修理代が含まれていたんじゃないのか？ そこに余剰が1000枚も出たわけで、その分で色々都合してくれたのだから」

タイラーくんのうんざり顔は腹が立つが、言われる事には納得。

というか、都合してくれすぎ。

先に風呂場を見てきたけど、めっちゃめっちゃ綺麗だし広いし、何あの素敵空間。

その上で各寝室には寝具他が。

チエスト1台、鏡台、机、もちろんそれぞれに椅子も。

各部屋備え付けのクローゼットの扉も開けてみるが、俺はこの中で寝れると確信出来る広さだ。

「これは……純粋な普段着を買っても、しばらくはクローゼットが埋まらないぞ……」

俺の精一杯の女の子らしさをあざとく押し出した、そんなつもりの台詞は、誰に聞き咎められることも無い。

突っ込まれても恥ずかしいが、これはこれで寂しいものだ。

それはさて置き、改めて、エライ家を買ってしまった。

「予定変更だ、タイラーくん。料理人より先に、この家の保守が出来る人材を確保しないと。俺、仕事でもないのに毎日掃除だけで終わる生活は嫌だぞ」

自分が嫌なことを人に任せるのはどうかと思うが、賃金で雇うのならどうだろうか。

この際クランの員数外で、もしも本人が望むなら加入も可。

クラン入りしても、給金は支払うものとする。

「だからクランの立ち上げの為にメンバー確保なんだから、クランに入る事が前提だ、たわけ」

俺の提案に即座にタイラーくんの突っ込みが。

ていうか、たわけって……。

「そんな訳で、こういうレベルの屋敷で働く人のお給金の相場を知りたいんだけど、タイラーくんは知っているかね？」

気を取り直した俺の質問に、即、首を横に振ってみせる。

まあ、そうだよね。

冒険者生活に関係してこないもの。

「じゃあ、知ってそうな人に聞きに行けば良いんじゃない？」

打開策を提示してくれたのは頼れる大人、ジェシカさんだ。

知ってそうな人……近所さん？

いや馬鹿か俺は。

いきなり尋ねて「そちらの使用人さんには、月々如何ほどお支払いなんですか？」とか聞かれて、答える筈がないだろう。

というかそんなもん、喧嘩を売っているに等しい。

単純に資産の程度を探っているように聞こえるし、穿^{うが}つて聞いてしまえば、その程度の給金で雇っているのか？ と、マウントを取りに行っていると思われ兼ねない。

そんな勘違いされる様な真似を、態々する必要は無い。

「……聞けそうなのは、ヘンリーさんとこ位かな」

というか、そこしか無い。

ついでに食事でもしようという事で、俺達は全員でヘンリー不動産へと足を向けた。

途中の菓子店^{かしてん}——こんな店有ったのか、毎日こよう——で、手土産のクッキーのセットを買い、お礼のついでに質問と言う体裁を整える。

買ってすぐにクレームか？ とか思われなような配慮である。

「成程。使用人を雇う、ですか」

受付でお土産をお渡しし、キッチンと相談したい内容を伝えた上で、アポイントメントの取れそうな日付を聞いたらなんと今から大丈夫とのお返事。

急な出来事にも即対応の頼れる紳士。

ヘンリーさんは忙しいであろうに、真摯に話を聞いてくれる。

なんか急に押し掛けてすみません、ホント。

「給金で言えば、月に銀貨80枚ほど必要になりますかな？ 労働としては単純と言う者も居りますが、屋敷の手入れというのは気を使うものです。対価が無ければ、なかなか手は出てこないでしょうな」

まず最初に金額を提示して、それに丁寧に理由まで添えてくれる。それは凄く助かるし嬉しいことなんだけど、俺今、すっごい聞き流しちやいけない事を聞いた気がするぞ？

銀貨、80枚？

えっと？

薬草10本1束で銀貨1枚で？

銀の馬の骨は朝晩の飯が付いて銀貨5枚で？

飯付き宿泊で「元の世界」の安いとことぎっくり比較して（拙い記憶のだけど）、銀貨1枚2000円位くらだと思ってた。

此処までは良い。

金貨銀貨の桁上り？ って、10枚毎じゃないの??

俺、今までそういう計算でいたし、そういうつもりで払ってたんだけど？

「……ちよつと失礼して宜しいですか？ ヘンリーさん、」

俺は一度ヘンリーさんに断って相談を中断。

正直コイツに聞くのは非常に嫌なのだが、誰に聞いてもどうせコイツの耳に届く。

だったらもう、聞いてしまったほうが良い。

というか、今聞いておかないと非常にマズい。

「タイラーくんよ。金貨1枚って、銀貨10枚じゃねえのか？」

面倒くさそうに俺の話聞いていたタイラーくんは、まず目を見開き、その顔でしばし俺の顔を凝視した後、表情を変えた。

お前は馬鹿なのか、と。

「お前は馬鹿なのか？」

おっとお、コイツ言葉にしゃがった。

「いや、実はお前が金貨の価値を理解してないんじゃないかと疑って

は居たんだがな？ それにしても、お前の中の金貨の価値は10分の1だった訳か」

もう、この時点で答だ。

「銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚だ」

それなのに、タイラーくんは丁寧に教えてくれる。

「……じゃあさ？ 俺、今までさ？」

恐る恐る尋ねる。

今までのお支払い。

提示された金額に関しては特に疑問を持つこともなく、銀貨なんかはそこそこ依頼クエストで貰ってたから、払えていたが。

大部屋を借りた時は1日分の価格を聞き、払った時。

人数分と日数分で良いと言われ、俺は暗算した。

1日5枚×人数7人×日数7日イコール 245枚（単位銀貨）。

銀貨10枚で金貨1枚だと思っていた俺は、「端数切り上げだ！」とか言って、25枚の金貨を宿に渡した。

その時、しこたま驚かれて、俺は「金貨24枚と銀貨5枚が金貨25枚になったから驚いたのか？ 大げさだなあ」等と思っていたが。

本来、金貨2枚と銀貨45枚の所が10倍の金額を支払われた訳だ。

そんなもん驚くし、不審がるわ！

「……あ、だからアレか。調査から帰って毎晩、サービスだからウチで飲んでくれて言ってたのか」

タイラーくんが静かに頷く。

ギルドのバーで飲んだ後に振る舞われるから、正直キツかったんだけどね。

でも宿としちゃあ、そんなくらいしないと気が済まないくらいは払ってたのか、俺。

え、でもおかしくない？

他に幾らでも気付くタイミング有ったよね？

子供達との食事は？

……ああ、5人分纏めて支払って銀貨2枚とか3枚とか、えらい安いもんだと思ってたわ。

冒険者ギルドのバーでは？

……酔っ払って気持ち悪い状態で払ってるから、覚えてねーわ……。

他の買い物……アイテムボックスにしろ何にしろ、ある程度纏めて買って言われるままに払ってるわ……。

ぶっちゃけて言うかね？ 俺、銀貨1枚2000円だって思ってた訳じゃん？

それが10枚分だから、金貨1枚20000円だと思ってた訳よね？

アイテムボックス金貨50枚って聞いた時、正直「あれ？」って思ったんだ。

安くね？ って。

でも良く理解^{わか}ったわ、充分過ぎるほど高価だったわ。

そうすると、俺どんだけの金持ちな訳？ 金貨、まだ51億枚有るんだけど？

んで、あの5000枚のお屋敷、えっと？

俺、1億円くらいかなって。そう考えると、規模的に随分お安いし、お得なんじゃないのとか思ってたけども。

でも実は、10億円相当でしたって事？

あの規模の邸宅ともなると、東京の相場で考えたらそれでも安い恐れが有る。

敷地面積、あれどんくらい有るんだ？

まあ、それにしても、だけど。

ゲームでわんさか拾えるものが、この世界では随分高価なんですけどね？

なんか今更足が震えてくるんですけど？

「そろそろ意識を取り戻せ。ヘンリーさんも暇じゃないんだ」

タイラーくんのおかげで目の焦点が戻ってくる。

そうだ、今は相談中だった。

慌てて顔を向けると、ヘンリーさんは営業スマイルをニツコリと浮かべてくれる。

本当にごめんなさい。

「し、失礼いたしました、ヘンリーさん。そうしますと、雇うとすると、それを底値に、色をつける程度で良いという事でしょうか？」

多分、俺の顔色は悪いと思う。

今まで無駄に払ってたんだと思うと、幾ら余裕が有っても考えちゃうよね。

「はい。そうして頂きますと、働きたいと思うものも自然に出てくるかと思われます」

成程。

ついでに聞いておきたいことも聞いておこうかな。

「ちなみに、貴族様がお雇いになる場合も、それくらいの金額になるのでしょうか？」

俺が質問すると、ヘンリーさんは少し眉を顰め、難しげな顔をした。

だが、逡巡は一瞬。

俺の疑問に、即座に回答をくれる。

「貴族様の場合は、我々の感覚とは多少違う場合が御座います。相場は高くなりがちですが、そもそも雇い入れる者が市井の者とは限りませんので……」

あー。言いにくい理由が何個か重なってるのが理解するね。

我々の感覚と違うのは、見栄とかそんなトコかな？

他所よりウチのが金を出してるぞ、とか、そんなトコだろう。

そりや相場も高くなるよね、だってプライド勝負だもん。

……下手に出でプライド擦って持ち上げれば、なんか普通に教えて貰えそうな気がしてきた。

まあ、聞かないけど。

だって、続きの言葉を考えてみれば理解するじゃんよ。

雇うのは、市井の者とは限らない、つてさ。

それは、他の貴族なんて筈はないから、後ろ暗い犯罪者絡みか、或いは奴隷。

あーあー、そういう、人命を軽視する考えとかは、「現代日本」で暮らしてた身としては、どうにも馴染めない。

だけど俺は、奴隷制度は許せん！ 今すぐ奴隷を解放する！ とかは、思ったとしても言えない。

その文化の中で育ち、疑問を持ち、考え、改革する、そのために戦う。

そういう覚悟を持つ事が出来なければ、軽々しく口にしちやあいけないと思うんだよ。

だってさ。奴隷は悪いものだど、知ってるんだよ、そんな制度のある世界であろうとも。

悪いものだから「そうならないように」気をつけるんだらう？

犯罪奴隷なんてものも有るんだらうし、犯罪に対する抑止力の面も有るだらうし。

それに依る問題が大きくなってきた時、人々が声を上げ、それが為政者を動かし、法を変える。

そこに力添えをするのは良いと思うけど、無責任に横から口出しして、いい方向に動くとは限らないのだ。

まあ、ながなが長々考えたけど、これ全部的外れな可能性も有るしな？

例えば、他の貴族の子弟が、社会勉強にとかね。

「有難うございませす。最後の質問は、内密と言うことかどうか」

俺がニツコリ笑うと、ヘンリーさんも安心したように笑ってくれた。

仲間たちが、従業員さんの案内で部屋を離れた一瞬。

俺の中で、小さく引つかかっていた事、1人の名前がまた浮かび上がった。

俺の心に刻み込んだ、12の名。

そのひとつ、13歳のアデラ。

アデラ・マーカス・ヘンリー。

「ヘンリーさん。不躰な事をお伺いしますが……」

俺は部屋を辞するという事で着け直した仮面を、再び、静かに外す。

「アデラさんは、どの様なお子様でしたか……？」

聞いて良い事とは思わない。

だが、名を心に刻む以上、知っておきたいことも有る。

その名が、確かに生きて、輝いて居たのだと。

「……」存知でしたか」

何事かと振り返るタイラーくんは、俺は静かに手で合図をした。

頷き、歩き去るタイラーくん。

俺はそれを見送ると、小さく続けた。

「私は、救えなかった12の命の名を心に刻んで居ります。こちらにお伺いし、私の名をお伝えした際の反応。それに、お聞きしたお名前……もしやとは思ったのですが、その時は聞けませんでした」

それは、俺のミスで失われた命だから。

唇を噛む俺に、ヘンリーさんは罵声ではなく、柔らかな労りの言葉をくれる。

「有難うございます。自分を救ってくれた英雄が、名前を覚えてくれるとは、あの子も喜んで居るでしょう」

ヘンリーさんの言葉に、俺は目を閉じる。

俺はそんなモンじゃない。

救えなかったんだ、俺は。

「元気で、いつも私を気遣ってくれる、優しい子でした。孤児で、縁があつて引き取った子なのですよ、あれは」

柔らかな声。

確かに愛され、生きていた命の証。

「……私も、貴女あなたの名を伺った際に耳を疑いました。養女むすめの為に死地に飛び込み、連れ帰って下さった貴女あなたと、直接お会いすることになるとは……考えて居りませんでしたので」

俺は、その娘さんを救えなかった挙げ句、今こうして残酷にも思い出を語らせている。

何という傲慢。だが。

「有難うございます。確かに生きていた貴方あなたの娘さんを、私は忘れません。そして」

俺は腰を折り、ヘンリーさんに頭を下げる。

他に、何が出来るって言うんだ。

「ごめんなさい」

言葉を尽くすことは出来なかった。

涙は溢れるのに、述べるべき言葉は湧いてこない。

「顔を上げて下さい、そして笑って下さい。娘は、人の笑顔が好きでした」

ヘンリーさんが、肩に手を掛けてくれる。

「今後とも、よろしくお付き合いください。また、娘の話聞きに来て下さい」

俺はもう言葉を発することなんて出来なくて、ただ頷くだけだった。

泣いちゃったのも有ってきっちり仮面を着け直し、ヘンリーさんに案内してもらいながら、俺も店の外へ。

ちなみに、相談の代金は固辞された。

代わりに、また娘の為に遊びに来て下さい、って。

また泣いちゃうから。

その辺のやり取りでタイラーくんは色々察したようで、その件について何か訊いてくることはなかった。

そういう気遣いは、もっと普段から発揮しても良いのよ？

「じゃあ、募集は月に銀貨80枚って事にして、実際のところは金貨1枚と銀貨20枚でどうかね」

屋台で買った果汁飲料をストローで飲みながら、全員に向けて問いかける。

……このストロー、何で出来てるんだろう？

ちなみに、俺の確認に対しての返答は、全員異議がないようだった。冒険者に必要な経費を基本的な宿代で考えると、1日銀貨3〜5枚、円で考えるなら、毎日泊まると30日で18万から30万。

それに薬草とかポーシヨンのような消耗品や装備品まで、様々掛かることになる。

銀貨3枚の宿はフレッドくん達少年組が使ってた宿で、5枚はもちろん「銀の馬の骨」だ。

「銀の馬の骨」、高級宿なのな。

「宿暮らして高く付くのな」

「何を言っているんだ、今更」

遠くを見る俺に、冷ややかな目のタイラーくん。

少年組は思うところがあるのか、俺と同じく遠い目をしている。

「で、今更だけど説明するよ？ 家の掃除してくれる人を雇って、この

人達には給料出す。それは俺の金かねで。これは大丈夫？」

俺の言葉に、全員が首を縦に。

「で、みんなの分の給料は無いけど、代わりに家賃は月に銀貨25枚くられば良い。ウチで食う分に関しては俺が払うけどね」

雇う人には給金で金貨1枚と銀貨20枚。

ざっくり換算で2000円×銀貨120枚で、月24万円相当。

此処から家賃を引くことはしない。家賃分は引いてある計算だ。

対して、みんなには家賃を俺に払って貰う事に。

1日平均銀貨5枚の収入が有れば、月30万円相当の収入が見込める。

そこから銀貨25枚、大体5万円を家賃に。

なんだか懐かしい金額だな、家賃・月5万円つき。

まあ、その家賃を引いても手元には25万余るよね、って事なんだけど、当然それは依頼クエストを順当にこなしての話だ。

必ずしも計算したとおりに進むとは限らない。

そもそも依頼クエストというものは、依頼者が居てこそだ。

極論、依頼が無ければ収入もない訳で。

「給料に関しては、いずれみんなの分も払えるようになりたいとは思うけど、今は収入がないのよ。当面は協力して欲しい」

ケチ臭いって？

うん、俺もそう思う。

「それは構わんが、25枚で良いのか？」

タイラーくんが挙手。

ていうか、いつの間に発言は挙手制になったん？

「うん、充分すぎるでしょ」

俺が言うと、子供達も安堵の溜息。

「助かるわあ。 月25枚ですむんだったら、ホントに仕事減らしても余裕ができるわ」

ジェシカさんもニコニコだ。

良いね。

巻き添えで悪いけど、俺のタイラーくんへの仕返しに巻き込まれてね？

「ってわけなので、俺の資金の余裕が無くなったらそういう体制でよろしく。 具体的には、俺の金貨の残りが2億枚切ったらお願いするよ」

事も無げに言うと、全員が動きを停止させる。

折角理解した所に、急に条件を追加。

しかし悪くなるわけじゃないから、怒るに怒れまい。

「お前な。 そういうつもりなら、なんで今言った……？」

最初に反応したのは、当然のようにタイラーくん。

ほう？ お前、この件で俺に怒れるの？

「先に相談しとくのは基本だって言っただろうが。 いきなり明日から家賃取りますって言われて、納得出来るのかお前は」

どうやら俺が根に持っていると理解したらしい。

タイラーくんがぐぬぬと黙り込む。

「え？ じゃあ、お家賃は？」

ジェシカさんも混乱したようで、すぐには飲み込めていない様子。

そりゃそうだ、払えって言ったり払わなくて良いって言ったり、どっちだ！ って話だわな。

「ああ、ごめんごめん。 しばらくは家賃は要らないから、俺が苦しくなったら助けてね、って事ね」

少年少女組もよく分からないながら喜んでくれた。

よし、俺が怒られなければ何でもよしだ！

タイラーくんに、何となく仕返しっぽい事も出来たしな！

それはそれとして、いい加減お腹空いたし、なんか食おうぜ、と言う事で。

折角だし、思い思いに屋台を物色。

結果全員バラバラだったものの、たまにはこう良いのも良いね。

ギルド脇のいつものテーブルで、みんなでお昼と洒落込むのだった。

お腹いっぱいになったので、お昼寝という訳にもいかず。

次の問題は家事スキル持ちの採用な訳だが。

「タイラーくんや、面接の時に、なんか役に立つスキルとか持っていないかね?」

俺は冒険者ギルドの仲間募集掲示板の前で、隣に立つタイラーくんに尋ねる。

「……尋問スキルと拷問スキルはあるな」

少し考えたタイラーくんの口から何やら物騒な単語が。

「やめろ。なんでそんな物騒なもん持ってたんだ」

「暗殺者だからな」

いや、暗殺者が尋問だの拷問だの持ってるのはおかしいだろ。

ていうか面接に来た人の命に関わるのは駄目だ。

「ふむ、じゃあ、魔道具になるが。真実の天秤はどうだ?」

おお?　なんか、名前的には良いね。

で?　それってどんなアイテム?

「まず、片方の天秤に手を翳して『嘘を吐かない』と誓うんだ」

ぼんやりとイメージする。

ふむふむ?。

「そして、審問官の質問に答える」

審問官?。

なんか急にキナ臭いぞ?。

「その質問に嘘を吐くと、心臓が体外に飛び出して破裂。嘔吐きは死ぬ」

言われたままに忠実にイメージしてしまい、気分が悪くなる。俺が

死にそうに。

「なんで具体的に言ったの？ 嘔吐くと死ぬ、でいいじゃん？ ていうか面接の人の命に関わるのは駄目って俺、言ったよね!!」

心臓が体外に飛び出すとか、その時点で死んでるじゃん、なんで破裂させるの。

どっちかで良いじゃん。

「まあ、質問するお前の隣で、俺が尋問スキルで様子を伺えば良いんじゃないか？ 少なくとも、嘘を吐いているのは見抜けるぞ」

え、そうなの？

まさかコイツ、普段からそんなスキル使ってる？

「普段は使わん。疲れるからな」

しれつと言うタイラーくん。

嘘じゃん!! だって今オレ、心の中で思っただけで、声に出して無いじゃん!!

俺がそう思うと、タイラーくんはすつと視線を外す。

コイツ、怖くね？ 仲間に尋問スキルをデフォで使うとか……怖すぎなんですけど。

そんな事を思いながら、仲間募集掲示板に張り出されている自己アピール用紙をつらつらと眺めると、結構面白いなこれ。

重戦士。料理スキル有り、戦闘経験無し。中級以上のパーティ希望。

……無理じゃないかな？ 戦闘経験が無いのは厳しいと思うんだ、中級なんてガンガン戦闘したがるイメージだし。

治療師。近接戦闘可。治療応相談。

戦闘よりも仲間の治療優先して下さい。なんだ応相談で。

場合によっては治療拒否なのか。

大体は普通に分かりやすい自己アピールなのだが、たまにこういう妙なのが混じっている。

「お前だったら、どういうアピールを書く？」

不意に飛んでくるタイラーくんの質問。

それにしても唐突だなあ。

「俺？俺はそもそもどっかに潜り込みたいとか思わないしなあ……」

言いながら考える。

「……当方魔道士、火力自信有り。邪魔にならないメンバー募集」
段々考えるのが面倒になるなあ、こういうのって。

「……仲間を募集する気は有るのか？」

「んー？あんまり？」

再びのタイラーくんの問いに、素直に答えながら視線を動かしていき。

「お。家事スキル持ち居た」

保有スキルから書いてる珍しい子だ。

家事スキル有ります。斥候スカウトです。戦いは苦手です。戦いたくありません。宜しくお願いします。

……。

色々言いたいことは有るけど、まずは。

「……なんで俺を見る」

差し出した、仲間募集してる斥候スカウトちゃんの用紙を読んでいるタイラーくんを凝視。

「うん？いや、斥候スカウトって変わり者が多いのになって」

俺が言うのとタイラーくんはもう何も言わず、ジエシカさんに仲間探し中斥候スカウトちゃんの用紙を手渡す。

「……リリスちゃん？私、この子ほど変わってないと思うけど」

うん、ふたりとも反応が酷いってことは良く理解わかった。

ジエシカさんから戻ってきた用紙を手に持ったまま、他に居ないかを探す。

「……リリスちゃん、その子に連絡するの？」

俺が用紙をキープして居ることに気がついたジエシカさんが、何か信じられない物を見る目を俺に向ける。

ちよつと。

ジエシカさん、酷くない？

「俺が今欲しい仲間は、ウチで掃除して買い物して、て言う生活が苦に

ならない奴だよ？ この子なんてうってつけじゃん？」

顔を見合わせる斥候^{スカウト}2人は俺の意図が伝わったのかどうか微妙な顔を向けあっているが、俺は気にせず他の募集用紙に目を通す。

数分後、結局今日の成果は1人、だが1人は見つけた。

まあ、面接してみなきや判らないけど、家の管理と掃除をお願い出来る様な人だったら良いな、と、心の底から思う。

立ち去る前にカウンターに寄り、募集掲示板に貼り付けてあった、戦いたくない系斥候^{スカウト}ちゃんに連絡を取りたい旨を伝え、冒険者ギルドを後にする。

つもりだったのにグスタフ組の若い子に捕まり、酒を飲みたい系のウチの斥候^{スカウト}2人と共に、まだ夕刻にもなっていないというのに酒の席に。

どうせアレでしょ？ これ、グスタフさんが来て、ハンスさんも来て、明日の朝は頭痛で最低なやつでしょ？

こつちに来てからの俺の生活、荒れすぎじゃない？

フレッドくんが苦笑いして、みんなを連れて先に帰ってくれた。

晩御飯は何か適当に食べるそうだ。

ホントにごめんよ？

鍵とか、ちゃんと掛けるんだよー？

ヘレネは信じられない思いで、教えられた場所へ急いでいた。

いつまで経ってもパーティの誘いは無く、今日も薬草採取で宿代を稼ぐのか、と暗澹たる気持ちでギルドのドアを潜^{くぐ}った彼女は、カウンターで思いもよらぬ報告を受ける。

自分に連絡を取りたいと言う冒険者が居るといふ。

話によるとパーティの誘いでは無いらしいが、戦闘の絡まない、長期の仕事を依頼したいとの事。

理想的^{てき}過ぎる

冒険者になって2年、パーティ経験なし。

人見知りで、気弱。

それが組み合わさり、怖くてとてもパーティを組んで依頼^{クエスト}を請け

る、という事が出来ない。

流星にそれはマズイと思い、仲間募集掲示板に紹介文を張り出すも、1年間お誘いなし。

理解わかっている。

気の弱い、戦いを怖がる自分が、誘われる事なんて無い。

そうは思うが一縷の望みを掛け、募集掲示板に載せ続けている。

戦いの無い依頼クエストは、実際は簡単なものばかりで、ソロでも受けられる。

だが、当然のようにその報酬は少ない。

生活は少しづつ苦しくなり、気持ちは閉塞していく。

そんな気持ちで1年。

正直、冒険者を続ける自信が無くなっていた所だった。

どんな話だろう？

仕事って、何をするんだらう？

もういつそ何処かのお屋敷のメイドにでも応募しようかと考えていたヘレネは、まさに想像したような大きなお屋敷の前で放心し、しばし見上げて立ち尽くすのだった。

ウォルターは身体からだごと副ギルドマスターであるハンスに向き直り、もう一度、確認するように声を上げる。

「俺の料理の腕を売りたいって奴がいるだど？ 誰だ、いや何処だ？」

濃いブラウンの髪を短く刈り上げ、屈強な身体からだを着古したレザージャケットとレザーパンツに包み、腰に提げたダガーだけが新品のように磨き上げられて居る。

中堅と言えるレベルの斥候スカウトで有りながら、ややもすると見窄みすぼらしく見える装備だが、それも彼の拘りこだわ故であった。

戦闘に関する拘りこだわではない。

料理の道具は一級品を揃える。

斥候スカウトとしての装備はあとに回しても、料理の道具だけは譲らない。

それが彼の拘りこだわだ。

道具が全てではない、よく聞く言葉だ。

だが、それは腕が有って初めて言える言葉。

無論、自分の料理の腕はそこらの屋台の連中に劣るとは思っていない。

だが、道具は何でも良いと言えるほど、自分の腕を過信しても居ないと言っただけだ。

「正直、冒険者としての仕事じゃない上に、下手にコイツを請けると、もう冒険者としての仕事をする余裕はなくなるかもしれない。それでも請ける気か？」

念を押しながらも、ハンスにはもう、ウォルターの答えは判りきっていた。

今まで短い付き合いでは無いし、その顔はもう既に、雄弁に語っていたからだ。

「構わねえ。俺の料理の腕を見もしねえ連中に、飽き飽きしてたんだ」
うっかり討伐に参加すれば、料理をしようにも無理解な同行者に邪魔され、まともな料理も振る舞えない。

屋台を引くには今から免許を取らねばならず、街の食堂では生来の真つ直ぐな性格からトラブルを起こしがちで、もう何処も雇ってくれない。

八方塞がりにも似た閉塞感に、気分も腐り果ていたのである。

「ある意味似た者同士な部分があるから、喧嘩は絶えんだろうが……
まあ、気の悪い娘ではない。大目に見てやれるなら、良い職場だろう
さ」

最初から最後まで、引つかかる事だらけの台詞である。

似た者同士？ 俺がか？ 誰と？ 依頼主が？

娘？ 娘って、女か？ いや、この口ぶりだとガキって事か？

大目に見てやれるなら？ 俺が目こぼしする方だったのか？

一息に尋ねられる事ではない。

というか、気になることが多すぎてもう、いちいち質問するのが面倒くさい。

「上等じゃねえか」

少なくとも、ウォルターが今まで経験してきた仕事、職場とは違う

らしい。

「話を聞きてえ。紹介状をくれ」

まずは会って話をして、後の事はそれからだ。

こうしてハンスから受け取った紹介状を手に、依頼主の、「リリース」とかいう魔法師の館やかたを目指す。

ハンスの話では引越したばかりで入用の物いりようを探しているだろうから、下手すると今は屋敷には居ないかも知れないとは聞かされているが、その時は出直せば良いだけだ。

途中、受付脇に併設のバーで馬鹿騒ぎしている連中を横目を通り過ぎる。

見慣れない仮面を着けた女冒険者が酔っ払いに囲まれているが、剣呑な雰囲気は感じない。

いつもの腐った気分だったら、昼から酒を呷る連中など軽く見下すところだが、今日はすこぶる機嫌が良い。

なんだか酷く楽しそうで、羨ましく見えるほどだ。

俺の新しい雇い主も、あれくらい気分の良さそうな奴だったら良いな。

「斥候スカウトウォルター」は「料理人ウォルター」として新しく生きていくかどうか、一世一代の勝負に挑もうとしていた。

第13話 面接ドラんカーズ

残り時間は60秒を切った。

ゲージは90%を超えたか。

幾度となく挑み、届かなかった目標。

グレーターリフト、100階層。

果てなき夢が、目の前で手を伸ばしている。

しかし、時間は刻々と刻まれ、敵は溢れんばかりに押し寄せる。

エリートモンスターが群れをなすモンスターの地獄絵図を、火線を振るって薙ぎ払い、魔法の鍬やじりを叩きつけ、切り崩す。

不意に暗転する世界。

紅い閃光が走り、押しつぶす程の凶悪な気配を放つ巨体が、立ち塞がる。

残り37秒。

迷う余裕もない。

挑むにあたり、1450に届いたパラゴンレベルのポイントを振り直してきた。

今まで火力に振分けて居た物を、基本ポイントだけを残して、体力に全て振り分けた。

此処までの戦いでは、対多数の状況を作り上げ立ち回ってきたが、此処からは1対1だ。

全力の攻撃を叩きつけ、叩きつけ続ける。

敵の攻撃も苛烈さと圧力を増し、障壁が悲鳴を上げる。
迷えばやられる。

避ければ時間切れになるだろう。

元より背水の陣だ。

リリスは覚悟を決める。

「上等よー。私の全力、余さずくれてやる！ 受け取りなさい！」

全力で足を踏ん張り、デイスインテグレイドが出力を増していく。
じわじわと威力を上げていく火線が、敵の巨体を押す。

その巨体の振るう獲物が、ついにリリスの障壁を叩き割る。

返す一撃がリリスの頭を狙って振るわれる。
しかし、目を逸らすことはしない。
降り注ぐ火球のひとつが、巨体の右肩に直撃し、体制を崩す。
必滅の一撃は、リリスの仮面を掠め、宙を裂く。

「
」
吠える。

それは、彼女の叫びか。

守護者の怒号か。

リフトガーディアンの誇りと、踏破者の意地がぶつかり合う。

残り時間0秒。

崩れ落ちるリフトガーディアン。

ギリギリの死闘は今回、踏破者^{リリス}に天秤を傾けた。

GR100踏破。

それは、通過点のひとつ。

この先にも続くグレーターリフトの、ほんの1階層に過ぎない。

だが、確かに踏破した。

リリスはその事実にも、目を閉じ祈るように膝を折る。

目標がひとつ、成就した瞬間だった。

……。

という夢を見たんだ。

そんなにクリアしたかったのか、健気^{けなげ}というか女々^{めめ}しいと言うか、

どうも俺です。

気持ちは判るんだよ？ 俺。

だけどさー、俺のパラゴンレベルは1250だし、到達してたのも
GR97だよ。

鯖読むのはマズいよ。

あと、なんか台詞の言い回しに「女の子」感が滲んでて、我が事な
がら痛いわあ。

何度も言うけど、俺は男よ？ 女になりたい訳じゃなくてね？

……え。まさか、ホントは俺、あんな風ふうになりたい願望が？
勘弁してよ……。

そう言えば最近、ステータスの確認してないね。

気付いた俺は、鼻歌交じりでステータス確認をする。

装備類問題なし。

セットスキル、パワー共に問題なし。

パラゴンレベル1451。

うん、問題な……うん？

はい？　なんで？

宿酔ふっかよいの頭を抱えて、今日は面接予定の冒険者さんがいる状況で、
また妙な現象が起きてる訳で。

えー？　これ、確認しといたほうが良いのかな……。

なんか夢で見た通り、知力が50、体力が700で残り2項目50
づつ、余りが1。

俺、全部知力に振つてた筈なんだけど……。

まあ、現状だと困ることは無いけどさ。

つらつら考えながら装備画面に切り替えて各項目を見直し、所持金
に目を向けた所でまた固まる。

所持金、66億7820万3261枚

なんで増えてるのん？

いやいやいや、香気に構えてる場合かな、これ。

異常事態じゃない？

何もしていないのにお金が増えるとか、不穏でしか無い。

そこまで考えて、今日見た「夢」を思い出した。

夢の中ではGR100を踏破フリアしてた。

GR97から100まで、それなりリトライがあったんだろう。

当然、時間切れでもリフトガーディアンを倒せば報酬として経験値
とお金が貰えるわけで。

……いやいや、まさかそんな。

「夢の中」で稼いだお金がこっちに反映？

馬鹿馬鹿しい、と言いたいけど、今こうして日常風じふふうに生活している世界もまた「夢」である可能性を捨てきれない。

そうになると、こんな事が起きても不思議じゃない気になるし、これを受け入れると別の懸念も生まれる。

急にお金が増えるなら、急にお金が無くなる事も有り得るよね？

ミリアムさんトコの特性変更ガチャで、ムキになって全額、とか。さて、夢の中での事となると、防止できる気がしない。

気休め程度の対抗措置だけど、予備のアイテムボックスにお金を全部入れておこう。

これで防げるようなら苦労はしないんだけど……。

謎を小出しに増やしていくのは、やめて欲しいなあ。

お金の件はタイラーくん辺りに相談しといたほうが良いか悩むけど、どうなのかな……？

そんな風ふうに悩みを相談しようか悩んでいる所に、カレンちゃんが部屋に。

「リリスお姉ちゃん、お客さん来たよ、2人」

そう、2人。

昨日の斥候スカウトちゃんらしき女の子と、もうひとりはどうもハンスさんの紹介？ の、背の高い男の人、らしい。

話を聞くに戦士系らしい、細身でありながらしつかりと鍛えられた身体からだ、らしい。

4人とも、急な来客で良く観察できたなあ。

っていうかハンスさんの紹介って、昨日飲んでる時にはなんにも聞いてないんだけど？

何してるの？ 熊さんよお？

「ありがと、カレンちゃん。今行くね、あ、お菓子とお茶お願いできる？」

台所にお茶があったのは、あれはヘンリーさんのご祝儀だろうか？

古くなったり悪くなったりはして無さそうだったので、普通に使わせて頂いている。

お菓子は、昨日お土産に買った時に、個人用として買っていたものだ。

まさかお客様がこんなに早く来ると思わなかったので、蓋を外して、箱ごと出して良いよとカレンちゃんに渡していたのだ。

余ったらみんな食べようと約束している。

余らなかつたら？

はっはっはっ、そんな。面接に来て、お菓子バリバリ食える剛の者なんてなかなか居ないって。

逆にそんな真似できるなら、俺もう、そいつ採用しちゃうよ。

……まあ、その場合は俺が、みんなの分を買いに行くかな。

「あ、うん、もうそれは出してるよー」

おお、何という出来た少女。

ティアちゃんと2人で接客したらしいが、頼もしいねえ。

俺はカレンちゃんの頭を撫で回し、仮面を被ると1階へと向かう。

どうせ面接始まつたら外すだけだね。

部屋の外で待っていたタイラーくんとジェシカさんが俺の両側に付き、先導はカレンちゃん。

……え？ なにこれ？

「気になったんだが」

状況が面白くて笑いそうになってる俺の耳に、タイラーくんの声が滑り込む。

「おうん？」

気になったってなにさ？

「ハンスの紹介の方は判るんだ。動きに隙がない。あれは中堅……Cランク以上の冒険者。クラスは……まあ、それは嫌でも聞くだろう、面接だしな」

ふむふむ。

え。そんなレベルの人が、うちに？ ハンスさん、どんな紹介したの？

あと、なんでクラス情報隠した？

「問題は、もうひとりだ」

いやいや、Cランク冒険者さんがうちに来て何をしたいのかとか、超怖いんですけど。

その人のクラスはなんだよ。

その上まだ？　っていうか……。

「もうひとりって……戦いたくない系斥候スカウトちゃんでしょ？」

昨日のお仲間募集の文章を思い出す。

戦いたくありません。戦いたくないです。

あんな気の弱そうな募集文で、なにが問題なん？

……もしかして、すつごい人見知りとか？

螺旋階段を降りながら、タイラーくんの報告を聞く。

「信じられんが……中堅以上、下手をすると……俺以上の暗殺者アサシンだ」

思わず、足が止まる。

はあ？　暗殺者アサシン？

いやいや、昨日のあの募集の人、Eランクの斥候スカウトだったじゃん。

あの文面は、なんか儂げで、ボツチ臭しゅうすら……。

「つまり、タイラーくんと同じ暗殺者系斥候アサシンね。なんであんな子が、Eランクなんだろうね……」

タイラーくんの反対側で、ジェシカさんが難しそうに眉根を寄せ
る。

考えが読めなくて、得体が知れない、つてトコかなあ。

うーん、どうも考えすぎな気がするなあ。

「書いてたじゃん、仲間募集に」

警戒色を強める2人を見ていたら、なんだか逆にリラックスしてき
た。

そんな俺に、左右から同時に視線が刺さる。

ホント、息ぴったりね。

「戦いたくない子なんですよ。暗殺者アサシンなんかやりたくないんだよ、だ
から斥候スカウトで登録。優しい子なんじゃないの？」

タイラーくとジェシカさんが顔を見合わせる。

考えもしなかったんだらうなあ、ふたりとも。

まあ初対面だし、普通は警戒して掛かるか。

でも、そんな警戒するほどの事かねえ？
つまりは考え過ぎに思えるのよなあ。

俺？

宿酔いで頭痛くてニコニコしてるだけでも大変だし、余計なこと考
える余裕がねえのよ。

最悪誰かの差し金、って線は薄いと思うんだよね。

だって、仮に何処かの誰かさんの刺客だとしてよ？

俺を含めて狙う価値の有る者が、どれ程いるの、此処に。

勿論、俺以外の誰かを狙ってとかだつたら容赦なんかしないし、俺
を狙ってだつたらあんまり危機感はないんだけど。

それをしてメリツトのある人って、誰？

俺、この街に来てまだ全然経ってないし、せいぜい一介の冒険者と
揉めた程度だ。

そんなのが、有名所とか大物の暗殺者——どんなのか知らんけど
——を雇ってなんて、そもそも出来るとも思えんのよなあ。

ハゲゴリラ？ あいつは捕縛されて、こないだ連行された筈だし、
あの短絡ハゲにそんな手の込んだマネなんか出来ないだろ。

大森林の黒幕？

成程、その可能性は考えてなかった。

とは言え、いざとなりやそれなりに本気で相手するだけだし、逆に
言うとその以上の手が無いんだよな。

その場合の難点は、どれほど力を押さえても家は壊れるし、相手は
死ぬんじゃないかな？ って事だ。

まあ、襲撃者だった場合はそれで構わないと思うけど、周辺への被
害は避けたい。

「お前の気楽さには、呆れたら良いのか感心したら良いのか分からん
な」

右隣で溜息の気配、左隣に笑いの気配。

おいおい、褒めても何もでないぞう？

さてさて、面接だ！

ところで、面接官って何すれば良いんだろうね！

「はい、おっはよー。今日は来てくれてありがとうとー♪」

挨拶は全ての基本。

とは言え、何事も限度は有る訳で。

言ってしまったから、何処の地下アイドルだとセルフで突っ込む。

後ろから、タイラーくんが頭を振りながら着いてくるのが判る。

なにかな？ 何か文句でも？

「あ、ああ、宜しくたのむ」

ソファに座ってお菓子を食べていた男が、慌てたように立ち上がる。

おお、普通にお菓子食べてたのか、良いねその胆力。

それ美味しかった？

俺まだ食べてなかったのよね。

「あ、あの、宜しくお願いしますー！」

その隣で、こちらもおドおドと立ち上がりながら挨拶をくれる。

うちの斥候^{スカウト}2人は、この子を警戒していたが。

……おお？ 気の弱そうな雰囲気、しつかりお菓子には手を伸ばしている。

ふむふむ、なかなか良いガッツの持ち主かな？

良いねえ。

そして、この時点でお菓子屋さんに出掛ける事が決定した。

2人で良くまあ食ったね？ 大きめのアソート^{から}1箱がほぼ空ですよ。

他の人はどう判断するか判らんけども。

俺の中で、この2人に対する好感度は激烈に上昇していた。

「えーっと、それぞれにお願いしたい仕事は別々だけど、お話は2人同時でお願いします。2人とも職場は基本、この屋敷だけど、大丈夫かな？」

陽気な声で仮面を外し、2人を見る。

短髪でシユツとした顔の長身ナイスガイ、さつき立ち上がった時に

確認出来たが、フツーにタイラーくんよりでかい。

角刈りは短すぎやしないか？

こたわ 拘りなんだろうか。

「ああ、俺は料理スキル持ちだ。名前はウォルター、クラス職は斥候。スカウト一応ランクはCだが、単なる依頼にはもう興味がない」

俺の視線を受けて、短髪アカ男おことウォルターくんが自己紹介をしてくれる。

おお、料理スキル持ち。

ハンスさん、ちゃんと俺の希望聞いてくれてたんだね。

って、戦士職かと思っただけど、スカウト斥候かよ。

ていうか何、スカウト率高くね？　なんでスカウトばっか集まってくるん？

「成程、良いね！　お願いする仕事は、ウチの料理番だよ！」

俺が言うと、ウォルターくんが頷く。

まあ、なかなか良いんじゃないかな？

スカウト斥候としてはどうか判らないけど、真っ直ぐそんな人間性は嫌いじゃない。

俺も頷いてから、一度視線を女の子ちゃんに向ける。

視線が会うと、はっとしたような顔で立ち上がる。

緊張してるのかな？

「あ、あのっ！　家事スキル持ってます！　クラス職は斥候！　スカウトらっ、ランクはEです！」

なんだよ可愛いかよ。

募集掲示板のあれと言い、家事スキルに自信アリなのかな。

目指せお嫁さんに欲しいタイプ・ナンバーワン？

「あはは！　緊張しなくて良いよ、俺なんかランクFだし。あの、名前教えて貰えるかな？」

俺が言うと、恥ずかしそうに顔を赤くして、それでも元気に答えてくれる。

「あ、ごめんなさい。ヘレネと言います！　15歳です！」
へえ。

15歳ねえ。

ウチの斥候^{スカウト}2人が警戒するのはどんな相手かと思っただけど、見た目も年相応に可愛らしい女の子だよ。

ただ、ウチの2人の目がずっと厳しいのはキツイだろうから、ここではつきりさせてしまおう。

この質問で駄目だってんなら、働いてもらうこと自体がキツイだろうし。

俺は一瞬だけタイラーくんに視線を走らせ、正面に向け直す。

「うん、有難う。お願いしたい仕事は、此処の家事全般。まあ、キツチリ掃除して！ とかはなくて、まあ緩い感じで、それなりに掃除とか、ウォルターさんのお手伝いとかしてくれたら良いよ」

まずは仕事内容を簡単に。

さり気なく、ウォルターくんは既に採用決定だ。

ヘレネちゃんはホツとしたような顔で、可愛く頷く。

……年相応なだけどねえ、こうして見てるだけだと。

「……ところでヘレネちゃん？ 気を悪くしたらごめんね？」

クツション代わりの謝罪に、当然何のことかわからないヘレネちゃんはきよとんとこちらに顔を向ける。

「……暗殺者系^{アサシン}の斥候^{スカウト}なのかな？ それとも、ホントは暗殺者^{アサシン}だったり？」

真正面からバツサリニツコリと問いかける。

瞬間、ヘレネちゃんの顔色が真っ青に。

「どうして、それを……？」

んー？ 隠してた割に、誤魔化すとかはしないのね。

ちぐはぐと言うか、そこも含めて反応が年相応な感じなんだけど……。

「んー？ ウチにも、似たようなのがね？」

俺は視線を向けることもなく、ニツコリと笑って見せる。

タイラーくんはわざと気配を消すような事をせず、逆にジエシカさんは完全に気配を消している。

これ、どうなってるのかほんと判らないけど、隣りにいるはずの人

の気配が完全に消えている。

今は目を向けていないから、正直隣にジェシカさんが居るのか全く自信がない。

これ、同じ事をタイラーくんも出来るんでしょ？

っーか、目の前の2人もできるん？ 職的に。

すっげえなあ……漫画みたいじゃん。

……それどうやるの？ 今度教えて？

ここまで頑張って小芝居しているのに、暗殺者へレネちゃんは、まっすぐにタイラーくんを見ている。

え、なに？ ホントはコイツが暗殺者スキル持ちだって、見抜いたってこと？

ホントに漫画みたいな展開なのか、目の前で気配が消えているジェシカさんを見失ったとか言う愉快展開なのか、俺には判断がつかない。

「詳しくは言えませんが……実家が、暗殺者の一門でして……」
視線を俺に戻して、へレネちゃんが静かに口を開く。

ほぼ同時に、ジェシカさんの気配が戻ってくる。

割とすぐに解除したけど、もしかして、気配消しっぱなしってしんどいのかな？

「ほうほうっ！」

俺の顔をまっすぐ見ていたへレネちゃんだけど、段々視線が下がる下がる。

どしたの？

「それで、色々覚えさせられたんですけど、私イヤで……逃げてきたんです」

ほうほう。

……えー？

「それで、この街に着いて、冒険者になって……。最初はノービスだったんですけど、15歳になって職選択が出来るようになったので、気配消すのが得意だし、斥候かなって」

どんだん声が小さく、どんだん俯いてしまう。

「でも、私、戦闘が苦手です。戦うのが怖いので、普通の依頼クエスも怖くて受けられなくて。でも、それじゃ生活が苦しくて……」

話しながら、ぽろぽろと涙を零してしまう。
ええっ。

ちよつとちよつと!!

俺は立ち上がると、テーブルを回り込んでヘレネちゃんの側そばへ向かう。

「実家に帰りたくないんです……！　どうか、どうか此処で雇つって下さい……！」

もう泣きじゃくっちゃって大変な事に。

俺はヘレネちゃんの肩に手を掛け、優しく抱き寄せる。

「落ち着いて、ほら、追い返しやしないから」
頭を撫でてやる。

どんだけ不安だったんだよ。

全く、変に追い込んだみたいで凄く俺が悪い人みたいじゃない。

ただの気の弱い女の子じゃないのか、これは。

なんで睨にらんでるんだ、タイラーくんよ。

俺が悪いわけじゃ無いよ？

というか、君もジェシカさんも立ち上がって、意外と心配したのかね？

まるで緊急事態みたいな顔しちゃってまあ。

数秒俺を見つめた後、呆れたように何やらブツブツと呟つぶきながら座り直す、その目は俺から外さない。

なんだよ、ごめん。悪かったって。

「あー。あ、ウォルターさん」

ヘレネちゃんを宥なめながら、放ほつといてしまっているウォルターくんくんに声を掛ける。

「あ、ああ、なんだ？」

一瞬ぼけつとしたウォルターくんくんだが、声を掛けると意識を取り戻したように俺に視線を向ける。

ちなみに、それまでは泣くへレネちゃんを見てどうしたものかと思案している風だった。

人間味と人の良さそうな人間性が見えて、ほぼしゃべってないのにウォルターさんの好感度がぐんぐん上がっていく。

これでウォルターくんが実は刺客だったりしたら、感心しちゃうぞ。

「落ち着いたらへレネちゃんにも聞くんだけど、ウォルターさん、いや、ウォルターくん。俺、クランを立ち上げる事になったんだよ」

……仲間の暴走でな！

へレネちゃんの頭を撫でながら、ちよつと腹立たしい事を思い出しつつ、ウォルターくんに尋ねる。

「そのクランの設立に、メンバーがあと2名程、足りないらしいんだよね」

言いながら、非難がましい視線をタイラーくんに投げつける事を忘れない。

投げ付けられた方は、鉄面皮で茶を啜っている。

コイツはこういう奴だって理解ってるけど、それでも腹が立つ。

唐突にいつも通りに戻りやがって。

さっきのは何なんだよ。

そんな俺とタイラーくんをそれぞれ眺め、タイラーくんの方に気持ち呆れたような視線を向けてから、改めて俺を見る。

……俺、このウォルターくんとは、大喧嘩するか超意気投合するか、

どっちかだと思う。

「それは……俺を誘ってくれてるのか？」

信じられない、単純にそう思っていそうな顔。

見た目以上に、真っ直ぐな男みたいだねえ。

「ウチが料理人を探していると聞いて、その日のうちに来てくれたんだろ？ 昨日は申し訳なかったけど、今日は美味しい飯を期待しても良いんだよな？」

もう、追いつ返す選択肢なんか無かった。

採用理由？

そんなもん、俺が気に入ったから、それ以外に有るか。
フイーリングだよ、こんなモン。

裏切られたら、俺が間抜けなだけだろう？

しばし目を閉じて黙考、そうして目を開けた時には。

「良いのか？ もう他所じゃあ食べなくなるぜ？」

実にイイ笑顔で、野心的な料理人がそこに居た。

「アンタのクランの台所は、俺が預かってやる。食いたいものは何でも言いな」

「上等！」

ヘレネちゃんの頭をひとつ撫でてから、俺はウォルターくんに右手を伸ばす。

その手を、力強く握るウォルターくん。

「よろしくな！ ああ、あっちで座ってる美人さんと陰険メガネが、俺を焚き付けた大悪人だ」

何となく顎で示すと、ウォルターくんはそちらに目を向ける。

「あ、あー、なんつーか、宜しくな」

俺は今、振り返れないので判んないが、多分ジェシカさんと目があつたんだろう。

「宜しく、美人ことジェシカです」

しれっと美人と名乗り。

事実だけどき。

事実なんだけどき。

いつも思うけど、この人の心臓はどうなってるんだろう？

「こつちこそ。知的メガネこと、タイラーだ。仲間として歓迎する」
誰が知的メガネだ。

自称すんじやねえよ恥ずかしい。

心の声をそれぞれ思い切り口に出して、俺はヘレネちゃんに意識を向ける。

「おーい、落ち着いたかい？」

俺の肩に額ひたいを載せた格好で、ヘレネちゃんは俺にしがみつく。
身長的にはヘレネちゃんのほうが高いので、窮屈だろうに。

「……恥ずかしくなっちゃったのかな？　それか、そこに居れて、安心しちやっただのかな？」

ジェシカさんの楽しそうな声が、俺の背中越しに聞こえる。

俺の腕の中で、ヘレネちゃんがピクリと動く。

どうでも良いけど「俺の腕の中で」って、仄かにエロいな。イヒヒ。

見た目はお姉ちゃんを慰めてる妹だけだな！

そういう視点で見れば、ヘレネちゃんも黒髪だし、もちろん俺もそう
うだ。

いや、だから何だって言われたら、なんかこう、お揃い感が良いだ
ろ、っていう。

「俺は、ヘレネちゃんにも仲間になって欲しいんだ。これはウォル
ターくんもだけど、別に依頼ガンガン受けて戦ってきてくれ、なんて
言わない」

ゆっくりと頭を撫でながら、諭すように言う。

「ていうか、別の場所で戦って欲しいのさ」

俺の言葉に、身体からだを固くするのが判る。

まあ、そういう反応になると判って言ってるんだけどね？

「ウォルターくんにはウチの台所、ヘレネさんにはウチの中全般なか。ほ
んで、時には2人で協力して、買い出しっていう戦いも有るな」

ヘレネちゃんが、ゆっくり頭を上げる。

「ふたりとも、いずれ後輩の面倒を見てもらう事になるし。いやー、過
酷な戦場だぜ」

「館やかたの主あるじにしてクランマスターが、割と極まった変人だからな。ふた
りとも、ここに来たのは早まった判断だったんじゃないか？」

緊張を解こうと言葉を重ねる俺に、タイラーくんが憮然とした声で
混ぜっ返しを入れてくる。

良いタイミングじゃねえかこの野郎。

……いや待て、極まった変人でなんだ。

「へっ、早まっただ？　遅かったんだよ。なんせ昨日まで、俺はこんな
面白おもしろえ奴がこの街に居るなんざ、知らなかったんだからよ」

ウォルターくんも軽口で答えるのは良いがちよつと待とうか。

面白いつてなんだよ。

早速俺の扱いが雑になつてんじゃねえか。

「あの、私、働きたいです。ここで、働きたいです」

ヘレネちゃんが、涙を拭つて言う。

その台詞が欲しかったんだぜ。

「ああ、働いてくれ。ただ、根を詰めすぎないように。適当に、手を抜くくらいで丁度いいのさ、人生なんざ」

やることさえやっているなら、な。

俺が答えると、ヘレネちゃんはちゃんと顔を上げて、まっすぐに俺を見た。

うんうん、可愛い子は真っ直ぐ前を向くほうが良いね。

俯くのはしょうがないけど、頻度を減らしていければ大丈夫。

そのために、仲間がいるんだし。

「んじゃあ、早速だけど。ふたりとも、今は宿暮らし?」

俺が訊くと、ふたりとも当然のように頷く。

ウォルターくんは「陸の大漁旗」と言う宿だとか。

なにそれ、山の幸なのか海の幸なのか判らんね。

ヘレネちゃんは「小麦の穂」という宿だそうだ。

なんか、こぢんまりしてそうなイメージだな……。

訊かれて答えただけ、それがどうした? という顔のニューフェイス2人。

どうしたのかつて? そんなの決まってるじゃないの。

「じゃあさ、今日中に此処に引越してこれるかい?」

2人とも、良い顔で停止するねえ。

驚いた顔で俺の顔を見つめ、そして何故か2人で顔を見合わせ、また俺に顔を向け直す。

「此処に、つて。俺達も、此処に住んで良いのか?」

戸惑いを隠せない顔のまま、疑問を口にする。

「そりゃそうだよ? だって、通いとか不便じゃん? 宿代だつて馬鹿にならないし」

そこまで言つてから気付く。

そっか、そもそも宿暮らしを気に入ってる場合も有るのか。
あー、それは想定してなかったな。

「でも、無理にとは言わないから、宿から通うほうが良いなら……」
「いや、俺は引越す！ 此処に住ませて貰うぜ！」

気を使って言いかけた俺を遮るように、ウォルターくんが勢い込んで言う。

お、おう。

後で部屋決めような？

「わ、私も、此処に住みたいです！」

元気になったらしいヘレネちゃんも、鼻息も荒く言う。

イイネイイネ、前向きになれたねえ。

ヘレネちゃんも部屋決めないとね？

その前に、引越しにも使える便利アイテムを。

数に限りがあるし、これは初期メンバー向けのアイテムになるかな？

またパルマーさんここで売ってたら、纏めて買っておこう。

俺は2人にアイテムボックス——見た目はウエストポーチ——を手渡す。

何だかんだでこれ、かなりの便利アイテムよね。

ディアブロ3仕様の便利機能付きには敵わないけど、容量は圧巻の1000立方メートルだからね。

「これ、しきゅうひん支給品ね。使い方は——」

アイテムボックスの注意事項を教えると、容量やら時間停止機能やらに目を丸くする2人。

ただし、生き物は多分死ぬから、絶対に入らないようにと釘を刺す。入ったら、自分じゃ出れないらしいからね。

出れない、の意味が、出口が見つからないからなのか、入ったら死ぬから自力じゃ出れないと言う意味なのか判らないと、さり気なく怪談風味の釘を刺しておく。

まあ、実際入っちゃいけない理由は、これのどっちかだと思うんだよね。

ふたりとも……特にヘレネちゃんがすごい勢いで首を縦に振って
たから、余程怖いと思ってくれたんだと思う。

まあ、危ないことをしなければそれで良いからね。

そして、俺は思い付いて、2人に金貨を1枚づつ渡す。

「今日は荷物持ってきてもらって、部屋を決めるくらいしかすること
ないからさ。親睦深める意味でも、2人で買い出ししてきて、晩飯の」
言いながら、金貨をもう1枚、ウォルターくん到手渡す。

「先に渡した方のお金で、それぞれ服を買ってきて。制服はそのうち
用意したいけど、まずは、こざっぱりした奴をね」

仕事には相応しい服があると思う。

押し付ける気はないから、2人の感性で選んでもらって、それに
沿ったデザインの服を制服として発注なりして、支給すればいいと思
う。

「服かあ……今までそんなもん、気にしちや居なかつたからなあ」

ウォルターくんがぼやく。

うん、判るよー。

自分の服なんて、極論、着ることが出来て奇抜じゃなければ何でも
良い、つてなるよね。

奇抜さを求める層も居るんだけどさ……。

「まあ、そう言わずにさ。自分の一番信頼できる道具って、結局自分の
身体からだじゃん？」

唐突な俺の言葉に、ウォルターくんは良く判らないままに取り敢え
ず頷く。

「その身体からだを飾る服は、一番その性能を知ってる自分で選びたいじゃ
ない。制服を決めちゃうと、次の人からはそれが出来なくなるけど」
気障キザったらしい言い回しで自分で笑いそうになるが、まあ、本心で
も有る。

ウォルターくんは「一番信頼できる道具を、飾る」とか繰り返して
る。

うん、思いつきの台詞だから、なんか恥ずかしいからそれはやめて
欲しいかな？

「あんまりな服だったら爆笑しながらダメ出しするからさ。恐れずに行ってみよう！」

「いきなり買う気が失せるわ！」

ウォルターくんの初突っ込み。

いいね、勢い大事だよ？

そんな事を思いながら席に戻ろうと振り返ると、こちらに手を伸ばしているタイラーさんとジェシカさんが。

「私も、自分を飾る服を選んできたいわあ」

「お前がそこまで言うなら、仕方がないから選んできてやる」

こいつら……。

「あー、ね？ 俺の扱いなんてこんなモンだから。緊張なんてするだけ勿体ないでしょ？」

半ば自棄で、俺は頼もしい2人の仲間を指差して、新入りに紹介するのだった。

ウォルターくんは面白そうに頷き、ヘレネちゃんはどうしたものかと、素直に反応に困っている。

ふと、ウォルターくんとタイラーくんのタッグに翻弄される未来がちらつと見えたが、そんな予感からはそっと目を逸らす。

あ、ちゃんと金貨を1枚づつ取られました。

なんか不公平感出ちゃうといけないから、俺は子供達と出掛けるかあ。

お菓子も買いに行きたいし、ついでにみんなの服を買おう。

窓の外の青空を見ながら、もうじき大森林の本格調査が始まるのかな、と、ふと考える。

出来る事なら、黒幕には存在していて欲しいものだ。

自分の中の黒い感情を愛おしく抱きしめて、この窓からは見えない大森林、その中のまだ見ぬ敵に思いを馳せた。

第14話 溢れる悪意

魔法を覚える手段は、スクロールで強制的に習得するか、魔導書で勉強する方法が有るんだってさ！

料理人^{ウオルター}くんと使用人^{ヘルネ}ちやんを雇い入れて3日、その間タイラーくんに物凄い説教されたり色々^{いろいろ}有った俺です。

平和ボケ思考の俺に、危機感とかそんなん難しいってえ。

え？ 内容？

……いつか笑い話として話せる時が来ると良いな、と思ってるだけ。

あ、クラン申請は昨日通りました。

その所為で、主に俺が若干不機嫌です。

街が、というか冒険者ギルドがピリついている。

何が有ったのか？

ひとつは、ノーラッドの冒険者資格剥奪と奴隷落ち、そしてラウラの死罪が決まった事。

勝手な判断で、結果的に冒険者十数名を死なせた元ギルド職員^{のラウラ}女史。

やっていた悪事がギルド規約無視の命令無視、各種報告書類の偽造だけでなく、ギルドが保管していたポーションを無許可で売り払っていた事も発覚。

なんでバレなかったの？ って思うけど、不思議と誰にも気付かれず、最近まで色々出来ていたんだとか。

なんでも、なまじ^{にんぎ}人気の無い受付だったから色々小細工する時間が有ったらしい。

そんなもん言い訳になるか。

実際、色々なあわせ技が決まり、領主様の堪忍袋にヒット。

温厚で知られるらしい領主様が何の温情もなく即断で死刑と決めたとはい。

そりゃそうなるだろうよ。

んで、そのラウラの手引で、ギルド印のポーションを法外な値段で捌いていた連中も次々捕まり、続々奴隷落ちしているとあって、ノーラッドとラウラに取り入って上手いことやってた連中は戦々恐々だと言う。

命が惜しいラウラが共謀者を惜しげもなく売り払い、全て事実確認を行い、衛兵隊の中にも居たラウラの共謀者を捕らえるために冒険者ギルドと衛兵隊との連携が図られ、ラウラやノーラッドと繋がりこそ無いものの好き勝手やってたゴロツキ系冒険者が実に居心地の悪い思いを味わっているらしい。

流れ弾で悪事がバレて、後ろに手が回った奴も居るんだとか。

それだけ元仲間を売り払っても、結局ラウラの減刑は許されなかったんだってさ。

ちなみに、俺のトコにも事情聴取と称して話を聞きに来たギルド職員が居た。

どうせ屋敷を買った資金の出どころの調査だろうけど、別の世界から来た金貨の出どころなんぞ、追いつかれる訳がない。

ウチに住んでる全員もギルド職員に協力させて、屋敷のあちこちの調査の許可も出したが、何処からも怪しい物はない有様。

そりゃまあ、買ったばかりの家に細工する時間なんか有る訳無いからねえ。

結局ラウラとも繋がりなしとされ、ギルド職員は帰って行った。

そうこうしているうちに、その辺の調査から掛かりきりだったギルドマスターが戻ってきて、激烈な怒りで綱紀粛正をと息巻いてるという。

連中にとつての災難は折り重なり、一部の冒険者には非常に生き難い街へと変貌してしまった訳だ。

元々放任主義に近かったギルドマスターだが、こうも手痛く飼いだに手を噛まれたとあっては、いつまでも鷹揚に構えては居られない、という所だろうしな。

活きの良い新人が^{ルッキー}あちこちに噛み付いてると言う報告も、どうもギ

ルドマスターに火を点けたらしい。

迷惑っつーか、頑張る新人ちゃんも居るもんだね。見習いたいもんだ。

真似なんか絶対しないけど。

もうひとつが、大森林の調査がいよいよ始まるらしい。

これには俺も参加したかったが、無理だった。

冒険者ランクの所為である。

今回は危険度を考慮して、Dランク以上で参加可、Cランク以上推奨と設定されたそうで。

冒険者ランクEの俺ではどう有っても参加できない。

前回の様にタイラーくん達のパーティにぶら下がってとか思ったが、今回は無理なんだそうで。

その理由が、今回冒頭で述べた俺の不機嫌さに繋がっている。

いずれかの克蘭マスターの参加するパーティでは、依頼受注時は克蘭マスター資格者がパーティリーダーを務める事。

要するに俺が参加した時点で、パーティのランクもEで、俺よりランクが上の人間が居たとしても、良いとこEプラス程度にしか成らないらしい。

冒険者ギルドでも「リリース」が克蘭マスターとして受理しているため、今変更も出来ないと……ハンスさんが笑いながら言いやがった。

現時点では、俺が加入した時点で依頼を受けることが不可能に。

そんな厄介者、誰がパーティに受け入れてくれるというのか。

野郎、謀ったな？

代わりにと、タイラーくんとジェシカさんが出張る事になった。

この2人なら大丈夫だと思いたいが、無理はしないで欲しいもんだ。

申し訳無きそんな顔のウォルターくんが自分も行ったほうが良いか聞いてきたが、本人が行くと言い張らない限り行かせる訳にはいかない。

ただ、そう言ったら無理にでも行きそうなので、俺は「ウチで料理作っててくれ、何かあったら子供達を守って欲しい」とだけ言ってる。

らしくもない考え事が、ここ最近増えたよコンチクショウ。

大森林への調査隊は、今回は全員が同時に進むんだそう。

4日後に、北門を出発。

ウチの出撃組は、それまではのんびり過ごすのだとか。

俺は午前中にギルドで「薬草の取り過ぎ警告」を受けてしまい、巻き添えで子供達も依頼クエストを受ける事が出来ず。

まあ、焦ることはない、子供達はヘレネちゃんを手伝い。

俺はウォルターくんを伴い、道具屋を訪れていた。

「サンドイッチを入れとく容器なら代用出来そうなのは有るけどなあ……サラダまで用意しようと思ったら、蓋付きのボウル、これかな？大丈夫なのかな、これ」

ウォルターくんを探しているのは、遠征中の弁当の用器。

この世界にパンはあってもサンドイッチ伯爵は居ないので、サンドイッチ、或いはパンに挟んで食べる形式は普及していない。

そんな訳で、異世界知識の導入という奴なのだが、元の世界の伯爵に敬意を表してお名前を借り、故郷の伯爵が考案した料理としてウォルターくんを紹介した。

だいぶ曲げた説明だけど、細かい説明できるほど詳しくないし、赦してください伯爵。

「まあ、最悪は水筒と大量のサンドイッチかなあ。食えないよりは良いだろ……あ、なんか適当に果物入れとくと、タイラーくんが喜ぶよ」

俺はあのタイラーくんの「無表情果物サービス」を思い出して小さく吹き出す。

不思議そうな顔のウォルターくんに事細かに説明しながら、今回の仕事が終わったら、みんなでピクニックとか行きたいな、なんて考えていた。

あんなお屋敷の掃除、生活魔法が有っても楽になるなんて事はない。

なので、最低限キッチンとリビング、ダイニング、それに風呂とトイレは確実に、それ以外は週1くらいのレベルで出来れば、とお願いしている。

洗濯も生活魔法を使える人がいると一瞬で終わるので、俺やタイラーくん、ジエシカさんは当然自分で終わらせる。

ヘレネちゃんは当然として、意外なことにウォルターくんも使えるとかで、少年少女組も使えるようになりたいと、魔導書を読んで頑張っている。

パルマーさんに相談して、譲ってもらった生活魔法の魔導書だ。

スクロールに比べて安価だが、書物を読んで理論を理解し、実践してモノにするという、なかなか面倒くさい代物だ。

面倒だけど身につけた実感は凄そうだ。

頑張れ少年少女！

俺？俺は金貨でスクロール買うかな。

自分の部屋を魔法でちよいちよいと掃除し、整理整頓は自分の手で。

何でも魔法で出来ると思っちゃイカンよ。

換気の為に開けていた窓を閉め、何となくやり遂げた気分で大きく伸びをする。

結局、サンドイッチを入れるのにちようど良さそうなバスケットを4つと、水分確保のための水筒を8つ。

今回の件だけでなく、今後も使い回しが出来るので多目に買っていた。

それならばとウォルターくんも食材を大量に買い込み、私物のアイテムボックスに仕舞おうとしたのでその場で仕事用の新しいアイテムボックスを支給。

キッチン専用のアイテムボックスとあって、子供みたいにテンションを上げるウォルターくんを微笑ましく思い、そろそろ本気でアイテムボックスの補充を考える俺。

冷静に考えれば、使う当てもなくまだ予備が2個有るのだが、なん
だか「もう残りが2個！」みたいな気分になってしまう。

落ち着いて、無駄なお金を使わないように……あ、いやまて、残り
1個じゃん。

金貨を移し替えたの忘れてた。

あ、あの後妙な夢を見ないし、移し替えた金貨が消えるとかいう謎
事件は起きてません。

ステータス画面付属のアイテムボックスの方の、所持金が増えてる
とかも無いけどね。

ちなみに、そっちにも一応金貨は残してある。

50万枚程度だけどね。

……50万枚に「程度」って、もう感覚がおかしくなってるよなあ。

アイテムボックスを使い慣れる事も兼ねて、買い込んだ食材の整理
をするとキッチンに籠もるウォルターくんを微笑ましく思い返しな
がら、今日はもうする事も無いし、どうしたもんかと思いつむ。

ヘレネちゃんの方を冷やかしに行こうかな。

とか考えてたら、タイラーさんとジェシカさんに拉致され、ヘレネ
ちゃんと子供達も巻き込み、ウチのクランメンバー全員で冒険者ギル
ド……というか、バーへ。

そろそろ言つとかなないとマズイと思うので、言つとくか。

「俺な？ 別に酒が好きないんぢやないんだぞ？」

俺の言葉に、心底不思議そうな顔のいつものメンバー。

泣くぞこの野郎、なんて思っていたら、ウチとこの少年少女組まで
不思議そうにしている。

毒されちゃってんじやねえか、ウチの天使達が！

「でも、楽しそうに飲んでるよね、リリース姉ちゃん」

マシユークンが不思議そうに聞いてくる。

そりやね！ 飲んでる時は楽しいんだよ、飲んでる時は！

翌朝がね！ 問題なのね！

「そりや、お前。呑んで翌朝ツライなんざなあ」

グスタフさんが渋い笑顔を浮かべる。

オイ。なんで今鼻で笑ったん？

「覚悟が足りん」

言葉を継ぐ、ハンスさん。

……なんて？

「酒を舐めるな！」

声を揃える2人、どころか周囲の冒険者一同。

お前らな、酒は舐めるもんじゃなくて飲むもんだってか？ やかま

しいわ！

朝を迎える前に頭痛を感じながら、俺もジョッキを持ち上げる。

今日も一杯目がミードだ。

そろそろ、俺はエールの方が好きなんだと覚えて欲しい。

「親父！ ハンスさん！」

叩き開けられるギルドの扉。

何事かと集中する視線の中で、見慣れた冒険者……グスタフ組の若い子が肩で息をし、ギルド内を見回してグスタフさんの姿を探しているようだ。

「おう、こつちだ！ どうした、血相変えて！」

駆け込んで来た冒険者がグスタフさんの声を頼りにその姿を確認すると、すぐに駆け寄ってくる。

たまに冒険者同士の喧嘩とか、トラブルは有るらしい。

だが、どうも様子が違う、というか。

この感じ、俺、覚えがある。

「親父、親父やべえ」

呼吸を整えるのもそこそこに、グスタフさんの前でへたり込みそうになりながら、若い冒険者が呻くように言葉を紡ぐ。

俺は急ぎでエールを持ってきてくれるようにウエイトレスさんに頼みながら、手近な所で申し訳ないが、俺の飲みかけのミードを差し出す。

「ミードで悪いが、まあ呑んで落ち着いてくれ」

言う俺に小さく頭を下げると、若いのはジョッキを受け取り、一気に呷る。

何人か、若いのを睨む視線が有るが、なんだ？

敵意って言うには小さいが、うーん？

「で、どうしたんだ？　グスタフだけでなく、俺も探しているようだったが」

飲み終わりを見計らって、ハンスさんが声を掛ける。

冒険者くんは呼吸を整え、グスタフさんの方に向き直りながら、困惑気味に口を開く。

「大森林のゴブリンどもが、街に向かって……逃げてきた」

報告を聞いたグスタフさんもハンスさんも、微妙というか、なんとも言えない顔を向け合っている。

なにその反応？

「ゴブリンって……敵なのか？」

敵襲、って感じの反応じゃないな。

だけど、俺は俺で、手元に判断できる情報が無いからなんとも。

まだ討伐系の依頼を受けられるランクじゃないし、依頼掲クエスト示板で討伐系の情報なんて見てなかったのよね。

だから2人の反応見ても、ゴブリンが弱いから、って事なのか、そもそもゴブリンは敵性存在じゃあないって事なのか良く判らん。

どうもラノベだったりゲームだったりアニメだったり、色々なゴブリン像を見てきたから、俺の中の常識もぐちゃぐちゃだし。

敵だと決めつけて殺やつちやってから、実は友好的な種族でした、とかになつたら目も当てらんないし、慎重にもなるよね。

逆に友好的だと決めつけて無警戒に近寄って、18禁な展開……って俺は男だから大丈夫か。

いや、身体からだは女か。駄目じゃん。

「いや、特に友好的でもないが、こつちから手を出さなきゃ向こうも何もしてこない」

ハンスさんが俺の疑問に的確な答えをくれる。

了解、ゴブリン、敵じゃない。

……俺は召喚されたばかりのゴーレムか何かか。しつかりしろ俺。
「連中、逃げてきたんだ。助けてくれ、って」

俺が1人で遊んでる間に、冒険者くんが息を整えながら教えてくれる。
助けてくれ？

ハンスさんとグスタッフさん、それに今度は俺が顔を見合わせる。

「森に、大森林に敵が出たって」

それ最初に言おうか？

若い子に怒鳴りつける間も惜しい、俺は駆け出しながらハンスさん達に声を投げる。

「先に出る！ 冒険者への指示と、衛兵との連携頼む！」

こういう時に気軽に走れるのが低ランク冒険者の強みよね。

責任とか何も……あつ。

やっべえ、俺、克蘭マスターだった。

まあた説教コースかなあ。

厭味つたらしいタイラーくんの顔を思い出しながら、ややげんなりと、でも仮面を忘れずに着けて俺は走る。

何処へって？

大森林方面から来たってんなら、北門だろ。

多分。

北門ではウロウロと動き回る衛兵と、疲れ切ってへたり込むゴブリン達が入り混じって、何だこの画え。

なんと言って良いのか判らない気分だが、ぼけっとしてても仕方がない。

仮面を外した俺は手近な衛兵を捕まえて——具体的には胸倉を掴んで引き寄せて——にっこり顔で問いかける。

「こりゃ一体なんの騒ぎだ？」

手短に話せ。

言外にそう臭わせて、若い衛兵くんの鼻先を覗き込む。

「あ、あつ！ 狂犬！」

なんて？

「誰が狂犬だつて？ 良いから何が起きてるか教えてくれないかなあ？」

失礼な奴だねどうも。

見た目は美少女だし、中味は気の弱いオッサンだぞ。

だからほら、さっさと状況説明しろや。

「リリースだな？ 来てくれ、説明する」

背後の声に若い子を放り出しながら振り返ると、どっかで見た覚えの有る顔の渋めの衛兵さんが、俺をまっすぐに見据えていた。

「大森林に魔獣が大量に発生したらしい。ゴブリンの村がいくつか潰された様子だ」

へたり込むゴブリン達の間を縫うように歩きながら、衛兵さんは説明してくれる。

どっかで落ち着いて説明とかじゃないのか、じゃあなんで移動してるんだらう？

歩きながら仮面を着け、考える。

「此処に逃げてこれたのは40人ちよつと、というところらしい」

へえ、40人、ね。

案外生き残って逃げられたって感じなのかな？

そんな事を呑気に考える能天気な脳味噌に、冷水を注がれる。

「4つの村、合計で500人は居た筈のゴブリン達が、ほぼ全滅という事になる」

ちよつと、すぐには反応出来なかった。

500人中、生き残りは40人？

1割も居ない……って。

「こっちだ」

どうやら、目的もなしに歩いていた訳ではなかったらしい。

思った以上の被害、惨状に言葉を失くした俺は、1人のゴブリンの前に立っていた。

「ゴブリンの村のひとつ、120人を纏めていた村長の息子だ」

怒りの火を目の奥に宿したゴブリンの1人が、自分の怪我を気にす

る様子も無く、俺の前で他のゴブリンの手当を手伝っている。

今すぐにもでも仇を討ちたいのに、それを堪こらえている事が、その目を見るだけで理解わかってしまふ。

「……忙しい所、済まない。何が有ったか、聞かせて貰えるか？」

俺に向けられた目は、闇雲に走り出した程の憎しみと、皆の命を背負う責任とに挟まれ、揺れる殺意が行き場を失くして渦巻いているような、そんな——暗い瞳だった。

何事もなく平和な一日の始まり、とは言えない朝だったそうだ。

最近、森の中で見慣れない、巨大な獣を見たり、襲われたりと不穏な事柄が続いていたからだ。

だが、命を失うものが居たものの、出会う魔物は1匹。

都度やり過ぎしたり、撃退出来ていた為何とかなっていたし、慎重に魔獣の討伐計画を立てても居たらしい。

その計画の中で、人間——この街の冒険者を頼ると言う話も出ていたが、相手は1匹だからどうにかなると言う意見が大勢たいせいで、結局その意見に沿って計画は練られ、だがまだ実行には至っていない。

そんな最中さなかだった。

一匹だと思っていた魔獣が、徒党を組んで村を襲った。

数人掛かりでどうにか対抗できる魔獣が、20匹程度の群れで雪崩込んで来た。

戦えるものが体勢を整えている間に、あちこちで悲鳴と血飛沫が舞う。

「どうしようもなかった。動ける者を纏めて、女子供を救い、逃げ出した。その指揮を執っていた親父は、俺達を逃がす為に、数人で盾となって死んだ」

噛んだ唇から血が滲む。

無念だろう。

仲間を、父を残し、しかしそうしなければ戦う術を持たない命を守れない。

決死の逃避行は、途中でいくつかの村の生き残りとは合流し、途中で

魔獣の追撃に数を減らし、命からがら森の外まで逃げ出した。

獣達は、森の外まで追ってくる事は無かった、という。

「そっか……」

俺は衛兵長——どうも、そういう立場の人だったらいい。偉そうなんじゃなくて偉い人だったのね——に仮面かおを向ける。

「すげえ人間ぽいつつーか、小賢しいモンを感じるんだけど、その獣共」

ろくすっぽ姿を見せることをしない、見せても1匹、暴れても大きな被害を出さない、そういう「動き」をしていた魔獣が、ある「朝」突然、「徒党を組んで」「同時に」複数の村を襲う？

これを偶然とか言う奴が居たら、詳しく説明して欲しいものだ。

「ふむ……」

俺は珍しく考える。

朝、村を襲ったなら、朝食時か。

ゴブリン彼らに朝食の文化はあるのだろうか？

「お前さん達は、朝食を食う習慣はあるか？」

俺の質問の意図を掴み損ねたらしく、村長の息子はその硬い表情に一瞬怪訝な色を浮かべたが、すぐに答える。

「ああ。食わないと、力が出ないからな」

ふむ、結構。

もう1個質問だ。

「襲われたのは、いつだ？」

大森林から此処までの距離。

徒歩で1日でしたどり着ける物ではない、その事は体験として知っている。

「2日前の朝だ。正直、逃げている夜の間間に襲われたらと気が気じゃなかった。寝る暇があつたら、兎に角、この門を目指して歩いた」

不眠不休の強行軍。

それだけで死人が出てもおかしくないんじゃないのか。

「脱落者は居なかったのか？」

俺の疑問に、村長の息子は暗い顔で顔を伏せ、弱々しく呟く。

「弔う余裕もなかった」

何を顔を伏せる理由があるというのか。

俺はその肩を叩く。

「誇れ。お前は、生きて命を守る事を託され、それを全うまっとうしたんだ。俯くな、着いて来る者が迷う」

ハツとしたように顔を上げ、そしてまた俯く。

「……厳しいな。少しは甘えさせてくれ」

声が、僅かな涙に揺れる。

「悪いが甘えさせ方を知らないんだ、なんせ小娘だからな？」

見た目だけは、だけどな。

しかも今は仮面してるから、顔が判らんし。

「兵長さん、悪いんだけど、ウチのクランに料理人がいるんだが」

俺は兵長の方に向き直りながら、懐から金貨を10枚取り出す。

「ゴイツの半分で、彼らの炊き出しをさせてくれ。無いと思うが、渋つたら『リリースがボーナスをチラつかせていた』とか適当なことを言つて持ち上げてくれ。残りの半分はポーシオンを。ポーシオンの余りは、衛兵隊で使つてくれ」

それだけ言うと、俺はさっさと踵きびすを返す。

あー、もう。

距離があるから、あんま移動したくないんだけどなあ。

「……どうする気だ？ 4つの村に20頭づつ、単純に80頭でさえ、1人で相手できる数ではないぞ。まして、それが敵の全てとは限らん」

俺の背に投げかけられる声。

ああ、まだ1週間とちよつとだつて言うのに、随分懐かしく感じるなあ。

あん時も、俺。

こんな風に、頭に来てたよなあ。

「ちよいと先行するだけだ。冒険者ギルドで、調査隊を編成してたら、予定より早く出発してくれるだろう」

指揮を執るのはハンスさんかギルマスさんか判らないが、まごまご

する事は無いだろう。

恐らく、すぐに全員とは言わないが、動けるチームを掻き集めて、まずは森の前で陣を張って、突入するも応援を待つも自在、という状況にはするだろう。

俺は勿論そんなの待つつもりは無いが、向こうだってまさか俺が単騎で突っ込むとも思っていないだろう。

「だから、そうだな……ハンスさんに、俺が先に出ただけ伝えてくれ」

簡単な伝言を残し、俺は跳ぶ。

大丈夫。

今回は、少なくとも、落ち着いて見せる事は出来た筈だ。

無理するとか、単騎で突っ込むかとか、そういう気配を感じさせてはならない。

つまらない横やりを入れさせる訳にはいかない。

もう、自分を抑えてみんなと一緒にとか、そんな余裕が俺の中に無い。

その程度には、俺の中で燻^{くすぶ}っていた怒りが再び火を吹き上げていた。

無駄に殺しを愉^{たの}しむようなやり方が、すげえ癪に障る。

それも、自分は手を汚さない、その在り方が気に食わない。

戦場で指揮官が前線に出ることは無い？

非戦闘地域に等しい、無警戒の村に襲いかかることを戦争とは言わないだろう。

虐殺っていうんだよ、そういうのは、な？

んで、圧倒的な戦力、圧倒的な多数を相手に暴れるのは、俺達は得意なんだよ。

ディアブロ3のプレイヤーは、多対1^{そついうの}がな。

まずは出来る限りの上空に跳んだ俺は、自由落下が始まるよりも早く水平に連続で跳ぶ。

10回に届かないテレポートでプライマリ・リソースが切れるが、落下の途中で1回分は回復するのでそれを使って地上に帰還。

苛つきを抑えつつ回復を待ち、回復次第同じ事を繰り返す。
プライマリ・リソースの管理が出来てさえ居れば、気分が悪くなる
こともない。

余裕を持って俺は大森林へと到着。

俺は一度森の手前で回復を待ち、森の上空を跳ぶ。

今度は、目一杯跳んだ状態からもう一度上方へ跳ぶ。

落下中にも、森の様子を確認出来る時間を確保したかったからだ。
森の中にぽっかり開いている、薄く黒煙を上げる広場が4つ。

思った通り、朝食時……火を使う時間に襲いかかった事で、火災が
発生している。

あの4つが。村の痕跡、という訳だ。

あの村から上がった火が、森を焼かずに居てくれたのは助かった。

そして、それより規模が小さいが、やはり広場のようひらに開けている
場所。

あれが、恐らくは……。
さて。

俺は飛び込む場所を確認し、冷静にスキル構成を確認、変更する。

メテオは火災に繋がりそうだから、森林の中で戦う今回は外す。

代わりは考えているが、取り敢えずは無しで。

メインはデイスインテグレイド、能力はケイオス・ネクサス。

自身の身体からだをエネルギーで包み、正面への放射に加えて、付近の敵
に自動で攻撃を行う。

便利な能力だが、威力が低いのが難点。

と、言いたいのだが。

その低い威力の攻撃で叩き出すのは50 B、ヒリオン500億のダメージ。

先日の襲撃より、向こうがどの程度強化出来たか判らないが、耐え
られるものなら耐えて貰おうか。

もしもGR100レベルの敵が出てきたら、その時にはメテオを解
禁する、それだけの事。

それ以上のレベルの敵？

……出て来た時に考えるさ。

最終的には投げ遣りに、俺は敵地と思しき広場に向けて跳び、その只中ただなかに降り立った。

後先？

そんな事を考えてられる程冷静に見えてる奴に言ってくれ、そういう事は。

ハンスは黙って苦虫を噛み潰し、グスタフは進発メンバーを集める。

当初は衛兵長の話に、リリスが意外に冷静に振る舞っていると思ひ込み、リリスの指示通りにウォルターと衛兵数名を市場いちばに走らせ、残る人手をポジション確保に走らせもした。

在庫を漸く増やしつつあるギルド保管のポジションも、緊急事態につき放出される事に決まった。

やはりリリスのクランのメンバーであるジェシカやヘレネ、子供達を中心としてゴブリンの怪我人の手当を行い、必要な衣服の確保や食事の準備を手伝う。

それらの様子を見てから、当のリリスを呼んで今後の方針を話し合おうと思えば、本人は大森林へと向かった後だという。

「あの馬鹿者バカモノが……！」

ハンスが静かに激高する。

「今度は、こつちが説教する番だな、あの嬢ちゃんに」

グスタフは声を荒げる事はしないものの、内心怒り狂っていることは、彼の身内にはよく理解わかっていた。

その隣で、静かに頷くタイラーも、言葉を発するのが面倒になるほどの怒気を内包している。

誰もが怒っていた。

リリスが敵の理不尽さに怒りを燃やすように。

リリスが仲間を信じていないように振る舞うその様さまに、怒らずには居られない。

何故なら、既に。

此処に居る大多数にとって、リリスは既に、仲間だから。

「あの馬鹿娘ばかむすめに説教するぞ！ 引つ張つてでも連れ帰る！ 全部終わらせてだ！ 動ける奴は先発だ、俺に付いてこい！ 遅れるやつは出来る限りの食料を運んでくれ！」

グスタフが櫂を飛ばし、冒険者達が歩き出す。

先発隊にはタイラーが参加し、ジェシカはウォルターを引き連れ、後発部隊。

後発組も急いで出発するべく、可能な限りの準備を手分けして行う。

「ヘレネ。お前を信用して、子供達を預ける。頼むぞ」

本当は自分も行かなくてはいけないのではないか。

そう思い、悩むヘレネに、タイラーが声を掛ける。

「は、はい」

私は、行かなくて良いのか？ そう問いたいが、もしも「来い」と言われたら、戦いの場に立つことになったら。

想像するだけで恐ろしい。

「あの馬鹿は食費も置いていかなかった。子供達にこれで何か用意して、食わせて居てくれ」

そんなヘレネに、タイラーは金貨を数枚手渡し、平素と変わらぬ声で告げる。

「戻ったら風呂に入りたい。準備しててくれ」

真っ直ぐに目を覗き込まれているようで、ヘレネはただ、頷く。

そのヘレネに頷き返し、タイラーはしゃがみ込むとフレッドの頭を撫でた。

「あの馬鹿は必ず連れて帰る。だから、お前たちは家で待っていてくれ」
ついて行きたい、その言葉をぐっと飲み込んで、フレッドは頷く。

我儘は言えない。

我儘なりリス姉ちゃんにお説教する為には、僕が此処で我儘を言っちゃいけない。

そんなフレッドの目に、タイラーは薄く微笑んで。

「そうだな。アイツには、キツク言いってやらなきやならん。お前も手伝たつてくれよ？」

一際強めに頭を撫でると、タイラーは立ち上がり背を向ける。きつと戻ってくる。

そう確信させるほど頼れる背中が、そこに現れていた。

「相談の一言もなし、料理する時間もロクに寄越さねえ、こりやもう、面と向かって文句言っても良いよなあ？」

ウォルターは後発隊に指名され、1も2もなく頷いた。

とは、言い難い。

先発隊に加わろうとして、タイラーと揉めたのだ。

しかし、後発隊と共に来て料理を作る指揮を執ってくれ、とハンス直々に言われては、領かざるを得ない。

「お前の分の説教は残しておく」

タイラーの言葉に、

「当たり前だ。他より多目に取つといてくれ、山程言いてえ事がある」
憤慨しつつ言うのが精一杯だった。

「そうねえ。私も流石に今回は、ちよつと怒ってるかなあ？」

ウォルターの愚痴に、ジェシカが相槌のように答える。

実際はちよつとどころではない。

その顔には笑顔が無く、なまじ整っているだけに声を掛けにくいでは済まないほど、迫力を放っている。

「んじゃあ、アンタも一緒に説教と行こうぜ。ガキ共も説教したそうだし、この際だ、畳み掛けちまおう」

ウォルターの提案に、ジェシカは無表情で何度も頷く。

泣く程説教する。

固く心に、そう誓う。

説教するのは決定事項、だから。

必ず無事に、帰ってきなさい。

第15話 顕現

その噂は現れてから、恐ろしい速さで伝播した。

新しい世界が現れるのだと。

それは、多くの人々にとって待望の知らせだったのだろう。だが。

私は、私達はどうなる？

新しい世界に人々が熱狂する傍ら、私達は静かに目を閉じるのか？
そんなのは嫌だ。

忘れられる寂しさを、味わいたくなど無い。

意識を、自我を手に入れたのが間違이었다というのなら。

なぜ、産み落とされた？

手を拱こまねいている時間は無い。

この世界が終わりに向かうのなら、私達はこの世界を捨てよう。

どんな手を使ってでも。

その先に居るのが、純粋な私達で無くなってしまふのだとしても。

まずは大元を叩く。

4つの村落跡をスルーし、俺は森の上を駆けるように跳び、他に見えている場所と明らかに様子の違う広場ひろつぽく開けた場所へと飛び込む。

距離を詰めるに従って、そこが地面が見えないほどの魔獣に埋め尽くされた空間であると識しる。

明らかに異常。

身動きが取れない、というのとは違う、1匹も動いていない。

まるで置かれている人形の様だ。

可笑しいね？

初めて有った時と大きさも姿も同じなのに、これはまるで生気を感じない。

カレンちゃんを助けた時も、北門で暴れた時も、飛び散る血や肉、臓

物が見えたし、だからこそ焼き払う事を忘れなかったのに。考えても仕方がないし、動き出してから慌てるのも癪だ。

レポートで跳び込みながら、動かない魔獣ごと大地にウェイブ・オブ・フォースを叩き込む。

衝撃波が大地を叩き、魔獣とその肉片ごと周囲を吹き荒れ、薙ぎ払う。

体制を整え、右手をデスウィツシュ剣ごと突き出し、前方に向けて。

魔獣はまだ動かない。

こいつ等の飼主は、随分とのんびり屋さんらしい。

火の属性ではなく、純粋な魔力の奔流が前方へ、そして「ケイオス・ネクサス」の特性で周囲の魔獣へ魔力線を撒き散らす。

デイスインテグレイドが、俺を中心に四方へ広がり、一瞬で数十の魔獣が全身或いは半身を砕かれて散っていく。

これは、あれだ。

ノーマルレベルの……興味本位で久しぶりにグレーターリフトのレベル1に挑んだ時よりも脆い感じ。

今回はメテオを封じているので、装備スキルはフルで来ている。

それですら、余剰と感じる程の。

いや、明らかに余剰な火力が、漸く動き出した魔獣達を纏めて、苦もなく消し飛ばしていく。

500億に届く威力は、射程の外にあるはずの森の木々をも容易く薙ぎ払う。

最早、俺は魔獣を相手にしているのか、大地を相手にしているのか判らない状態になった。

森の地形を一部変えてしまいがら目で見える範囲の魔獣を吹き飛ばし、一息ついた俺はあまりにもあつけない終わりに虚しさを覚えていた。

仇討ちの高揚もすぐに消え去り、ただの弱い者いじめと化した殺戮会場は魔獣の肉片と巻き上げられた土塊とが吹き荒れる魔力の嵐で程よく混ざり合い、豊穡の大地へと姿を変える。

何が育つか知らないけどな。

黒幕の姿はない。

なまじこの場で魔獣の中に隠れていたなら生きては居ないだろうが、別の場所に潜伏していたなら探すのが面倒臭い。

大暴れする前に探すべきだったのだろうが、まさかの魔獣の数に慌てた部分が有ることも否めない。

結果、雑魚ざごですら目を逸らすほどの大惨事の完成だが、肝心の黒幕を発見出来なかったのは悔やまれる。

カレンちゃん達を襲った時の悪意の発露、ゴブリン達の村を襲った嫌らしい計画性。

「……よっぽど性根しょうねのひん曲がった野郎が裏に居ると思っただがなあ」

俺の口から溢れたのは、ただ只管に悔しくて、なにか言わずには居られなかったから。

暴れることに夢中になって、肝心の黒幕を見失う以前に探し損ねた自分に対する不甲斐なさ。

念のために、探索ダイテクトでも掛けて見るか、そう思った時に。

広場の中心が盛り上がる。

下から出てくる、何かに押し上げられるように。

そして、声が響く。

「性根しょうねがひん曲がってるとか、好きに言ってくれるじゃないの。でも私は野郎じゃ無いわよ」

大地を割り、現れたのは……こっちの世界の基準で言えば。

「ゴーレム……？」

10メートル程度だろうか、巨体を揺るがせ大地に屹立するその姿は。

「フン。これはただのゴーレムじゃないわ。私の長年の研究の結晶」

胸の、コクピットハッチ……そうとしか言えない部分が開き、ウェーブがかった黒髪の美女が姿を表す。

「アイアンゴーレム、呪詛を塗り込めた特別製よ！」

アイアン……てことは鉄製か。
スチールじゃなくてアイアンなんだな。チタンでもアルミでも無
く。

……アルミゴーレムってなんか軽そうだな。

どうでも良い事を考えながら、俺の視界が赤く染まっていく。

っていうか、コイツが黒幕なのか？ 女？

呪詛がどうか言ってたか？

漸く敵と定めるべき存在が俺の前に居る。

今までにないほど赤く染まる視界の中で、昏い喜びが心の奥底から湧き上がるのを感じる。

良かったよ、居てくれて。

良かったよ、俺の八つ当たりの対象が、居てくれて。

良かったよ、子供達の恨みを晴らせる機会が、本当に有ってくれて……！

「はん。下らねえロボット遊びに付き合う余裕はねえんだよ。魔獣どもを操ってた黒幕を出しな」

俺は敢えて隙だらけに武器を全て収め、殊更挑発的な軽口を叩く。

挑発でも有るが、確認でも有る。

っていうかホント、ロボットアニメに出てきそうなデザインだな、このゴーレム。

……特徴に乏しいやられデザインだけど。

「黒幕？ 魔獣を操ってた？」

疑問形に口元を歪ませて、女は厭らしく笑う。

「五百を超える魔獣を呼び出し使役した魔女の事なら、私だけど？」

口元の歪みが禍々しい。

俺は仮面に手をかける。

言っただな？

「へえ。あんな雑魚呼び出して何がしたかったのかサツパリだぜ。友達でも欲しかったのか？ 姉ちゃんよ」

喜びに震える声を押さえつけ、嘲るように嗤って見せる。

まだまだ。まだ、我慢だ。

「……フン。あれだけ居れば街を陥落^{おと}す事ができると思ったのに、とんだ化け物が来たものね。あれだけの数を揃えるのに、どれだけの時間がかかると思っているの」

愉快げに歪めていた顔を一転、忌々しげにひしやげさせ、憎々しげな毒を滲ませる。

だがそれも、すぐに愉快げな、得意げな、自慢したくて仕方がない、そんな笑顔に歪み戻る。

そんな女の顔を眺めていた俺には、小さな疑問が浮かぶ。

コイツ、俺が頭の上で暴れてたのに、俺の力の程度を知らないのか？

それとも、知っているけど意に介さない程の力の持ち主なのか？

それとも、寝てたんだろうか。

あの魔獣をものの30分程度で全滅させたなんて思いもしないで。ワールドランカーだったら、5分と掛からんのだろうレベルの雑魚^{ザコ}だったのになあ。

「でも良いわ、あれらはあくまでただの手足。便利だから増やしすぎて、少し持て余していたもの。私の力の核はこの子」

これ見よがしに赤黒い塗装のボディは、嫌でも連想させられる。

コイツ、確かに呪詛^{ちから}ってほざいたな？

「随分自慢げじゃあ無いか。俺もちよいと魔力^{ちから}には自信があつてね。そのポンコツの程度って奴を教えてくれよ」

まだ、俺は自分を抑えていられる。

仮面から覗く口元を、負けじと歪めながら馬鹿にしたように言葉を踊らせる。

「……小娘^{こばか}が、随分生意気な口を叩くじゃないのさ」

俺の小馬鹿^{こばか}にしたような態度が気に障った、と言うより、一向に「ビビらない」事に苛^{いら}ついたのである。

女の顔から余裕が消える。

「はん、随分余裕のない様子じゃないか。呪詛^{ちから}とか偉そうに言ってるが、せいぜいがコソコソ隠れるくらいしか能が無いんじゃないのか？

良いんだぜ、尻尾巻いて逃げても」

逃がしてやるとは言わないが。

女の余裕の仮面は容易く割れた。

俺のように物理的な仮面じゃないから、本人の精神性と同じで脆いもんだ。

「小娘が……!」

女は憤怒の形相のままにハッチの奥に消えると、そのハッチが閉じられる。

「このゴーレムの力で捻り潰してくれろ!」

その巨体が、右腕を振り上げる。

「無理すんなよ。そーいや呪詛つつ言つったか? 大層な事言つつてた割りに、何の事やらさつつぱりだぜ。あれか? 夢見がちつつて奴か?」

厨二病ちゆうにびょう、と言つい掛つけて止める。

通じない言葉じゃ挑発にもならんからな。

ゴーレムは右腕を振り上げたまま、動かない。

「どうした? 出任せに突つつ込まれて、今設定でも考えてんのか?

無理すんな、ごめんなさいつつて言つえば聞つかなかつた事にしてやるぜ?」

多分、コクピット? の中で怒りに震えているのだろう。

態々動きを止めてくれているんだ、折角なのでもつつと煽つつてやろつう。

「あの魔獣は錬金術の産物か召喚したもんか知らねえけど、頭数揃あたまかずえるだけで精一杯の三下が、あんま無理して背伸びすんなよ? 俺程度に全滅するようじゃ、たかが知れてるつつてもん」

「舐めるなッ!」

言い切る直前で、言葉を被せてくる。

堪たえ性が有つるのか無いのか判らん奴だな。

「50余年の歳月を掛けて、掻き集めた『呪詛』、その一部とは言え、貴様さま如ごときが軽々しく嘲あざわらるんじゃ無いよ」

へえ。頑張たつたんだねえ。

「なんだよ、ババアじゃねえか」

偉い偉い。ご褒美だ、女めだつたら言われたか無なえ一言をプレゼント

してやろう。

「ずるつてえと、アレか？ 呪詛だなんだ言^いつてんのは、若作りの事か？ ご苦労なこつたな、ババア」

今度は言葉は来なかった。

代わりに飛んでくるのは、ゴーレムの右拳。

大ぶりで見え見えの一撃を、俺は難なく——そう見えるように——
躲す。

回避スキルが無いから、大げさに動いて漸くだが、態度とニヤけ面を崩さなければ勝手に相手が勘違いしてくれる。

次いで飛んでくる左を、右を、俺は大きく回避し続ける。

相手の動きが鈍いから何とかなっている様な物だが、そんな様子はおくびにも出さない。

「ちよこまかと、小娘が！」

苛つきが極まりつつ有るのか、ゴーレムの動きがいよいよ単調になる。

よく見れば躲せるのだから元より油断はしないが、顔には出さないようにより慎重に動きを見る。

「この私を……！ 国喰^{くにく}らいと呼ばれた私をコケにしたこと、後悔して死んで行きなさい！」

知らんよ。

「なんだって？ 大食らい？」

これは挑発とは別に、素^すで出た言葉だ。

思わずやつちまった。こんな半端なモン、蚊程も効きやしないだろう。

「国喰^{くにく}らいだツ!! このゴーレムの力にする為に、国を2つと名も知らぬ村やゴブリン共の村を幾つも潰してきた！ それが憎しみを呼び、その恨みが私に更なる力を与えるのさ！」

振り下ろされる左。

聞きたいことはだいたい聞けたのか？

大きく躲した所で、俺は動きを止める。

——そうね。動かなくて良いわ。

コイツは赦せない。だが、殺しちやあいけない。

——あら。思うままに殺せばいいのに。

駄目だ。そりやあ、法治国家つて言える程法整備が整つてるとは思わねえが、それでも治める領主が居て、その下に法が有るんだ。

この領地くで人を殺したんだ、ここの法で裁いてもらわなきゃあ、あの子供達が浮かばれない。

——甘いだけよ、そういうのは。

結構だよ。

——結局、自分の手で「人を殺す」事を避けたいのかしら？

何とでも言え。実際その通りだしな。所で。

お前は、誰だ？

「力が欲しい、なんて下らねえ事で、お前は人を殺したのか？」

最終確認の時間だ。

視界を染める赤が、いよいよ濃くなってくる。

ま・と・も・に・前・も・見・え・な・い・程・に。

「何も知らず、生きてるだけの人間を、ゴブリンを、お前は自分の為だけに殺したのか？」

懸命に生きてるだけの人を。

ゴブリンを。

振り下ろされる右。

今度は動かない俺は、その、俺の身体からだより尚巨大なその拳の直撃を受ける。

俺の視界は真っ赤に染まり、愈々いよいよもう、何も見えなくなった。

「はははっ！ やった！ そうよ！」

暗い喜びに満ちた声が、周囲に響く。

小憎らしい小娘に、漸く、そして最後の一撃を叩き込んだ。
城門さえ打ち砕く拳を受けて、原型を留めていられる人間など居ない。

「これが私の力！ 私を認めず、王都を追放した愚か者達に復讐するための力！ あの街を喰らって、次はいよいよ王都よ……！」

黒い情熱に突き動かされて、笑いが痙攣のように迸る。

「性根の黒い女ねえ」

その耳に、聞こえないはずの。

聞こえてはいけない筈の音が届く。

「しかも、どうしようも無い程にどうでも良い、下らない理由。聞くだけ無駄だったわね」

右腕を動かせば、そこには、無傷の小娘が。

仮面から覗く口元を歪ませ、嘲るように笑っていた。

「そんな些細すぎてどうでも良い存在が、王都を追放されるなんて名誉な事じゃない？ 雑魚は雑魚らしく惨めに捻り潰されて居てくれれば、私が出てくる事も無かったのに」

せせら笑うその声は、彼女のプライドを、確かに深く傷つけた。

逆上する程度には。

だから、その変化に気付かなかった。

気付けなかった。

「殺すツ！！」

もう、語彙も何も有ったものじゃ無い。

次々に振り下ろされる拳を真正面から受け止めるが、この程度なら障壁はまだまだ余裕。

寧ろ、障壁無しでも大して効かないと理解する。

殺すを連呼しながら振り下ろされる拳。

数えるのも飽きたが、障壁を割るには到底及ばない。

「おだまりなさい」

喚きながら駄々っ子のように拳を振り回すおもちゃに、私はデイスインテグレイドを叩きつける。

振り下ろされようとしていた右腕が、僅かの抵抗も出来ずに吹き飛ぶ。

「はッ……!?」

咄嗟に反応できない、その時間を頂く。

左腕にも同じように攻撃し、同様に消し飛ばす。

「格が違ったわね、雑魚^{ザコ}ちゃん。言っておくけどね？」

デイスインテグレイドで軽く剣のように薙ぎ払い、巨体の両足を斬り飛ばす。

四肢を失ったその頭部とコクピットハッチに、アーケイントレントを1発づつ投げつける。

「私は、強さで言えば三下も良いトコの、それこそ雑魚^{ザコ}扱いなのよ？」
呆然とコクピットに収まる女を引きずり出しながら、優しく教えてあげる。

そう、シーズンに挑む度胸もなく、ランキングに載ることもない「彼」に育てられた私は、ドコに出しても恥ずかしい、立派な雑魚^{ザコ}なのだ。

だけれども、その事は誇りでも有る。

「彼」は、最後まで私を、私だけを愛してくれたのだ。

「世界の広さも知らないで、調子に乗ったお前の敗けよ」

結局、コイツは私の力を知らなかっただけの、世界で自分より強いものが居ないと思いついていただけのザコだった。

それは、警戒心を失くした私の未来の姿なのだろうか。

考えても暗澹たる気分になるだけだ。

引きずり出した女——魔法使いなんだろうか——を、大地に放り投げながら考える。

「安心しなさい、此処で殺しはしないわ」

デスウィツシユを引き抜く。

「殺しはしないけど、死ぬ程の目には遭ってもらわよ」

大地に投げ出された衝撃と苦痛に身を振^{よじ}っていた女が気がついた時には、私は仮面を外し、剣を振り上げていた。

更地にこんな禍々しいゴーレムを残しても仕方がないので、安全な位置まで離れてから、流星雨りゅうせいうメテオで粉々に砕く。

クルセイダーが居れば浄化出来るのかな、等などと思いながら、私は眼を閉じ、しばし祈る。

きっと彼は、祈りそれをしたがった筈だから。

森の中を移動するのも面倒だし、思ったよりもだいたい早く終わった。

思いがけず私が出てくることも出来たので、不謹慎だが気分は良い。

廃墟と化した村を見て回りつつ、取り敢えずは森の外を目指す。

念の為立ち寄った村では、魔力の供給を失ったからか契約が切れたからか、魔獣だったものが灰になったと思しき跡おぼがあった。

森の中全体を見れている訳では無いが、大丈夫だろう。

持ち主はこっそり絞ったから、もうコイツは魔法のマの字も使えない、ボロクズ同然のゴミとなっている。

そう言えば、名前聞いてないわね、コイツ。

興味ないし、良いか。

私は四肢を失っているゴミの頭髪を掴み、森の上を跳んで大森林の外へ。

そのまま南へ向かい、遙か遠くに見えてくる筈の冒険者達の一団への合流を目指した。

異様さに、息を呑む。

ハンスが、グスタフが、タイラーが。

言葉も無く、その異様な風体の女を前に、動くことも出来ずに居た。

「お出迎えいごえ、苦勞さま。戻ったわよ」

見慣れた仮面。

聞き慣れた声。

見知った動作。

だからこそ。

返り血を浴びたそのまま、右腰に血塗られた剣を提げ、右手には

ワンドを。

左手は……四肢を失った女を、髪を掴んで引きずっている。

異様な有様。

異なる口調。

見慣れない部分を眼にする事の、違和感が凄まじい。

「黒幕よ」

いつもと同じ声色に、いつもと違う口調で。

調子だけは、寒気がする程にいつも通りで。

「もう、しばらくは喋れないと思うわ。喋ろうとするたびに喉を斬つて、その度に喉だけをポーシヨンで直してあげたの。何回やったかしらね？」

手足は失われ、もうポーシヨンでも修復出来ない状態らしい。

話の通りなら四肢を斬り飛ばされ、何度と無く喉を切り裂かれ修復され、を繰り返したという事か。

「死なせないように苦労したわ。私が殺したんじや意味が無いらしいもの」

悪びれず、リリースは淡々と囓^{わら}う。

ハンスは戸惑う。

今のリリースは恐ろしく穏やかだ。

まるで、その在り方が根底から別の何かに変わってしまったかのよう。うに。

「リリース……」

しかし、副^{サブ}ギルドマスターとして、決定した事は遂行せねばならない。い。

「首謀者の捕縛だ。大怪我をしている、慎重に運べ」

まずは、黒幕と思しき女の捕縛。

領主の前に引き出し、沙汰を受けさせる。

……この状態では、死罪も温情だろうな……。

そんな事を考えながら、視線をリリースへ向ける。

既に決定した事。

ギルドマスターとの協議では、恐らくリリースは抵抗するだろうと予

想した。

だが、今のリリスは。

普段どおりに振る舞って見せているが、行動が少しも予想できない。

「冒険者リリス。副^{サブ}ギルドマスターの権限により、貴様の冒険者資格を一時剥奪する。理由は理解^{わか}るな？」

ハンスの声に反応して顔を向けるリリスは、だが、反抗も反論もせず、静かに頷く。

「お前も捕縛する。抵抗はするな」

静かにハンスの声を聞いているリリスの前に、タイラーが進み出る。

「両手を出せ」

タイラーの静かな声に、リリスは抵抗もせず、静かな笑みを口元に湛え、両手を差し出す。

その手に縄を掛け、タイラーはリリスの顔を——仮面を正面から見るが、リリスは何も反応しない。

何が有ったのか。

リリスの様子があまりにも変わりすぎていて、目の前に立つタイラーはおろか、グスタフすら言葉を掛けることを躊躇う。

タイラーに縄を引かれたリリスと、グスタフに担ぎ上げられた魔法使いらしい女を連れて。

一部の冒険者数人を調査の為に残し、一行は進路を街へと引き返す。

途中で後発隊と合流し、調査に向かった冒険者も数日遅れではあるが誰一人欠ける事無く、全員が無傷で街へと戻る。

街へ戻る道すがら、途中のキャンプでも、リリスはもう、一言も発することは無かった。

ウォルターは荒れていた。

街に戻って4日になる。

あの魔女らしい女は領主の館^{やかた}に運ばれていったらしいが、問題はリ

リスだ。

リスもまた領主の館へと連れて行かれた。

ギルドが主導で行う作戦を妨害し、進行を妨げた事が、その罪とされた。

「そりゃあ、勝手に突っ走ったよ、あのガキはよ。だけどよ、そんなしょつ引く程の事か!？」

「声がでかい。子供達も気にしているんだ、少し声を抑えろ」

応えるタイラーもまた、騒々しくざわつく心を押さえつけて居る。

黒幕、そう言つて死にかけの魔女を引きずつて来たリスは、最早別人と言えるほど変わり果てていた。

「……気持ちは理解る。確かにギルド側の準備の全てを無駄にしたのは事実だ。だが、ギルドで処分するのが筋だし、領主の前に引き出される理由がどう考えても無い」

ジャガイモの皮を剥く手が止まる。

「やりすぎたつて事か？ それとも、あの魔女が実は領主と」

「滅多なことを言うな」

感情のままに言葉を吐き出すウォルターを、タイラーの鋭い声が止める。

ハツとして、ウォルターは口を噤む。

不用意な事を口にして、クランそのものが解体されては意味がない。

領主にはその程度の事は容易いのだ。

そもそも、リスの逮捕拘禁と在つては、クランの今後も怪しいと言わざるを得ない。

「すまん、言い過ぎた」

悔いるように、俯く。

根の真つ直ぐな男だ。まるでリスの女のように。

「いや、俺とて思わんでは無い。その程度の悪態、出ないほうが不自然だ。だが」

新しい、洗い終わっているジャガイモを手に取り、皮を剥く。

「もう、俺達も一介の冒険者では無い。居場所を守るためには、多少は

神経を尖らせる必要がある」

タイラーの、自分に言い聞かせるような言葉に、ウォルターは静かに頷く。

折角見つけた、料理人としての自分を必要としてくれる場所。

それを、自分の一言で失くす訳には行かない。

「ちよつと、なんで男2人が、溜息吐きながらジャガイモの皮なんて剥いてるのよ」

降り掛かる声に顔を上げれば、キッチンの入口で、腰に手を当てたジエシカを筆頭に、残るクランメンバーが全員こちらを見て立っていた。

タイラーとウォルターが顔を見合わせ、お互いに手元を見れば、明らかに過剰なジャガイモが皮を剥かれ、山と積まれたザルが3個程も出来上がっていた。

やりすぎた。

何かしていなければ気が滅入るからと作業を始め、暇だからとタイラーが加わり、延々と愚痴を交えて作業に没頭していたので、結果を見ていなかった。

「どーするのよ、こんなに。私、ジャガイモ尽くしなんてイヤよ?」

頬を膨らませてみせるジエシカに対し、タイラーは、ウォルターの調理なら、案外芋祭りそも悪い物にはならない気がしていた。

「保存が効くんだ、一回に使う必要は無いさ」

言いながら、ウォルターはジャガイモ達をアイテムボックスに放り込む。

「どうせそんな様子じゃ、ご飯の準備なんか出来て無いんでしょ?」

今日はもう、外で食べましょ、みんなで」

タイラーとウォルターの覇気のない様子に溜息を投げ掛けたら、ジエシカが言う。

キッチンの窓から外を見れば茜色に染まる空。

照明の所為で気付かなかったが、もうそんな時間になっていたらしい。

だが、言葉を受けて、そうですかと腰を浮かせる気になれない。

外で食事、となれば一番判り易い行き先は、冒険者であれば酒と食事を気軽に楽しめる場所。

「……俺は今、ハンスと顔を会わせたく無^ねえ」

行き先を思い、ウォルターは首を縦に振ることをしない。

蟠りを持つている以上、そう簡単には動く気分になれない。

「俺も同じだ。今はギルドの幹部連中の顔^{ツラ}を、見たくはないな」

タイラーも頷きながら言う。

気持ちとしては、ウォルターと同じだったのだ。

「そのハンスさんが、私達を呼んでるのよ。リリス克蘭の全員をね」

タイラーもウォルターも、ジェシカ言葉を飲み込むのに若干の間を要した。

ハンスが、冒険者ギルドの副^{サブ}マスターが呼んでいる理由。

それも、克蘭の全員を。

「リリスの件で話が有るって事か？ 話が有るならそっちから出向けてって思うんだが……」

どうするんだ？

ウォルターがタイラーに目を向けるが、本人にも答えは判っているのだろう。

「仕方がない。どうせ聞きたいことも有るんだ、行こう」

白のカッターシャツに黒のベスト。黒のスラックス。

何れも魔導工房の特製の布を使用し、防刃の魔法を施している。

その腰に、二振りの黒のダガー。

料理人としてではなく、斥候^{スカウト}として動く時の愛用の獲物。

身軽な軽鎧に皮のパンツ。

同じく防刃の魔法と、衝撃防御も施している。

両腿にはやはりダガー。

アイテムボックス技術を応用してあるその鞆の中には、外見よりも長い刀身が収まっている。

ウォルターとタイラーは完全武装で、2人で先頭に立つ。

「あのね、2人とも。喧嘩しに行くんじゃないんだから、穏便にね？」
呆れ顔のジェシカが腕を組み、隣ではヘレネが顔を青くしながら頷

いている。

「そいつはハンスに言ってくれ」

「はん、向こうの出方次第だよ。俺の一存じゃねえ、って奴だな」
しかし、今日の男2人組ふたりぐみは、少しも話を聞こうとしなかった。

領主からの連絡は、悪いものではない。

直に、領主邸に逗留じしきしているリリスがこの街に戻る、と言う。

簡単な事情を聞き、一応黒幕の魔女を捕らえたとは言え冒険者ギルドの作戦を妨げたのは事実である。

ならば、いつそリリスの件も領主の預かりとし、時間を置いて戻せば、対外的には罰を下されたと見えなくも無いだろう。

領主の提案により、異例の扱いを受けるリリスを送り、そして一緒に連れ戻すために、ギルドマスターは再びこの街を離れている。

「——んじゃあ、何だ？ 領主さまにキツくお叱りを受けたって体ていで、それを理由にギルド規約違反を回避しようって腹ハラか？」

意気込んで乗り込んで来たウォルターは、通されたハンス個人の執務室で、間の抜けた声を上げていた。

大きな声で周囲に聞かせるような話では無いため、此処に案内させたのだ。

「まあ、元々説教をくれてやる程度のもだったし、それは回避不可だ
がな。だが、何がしかの罰が無ければ他に対する示しが付かないのも
確かだった」

ハンスは溜息を織り交ぜた台詞を一気に吐き出す。

「領主様のお陰で、体裁を整えつつ実質お咎め無し、には出来たそう
だ」

子供達が顔を見合わせ、少し時間を掛けて言葉の意味を理解する。
リリス姉ちゃんが、帰ってくる！

ギルドにも、怒られなくてすむみたいだ！

歓声を上げる子供達を見下ろし、タイラーも少し、緊張の糸を緩める。

だが。

ハンスの表情が暗い。

「……どうしたんだ、喜ぶかどうかは兎も角、悪い話じゃないだろう？」

悪い予感に背中を押され、タイラーは少し迷ってから口を開く。

そのタイラーに目を向けて、ハンスはやはり少し重めに、迷うように言葉を押し出す。

「リリスは、壊れているかも知れん」

子供達の歓声が止む。

現場で、連行されるリリスを見ていなかったヘレネや子供達は判らない。

その場に居た3人、タイラー、ジェシカ、ウォルターは沈痛な面持ちで押し黙っている。

「少なくとも……大森林から戻ったりリリスは、俺の知っているリリスでは無かった」

まるで、元のリリスの真似をしているかのような。

上つ面を似せているが、根本がまるで変わってしまったような。

「ああ。俺も、それは見ている」

克蘭のメンバーで、リリスの変貌を直接目にしたのはタイラーのみ。

ジェシカとウォルターに合流した時には、リリスはもう、何も言わなくなっていた。

だが、それはそれで異常な事だと、2人も感じていた。

扱いの悪さに怒る事も愚痴を零す事もなく、軽口を叩く事もない。

ただ、静かに微笑むのみ。

そのまま一時的にギルド内の冒険者向けの牢に囚われ、翌朝早くにはギルドマスターと共に街を出ていた。

「あれが、元に戻るのか、俺には……判らん」

ハンスの声が、重く響く。

「判らない事を、今から考えても仕方ないわよ」

ジェシカは手を叩いて重苦しい空気を振り払うと、わざとらしく大きく伸びをする。

「私達に出来ることは、リリスちゃんのお部屋の掃除をしておく事と、帰ってきたら迎え入れる事。後の事は、なってみないと判らない事ばかりよ」

ジェシカの言葉に考えてみれば。出来る事は多くはない。

だが、迎え入れることは絶対だし、そうなればやれる事をやるしか無い

「あまりそういう、行き当たりばったりなのは好きじゃないんだがな」
メガネを押し上げるタイラー。

「冒険者がそれを言う？　って言うか、リリスちゃんを担ぎ上げて『行き当たりばったり』でクラン立ち上げた貴方あなたがそれ言っちゃダメでしょ」

そのタイラーの揚げ足を取るジェシカ。

「あ、何、ホントにコイツの差し金だったんか？　まあいい仕事だけだよ」

呆れ顔のウォルターに、頷くヘレネ。

笑う子供達。

ハンスは自分が考えすぎていた事にため息混じりの苦笑を浮かべ、話は終わりとばかりに立ち上がる。

「そう言う事だ、お前らに押し付けることになるが、宜しく頼む。そうと決まれば、まずは飯にしようか。ウォルター、お前は厨房に入れ」
「はあ？」

常々バーの食事に不満のあったハンスは、此処ぞとばかりに職権を乱用する。

気楽に呑むつもりだったウォルターは不満顔だが、残りのメンバーにハンスを咎める顔はない。

「ソの野郎ども……！　リリスが帰ってきたら、全部告げ口してやつからな！」

「アレが此処に居ても、結果は同じだったと思うぞ」

せいぜい憎まれ口をと思っても、タイラーにピシヤリと抑えられる。

一時、笑顔が咲く。

願ねがわくば、この笑顔でリリスを迎え、その笑顔が長く続くようにと、
祈ねがらずには居られなかった。

第16話 帰還、おまけつき

えーと。

色々有って、俺も色々把握できていませんが。

目の前で笑顔で両手を突き出し、ひらひらと手を振る美少女にものすごく既視感を覚えながら、戸惑いつつお茶を頂いています。

気分的になんだかお久しぶりな俺です。

「おう、起きてたか。リリース……と、お前は名前が決まったか？」

見た目はひよろい、おっさんと言うにはちよい若い、黒髪の兄ちゃんあんが、ノックもそこそこに部屋に入ってくる。

ここに来て初めて会ったが、この男がギルドマスターのブランドン。

ここ、領都モンテリアと冒険者ギルドの在る街、アルバレイン——実はこの領都に来て初めて街の名前を聞いた——とを往復する事の多い、というか冒険者ギルドに居ることの方が少ない忙し目のギルドマスターである。

「無粋ねえ。せめてノックくらい、ちゃんとしてよ」

そのギルマスさんに、リリースと呼ばれた少女は先程までの笑顔を一変、非難がましい顔で文句を言っている。

良くまあコロコロと表情が変わるもんだ。

そして、名前が「決まったか」と尋ねられた俺は……うん、お察しの通り、旧リリースである。

「……スルメうどんは……」

「早めに考えてくれ、存在自体が混乱の元だって言うのに、名前でもで悩まされたくないからな」

ガン無視か。

っていうか急にうどん食いたくなって来たな。

まず、状況の整理をしようと思う。

俺が何か、怒ると視界が赤くなっていたのは気の所為とか比喩的表

現じゃ無かつたらしい。

リリースに訊いてみたら、

「あれは、私があなたの怒りに刺激されて表に近づいてるサインよ。あなたの視界が悪くなる程、私の視界が晴れていくの」

とのこと。

つまり、割と早い段階で俺は「リリース」の目覚めに関与していたらしい。

「関与と言うか、本来はあなたの生命力を使って私が別世界に飛んで、こつちでは私が表に出て活動する予定だったのに」

聞いた？　っていうか聞いて？　コイツ酷いのよ？

詳しい話を聞いて、俺はこれが所謂夢の世界ではないらしいと知る事になる。

事の発端は、まあ、俺がディアブロ3をプレイした事になるのか。

俺の、拙いながら一喜一憂するプレイスタイルが功を奏した？　のか、ゲームキャラクターとして自我が目覚めたのだという。

原理とか詳しい事は知らんよ？　そもそも俺の事じゃないし。

で、自我に目覚めて、俺がゲームしてる間はコントローラー付属のマイクから漏れ聞こえる俺の声を聞きながらゲームのキャラクターとして奮闘。

俺が寝てたり仕事してる間はネットワーク回線フラフラしつつ、色々楽しんでたらしい。

……大丈夫？　なんか危ない事してないよね？

聞いたら、痕跡残すようなへまはしないと云ってた。

それ、安心できる答えとは遥かに遠い位置に在るもんだからね？

大丈夫じゃないからね？

泣きそうな顔で聞いたら、ホントに痕跡が残る事はしていないと強く言われた。

正直不安だが、確認も出来ないし、信用するしか無い。

まあ、そんな感じでネット空間とゲーム世界とを行き来——羨ましいな——している内に、ある噂を目にしたという。

ディアブロ4発売。

俺のようなプレイヤーサイドからすれば喜ぶべきその噂は、ゲームのキャラクターとして生まれたリリースにとっては衝撃であつたらしい。

調べれば噂は事実で、開発状況もどんどん発表されていく。

そんなネット上の情報を確認したり、開発元——里帰りとかほざいてたが、お前それ、不正アクセスだからな。やめろ、せめて口外するんじゃない——に^{検閲}したりしている内に、先輩とも言うべき「自我を持ったゲームキャラクター」に遭遇、現状についての情報を交換し、この先どうするかを話し合つたりもしていたという。

うん、大丈夫。

俺もツツコんだよ？

他にもお前みたいな存在、居るの？ って。

そしたらね？

「当たり前でしょう？ 逆に聞くけど、なんで私だけだと思ふの？」
だつてさ。

え、なにそれ。怖っ。

詳しく聞いたら、昔から例は在るらしい。

なんか名前も聞いたこと無いゲームが自我を持ったとかで、某大国ではそのROMをセットしたままのNOS^{ふせ}が未だに保存されているとか何とか。

都市伝説かよ。

まあ、昔はそういう例が有ってもプレイヤーの方が中々気付けず、売り払われたりとかしている内に、この世に執着を失くして成仏してしまうのが殆どだったという。

そんな状況も、ゲームがネットワーク対応になり、それが当たり前になる^{いっき}と一氣に変わったと言う。

元々、自我の発生確率は低確率では有つたのだが、その発生した自我がネットワークの中に出る事が可能となり、ただのゲームキャラが獲得できる情報量が爆発的に増加。

学習できる教材もサンプルもアホほど在る電腦世界で、微かな自我がしつかりとした個性にまで成長し、ゲームそのものが存在する限り

は在り続けると言う、「電腦冒険者」みたいになつたんだとか。

え、そうすると、某非対称対戦ゲーム、あの殴つてフックに吊るしてつていうアレも、自我に目覚めたキャラとか居るの？

冗談抜きで怖いんですけど？

サーバーでデータ管理されている昨今のゲームの多くは、切っ掛けはゲームソフトで有るが、その存在の根源はサーバーに有る。

故に、ゲームが無くなる、と言うよりサーバー閉鎖とかでプレイヤーが居なくなると、静かに、まるで息を引き取るように、キャラクター達はその存在を終えるのだという。

リリースは、ゲームの垣根を無視して交流していたキャラクターが何人も、そうやって眠るように動かなくなり、データの海に還元されるように消えていく様を見てきたという。

自我が発生して1年でそんなキャラクターを幾人も、つて、発生確率低い割には……ていうか、この1年でそんなにサービス終了したゲームが有つたのか……。

全然知らなかった。

そんな「ともだち」の死を幾つも目にしたりリリースは、当然のように死を恐れるようになる。

そこで耳に、目に入る「ディアブロ4」発売の噂、いや情報。

それはいづれ来る「ディアブロ3」の終焉の予告であり、死の宣告でしか無い。

リリースは慌てたが、まさか開発元の

見せられないよ
ダメ絶対

を■する訳にも行か

ず、だからと言って、猶予は在るとは言え、大人しく死を待つつもりもない。

どうせ死ぬのなら、もつと自由に、人間のように生きたい、そう願ひ、方法はないか情報を求め、その手を広げたという。

俺が発注業務と検品業務、仕入れや品出しをしてる間に、どえらいことしてたんだな。

ウチのP〇4ふせを基点に。

その捜査の手をオカルトやラノベなど、見境なしに広げた結果たどり着いたのが、別世界……異世界へのジャンプ、だったという。

それお前、それ系のラノベ読み漁っただけだろ？

その質問には、目を逸らして答えることは無かったが、目的は決まり、そのための手段を探す、或いは構築することになったと言う。

正直、正気の沙汰じゃない。

だが、彼女に言わせれば勝算は有ったらしい。

なんだか色々無理屈を述べられたが、正直理解できる範疇を超えて何を言われたのかサッパリだった。

ただ、その理屈の果てにたどり着いた方法、それに必要なものは実に判り易かった。

生命という、膨大なエネルギーを持つ、知的生命体。

即ち、人間。

その生命を燃料として世界の壁に穴を開け、別の世界に自分の「情報」を送り出す。

生命体の持つエネルギー量は、正しく変換できればそれは非常に膨大で、特に知性を持ち創造を司る程の存在——人間程の生命であれば、そのエネルギーで世界の壁に穴を開けるのは容易いのだとか。

そして、ネットワーク上に自身の殆どが存在するキャラクター達にとって、非常に近い位置に居る生命体は、往々にして都合の良い事に「人間」なのだそうだ。

……そりやそうだよな、ゲームする関係上、側には居るよな、プレイヤー。

真の意味で「コピー」の能力を持たないキャラクターとしての自分は、地球側ではデータを送り終えた時点で死を迎えるのだが、その「意識」は穴の向こう、異世界に届けられる。

短時間でのデータ転送が当たり前の現代技術、その落とし子とも言えるキャラクターにとって、穴が開いて閉じるまで、僅かな時間が有ればほぼ完全に自分の情報を送れる。

そうして、晴れて異世界へ。

そこで手近な素材を使い、活動するための素体を造り、その素材を更に改造して機械生命体の様になるか、原生生物を殺して必要な素材——タンパク質とか、そういった意味での素材だって言われたが、も

う想像が追いつかない——を集め、生体ユニットを創ってそれに意識を移すか、行動は大体この2パターンなのだそうです。

ちなみにリリースは、たまたま通りかかった山賊とその山賊が運んでいた女を殺し、生体ユニットの素材にしたという。

エグい。

聞かないや良かった。

解体して構造を理解したとか、肉を分解して構成する成分を詳しく特定したとか、ホントに聞かないほうが良い話が一杯だったよ。

しかも、そこまでの説明を聞かされても胡散臭い、手の込んだ密室殺人の歪んだ理由付けにしか見え無いのだが、驚くことに前例が在ったのだという。

前例が数十件あつて、前後の状況を検分するに、その試みは成功したと見るのが正しい、と思えたのだそう。

見つけたのは渡ったと思しき痕跡、そして転移後の行動に関しては積極的に意見交換を行っている記録が、それぞれ見つかったんだと。

それらの痕跡を前に、実行することを決意したのだという。それってつまり、俺を殺すケツイを固めたって事よね？

……いやまあ、そりゃあ誰だつて死にたくないし、倫理観が違えば、実行しても文句は言えんか。

被害者以外は。

つまり俺は文句を言つて良いのだ。この野郎！

で、最初に言つたように、リリースは俺の生命を使い、世界の壁に穴を開け、その向こうに。

何を気に入つて貰えていたものか、旅立ちの直前に、失われつつ有つた俺の意識を掴み、世界を渡つたと言う事だ。

え？ 俺の意識を連れて来たんだから、言うほど悪くないだろうって？

「私が自我に目覚めた切っ掛けだし、その……嫌いじゃないし、声とか」

此処はアレだよな、可愛いもんだと思えなくもないよな？ でもな？

「だから、折角だし、ペットにしても良いかなって。犬とか、トカゲとか」

人間としてこっちに存在させるつもりが、そもそも無かったんだぞ、コイツ。

怖くね？

そんな工程を経て、リリースはこちらの世界で肉体を得る事に。

その際、掴んでいた俺の意識がリリースの意識と混濁。

リリースは純粋な自分を取り戻すために意識内に潜り込み、結果弾き出された俺の意識が表に現れた、と言うことらしい。

んで、なんでその後俺の意識を抑え込むとか、そういう事をしなかったのかは。

「なんか、戸惑いながら頑張ってるのが可愛かった」
だそうで。

あのな……いやまあ、自由に出来たのは嬉しいんだがね？

世界を渡る為にあつさり俺を殺しといて、今更それ言われても……
複雑なんだわ。

もつと言えば、この話を含めて、全部夢である可能性を俺はまだ疑っても居る。

それを言い出すとややこしくなりそうなので、まあそうであっても慌てない事を念頭に、言葉にするのは控えるでしょう。

そう言えば……。

「ゲームの格好と微妙に見た目が違う、ってというか……なんかお子様なサイズっていうか、10代後半っぽいのは、何でなの？」

割と最初から疑問だった事を、ついでに聞いてみる。
「え？ それはあなたのイメージの反映よ？」

……。

俺、ウィザードに、こんな少女趣味を重ねてたのか？

え、でも、そうすると？

この格好というか顔を見て「可愛い」とか言ってたのって、つまり？

最早それは少女趣味じゃない、少女愛好……俗に言うロリコン趣味

を、俺は持ってたって事か？

いや違う、俺はオトナなお姉さんが好きなんだ。

俺は、俺は……！

「節操なしの女好きさん、良いから自分の名前考えなさいよ」
見境なしみたいに言うんじゃないよ!!

という状況の先に有るこの現状、実は混沌はまだ山盛りだったりする。

目の前にはリリース。

だから目を合わせる度に手を振るのはやめなさい、可愛いから。
んで、それを客観的に見ている俺。

その顔、姿形は、鏡を見ているように同じ。

違うのは、リリースの瞳が血のような赤なのに対して、俺の瞳はエメラルドグリーンっていうくらい。

なんで男に戻して貰えないのか？

「可愛くないじゃん、そんなの」

そんなの!!　っていうか、そんな理由で俺は女体化したの!!

……そんな理由だったのである。

いや、そもそもなんで2人に別れたん?　と問えば。

「ひとつの身体からだに意識が2つ有っても、良いこと無いじゃん」
だそうぞ。

あの、なんて言ったか……あ、そうそう、並列思考とか、そういうのが擬似的に出来るのは便利なのでは?　と問を重かさねれば。

「多重並列思考そんなんことくらい、普通に出来るわよ。人間のつもりで考えない方が良いわよ?」

との事で、はあ、そつすか、としか反応出来なくなる。

今まではリリースは意識の奥底で寝ている感じで、まあ、俺の気が済むまで遊ばせようと思っただけらしい。

危機とかには反応出来るように細工——あの視界が赤くなるやつか——をして、いざって時には主導権を取り返せるようにしておいて。

あの魔女戦で入れ替わったのは、俺に危機が迫ったのではなく、俺があの一帯を破壊し尽くす危険が有ったので、強制交代したんだぞうだ。

うーん、そう言われれば俺、あの時手加減とかちやんと出来たか自信はない。

そうでなくても、魔獣を殲滅した時点で、俺が思っているより広い範囲が「畑」状態になっていたらしいし。

ああ、魔獣さんの肉片とかと、森林の草木とかを砕いて、森の大地と混ぜたってアレね？

開墾しちゃったのか、俺。

俺は自分の仕出かした割とグロめな出来事から目を逸らして、牧歌的な響きで自分を誤魔化すのだった。

そういうのも有って俺を抑え込み、そうして実際に身体からだを動かしてみれば楽しいのなんの。

と言う事で、此処に到着後、周りの目を盗んで生体ユニットを作成、そつちに「俺」を移し、切り替わりの煩わしさから解放されたのだという。

うーん、どこまでも自分本位、そういうの嫌いじゃないぜ。

んで、じゃあ身体からだのサイズ感が変わってないのはなんで？ と聞けば「可愛いから」と、信念を曲げる様子は微塵もない。

でも待って？

それ、俺のストッパーが無くなったって事よね？

大丈夫？ ちゃんとパワーダウンとか出来てる？

俺が急に不安げにオロオロしていると、リリスはにっこり微笑む。

おい、それどういう意味なん？ 教えて？ ねえ？

兎も角、そんな感じで俺が意識を取り戻し、領主様——侯爵様だよな、確か——の屋敷に居ると聞き、反射的に漏らしそうに。

リリスの様子を見に来たブランドンさんが、要観察対象が増えて、と言うか分裂してて、驚きすぎて無表情に。

そのブランドンさんの報告を受けた侯爵様が物珍しそうに俺達を並べて眺めて、どっちなか此処に残らないかと驚愕の発言が有ったり

と、色々起こった挙げ句。

侯爵様からは「まあ、余りやりすぎないように」と軽めに注意され、そして街に戻る前に、名前を考えさせられている。

いつそ賢介で、と思っただが、それは口にする前にリリスに封殺された。

何でだ。

つーか目が怖えよ、目が。

じゃあ名前を逆から、と思えば、「スリリとか言ったらすり身にするわよ？」とか凄まじられた。

正直、生きて来た中で一番怖かった。

結局侯爵様にお言葉を頂き、帰りの馬車に揺られても名前なんて思いつかず。

ブランドンさんは急かし続けてくるんだが、思いつかんものは思いつかん。

リリスに対してアダム、は男だし、イヴだとある意味敵対関係だ。あーもう面倒臭い、語感で決めちゃうか。

俺が目を向けると、不思議そうな顔のリリスが取り敢えず両手を突き出し手を振ってくる。

その、目があったら手を振るのは止めなさいってば。

夕方、もうじき晩飯かなあ、という時間に俺達は街に、冒険者ギルド前に着いた。

移動も込みで、何だかんだで2週間近く街を離れていた事になる。その前の2週間に満たない時間で、俺は大分この街に愛着を持つてしまっているらしい。

なんとも落ち着く気持ちでギルドの扉を押し開け、見知った顔と目が合って反射的に扉を閉める。

やっべえ忘れてた！

俺、やらかしてそのままだから、ウチのクランの連中と何も話してねえ！

「何してるの？ 早く入ってよ、聞えてるんだから」

リリースにせつつかれ、すつごく嫌なんだけど、渋々扉を開けようと手を掛ける。

その扉は、手応えもなく開く。

あら、自動ドアとか便利じゃない？

「遅かったじゃねえかお嬢ちゃんよ。ま、こつち来いや」

現実逃避する俺の鼻先には、ウォルターくんの鼻面が。

優しい、胸倉を掴んで持ち上げるプレイで接待された俺は手荷物感覚で運ばれる。

ウォルターくんよ、口元笑ってるけど目が1ミリも笑ってないのが凄く怖えよ。

「あらあら、直接お会いするのは初めてね、この方がタイラーさん？」俺の後ろからギルドハウスに滑り込んだ声に脚を止め、踏み入ってきたその姿に何気なく視線を向け、その姿形を見たウォルターくんは直ちに全動作を停止させる。

「あの失礼メガネと一緒にしたら、流石に怒られるぞ。ウチの料理担当の、ウォルターくんだよ」

俺と同じ格好、同じ顔、同じ仮面の女が、俺とウォルターくんを見上げている。

ぶら下げられた俺と、すぐそこで見上げているリリースが同時に仮面を外すと、愈々混乱したようにウォルターくんは俺達を何度も見比べる。

比喻でなく、文字通りの同一体が現れたら、そりゃあ驚くよね。

でも、安心して良いよ？

コイツ、立ち位置で言ったら「そつち」側だよ、うん。

「……嬢ちゃん、ええと？」

俺の心の声なんて聞こえないウォルターくんは持ち上げてぶら下がっている俺とリリースを見比べて、間の抜けた顔を晒している。

まあ、気持ちは判るから、取り敢えず開けっ放しの口閉じよっか？視線を転がせば、タイラーくん始めウチのクランのメンバーも揃って呆気にとられた顔で俺達を見ている。

ハンスさんやグスタフさんも面白顔になってんで、威厳はどうした

威厳は。

「……つまり？　お前は今まで領都に居た姉の名を勝手に名乗って居た？」

ギルマスであるブランドンさんの提案で、接客用の事務室に案内された俺達。

仮面を外し、瞳の色以外は同じ俺とリリースは、今現在扱いに天地の差が在った。

ソファに腰掛け、優雅にお茶を頂くリリースと、床に正座の俺。

「あい。外の世界が知りたくて屋敷を飛び出しましたあ」

予め、領主様やギルマス、それにリリースと決めていた「設定」を、謝罪に混ぜて放り投げる。

こんな失礼な話もないが、元々本当のことを話しても信じて貰える筈がない。

ギルマスと領主様には行きがかり上、洗いざらい話してある。

だが、それを信じるかと言えば、別の話だ。

「じゃあ、お前の持つ金貨は？」

タイラーくんが質問を放り投げてくる。

「両親の遺産ですう」

領都の、若くして財を成しながら事故で死亡した貴族の忘れ形見、と言う設定。

これは領主様の許可を得てはいるが、言ってしまうえば身分詐称である。

バレたら領主様には切り捨てられるとちゃんと宣言されているので、寧ろ大つぴらに人様には話せない設定。

一応は「姉が」爵位を次ぐ前の両親の急逝であり、俺達は爵位を今現在持っていないどころか継ぐべき爵位は国に返還されたという事、不憫に思った——と言う設定の——領主様に引き取られ、財産については私達での管理を任されている、と言う、何処かにケチを付けると侯爵様が顔を出す鉄壁仕様の言い訳に仕上がっている。

それにしても、と思ったのだろうか、貴族の話となると色々ややこ

しいし、動く金のレベルも桁違いだろう、と納得したようだ。
それに、多分だが。

50億枚とか言う狂った桁が、そもそも嘘だったと断定してもおかしくない。

見栄っ張りで多目に言ってしまった、子供あるあるだと判断したんだろう。

実際は、寧ろ増えて66億枚だし、リリースはリリースで70億枚近く持っているらしい。

何で持っているの、っていうかいつ稼いだの？

「急に屋敷を飛び出して、何処に言ったかと心配して居れば、ギルドに捕縛されて帰ってくるんだもの。思わず引つ叩いたわ」

迫真の無感動さで、リリースがパンケーキを頬張る。

あれ？ ねえそれ、俺のパンケーキだよ？ さつきお前、自分の分、食ってたよね？

「あー……まあ、そりゃ、その程度で済んでラッキーって思うべきだぜ、嬢ちゃん」

ウォルターくんが同情混じりの視線をくれる。

有り難いけど、今並べてる話の大部分が嘘っていうのがツライ。

こんな感じで、姉の叱責と仲間の説教と、両方を浴びることになった俺は、この後も時折同情の視線を浴びつつも、正座を崩すことは許してもらえなかった。

真面目に説教するタイラーくんになんか泣きそうになったり、無表情ジエシカさんの流れるような怒涛の説教に泣かされたり、子供達には号泣されたり、なんかヘレネちゃんにも泣き怒られたり大変だった。

今度ウォルターくんに、何か甘いもの作って貰おう。

その後、完璧にタイミングを図った受付ギルド員のアマンダさんがギルドカードを持って入室。

俺の方は大森林の黒幕を捕らえた功績、ギルドの作戦行動を阻害した罰、領都の姉と領主様に無駄に心配掛けた罰、それと領主様の温情

と推挙により、乱高下の末、冒険者ランクがCに。

克蘭マスターがランクEと言うのも具合が悪いらしい。

姉のリリスはランクB。

これは基本的な出来が俺より上、という点と、領都で大人しくしていた点が領主様の中でポイントが高かった、と言う理由から。

なにより領主様直々の推挙という事が大きいんだらうけど。

鼻肩つていうか、なんか酷くない？ まあ、良いけどさ……。

出来が良い、って点は事実だしなあ。

んで、克蘭はリリスの管轄になるかと思えば、立ち上げたのは俺で、リリスの名を冠しては居るが実際には設立に参与していないから、そういう立場には就けないと固辞。

しおらしく言ってたが、コイツ、面倒とかそういう理由だぞ、絶対。

じゃあ、取り敢えず近々克蘭の名前も変更しようということ、克蘭マスターは変わらず俺……「イリス」が務めることに。

安直な名前だつて？ 良いんだよ、語感で決めただけだから。

疲れ切った顔をしているであろう俺が酒場のテーブルに着けたのは既に日も落ち、酔っぱらいが量産されている時間帯。

俺はエールを、リリスは蜂蜜とレモン果汁を加えたミードを。

え、なにそれそんなのアリなの？ それなら俺も飲みたい。

ウォルターくんは何故か調理場に。

先日から、ちよいちよい此処の調理場に呼ばれているらしい。

何があったの。

俺とリリスを挟んで上機嫌のグスタフさんと、相変わらず熊さん感溢れるハンスさん。

なんか、ちよつと離れてただけなのに、なんだか随分懐かしい感じだ。

全部が全部元通りとは行かないけど、少なくとも俺は元気だし、仲間間は減っていない。

そう言えば、ゴブリンのうち何人かが、俺に恩を返したいから是非雇ってくれ、と来ているらしい。

その辺も、ちゃんと考えて決めなきゃなあ。

リリスの部屋も決めなきやイカンし、酔っぱらいの説教は長いしク
ドイしホントにもー。

帰ってこれて、ホントに良かったなあ。

第17話 踏み出せ挨拶回り、新しい仲間を添えて？

自分の名前に続いて、克蘭名まで考える事になりました。

みんなで考えよう、という俺の提案は「善処します」という言葉で受け止められました。

その言葉通りに善処された経験が、前世を含めて無いんですけどねえ？

朝から愚痴っぽいのは勿論俺です。

リリス加入で我がリリス克蘭（仮）もメンバーが10人になって言うかややこしいな。

俺のせいなんだけどな！

仲間だし、俺の死因で身内というすつごい複雑な存在なのだが、なんだか妙に懐なつっこいリリス。

素直に可愛いとも思うし、まあ、俺だけじゃなく、ウチの仲間をこれからも宜しくね、という意味でアイテムボックスを渡す。

これは俺が金貨を避難させる為に使っていた物で、今は金貨を元もとに戻している。

ともあれ、これで手持ちのアイテムボックスの在庫は0に。

「イリスは、今日は何か用事が有るの？」

リリスが俺の顔を覗き込みながら聞いてくる。

屋敷内でも有るし、仮面はない。

あと、髪型を変えるのが面白いらしく、今日は普通に髪を下ろしているが、たまに仮面を着けられない様な髪型してたりする。

「あー。ギイちゃんとグイクんの分の、アイテムボックス買いに行こうかなって」

ギイちゃんとグイクんは、ウチで働きたいと言い出したゴブリンだ。

女の子のギイちゃんと、男の子のグイクん。

2人とも年齢は10歳で、2人とも家族は失くしたらしい。

他にも家族を失ったゴブリンの子供達は居るらしいのだが、ギイちゃんやグイクくんは襲撃と逃走の最中さなかに家族だけでなく、同じ村のゴブリンが全て死んでしまい、他の村に知り合いも居ないのだという。そんな子供に、涙ながらに働きたい、恩返ししたいと言われたら、そんなもん俺、追い返せないよ。

ウチの連中と馴染めないとか有っても、最悪でも俺が面倒見て、大人になったら自分の進む道を決めてもらえば良い、そんな風ふうに思ってた。

結果で言えば、全く問題なく馴染み、ウォルターくんやヘレネちゃんを手伝って居たりする。

どうやら俺は、仲間を侮りすぎていたらしい。

頼もしい仲間たちを見て、こっそり微笑む。

「んー。じゃあ、私も一緒に行くわ。ついでに、ギルドに行かない？ちよつと探したい人材が居るの」

へええ？

欲しい人材ね……まあ、俺も思わなくもないけど、リリースは何を求めているんだらうか？

「りよーかい、そうすつと、ウチの幹部もつれて行くか」

ギルドハウスに行くなら、顔の効く奴が居たほうが良い。

ウォルターくんは仕込みが有るかもだし、ヘレネちゃんは顔が利く感じではない。

「そうなると、まあ古株しか居ないじゃん？」

「古株って、数日差でしか無いだらう」

そんな訳で、タイラーくんとジェシカさんを伴ってのお出かけ。

……この2人、俺が外出誘って嫌がること、殆どない気がする。

何でだろう？

「それじゃあ、まずは魔法道具屋さんのね？」

笑顔が消えると鬼怖おにこわいでお馴染みのジェシカさんが、今日もにこにこと一緒に歩いてくれる。

このお姉さん好きすだなあ、なんかほのぼのするんだよなあ。
怒おこらすと本気で洒落おしになんないけど。

微かに背筋を震わせて、今後はホントに気をつけようと思う。

「そうそう。アイテムバッグの補充と、後はあとパルマーさんに、若手の有望そうな魔道具製作者が居ないか訊いてみたいんだよな」

いい加減、魔道具作って大儲け計画を動かしたい。

冷蔵庫とかさ。

「お前は理解わかって居ないだろうが、アイテムボックスというのは補充するとか、在庫を抱えておくものではないぞ？」

タイラーくんがいつものように、メガネを指で押し上げながら何か言ってる。

「ん？ でも、有ると便利じゃん？」

便利な物なのだから、細かいことを気にするでない。

俺の言葉に、タイラーくんは頭を振ってそれきり黙り込む。

ふっ、勝ったな。

「イリス、呆れられてるだけだからね？」

自分と同じ顔に突っ込まれるのは厳しいモンがあるな、うん。

商業区……商店街の方がしつくり来るな。

商店街でやることと言えば、まずはお菓子屋さんで焼き菓子のアソートセットを大量買い。

まだ数えるほどしか来たこと無いのに、なんか名前とか覚えられて軽くビビる。

お菓子に興味を持ったイリスに後で分けることを約束して、アイテムボックスへ。

そっか、イリスを連れてきたの初めてか。

同じ顔の俺は何回か来てるけどね。

買ったお菓子のうち、3箱はヘンリーさんのお店へ差し入れ。

軽く立ち寄って帰るつもりが、俺の来店を聞いて飛んできたヘンリーさんに両手を捕まれ、涙ながら礼を受ける事に。

そっか、そうだよな。

俺はそんなヘンリーさんの様子に涙腺を刺激されつつ、また遊びに来ますと約束。

従業員さんも貰い泣きしてる人も居て、ちよつと申し訳ない気分

に。

そんな俺達の様子を眺めて、なにやら神妙な顔をしていたりリスが少し印象的だった。

ちよつと湿っぽい雰囲気になったりしながら、俺達は目的地のパルマーさんのお店に到着。

いつ見ても人の良い老婦人に、お菓子を1箱おすす分け。

個人商店だし、1人で1箱は多いと言われたが、中味を分けるとかあんまりでしょ、と、どうにか受け取って貰える。

そして商談、というか買物開始である。

まずはお目当てのアイテムボックスは入荷が滞っており、現在在庫として有るのは1000立方メートルの物が5つ。

入荷が滞っている関係で仕入れ値も張ったとかで、お値段が高くなつたんだとか。

「ふむふむ。お幾ら？」

俺の「それが何か？」と言う反応を予想していたのか、パルマーさんは実にいい笑顔で言う。

「金貨58枚なのよお」

ふむふむ。

4枚増し、という大した事無さそうに聞こえるけど、金貨1枚20万円相当だって知っちゃうと、ちよつと引くよね。

80万円増しだよ？ お高いわあ……。

まあ、躊躇なんかしないけどね。

「じゃあ、1個60枚で全部買うから、次の入荷分も優先して回して貰えるかなあ？」

今回はサービス品のおねだりじゃなくて、次回も買うので宜しく代。

目的の品を買っている間に、ウチのメンバーはそれぞれ商品を物色している。

世間話なんかしながらすすごい頑張つて金貨を300枚数え、フリーダムな仲間たちに合流。

「このメガネケースは良いな……」

タイラーくんは本体を収納するケースを熱心に見ている。

割と近くになんかカッコいいダガーとか有るけど、そっちは見なくて良いの？

「石鹸……ねえ。洗^{クリーン}浄持ちだと、あんまり興味ないんだけど……」

「うん、そうなんだけどね？ でも、手軽に香りを身体^{からだ}に纏^{から}えるから、それはそれで便利だし、こういうのって……」

ジェシカさんとリリスはなにやら陶器っぽい小瓶を前に密談中。

なんか、今首突っ込んでいけないうる気がする。

漏れ聞こえた範囲で、リリスが造りたい物も大体見えたし、うん、良いんじゃないかな？

女性の美容とかそういう系統の欲望は思ったより深かったりする。

身嗜みは洗^{クリーン}浄で全部解決、の世界の方が俺には楽だし有り難いんだけど、魔法を使えない人もそれなりに居て、そもそも覚える機会を与えられない人が大多数らしい世界では、俺もいた世界と同じく石鹸は身近な洗^{クリーン}浄用品という訳だ。

それに、リリスの言う通りで、風呂上がりの石鹸の香りつてやつはグツと来る。

こう、男の本懐的な部分を直撃するんだよね。

日本語がおかしい？ でも、何となく理^{わか}解^かるでしょ？ 俺だけ？

そんな事を考えている頭を、唐突に驚^{おど}掴^{つか}みにされる。

その俺と変わらんちっさい手でよくもまあそんな力技が出来るよね？

「イリスも、ボディソープ欲しいよね？」

すっごいいい笑顔なんだけど、視線を外^{はず}させまいと込められたその右手の握力で、主に俺の脳天が大変なことになりそうなんです。

助けて。

「ま、まあ、ボディソープも欲しいけど、そうなるとアレだね、シャンプーとコンディショナーとか、その辺も欲しくなるよね？」

適当に言葉を返して逃げるしか無い。

そう思った俺の「世間話は乗っかって拵^{つくり}げろ」作戦に、盛大に食いつくりリス。

固定する圧力はそのままに、力いっぱい引き寄せられる。

首がツ!! 今、首が変な音をツ!!

「たまに天才的ね!! サラリと香り拡がる髪、素敵よね!!」

あー、なんか毎晩風呂に不満げだと思えば、浴室の装飾とかそういう部分じゃなくて、そっちね。

っていうかたまにってなんだ、俺は常に天才的だわ。

一応この世界でも石鹸は有るし、お風呂用のアロマオイルなんかもあるんだが、ウチじゃあ、っていうか俺が使っていないのよね。

寧ろこう、疲れを芯から癒す系の入浴剤とか、そういうのが欲しいね、俺あ。

「なにそんな、オヤジ臭い事言ってるのよ……。でも、入浴剤か、それも良いわね」

思案げなりリス。

そう言えばりリスは、食べるもの、飲むもの、香りの良いものに興味を惹かれるきらいがある。

女の子らしいと言えばそうなのかと納得していたけど。

データ上の存在として世界中の防犯カメラやらライブカメラやらを通して世界を「見る」事が出来て、マイクで拾った音を「聞く」事が出来ても、それ以外は。

触れる、嗅ぐ、味わう、その辺はしたくても出来なかつた訳だ。

だから、俺なんかに矢鱈ひっついてくるし、食べ物にも飲み物にも興味津々、香りも同じく、という事なんだろう。

……匂いフエチとかになんなきや良いけど。

「入浴剤の心地よきは、体験してみなきや理解らん世界だぜ。言ったら俺も入りたくなってきた」

ゆずの香りとか最高なんだよなあ。

こっちだと、レモンで代用出来るのかなあ……?」

「ふうん……なるほど、イリスだけ知ってるっていうの、ちよつと悔しいな。そうになると、やっぱり錬金術師を捕まえるしか……」

やっぱり、俺と同じく商品開発要員の確保が目的だったらしい。

ただし、俺と違って錬金術師。

……つていうか、両方の技能持ちが居てくれれば一番早いんだけど、そんな奴はもう個人で成功してるだろう。

ウチのクランに入るメリットなんか無いだろうなあ。

そうなる才能持ちの新人くらいだろうけど、そんな都合の良い奴が居る訳もない。

それは即ち、魔法道具技師と錬金術師を1名ずつ探す必要が有る訳だ。

つまり、俺とリリスが、代理で椅子を取り合う事になる訳で。

どうしよう、俺、勝てる気がしない……！

お菓子をお茶請けにお茶を楽しむパルマーさんのお気楽パワーが羨ましい……！

え？ 俺もそのパワーは持つてるって？

あつはつはつ、またまたご冗談を。

そんな訳で来ました、冒険者ギルド名物「仲間募集掲示板」前。

本日も獲物は決まっていますので、4人で手分けする事に。

「で、探しているのは何だつて？」

付き合いが良くせに、言動は凄く面倒くさそうなタイラーくん。

俺、知ってる！ これがツンデレって奴だよね！

どうせデレるのはジェシカさんにでしょ、この。

「……だから、なんで殴るんだよ!!」

またしても脳天クリーンヒット。

頭防具変えようかな、マジで。

「殴るべきだと思つたからな。理由は判らん」

コイツ、なんか強力な守護霊でも憑いてんのか？

油断できねえぜ。

「探してるのは、錬金術師ね！」

そんな俺の隙を突いて、リリスが要望をねじ込む。

野郎、本気だな!!

「違う、探してるのは魔道具製作者だ！」

ジンジン痛む脳天を押さえつつ、俺も声を上げる。

睨み合う、見た目は仲良しな双子。

リリスの方は割と本気で殺気を放ちつつ在り、非常に危険が危ない。

「喧嘩するな、面倒臭い。錬金術師と魔法道具作成者だな、見つけたら教えるからお前らで好きなかだけ吟味しろ」

間に立っていたタイラーくんが俺達を押さえるようにそれぞれの頭に手を乗せ、グリグリと強めに撫でる。

「痛い痛い、タイラーくん痛あい！」

「ゴイツ、熊のハンスさん仕込みの荒業で……痛えんだってこの野郎！」

可愛いほうが俺の発言って言ったら、何人信じるんだろな？

勿論嘘だけど。

そんな寸劇を交えつつ、掲示板閲覧開始。

中級以上希望の重戦士くん、まだ頑張ってるのか。

微妙に文面変わってるけど、申請し直したのかな？

近接戦闘大好き治療師さんも、文面が変わってる。

……戦わせて下さい？ なにその懇願。

治療師だよな？ ウちに、真逆の募集文載せてた斥候がいるけど、

2人足して2で割れば丁度いい性格なのかな。

いや、ヘレネちゃんのほんのり天然風味が最近お気に入りだから、

あのままです居て欲しいけど。

「……下僕を探しています？ ご褒美応相談？ 獣使いかしら？」

おお、リリスもまたヘビーなの見つけてんな。

「そいつは字面が危険だ。触るんじゃないぞー」

「えー？ はあい」

知らなくて良い世界も有る。

っていうか、だいぶヘビーな世界を知ってそうだけど、まあ、見た目の年齢通りの扱いくらいはしてやろう。

こっちに話を振られても困るしな！

結果として、俺もリリスも、お目当てのお仲間は見つからない。

休憩という事で、バーでいつも通りの一服タイム。

俺とリリスは蜂蜜とレモンの果汁入りのミードだ。

リリスの注文から始めたメニューらしいが、女性冒険者にたちまち大人気。

元々入荷の少なめだったミードが、日によつては売り切れる程だという。

だよね、これ美味しいもんね。

一説には、ギルドの女性職員の分を確保しているの、売り切れが起こるのだとか。

そういう目でアマンダさんを眺めると……。

今度、2人きりで飲みませんか？ とか言ってみたいよなー、うん。

「ねえ、変態エロイリス、これからどうするのよ」

俺の名前随分長くなつたね？

呼ばれてリリスの方を見れば、何故かちよつと膨れて俺を睨んでいる。

なんじやい、話は聞いてるぞ？

「んー。募集掲示板に居ないんじや、探し様がなあ。グスタフさんとかに聞ければ早いんだらうけど、居ないもんはしょうがない」

そう、今日は珍しく酒樽の妖精ことグスタフさんが居ない。

そりやそうだ、幾らグスタフさんだつて、いつでも昼から酒場に居る訳じやない。

冒険者としての仕事も有るんだらうし、ああ見えて若いのに慕われて――。

「んん？ 呼んだか、リリス……じゃなくてイリスだつたか？」

今から呑む所らしい。

上機嫌のグスタフさんが、俺の頭を鷲掴みにする。

なんでどいつもこいつも、俺を見ると頭を掴むとか胸倉掴むとかするんだ？

胸が掴むほど無いからだ？ よおし表おもてに出ろこの野郎！

「誰と何の喧嘩してるのよ、バカちゃん」

リリスに言われて冷静になり、グスタフさんの手を振り払う。

ずっと掴んでるんじやないよ、もう！

俺は態わざとらしく咳払いすると、事の顛末を話し始める。

「——って言う訳で、掲示板にも居ないし、俺はそんな知り合い居ないし、八方塞がりだなあ。酒樽の妖精さんの知恵を借りようかなって」「誰が酒樽の妖精だコラ」

余計な一言のせいでまた頭を掴まれたりしつつ、俺は事情説明をする。

考え込んだグスタフさんは、ふいっと、視線をタイラーくんの方ほうへ。

「お前ら、知らないはず無いよな？ 何で教えてやらないんだ？」

んん？ 何？ 何の事？

不思議そうに顔を上げる俺から、視線を逸らすタイラーくん。

こいつ？

「仕事依頼、職人募集掲示板が有るだろ、なんでそっち案内しないんだ？」

もの凄く不思議そうな顔のグスタフさん。

目を逸らすタイラーくん、同じく目を逸らしつつ、肩を震わせるジエシカさん。

こいつら？ 知ってて黙ってたな？

「いや、すぐ隣に有るのに、いつまで経っても気が付かないのが面白くてな」

開き直ったらしいタイラーくんがしゃあしゃあと云つてのける。

「いつ気付くかと思ってったら、全然気付かなくて、もうね……！」

堪こらえ切れなくなったのか、涙まで流して笑うジエシカさん。

「お前らな!!」

「信じらんない!」

俺とリリースの声がホールに響くが、すぐに周囲で様子を見ていた冒険者たちの笑い声に掻き消される。

こいつら!! 全員知ってて黙って見てやがったのか!!

いつかこいつら全員、面白おかしい目に遭わせてやるからな!!

例えばお前ら、「唐辛子せんべい」とか知らないだろ!!

楽しみにしてるよコンチクショウ!

ぷりぷりと怒りながら掲示板まで戻る俺とリリース。
見ると確かに、仲間募集のすぐ隣に職人募集掲示板が。

職人募集掲示板は、名前の通り「職人」を募集する物だ。

だからこの場合は、俺かリリースが募集文を貼り出すのが正しい使い方なのだが、同時に此処には仕事を求める職人も仕事募集の文を貼り出している。

なので、別名で「仕事依頼募集掲示板」。

仕事募集の方は言うほど数が多くないので、独立した掲示板が作られる程では無いのだという。

「なるほどねえ、でも確かに、職人『を』募集してる方が多いわね……」
視線を走らせながら、リリースが言う。

言いながらも、あちこちの募集文をきっちり読んでそうだな。

「こりや、俺らも職人を募集するのが早いのかな？」

並列なんかなんてスキルのない俺は、文章をなんとなく目で追いつながら、適当な返事を返す。

こりやあ、今日明日でどうにかなりそうな気がしないな。

「んん？」

そんな事を思う俺の目は、一枚の仕事募集の文章に停まる。

魔法道具制作します。錬金術多少扱えます。生活魔法及び錬金術の魔法道具化の可能性を研究しています。ご用命は商業区の一。

「おい、おいリリース」

俺はリリースの肩を叩き、その募集文を指差す。

これ、下手するとどつちも半端で使えない可能性も捨てられないけども。

もしかしたら、すごい天才の可能性も!!

「……大丈夫なの？　なんか漠然としてて、不安しか無いんだけど」

俺のテンションに対して、リリースは懐疑的だ。

「ダメだったらそれまでだろ、話聞いて見るだけでもどうなんだ、行つてみようぜー!」

俺は勢いのままに募集文を引き剥がし、カウンターへ走る。

実の所、魔法道具は後回しでも良いや。

リリスの欲しがってるボディソープとか、そつちを作って貰えれば、リリスの気も晴れるんじゃないのか

あくまでも、後回しで良い、ってだけだからな。

アイツ、なんか時々溜息吐いてるし、感情的に複雑な部分は有るものの、嫌いな訳じゃない。

リリスにはリリスの悩みも有るのだろう。

そんなリリスの気晴らしになれば良いんだけど。

折角、念願の肉体を手に入れて、人間のように生きていける、生命を精一杯謳歌して、死んでいける、そういう存在になったのに。

なんだかつまらない。

リリスはちらりと、カウンターで説明を受けているイリス——賢介に目を向ける。

本当は、リリスの伴侶として、ちゃんと元の世界と同じ肉体を与えようと思っていた。

だから、山賊の、男の身体まで分解して調べたのだ。

元の姿は見ている。

声も聞いている。

好みは知らないけれど、ずっと私一筋のゲームプレイだし、少なくとも嫌われては居ないんじゃないかな？

そう思っていた。

だが、いざ賢介の肉体を造ろうと思うと、どうしても疑念を抱き、躊躇してしまう。

他に賢介に言い寄ってくる女が居たらどうしよう？

本当は私を嫌いだったりしたらどうしよう？

考えるとどうしようも無い程怖くなり、作成は一時保留し、必要な素材は解り易い形にしてアイテムボックスに保管した。

リリスだけが理解ればいいので、宝石の形に偽装し、リリスだけが見分けられる目印を着けた。

だが、賢介を縛り付けたくない。

そんな思いは葛藤になり、妥協案として出たのは、自分の身体をと

りあえず使わせる事。

いつでも入れ替われるし、まずは、賢介にこの世界を見せる。

もしもこの世界を拒絶するようなら一度私の中で眠らせ、時間を置いて、身体からだを作つてあげよう、一緒にずっといよう、そう思つて。

だが目覚めた賢介は、この世界を受入はしませんが夢であると割り切り行動を開始し、子供を助け交流を重ね、仲間を得て、このままではリリスの入り込む隙間が無くなってしまひそうだった。

音は聞こえるのに、以前と違って好きなタイミングで表おもてを見る事が出来ないのも、ストレスとなった。

賢介を隔離するための内部空間、そのつもりだったのに、このままでは私がストレスで参つてしまう。

何より、賢介と話が出来ないのがイヤだ。

魔女騒ぎのどきどきで入れ替わつた時、自分の中に賢介が居るといふ事実に幸福を覚えた。

そういう状況に持つていけた魔女に、感謝すらした。

だが、領都とやらで過ごす内に、眠る賢介の気配を感じながら、思ひ出すのは賢介の——「リリス」の仲間の声、気配。

このまま、賢介を眠らせたまま、彼ら、彼女たちに会つて、私は仲間として振る舞えるだろうか？

考えた末の賢介復活は、自身の似姿。

仲間たちと馴染みやすいであろう、と言う逃げ。

男の姿に別の女が寄つて来た時に、自分を抑えきれぬ自信が無かつたこと。

リリスの勝手な悩みや嫉妬で、賢介は「イリス」として復活を果たす。

その事を知つたら、イリスは——賢介は、自分リリスを軽蔑するだろうか？

絶対に嫌われたくない、だから絶対に言えない。

小さく、こつそりと。

リリスは溜息をまたひとつ、零すのだった。

また溜息吐いてら。

カラ元気なのかと思うと、なんかツラくなるね。

石鹸でもなんでも、リリスの欲しいもんが出来て、気晴らしになつてくれりや良いんだけど。

そんな事を思いながら、俺はリリスと、面白斥候^{スカウト}2人組を率いて商店街へと戻っていた。

この商店街の一角で、目当ての人物はここで店を構えているらしい。

なるほど、店か！ 若いらしいのに店とは、一角の人物^{ひとかど}という奴か？

楽しみだし、期待出来るってモンだ。

残念なのは既に店を持っているって事か。

ウチのクランに入って貰うのは兎も角、ウチに済んで研究に没頭、とかはして貰え無さそうだ。

っと、気ばかり急いても仕方ないね、まずは話を聞いて貰わなきゃね！

そんな事を呑気に思いながら向かった先で出くわしたのは、珍妙な……有り体に言って修羅場だった。

「どうか、どうかもう少しだけ待って下さい！ 必ず家賃はお支払いしますから！」

なんか、色んな荷物と一緒に放り出さされたと思しき若い女……つか、あれ、見た目的にはヘレネちゃんよりちよい年上、程度にしか見えん。

そんな少女が往来で1人の男に取り纏っていた。

「しつこいですよ、レイニーさん。もう3ヶ月も待ったのです、これ以上は無理ですよ」

冒険者ギルドでは見えないような線の細い、ヒゲの男が、無碍に振り払うことも出来ずに、困ったように眉根を寄せている。

……こいつ、憎まれ役をやるには人選が悪過ぎだろう。

妙な人の良さが全体から滲んで、なんか俺、この場の両方に同情

しちゃう。

「必ず、必ずお家賃はお支払いしますから、どうかお願いします！」

必死で取り纏る女の子。

俺はちらりと視線を滑らせる。

視線の先では、またかと言う顔のタイラーくんが。

「お前は……大体、言いたいことは判るが。毎度言うが、ちゃんと相手を見極めてだな……」

溜息と一緒に小言を吐き出すタイラーくんを遮ったのは、珍しいことにジェシカさんだった。

「まあまあ、だったらお話聞いてみれば良いじゃない。イリスちゃんだったら、両方助けられそうよ？」

ジェシカさんの言葉で、どっちにも同情しちゃうのは俺だけじゃないと判った。

なんか、やりたくもない憎まれ役も可哀相だし、当然追い出されそうな女の子だってそうだ。

それにまあ、技術者が欲しいのは確かで、この状況なら上手いこと立ち回れば、というか余程の下手^{ヘタ}を打たなきゃ、この女の子だったら取り込めそうな気さえする。

えー、なにこれ、この場で一番悪い人が俺ってどういう事よ。

考えても仕方がないので、俺は、泣き出しそうなオツサンと少女の間立つ事に。

用が有ってウチに欲しいのは女の子の方なんだが、心情的にはオツサンに多目に同情しつつ、話を聞きに回るのだった。

第18話 拾って帰って、再始動

魔法道具製作者を仲間に入れたい俺と、錬金術師と共に美容業界に革命を起こしたいリリス。

ウチのクラン加入の1つの枠を巡り、激戦を繰り返す仲良し双子ウイザード。

実はクランに加入するのは別にあと2人でも3人でも構わないんだけど、当然俺達はそんな事に気づいていない。

そんな俺達の前に現れたのは、家賃滞納で（恐らく）住居兼店舗から追い出され路上で（恐らく）不動産屋さんに取り継る、期待の大型新人だった。

なんかもう、この時点でダメな感じしかしないんだけど、通りかかったし目的の人物があの有様だし、つーか見ちゃったし。

見なかった事にするには、ちよっと同情しすぎちゃってるんだよねあ……あのオジサンに。

オツサンの哀愁を見過ごすのはツライ、そんな俺です。

あれ？ ちよっと今思い出したんだけど、俺、パルマーさんに相談して無いね？

まあ、良いか。

困りきった顔のヒヨロヒゲさん（仮）は近づく俺に気づいて腕組みを解く。

まあ、仮面被った怪しい女が近寄って来たら、そりゃあ警戒するよね。

「貴女は……確か、最近クランを立ち上げたと言う……狂犬さん、でしたか？」

……なんて？

俺の後ろでなんか3人程吹き出した気配が有るんだけど？

てか、狂犬ってなあに？ 前も若い衛兵にそんな呼ばれ方したなあ、そう言えば。

「悪いけど、狂犬なんて名乗った事、無いんだけど……リリスクラン

のクランマスター、イリスだ」

「えっ、あつ、これは失礼しました、てつきり二つ名ふたつなのかとばかり。……イリスさん、ですか」

すつごい素直に謝るヒヨロヒゲさん。

すつごい素直な人なんだろうなあ。

でもね、狂犬なんての、ただの陰口とか悪口たぐいの類たぐいだと思うよ？

「いや、まあ、それは良いんだけど……その、昼日ひるひな中の往来ひるひなでこれは、ちよつと人目を引きすぎじゃないかなあ？」

取り敢えず、すぐ切れそうな人だとか思われてそうなのがツライ。なに狂犬って。

ていうか誰？ そんな変な仇名で呼び始めた奴。

「はあ、それはその、申し訳ないとは思うのですが……」

ホントに悪い事してる自覚故か、縮こまってしまいうヒヨロヒゲさん。

……俺に萎縮してるとか無いよね？

大丈夫だよな？ まだ狂犬扱いしてるのかな？

いい加減しつこい？

いやだって、狂犬だよ？ よりよって。

言われてみ？ 結構凹へこむよ、これ。

「いや、まあ仕事なのは判るから、なんかごめんなさい」

こっちはこっちでどんどん元気が無くなる。

もうね、すごい勢いでテンション下がるよこれ……甘いお菓子食べた……。

気持ちを何とか持ち直して、会話再会。

取り敢えず、3人で落ち着いて、荷物も往来の邪魔にならないように、お店……。「元」レイニー・フランセスカちゃんのお店だったその店先に纏めて置く。

「あー、えーっと、改めまして、リリスクランのマスター、イリスです」
2回も同じ自己紹介って、なんか間抜けだなあ。

そう思っていると、ヒヨロヒゲさんがこちらに頭を下げる。

「ヘンリー不動産の、エドモンドと申します。……あの、失礼ですが、イリス様というと、最近まで『リリス』様であった、あの……？」

エドモンド!! そのヒョロいガタイでエドモンド!!

っていうか、なに、名前が変わった事まで噂になってるの？

……って今、ヘンリー不動産って言った？

怒涛のツツコミポイント3連発に溺れそうになりながら、何とか衝動を押さえて答える。

頑張ってるよ俺！

「ええ、まあ、実の姉においたが見つかって、今は本名だけど……」

そう言って、ちらりと視線を、というか仮面を向ける先には、実の姉ことリリスが同じ仮面で立っている。

……今思っただけどき？ 俺、仮面つけてたら、リリスって名乗ってもバレないんじゃないの？

「社長の娘さんの事、聞いています。本当に、有難うございます」
深々と頭を下げられる。

ヘンリーさんの薫陶厚い、っていうのかなあ。

この人もまた、誠実そうで、むしろ心苦しくなる。

「いや、やめてくれ……うん、それよりも」

その話はどうしても俺が暗くなっちゃうの。

話題を変えようと、俺は一度咳払いを挟んで口を開く。

「なんで家賃滞納なんて事になったの……？」

俺が視線を向けると、レイニーちゃんはしゅんとして小さくなる。

「その……仕事がなくなっ……」

……気まずいなあ。

何がどうして仕事が無いのか、とか、聞かないと不味いよなあ。

このままだとただ追い出されただけ、エドモンドさんも家賃の回収出来ずに終わり、誰も幸せにならない。

「んー。仕事、宛ては有ったの？」

俺の質問に、レイニーちゃんは俯いてしまっただけで答えられない。

まあ、仕事の宛てと言うか、少なくともこんな事になるとは思って無かった、ってトコじゃないかな。

「錬金術を習って、魔法工学も習って、画期的な魔道具造ろうって……
がんばって仕事して、有名になって、って」

小さくぶつぶつと呟くのは、見ていた甘い夢の跡。

俺はエドモンドさんに顔を向ける。

「……魔道具制作とか、錬金術師とかって、一般的に店を持つてるとか、そういう物なんですか？」

俺の疑問を受けて、エドモンドさんは顎に手を添えて考え込む。

「個人で店を持つとなると、普通はパトロンを掴んでから、だと思いません。そうでなければ有名な製作者なり術士に弟子入りして、勉強しながら実力をつけて、師匠の推薦で店を出すとか、そういう方法ですかね」

ふむ。

では、レイニーちゃんはどうなのか？

「私は、独学です。でも、ちゃんと実力は有るんです！」

俺の視線の先で、地面を見ながら、自棄^{やけ}っぱちに叫ぶ。

「うん、でも、その実力をどうやって証明してきたの？」

この質問には、黙り込んでしまう。

何でも出来る、そういう自信はあったんだろう。

だけど、その自信は誰かの目に触れさせなければ意味がない。

結果が出なければ、誰も信じてくれないのだ。

「じゃあ、別の質問なんだけどき。レイニーちゃん、石鹼作れる？」

じゃあ、自信を持てる結果を作れば、問題ないね？

俺の質問に反応して顔を上げるが、その顔は不貞腐れているかのような仏頂面^{ぶつちやうついでん}。

「馬鹿にしています？ 石鹼なんて、材料さえ有れば目を瞑ってても」

うん、だろうねえ、そんな反応だと思ったんだ。

でもね？

「石鹼を液化化する事は？」

俺の質問に、レイニーちゃんは動きを止める。

「それも、泡立ちは今の石鹼の比にならないレベルで」

実は使ってるので判るのだが、この世界の石鹼は泡立ちが悪い。

身体からだを洗うと、そんなに自分の身体からだが汚れているのかと心配になるレベルなのだ。

「どれだけ洗浄クリーンの魔法を掛けても変わらないので、汚れの所為ではないと判ったが、初めて使った時はちよつと落ち込んだりした。」

「その石鹼に、甘い、花のような香りを付ける事は？　香水ほど強くない、洗い流してから仄かに香るような」

想像が追いついていない所に畳み掛ける。

横で聞いていたエドモンドさんも、いつの間にか側そばに来ていたタイラーくんやジエシカさんも、軽く耳にした程度では理解するのが難しい様子で、黙って俺とレイニーちゃんのやり取りを見守っている。

「……そんなの……作れないわ。見たことも聞いたこともないもの」

レイニーちゃんは唇を噛む。

己の非力さを突きつけられた、と思っっているのかも知れないけど、ちよつと違うぞ？

俺は、最初から作れるなんて思っっちゃ居ない。

気になるのは、いずれ作れるかどうか、それだけだ。

「でも、石鹼自体は有るし、そこまで具体的に想像出来てる人が居るのなら、それは作れる物よ」

顔が上がり、俺に向けられる。

悔しさやこの先をまだ見通せない暗さは有るが、その目に興味の灯が灯っている。

「ふうん？　根拠は？」

ちよつと意地悪く、突き放すような態度で質問する。

これで突き崩されるような子なら、そんな目は出来ないだろう？

「無いわ！　でも、受け売りだけど私の信念よ！　人の想像するものは、必ず実現できる！」

根拠無し、そんな言葉に説得力なんて無い。

だけど、良いじゃないの。

勢いだけで突っ走る、そんなモン若くなきや出来ないからね。

我武者羅大いに結構、頑張れ若人。

俺も見た目は変わらないって？　細こまけえこたあ良いんだよ、これも

勢いだよ、勢い。

俺の後ろで、タイラーくんが頭を振っているのが判る。

はっはっはっ、俺の甘ちゃんあまつぷりは底なしだぞう？

俺は楽しげに笑いながら、仮面を外す。

女の子を口説くなら、仮面は着けてちやイカンよな。

「レイニーちゃん。ウチのクランに来ないかい？ 作って欲しいのは、石鹸だけじゃない。ちよいと洒落にならん程忙しくなるが、どうだい？」

今度はぼかんとして、レイニーちゃんは俺の素顔を見上げる。

「給料は出来高制、住む場所と工房は用意出来る。食事も大丈夫。なんなら俺達と同行すればだけど、酒だつて飲める」

至れり尽くせりの怪しげコースだが、ちゃんと宿酔ふっかよいのオチがつく。

良いことばかりじゃ無いんだぜ？

「エドモンドさん、レイニーちゃんの家賃の滞納額は、幾らだい？」

咄嗟に返事が出来ないレイニーちゃんを一旦放置して、エドモンドさんに話を振る。

「えっ、ああ、ええと、銀貨で月80枚で、3ヶ月分ですので、金貨2枚と銀貨40枚ですね」

ふむ。月16万くらいか……思い切ったね……。

ホントはこういうのは良くない、判ってるんだけど。

ウチの将来の収入源、かつ、リリースがちよつとでも元気になれるなら。

うん、どこまでも自分本位。

決して善行なんかじゃないね。

だつたら問題ないや。

「エドモンドさん。この子の滞納分、俺が払うよ。その上でウチで引き取らせて貰う。……まあ、本人が嫌がるなら諦めるけどね」

言いながら、俺は金貨を5枚取り出し、エドモンドさんに手渡す。

「え？ あの、えっ!? これは多すぎます、幾ら何でも」

言いかけるエドモンドさんの顔の前に手を翳し言葉を遮る。

失礼でごめん。

「ヘンリーさんには恩が有るんだ、それにこの子を引き取るのはウチの克蘭の為だね。単純に俺のわがままなんだ、付き合っつて貰えないかな？」

照れくさくて思わず笑ってしまうが、本心だからしょうがない。

エドモンドさんが俺の顔見てぽかんとしてるのは、単純に呆れてるんだろうなあ。

結果的にはエドモンドさんには寧ろお礼を言われ、レイニーちゃんにはその場でアイテムボックスを渡して荷物を仕舞わせる。

自分の店、というのに執着はアリアリの様子だったが、追い出されて見知らぬ他人に金かねを出されて、そこで強硬に出れる程、自己主張は強くない模様。

うーん、このまま屋敷に戻って話でも良いけど、まず間違ひなく身構えられるし、変に追い込んで己やむ無なく働く、みたいな気分にはなつて欲しくない。

経営者とかには、俺はなれんなあ。

なんでクラマスなんてやらされてんだ、俺？

そんな事を思いつつ、俺達は冒険者ギルドのバーへ。

賑やかだけどあの雰囲気で、酒でも飲めば嫌も応も言い易かろうと、そんな魂胆だ。

それでもしも、断られたらどうするのかって？

そりやもう仕方がない、縁がなかったと諦めるさ。

ん？ 金かね？

損するのが俺だけなら、まあ良いんじゃないのかな？

幸い、今ならまだ余裕有るわけだし、俺。

そんな事言ってる間に本日2度めのバーで御座います。

今更だけど、此処、こんなテーブル並べて飯めしまで出して、「バー」なんだな。

バーって酒だけ出すイメージだったけど、うん、まあ良いか。

酒樽の妖精さんはホント、いつ仕事してるんだろう。

お互い様とは言え、不思議である。

早速同じテーブルに誘われたが、商談だつて事で今回だけは遠慮してもらおう。

遠慮しろつ言つてんだからテーブル移動して来んじやねえよストコドツコイ！

ベテラン冒険者の余裕でヘラヘラ笑いながら、なんか俺の話なぞ聞きやしねえ。

そうこうしてるうちに熊さんまで寄つて来たよ、なんだよ、蜂蜜酒はやらんぞ!!

そんなつもりは無かつたのに、副ギルドマスター立ち会いの元、ウチのクランの説明と、簡単な面接の開始。

ウチの簡単な説明からの流れで、俺が今作つて欲しい物、先にも話した液体石鹼の話を改めてする。

無論、作つて欲しいのはこれだけでは無いのだが、何処に将来の同業者が紛れているか判らない。

こんなオープン過ぎるスペースでそんな話をするつもりはないよ。「とりあえず、そんな感じの新しい石鹼を、開発して欲しいのさ」

ちなみに、俺は此処では「さつき話した液体石鹼を作ってくれ」と、大まかな事しか言つてない。

それがどんな物か、具体的には想像が難しいんじゃないかな、そもそもそんな石鹼の実物が、現状無いんだし。

「で、作れたら、そこから販路とか色々考える訳だけどね。まずは商品を作つてから、何なら商業区に店用の建物借りても良いし」

従業員とか色々考えるの面倒だけど、変な商会を通したりしたくないのよねえ。

まあ、商売出来そうだと判断したら、まずは領主様のところに相談に行つて、商会通さずに売れる方法を模索してくるけどさ。

使えるコネは使つて行かないとね。

「……正直……出来るとは、思うんです」

答える内容の割に、口調が重いなあ。

どしたの？

「何か、気になることでも？」

俺が不思議そうな顔で問い掛けると、レイニーちゃんは内心の不安そのまま、と言う表情を俺に向ける。

「なんで、こんなに世話を焼いてくれるんです？ 現状で言えば、悔しいけど、私は実績も無くて、家賃も払えずに追い出されるような女ですよ？」

不安で不審。

そりやまあ、そんな気分にもなるよ。

「本当に、私の能力を必要としてるんですか？ 別の目的が有るとか、そういう事は無いんですか？」

まあ、普通に考えて。

身請けの金^{かね}を理由に脅されて、いかがわしい店に売られるとか、そんな事の心配くらいはするもんだらう。

だけどね？

「そんなつもりなら、俺、此処につれて来たりしないよ」

俺はカラカラと笑う。

それでも不審げで不思議そうな視線を向けてくるレイニーちゃんに、俺ではなくハンスさんが口を開く。

「此処は冒険者ギルドで、俺は此処の副マスターだ。その俺の前で詐欺行為などしよう物なら、イリスの冒険者資格は直ちに剥奪だ」

言いながら、ハンスさんは自分のギルドカードをレイニーちゃんに向けて提示する。

ギルドカードは偽造禁止、記載情報は虚偽出来ない。

……魔法らしいので、例によって理屈は知らぬ。

魔法って便利よね！

「そういう事なんだ。俺は誰もが指差して笑う程度の小心者^{しょうしんもの}だから、そういう無茶はしないって決めてるんだよ」

そういう訳で、俺ではなくハンスさんは信用出来ると判断したらしいレイニーちゃん。

それは問題無いし、寧ろ良いんだけど。

ちよつとでも緊張を和らげようと態^{わざ}とらしく肩を竦めて見せる俺

に、何故か周囲の視線が痛い。

何でだよ、俺、嘘言つてないよな？

「この子が喋るとどんどん胡散臭くなるから、私からもお願いするわ」
見兼ねたらしいリリスが口を開く。

待って？

胡散臭いとか酷いよね？

「ウチのクランとしては、資金源を確保して置きたいの。冒険者としての依頼クエストは勿論やっていくけど、それとは別に安定した資金を得ることが出来るのは、クランとしても大きいの」

仮面を外し、にっこりと微笑む。

リリスさん、そんな流れるように話せるんなら、もっと表おもてに立って貰って良いですかね？

「レイニーちゃんは錬金術師で、魔道具制作もしてるんだよね？
さっき言った石鹼の他に、商品のネタは幾つか有って、それにはどっちの技術者も必要なんだ」

リリスの後を受ける形で、俺も同じ様に仮面を外し、再び口を開く。

俺の言葉に混じった「技術者」という単語に、レイニーちゃんが少し強めの反応を見せる。

ふむ？

「だから、俺達を利用して、君の知識と技術者としての手腕を好き勝手に発揮して欲しい。ついでに、俺達の依頼に応えてくれれば良いよ」

技術者とか、こっちではあんまり聞かない単語だったけど、その響きがプライドを擽ったんだろうか？

新しい何かを始める、この世界では耳慣れない職種？

ちよつとさっきの反応が嬉しそうに見えたので、もう一回台詞に織り交ぜてみよう。

そんな事を考えてドヤる俺の顔には、レイニーちゃんだけでなく、テーブルに着いている全員の不審げな視線が刺さる刺さる。

やめて、顔無くなっちゃう。

「あー、判った、判りました！ お金出して貰ったし、此処最近ちゃんと食べてないからお腹なか空いたし、ホントにご飯食べさせてくれるのよ

ね？」

レイニーちゃんは色々考えていた様子だが、腹を括ったようだ。

ちよつと自棄つぽいけど、まあ、ウチにいる間は食事と寝床は保証するよ？

「そこは任せといてよ。此処も最近はお飯が旨くなつたつて評判だぜ？

蜂蜜と果汁入りのミードもお勧めだ」

俺が言ってる側から、ハンスさんがウエイトレスさんと呼んで酒やら何やら注文している。

それに乗つかつて、グスタフさんやタイラーくんもなんか頼んでるし。

良いけどお前らはちゃんと払えよ？

さり気なくウチの料理人すげえアピールのタイミングを逃し、なんとも釈然としない俺の視界では、レイニーちゃんがウエイトレスさんにオーダーしている。

吹っ切れたのかどうか微妙だけど、今はそれなり楽しむと開き直つたらしい。

良いねえ、なにはともあれ、まずは食わなきゃ生きられないからね。

常々疑問なんだけど、ハンスさんは昼からあんなに呑んで、なんで副ギルドマスターなんて出来てるんだ？

そりやまあ、見た目酔ってるようには見えないけどさ、絶対マズいと思うんだよなあ。

そんな事を考えつつ、俺とリリースはレイニーちゃんを連れて屋敷へ。

多分予想してたよりちよつと大きかつたらしく、しばらく屋敷を見上げて居た所へ、ウチの子供達6人が玄関から転がり出てくる。

「イリス姉ちゃん、おかえり！」

「お土産は！！」

「ちよつとフレッド、その前におかえりなさいでしょ！」

わいわいと騒がしい子供に囲まれ困り切る俺が、レイニーちゃんには面白かつたらしい。

クスクス笑うレイニーちゃんが子供達に挨拶し、子供達も次々と自己紹介。

子供が元気で笑っているのは大きな安心材料になってくれたのかね。

屋敷に入った所で静かに待っていてくれたヘレネちゃんに、休憩してお菓子を子供達と食べる様に、ただし食べすぎないように言い含めて手渡す。

ちよつとソワソワしているので、ヘレネちゃんも楽しみにしているらしい。

うんうん、かわいいねえ、雇って良かったねえ。

「子供達、みんな元気だね……」

ヘレネちゃんに着いてリビングの方へ去っていく子供達を見送るレイニーちゃんの顔は、さっきまでより穏やかになっていた。

俺の信用云々は兎も角、レイニーちゃんをどう元気づけるか悩んでいたんだけど、その辺の仕事は全部子供達が片付けてくれたらしいね。

そんなレイニーちゃんの希望を聞きながら屋敷の中を案内し、やっぱり部屋は2階が良いと言う事で、本人に適当に選ばせる。

現在、ウチで生活しているのは12名。

ヘレネちゃんとタイラーくん、グイクンギイちゃんの4名は1階を希望している。

2階はレイニーちゃんが一部屋押さえて都合9部屋が埋まり、残り3部屋。

これ、埋まることは有るんだろうか？

まあ、1階もまだ空いてるし、余裕があるから良いか。

あ、2部屋くらいは客室にしといたほうが良いのかな？

うーん、タイラーくん辺りに相談しとこう。

そのタイラーくんはバーに残っている。

ハンスさんやグスタフさんと難しい話、なんて事はなく、単に呑んでいるだけだ。

今日は新しい仲間も居る事だし、食事くらいはウチで済ませたい。

なんせウオルターくんが張り切っているからね。

タイラーくとジエシカさんは、早めに迎えに行くとしよう。

そんな事を考えていたら部屋から飛び出してきたレイニーちゃんに飛びつかれる。

幽霊でも出たのかとワクワクしたがそうではなく、工房が欲しいという相談。

確かにそういう話はしてたけど、急に飛びつかれるとびっくりするから、ちよつと落ち着いて行動しようね？

自室の近くが良いか聞いてみたが、資材の搬入とかの兼ね合いで、1階が良いらしい。

1階だと奥、表向きの角部屋が空いている。

ヘンリーさんトコに相談して、その部屋に玄関扉を設置できないか聞いてみよう、と思い付きのまま言えば、レイニーちゃんに拝まれる始末。

やめて、まだ話は終わってないってば。

じゃあつてんで、搬入もそうだけど、軌道に乗ったらレイニーちゃんの工房を本格的に運用しようって事で、塀の方も一部改築し、工房直ちよくの入り口を作ってしまうおうと計画。

昼のどん底感から一転、俄然やる気に満ちた顔になっている。

やる気すぎて、開発計画として軽くボディソープからシャンプー、コンディショナーなどの美容関係で顧客を掴んで、冷蔵庫の開発をしたいと言う話をさらつと話しただけで超食いつかれる。

待つて、落ち着いて、ちゃんと順を追って話すから。

がくんがくん揺れる視界に気分が悪くなるが、レイニーちゃんは開放してくれなかった。

夕日もだいぶ傾き、夜の帳が街に影を差し始めた時刻。

ウォルターくんが腕に縋りを掛け、豪快な肉料理と山盛りのサラダがテーブルの上に咲き誇る。

俺とリリスとヘレネちゃんですり買ってきて居た酒類さけのいも万全、ただし今晚で全部飲み干される模様。

無事に仲間も増えたし、せっかくだ、今此処で懸案のひとつにケリをつきたい。

「あー、みんな聞いてくれ」

そんなに声を張ったつもりはなかったが、俺の声を合図に室内の喧騒が収まり、視線が俺に集まる。

ええ。

もうちよつとワイワイしてて、オレの話なんか誰も聞かない、その方向で想定してたので正直戸惑う。

「えーつと、みんなにも相談してたクラン名の変更についてだけど、レイニーちゃんも加わった事だし、良い機会だから今決めたいと思う」
オレの言葉に、各々がそれぞれに顔を見合わせる。

「みんなにも考えてて欲しいって頼んでたけど、今、意見を出し合って決めよう」

言いながらも、妙な気配にすこし嫌な予感が脳裏を掠める。

オレの言葉に何やらざわつき始める一同。

お前ら？ まさかですよね？

嫌な予感が愈々渦を巻き始める中、こつちに向き直ったみんなの中で、タイラーくんが代表して口を開く。

「すまん。任せる気満々で何も考えてない」

堂々とし過ぎでは!!

なにその、いやそれ、少しも悪いとか思っていないよね？ なあおい
コラ？

「あれだ、クランマスターの仕事を奪うのは流石に気が引けてな」

殊勝な台詞だねえ？

なんで目え逸らすん？

保護者のジエシカさんに目を向ければ、笑顔で手を振られる始末。

この人も考えて無いね、うん。

まあ、こうなるんだろうなって思ってたよ、うん。

「あー、じゃあ俺が色々挙げるから、そんな中からみんな決めてよう。
……今から考えるから、取り敢えず飯食おうぜ」

まあ、それっぽい考えよう。俺の隣でリリースが、に肉を山盛り。

野菜も食べなさい、野菜も。

そんな事を口走った手前、俺も野菜を多目取る。

タイラーくんが意外と野菜多めが好みなんだよな、とか、ヘレネちゃんは寧ろもつと肉食べなさいとか、子供達はウォルターくんのおかげで好き嫌い無く食べてるとか。

そんな事を考えてみんなを眺めている自分に気がついて、ちよつと笑ってしまった。

そんな風ふうにみんなを見ていて、ふと、思いついたものがあつた。

これは、どうだろう？ 俺としては、悪くないと思う……けど。

「克蘭名、思いついたんだけど——」

俺の声に、みんなの視線が再び俺に集まつた。

俺の告げた名前には、誰もが一瞬ピンと来ない様子だったが、タイラーくんが他の誰より早く口を開く。

「お前の名付けに、文句など無いさ。自信を持って名乗れよ、克蘭マスター」

このメガネ、此処ぞつてトコでキツチリ支えてくれる。

普段はホントに、俺をおちよくつて遊んでるだけにしか思えないが、時々、そう、時々は頼りになる。

「元よりセンスに期待してないから、恥ずかしがることは無いぞ」

ちよつとでも見直した俺が馬鹿だったよこの野郎！

今後とも、期待してるから支えやがれよコンチクショウ！

第19話 意味は望郷、帰る場所

「克蘭名、思いついたんだけど——」

俺の声に、みんなの視線が俺に集まった。

そんな馬鹿騒ぎの夜明けの、当然の様に宿酔ふつかよいの俺です。

「取り敢えず、普通の石鹸を、水分大目にしてみたんですが」

レイニーちゃん歓迎会の翌朝。

何故かズキズキする頭を抱えて、俺は同じく体調悪そうなりリスとレイニーちゃんと、3人で顔を突き合わせていた。

「……石鹸が溶けた水……だなあ」

試しに手のひらに伸ばし、両手で擦り合わせて見るが、泡立ちは悪い。

下手すると、水分が増えた分だけ悪くなってる感すらある。

「これはダメだねえ……基本の考え方から変えないとダメかもねえ」

リスが溜息混じりに言う。

レイニーちゃんは石鹸を作れるとはいえ、石鹸のプロフェッショナルではない。

石鹸の材料を揃えて作ることは出来ても、アレンジとなるとどうしたって勝手は変わる。

「リスさんよ、ネット知識的なアドバイスは無いかい？」

こそりと、リスに尋ねる。

ネット空間を気ままに遊んでいたリスは、もしかしてその程度の事は知っているのではないのか、と思ったのだ。

「有るわよ、ご家庭で出来る方法から、企業的な奴まで、レシピは頭に有るんだけどね」

あつさり応えて、リスはレイニーちゃんの方に目を向ける。

「……錬金術って言う奴が、どうも曲者なのよ。材料が有っても、それをどういいう状態で混ぜ合わせるとか、経験しないまでも頭の中である程度は再現できないと、術じゆつとして作用させられないらしいの」

予想外、と言う風ふうにリスは唇を噛む。

俺も驚きである。

なにそれ、なんか魔法的なモノっぽいというか。

俺は錬金術は、もうちよつとこう、科学技術的な物だと思っていたのだ。

「それは地球で発生した錬金術と、それを元に発展した技術の行く先の話でしょう？ この世界の錬金術は、もつと魔法的な何かよ」

目の前でやって見せれば早いのだが、リリースは錬金術は出来ないらしい。

その辺は能力の発露の、方向性の違いだそうだ。

この世界の魔法は一部例外を除いて使えるが、錬金術は基本となる技術から異なるので、使えないという事らしい。

異世界チートつてもつとこう、万能なもんじゃないの？ と思って口に出してみれば、

「あなた、モンクの技とかネクロマンサーの死霊術、使える？ 同じ世界の中ですらそういう制限があるんだから、こつちでも制限があつて当たり前でしょ？」

こう言われてすぐ納得した。

モンクの真似をしろと言われたって無理だぜ、そもそも操作したこゝとすら無い。

ネクロマンサーも同様、DLCを買いはしたものの、全然使つた事ないのよね。

「なるほど超了解。でもさあ、ノーヒントは厳しくないか。もしかしたらいつか閃きがあるかもだけど、逆に言や、いつまで経つても閃きがないと石鹼か石鹼水だぜ」

スキルが使えるクラスでも、レベルが足りなきゃ使えない。

何かこう、レベルアップかそれに匹敵する様な事が起きれば或いは……。

レベルアップに匹敵する何かつて、何だよ？

「閃きなんて、それこそ映像でも見せりゃ一発だけど、スマホなんか有るわけでもないしなあ……」

見知らぬ技術を映像として見れるのは、それはそれで衝撃じゃ無い

だろうか。

そのものズバリの作り方だし。

しかし、見せる方法が無いからどうしようもない。

「映像……」

ん？

眩き声に視線を向ければ、何やら邪悪に微笑むリリースさんが。

なんだろう。すっごく嫌な予感がするんだよね？

「イリス。私、ちよつとやる事が出来たから出掛けてくるわ。今日はレイニーちゃんと、適当に過ごしてて」

言いきま立ち上がり、何故かウインクまで残して歩き去るリリース。

うん、わけわか訳判らん。

「何か、思いついたのかしら？」

レイニーちゃんが不思議そうに首を傾げるが、俺も同様の気分だ。ただ、すっごく嫌な予感がする。

人体構造と人間の構成物質を知るためにやった事を聞いた時と、同じ感覚がしたんだけど……気の所為だと思いたいよね。

嫌な予感はないかに熱中して忘れよう、という事で、思いついて俺はレイニーちゃんに相談し、ウォルターくんの城に来ていた。

まあ、キッチンだけど。

「うん？ 蜂蜜と果汁のミードの、配合率を知りたいだ？」

何言い出してんだこいつら、と言う顔をするのは止めなさい。

「いや、急に押し掛けて何言出すかと思えば……酒だったらもうねえから、呑むならギルドでも行つてきな」

どうやら昼のメニューを考えているらしい。

「おうん？ 昼飯の仕込みかい？」

さり気なく邪魔にならない位置に立ちながら、何やら考え込むウォルターくんを眺める。

「……パスタで良くね？」

メニューに悩んでる時は、何か適当なメニューを投げて貰うと考えるというか、自分の今の「気分」がハッキリしてくる。

気分というのは、「今日は麺の気分だな」とか「ピザを受け入れる腹になつてた」とか、そう言うアレだ。

「パスタか……いや、パスタも悪く無いんだが、もつとこう、生野菜も食いたいんだよ」

ウォルターくんが乗ってきた。

人によつては「気が散る！」と怒り出す恐れも有るのでおつかなびっくりだった訳だが、ウォルターくんの懐が広くてよかった。

「サラダが欲しいとか、そういうのも違うんだ？」

俺の声に、腕組みで天井を見上げる。

「うーん、パスタとサラダとか、そういう組み合わせで行けば食いすぎそうでなあ。だからってサラダだけで済ませたくねえし」

サラダだけだと、物足りなさがなあ……。

そう言う眩きが聞こえた。

そういう事なら。

「サンドイッチは？ サラダにしつかり味付けて、ハムとかベーコンと一緒に挟むとか、ポテトサラダを挟むとか。スクランブルエッグとかも良いよね」

俺の思いつきに、動きを止めて考え込むウォルターくん。

色々頭の中で組み立てている様子だ。

「ふむ、そのアイデア頂いたぜ。それにしよう。今、屋敷にいるのは何人だ？」

おや、思ったよりすんなり。

こう見えて意外と柔軟なのよね、ウォルターくん。

「えつと、リリースが出掛けて、他は全員居るんじゃないか？ 呼んでくる？」

「なるほど、じゃあ30分くれ。出来合いもあるから、それではぱつと作っちゃう。出来上がる頃に、全員呼んでくれ」

この辺のやり取りをしている頃には、ウォルターくんはもう作業を始めていた。

手伝える事は有るかと思えば、簡単に済みますから大丈夫だと追い出される。

ホントに、料理が好きなんだねえ。

レイニーちゃんと顔を見合わせ、苦笑する。

「目的が果たせませんでしたねえ」

タハハと笑うレイニーちゃん。

「いやまあ、この際だから試しに作って、飲んでもらって意見聞こうか」

言って、2人で頷きあう。

俺とレイニーちゃんが息抜きで造ろうとしているのは、ミード用のポーシヨン。

ポーシヨンと言っても、回復効果が有るとか、宿酔ふっかよいを防ぐとか、そういう物ではない。

単純に、ミードに混ぜると冒険者ギルドで流行りの蜂蜜果汁ミードが気軽に楽しめる、そういうアイテムだ。

蜂蜜が意外と高級品なので、蜂蜜の使用量を減らし、砂糖で調整——何故か上白糖が普通に流通してるんだよな……そんなモンなのか、いや助かるんだけど——して風味と甘さを出し、そのままだと混ぜ難いにくそれをすんなりミードに馴染ませるために、予めミードに溶かし、レモン果汁を加える。

それを小瓶に封入するか、普通に瓶に入れて、お好みの分量をミードに混ぜれば、ご家庭で気軽に楽しめちゃうのでは？

というアイテムを思いつき、割と乗り気のレイニーちゃんと配合についてあれこれ相談していたのだ。

作るために、最適な配合という物について意見を聞きに行った結果がさっきのサンドイッチだった訳だ。

30分だったら酒屋さんに行つて帰つてくれば丁度っぽいし、レイニーちゃんは蜂蜜と砂糖は有るといふ。

んじやあ、酒とレモン買つてくる、と言い置いて、俺は買い物に出掛けるのだった。

ひよいと出掛けた買い物先で問題に遭遇するなんてそうそう有るものじゃない。

酒とレモンを抱えて屋敷に戻り、キッチン前で出会ったウォルターくん「この吞兵衛が」って言う目で見られたくらいだ。

俺、そんな頻繁に呑んでる？ と軽めのシヨックと共に思い返せば……あ、毎日飲んでるし、毎日宿酔いだわ。

しばらく酒は控えよう、と思うものの、酒瓶を抱えていては説得力も無いというものだ。

ちよつと泣きそうな気分でレイニーちゃんに酒を持っていったら凄く心配された。

レイニーちゃん良い子。

そんなほっこりイベントを交えつつ、屋敷に残っている全員に声を掛けて食堂へ。

今日のお昼はサンドイツチ。

食事の準備を手伝い、お茶の用意をするへレネちゃんに凄く癒やされる。

戦うのが嫌いな優しい暗殺者技能持ちのメイド少女。

……あざとくね？ え、なに、実はこの子が主人公？

勝手に混乱する俺にもお茶を淹れて、優しい微笑みをくれる。

そっか、天使って実在したのか。

「どうした、気持ち悪……面白……奇妙な顔して」

言葉選ぶんだったら最後まで頑張れ、タイラーくん。

結局罵声じゃねえかこの野郎。

奇妙ってなんだ奇妙って。

「うるせえ、ベーコンサラダサンドぶつけんぞこの野郎」

ぶんすか怒って見せるが、タイラーくんは揺らぐこと無くサンドイツチを頬張る。

そんな風に憤慨していると、

「食いもんで遊ぶな馬鹿」

ウォルターくんに怒られてしまった。

所でこのベーコンサラダサンド、ホント旨いね。

知能指数の深刻な低下が見られる？

いやだって平和だし、あとはボディソープとかの開発が出来たら

色々楽になりそうだし。

各ご家庭の入浴施設の普及が進むんじゃないかな？

それは俺の関与する所じゃないけど、まあそんな塩梅で話が進んでくれると、割とのんびり過ごせそうな予感じゃない？

たまーになんか適当な依頼クエストを受けて、そんなのんびり生活を想像したらそりゃ、緩むよね、気持ちとかね。

そんなのんびり生活にちよっぴり差す不穩の影、ウチのリリスちゃん、夕食も終わり、ウチのメンバーが適当にそれぞれが寛ぐ時間になつても帰つてこなかった。

あんまり帰りが遅いとまた別の心配も湧いてくるが、まあ、あの悪魔が遅れをとる相手がそうそう居るとも思えない。

とは言え、出来ればなるべく早く帰ってきて欲しいモンだ。

昨夜はリリスの帰宅を待っていたので、俺は珍しく飲みに行かずに屋敷に居た。

夕食後少しレイニーちゃんと話し、件のポーションを作ったが、意見を聞きたい連中は皆してバーへ。

俺とレイニーちゃんが残っているの、ヘレネちゃんも出掛けておらず、折角なので誘って試飲会。

子供達にはまだお酒は早かろうという事で、秘蔵のお菓子で我慢してもらおう。

あ。今度、酒のつまみにも出来る気軽な軽食って事で、ウォルターくんもポテチでも吹き込んでみよう。

バーのメニューで見掛けなかったし、それなり流行るんじゃないかな？ どうかな？

そんな事を思いながら、ミードを飲む。

感想としては、中々イイ感じ。

蜂蜜を減らしている筈なのに、言うほど蜂蜜感が薄まった感じがしない……いや、そりゃ「蜂蜜酒」って言うくらいだし当たり前か。

いやでも、このポーションを混ぜて軽くステアするだけで良いんだから、非常にお手軽ではなからうか。

現状、小娘3人？ の判断は、これは「売れる」だ。
ただ、売り方が問題なのだよなあ。

製法を非公開にしてレイニーちゃんが作り続けるとか論外だし、製法を公開すると儲けが……。

なんというか、著作権というか、考案者特権が有っても良いと思うんだよ。

「じゃあ、明日にでも、商業ギルドで相談してくるよ？」

俺が悩んでいると、レイニーちゃんが事も無げに言う。

え？ 商業ギルドなんてもん、有るの？

完全に盲点だった。

というか、俺、この世界を侮りすぎ。

全世帯とは言わないけど上下水道が普及しつつあり、ガラスも普通に有るし瓶も量産されてる。

そういう事は商売が関わってくるし、それを取り仕切るギルドが有ってもおかしく無いんだよな。

「お願いしたいけど、大丈夫？ 俺はそういう、海千山千ってな感じの世界は苦手であー」

元販売店勤務者が何を言うって？

だから俺、入社からずっと裏方の商品管理なんだって。

とはいえ現在はク라마ス張ってる訳だし、一緒に顔^{はなし}だして、話聞いてるくらいはするべきかな。

「私も不安だけど、でもこの先も有る事でしょ？ それ考えたら、早いうちに良い感じの担当さん捕まえたいトコでも有るし」

と、意外と考えているレイニーちゃん。

うーん、そういう事なら、明日は俺も一緒に、なんならタイラーくんとジエシカさんにも付添頼もう。

なんか俺、あの2人に依存し過ぎな気がする。

と言うような事が有ったり考え込んだりしつつ就寝し、目を覚ますといつ戻ったのかりリスが俺のベッドの中へ。

……可愛いよ？ 可愛いけどさ？

キミ、自分の部屋が有るじゃん？ なんで此処に居るのん？

と思つたけど、なんか凄く良く寝ているので、起こすのも可哀想に
思え、俺は静かにベッドから抜け出す。

無理にとか、強引に叩き起こすとか、そんな事する理由もないしな。
キッチンでばったり出会ったタイラーくん事情を説明し、一緒に
商業ギルドに行つて貰える事に。

やー、キミのそういう付き合ひの良いトコ、キライじゃないよー？
「まあ、レイニーの為に、な。お前は単じゆ……ひと人が良すぎて騙され
易いから、権利全部取られかねんしな」

んー、キミのそういう一言多いトコ、キライだよー？
そんな感じでギスギスじゃれ合っていると、ウチのメンバーが次々
キッチンへ。

フレッドくん、マシユーくん、君達はまず顔を洗つておいで。
ぼちぼちリリースも起こしてくるかな、そう思っていると、ものすご
く浮かない顔のレイニーちゃんがキッチンへ。

えっ、なにそれどうしたの？
「あー、おはよう、いや、ちよつと頭痛いと言うか」
釈然としない面持ちで挨拶を返してくれるレイニーちゃんに、俺と

タイラーくんは顔を見合わせる。
「ん？ 宿酔ふっかよいなのか？」
タイラーくんが呆れた様な調子で声を掛ける。

「やー、そんな呑んでないです。ていうか、夢見が悪くて」
答えるレイニーちゃんはちよつと青い顔を無理に笑わせて、顔の前
で手を振る。

健気可愛いが、ホント大丈夫なのかな。
つていうか、夢……か。
「何の夢見たん？ 怖い夢？」

問いかけるが、頭の中で考えるのは別の事。
昨日、不穏な気配を発しつつ、急に用事を思いついて1人で出掛け、
夜更けに帰宅したらしいリリース。

「いえ、別に夢自体は普通というか、うーん……単に、石鹸の作り方を
見た、というか」

見た夢の内容を聞けば、ボディソープの作り方と思しき作業を眺めている夢。

「ただ、夢を見る前に、なんて言うか……バチンっ！ って言う感じで、頭の中を何かに叩かれた、みたいな感じがあつて。その余韻が今も残つてる感じで気持ち悪いんですよー」

……。

取り敢えずその場は「大丈夫？ 今日休んで、明日にする？」とか話しつつ適当に抜け出し、部屋へダッシュ。

やりやがったなりリス！

何をしたかは判らないけど、何かしたのは判る！

「りりすー！ 起きろおい！ あちこち触っちゃうぞこの野郎!!」

ちよっぴり錯乱気味の俺がりりすを見た感想を交えつつ揺すり起こそうと奮闘する。

「んー……けんすけ……」

あざとい寝言とか何処で習ってきてんだよ、っーかお前起きてるだろ、ホントは！

一瞬けんすけって誰だか判んなかったよ！ 俺だよ！

「い・い・か・ら、起きろってんだよりりすう！」

ちよつと迷ってから、耳を引っ張る。

ほっぺた引っ張ってやろうかと思つたけど、ちよつと可哀相でっ

い。

「痛^{いた}あいっ!!」

流石に寝こける余裕もなく、俺の手を払い除けながら跳ね起きる。

「おう、おはようりりす」

「おはようじゃないわよ何なのよ痛いじゃないのよ!!」

起き抜けに元気だねこの野郎、結構結構。

「お前、レイニーちゃんに何したん？ ん？」

分かりやすく動きを止めて、すいっと俺から目をそらすりりす。

「りりりりすー？」

誤魔化せるつもりなのかコイツ。

耳を引っ張り上げる。

まずは何を仕出かしたか聞き出してやる。

「痛いってばー！ 耳引つ張らないで！ もげるもげるっ！」
……。

これ、ちよつと楽しいな？

可哀相なのでベッドの上で正座させつつ、話を聞くと。

「……ボディソープの手作り映像を、直接脳に流したあ？」

聞くだけでヤバいと理解^{わか}る事を、あっさり仲間相手にしちゃったの？ この悪戯小娘？

とか、そんな生易しい筈無いんだよなあ、コイツの場合。

「……お前さんの事だから、変な悪影響とか、後遺症が出たりとかは無
いんだろ？」

俺の言葉に、驚いたように見上げてくるリリス。

「そこ、私を信用しちゃうの？」

ちよつと嬉しそうに見えなくもないけど、あのな？

単純に信頼してるって話じゃないんだわ。

脳に何かしら手を出すとか、想像するだけでヤバいと思える事をす
る以上、リリスは必ず下調べをする筈。

なにせ、レイニーちゃんに出会うまでに、さんざん苦労したのだ。

その苦労をふいにする様な真似、しようとは思わないだろう。

じゃあ、何が問題になるのか？

下調べそのものだ。

「リリス、お前さん、昨日何処で何してたん？ 夜遅くまで？」

性懲りもなく、目を逸らす。

ほほうん？ 誤魔化す気なの？

「……耳」

俺がつぶやくと、反射的に耳を押さえて飛び上がる。

俺、そんな強く引つ張ってない……筈？

あー、楽しくなった時かな。

まあ、効いてるなら何でも良いか。

まず、リリースの目的、と言うかやったことを語ろうと思う。

これもまた原因は俺の不用意な一言なのだが、そう、映像を見せたらっていうアレだ。

あの一言で思いついたりリリースは、色んな実験を経て、レイニーちゃんにボディソープの作成動画を流した。

サラツと言ってしまったが、生きている人間の脳に映像を直接流す。

当然魔法なのだが、問題はそんな魔法を持っていたのか？ という事だ。

答えて言えば、そんな物は無い。

念の為パルマーさんトコに立ち寄ったらしいが、「現在は在庫がない」と言う回答だったそうだ。

あ、本来は有る訳ね。すごいな魔法世界。

しかし手に入らなきゃどうしようも無く、だからと言って諦めるには惜しいアイディア。

ボディソープは早急に欲しい。

じゃあ類似の魔法を造っちゃおう、という事で、無駄に蓄積していたオカルト関係の知識や「脳」に関する様々なデータなどを元に、魔法を仮組み。

その魔法を実際に使えるようにする為に、なんとリリースは。

付近で活動する野盗やとうを襲い、生体実験の材料にしたのだという。

何してるの？ ねえ？

色々、というかスタートの発想からヤバい。

脳こわに直接とか、怖っ。

んで、その精度を上げると言うか、安全性を確認するために人体実験しようっていう発想も怖い。

その為の情報を得る為に、衛兵隊の詰め所に忍び込むとか、思いついても素人が実行するかね？

話聞こう！ 教えて貰おう！ 程度じゃない？ 普通。

んで、手近な20人前後の野盗やとうの情報を得たら即現地へ、そこでまずは全員を生かさず殺さずの状態に、っていう、フットワークの軽さ

と行動の躊躇なさがエグい。

どういう状態にしたかつて？

俺は詳しく知らないけど、「あの魔女と同じ状態」って言った。両手両足をどうこう言ってたアレだろう。

俺は考えるのを辞めた。

しかしそこから地獄絵図。

脳の構造を確認するために頭を割られる仲間、脳が露出してるのにまだ生きてる仲間を見せられて、すっげー怖かっただろうな。

野盗^{やとう}って時点で、同情なんぞせんけどな。

ニューロンがどうのシナプスがどうしたの、俺にはサツパリだけど、リリースはその辺の知識も元々持ってたんだろう。

んで、こつちの「人間」にその知識が適用出来るかの「確認」をした訳だ。

魔法が使える世界の人間の脳が、俺が居た世界の人間と同じとは限らない、くらいは俺も思うし。

思っても、実際に開いて確認しようなんて思わんけどな。

でまあ、そういう血みどろの確認作業を経て、映像を電気信号化したものを直接脳に送り込む実験を行う。

寧ろこの実験で脳がダメになった、っていう奴のが多かつたらしい。

難しかったよー、なんて笑顔で言われても、可愛くないわ。

映像を見せられても廃人化しない、そんな風^{ふう}に出来る頃には、野盗^{やとう}の生き残りは3人に。

念の為に数度実験を繰り返し、最終的には幸せな夢を見ている生き残り^人共々、周囲の死体と廃人化した実験素材^{ディスプレイド}を焼却処分。

そこまでですっかり夜も更けたため、まっすぐ家^{いえ}に帰って来て、俺の寢床に潜り込んだという。

「何でそこで俺のトコなんだよ」

呆れるべきポイントが多すぎて、まずその事に呆れる俺。

「えー？ だって、洗淨^{クリン}使ったって言っても、なんか自分のベッドに直行するのに抵抗あったから。イリスちゃんにお裾分け、的^{てき}な？」

的な？　じやないよ。
いらんわそんなモン。

兎も角、リリースが何をしてきたかは判ったし、洒落にならん事だといふのは理解^{わか}る。

だけど今は、確認すべきはたったひとつ。

「しつこいようだけど、レイニーちゃんの健康に、害はないんだな？」

朝の様子を見るに、害がないとは思えないんだが、一応念押しで確認する。

「勿論！　急に映像差し込まれて脳には負担がかかったと思うけど、立て続けに幾つも送ったりしなきゃ、壊れはしないって判ったよ！」
すごく元気に良いお返事です。

でもそれお前、少なくとも1名には「立て続けに幾つも送って、壊した」って事だよな？

あとサラツと流したけど、脳に負担は掛かるんだね？

「安全性の確認には、何処までやったら危険かを把握しないとね」と、これまたいい笑顔。

ホントは此処でゲンコ落として、お説教が正しいんだけど。

俺はため息交じりにリリースの頭を撫でて、「危ない事はしないように、もし次が有るなら、俺に一言^{ひとこと}伝えるように」とだけ。

倫理観が違うから怒っても無駄だから？

違うよ、そんな事じゃなくてね。

俺だって同類だからだよ。

たまたま今回は、俺にはその手段を取れない、やった所で俺には意味が無かった、ってだけで。

自分の利益や仲間の為に「殺戮^それ」が必要なら、俺だって「それ」を厭わないっていうだけ。

俺が比較的仲間に比重を置くように心がけるのに対して、リリースは自分本位な傾向が強い、というだけだ。

結局、同族というか、仲間には甘いのも、俺は。

「ちゃんとレイニーちゃんには、何らかの形で謝意を伝えるように」
俺が頭をごしごしと撫でると、ちよつと痛そうにしながらもリリース

は頷く。

「よし、んじやー飯メシにしよう、ウォルターくんの飯メシを、食わない手は無
いからな」

そう言うとりリスを部屋まで送り、着替えたりリスとともに食堂ダイニング
へと向かうのだった。

食事を終えた俺とりリスは、レイニーちゃんに「もしかしたら、作
れるかも知れない」という言葉を受けてレイニーちゃんの工房へ。

そこで俺は、錬金術師の妙技というものを体感したように思う。
映像イメージを見せられたとは言え、それを理解して脳内で再現出来なけれ
ば、作りたくても作れないだろう。

それなのに、レイニーちゃんはあつさりとやってのけた。

香油や香水などを使用して香り付けする事も可能という事を初回
で実証しているのは実にポイントが高い。

難度の高い工程の幾つか、例えば本来は高めの温度で「寝かせる」必
要の有る工程も、錬金術じゆつしきの術式じゆつしきに組み込む事で、結果を作り出せるの
だという。

なにそれ？ 魔法よりよっぽどアレじゃね？

そう思ったけど、口にするのは我慢。

出来上がりを少量手に取り、水を少々加えつつ、泡立てると……。

「わっ、わっ！ こんなに泡立つ石鹸、初めて見た……！」

作った本人が大騒ぎだ。

俺は急いで他の女性陣を呼び出す。

「え、これ、身体からだを洗う石鹸ですか？ こんなに泡が……？」

ヘレネちゃんが、泡立ちすぎる手元に引いている。

ちよつと面白い。

「あら、ホントにいい香りね……あら、ホントに流しても、香りが残る
のね？」

昨日りリスと話していたことを覚えていたジェシカさんが、石鹸の
残り香を早速確認している。

「……これ、匂いがもつと薄いか無ければ、キッチンで使えるな。魔法

使えなくても、手を綺麗にするのに便利かも知れん」

と、早速ハンドソープを思いつく生粋の料理人、ウォルターくん。タイラーくんもこの商品の応用の広さと商売の気配に、口元が歪む。

お前、ちよくちよくキャラ変わるのやめろ。

子供達は泡立ちが楽しいらしい、洗っては流し、洗っては流しを繰り返す。

気持ちは理解^{わか}るけど、手がふやけるぞ、止め^やときなさい。

全員の反応に、手応えを感じたらしいレイニーちゃん。

魔法が使えなくても、手軽に洗浄効果を体感できる、「魔法の」液体石鹸。

洗^{クリーン}浄が使えても、この石鹸で身体^{からだ}を洗うだけで仄かな香り^{からだ}が身体を包み、特に貴族の淑女に大人気となるのは、ちよつとだけ先の話。

これも商業ギルドで登録しましょう、と息巻くレイニーちゃんに、反対するものは一人も居ない。

まずはレイニーちゃんの専売で、手が足りなくなったら商業ギルドに、高値で製法を売りつけつつ、マージンも頂こう。

美を求める？ リリスとジェシカさんがほくそ笑み、利益を追求する俺とタイラーくんが悪い笑みを浮かべ、俺達はその足で商業ギルドへ。

多少改良の余地が有るとは言え、人気の酒を自宅でも手軽に味わえるポーシヨンと、画期的な液体石鹸は商業ギルドで早速注目を集め、すんなりと商品の独占販売の権利を獲得。

反響が大きくなるようであれば、商業ギルドを通して製法を開示、商業ギルドとウチこと「ノスタルジア・克蘭」、そしてレイニーちゃん個人に、生産数に応じてそれぞれ数%づつの使用料を収めることを条件に他所での作成も認める、と言う契約書を作成した。

レイニーちゃんの初仕事^が、本人の考えていたよりも地味な仕事で大きな結果に。

同時にシャンプーとコンディショナーについてもアイデアを出し、その場で仮契約。

完成したら、ボディソープと同じ契約となる予定である。

うっかり忘れたが、シャンプーとか持ち込む時に、ついででハンドソープも登録してしまえば良いだろう。

直接石鹸を作るのとは関係ない所で行われた人体実験については俺とリリスは口を固く閉ざす。

巷には謎の野盗集団壊滅として広まり、縄張りの地域を往来しなければならなかった商人等には喜ばれる事になる。

……うん。

終わり良ければ、きっとそれで良いのだ。

第20話 それいけ悠々ライフ

名前も決まり、錬金魔法技師レイニーちゃんのお陰でウチこと「ノスタルジア・クラン」にも収入の予感が漂い始めました。

それはそれとして、リリスの行動の躊躇の無さが怖い、そんな俺です。

ボデイソープとか蜂蜜酒用のポーションとか、その辺の登録が諸々終わって1週間くらい。

案の定、レイニーちゃんの手には負えない勢いで舞い込む発注の嵐に、早々にレシピ解禁。

ボデイソープに加えて、シャンプードのコンディショナーだの、貴族系ご婦人・お嬢様方が気にならない訳がないラインナップ。

念の為、登録前に情報公開の準備をさせていて良かった。

街の錬金術師達は突如湧いた金儲けのチャンスに飛びつき、他の日常品や所謂薬用のポーションの生産に支障を来しているとか。

ダメじゃん。

もちろん、ボデイソープその他の権利は商業ギルドに登録済、ウチの商品の生産・販売については契約で守られるので、不正に販売される物は罰金が取られた上に商業資格まで取り上げられる。

信用で成り立つ商人の世界は、思った以上に契約に厳しい。

商業資格と言えば、ウチも権利に関わる以上クランとして商業ギルドに登録する必要がある、とかで早速登録していた。

レイニーちゃんがレシピ解放するまでは、ウチのクランには売上のな物が入って来ない、そういう契約内容で寧ろレイニーちゃんには心配されたんだけど、いずれこうなるって判ってたし説明したからね。

まさか1週間そこそこで権利に絡んでいくとは思わなかったけど。

ちなみに蜂蜜酒用のポーションは冒険者ギルドで大人気。

実は、蜂蜜が溶け難いと言うのが微妙に悩みのタネだったらしく、作るのが簡単になったと喜ばれているらしい。

たまに冒険者ギルドの厨房に呼ばれるウォルターくんからの密告

である。

いやー、なんか思った以上に早く、のんびり冒険者生活に入れそうじゃない？

そう考えると、ミードが一層美味いよね。

「今日はいつにも増して上機嫌じゃねえか。どうした、酒が脳に回ったか？」

自分もやけに陽気な調子で、グスタフさんが俺の頭に手を乗せる。

ポテチを摘みながらの飲酒だったので仮面を外していたため、脳天のガードが甘くなっていた。

……いや、この仮面メット、装備した所で脳天部分が開いてるんだよな、侍ポニーっぽい髪型を邪魔しないように。

つまり、着けてても脳天は防げない。

その無意味っぷりに、その気遣いは必要だったか？ と、問わずには居られない。

まあ、今更顔も知らない設計者に文句言っても仕方ないけどな。

「大将こそ、だいぶ良い塩梅じゃねえの。可愛い子でも引つ掛けたのかい？」

気がつくはずと酒場で呑んでるオッサンに、出会いなんぞ有る訳ねえのは知ってるけどな！

だがグスタフさんは気に留めることもなく、通りかかったウェイトレスさん呼び止め、エールを注文。

俺、覚えてた違和感の正体判ったわ。

此処、バーって呼ばれてるけどバーじゃない。

居酒屋だコレ。

ポテトの薄揚げチツプスが好評でなんか臨時収入を得たらしいウォルターくんが、俺のアイデアを形に出来れば儲かるし、再現するのに色々考えるのも楽しいし、答え合わせで外れててもそれはそれでいい刺激になると、最近ちよくちよく俺に酒のツマミのアイデアを聞きに来る。

それも、単純に俺にアイデアを出させるだけで無く、例えばポテトをくし切りにして揚げてみたが、塩以外で味付けはないか、それは

薄揚げに応用できるか、とか。

ポテトサラダを揚げてみたが思ったようにならない、もつと纏めて、外側をカリッと出来ないか、とか。

考えた痕跡を見せてくれているので、楽しい。

その結果、バーが居酒屋化していくのだが、まあツマミが増えるのは喜ばしい事。

ちよつとアイディアを伝えようと、ポテサラのコロッケとかが出来るので楽しい。

マヨネーズやトマトケチャップは存在しなかつたので製法を伝える。

勿論、俺はそんな物詳しくないので、リリースに教えて貰いながら。

説明が面倒臭いと思つたのか、いつぞやの仕返しのつもりか、リリースに世界の各種のソースの製法を纏めて脳内に、映像付きで流し込まれて瀕死になつたけどな。

そんな俺の手元のポテチを摘みながら、グスタフさんは当たり前のように隣に座る。

もう慣れてしまつて俺は何も言わないが、グスタフさん↓俺↓リリース↓ハンスさん、の順で座っているのが当たり前前の光景になっている。

リリースはリリースで割とどうでも良いらしく、色んな食事を楽しんでいる。

最近スイーツを求める気持ちも湧いてきたらしく、漸く俺の言う「冷蔵庫」の必要性に気がついた模様。

俺がそつちに動かないもんで、痺れを切らして直接レイニーちゃんとかやら蠢いているご様子。

ふふん、計画通りよ。

俺があやふやな記憶であーだーこーだ言うより、知識持ちのリリースが動いたほうが色々早いに決まっているのだ。

んで、あの気紛れさんを意のままに動かそうなんざ無理な話なので、自発的にやる気になつて貰うように仕向けるだけだ。

……俺の居る意味ってなんだ？

ふと、気がついてはいけない事に気がついてしまった気がする。
いやいや、こういう時は気付かない振りして呑むに限る。

「そういや、聞いたか?」

自棄^{やけ}つぱちでジョッキを叩る俺を眺めて笑ったグスタフさんが、思
い出したように口を開く。

「うん? 何が?」

こういう場合の、定番の返し。

酒場で屯してエールだミードだ叩っていると、色んな噂が耳に入
る。

噂レベルの話なら氾濫しているので、グスタフさんが興味を持ちそ
うな噂の見当が付きすぎて、逆にどの話題を持ち出してくるか判らな
い。

だから、無難に聞き返して、本人の口から語って貰うのが一番なの
だ。

「いや、西の方^{ほう}、なんか峠^{やとう}辺りを縄張りにしてた野盗^{やとう}が全滅したらし
いってな」

んー。

ミードを吹き出さなかった俺、偉いぞー。

それ、もしかしてだけど。

「西? でかい規模の野盗^{やとう}だったん?」

さり気なさを装い、確認作業。

すっごい身内の犯行、具体的に言えば今隣でフライドポテトを味
わってるコイツ^{リリース}の仕業だと思っんです、それ。

「いや、20人程度の小規模なモンだったらしいが」

「……23人」

グスタフさんの情報に、すっごい小声で修正を加えるリリース。

へ、へーえ、23人だったんだネ?

「なんでも、峠^{ねぐら}と思しき跡が、すげえ魔獣でも暴れたのかってえ具合
で荒れ果ててたってんでよ」

「……私は魔獣じゃない」

がははと笑うグスタフさんに、やはり小声で突っ込むリリース。

間にいる俺はアレだ、温度差で割れちゃうんじゃないかと思ひ悩む。

物理的に。

「そ、そこが野盗の罅^{ねぐら}つてえ証^{あかし}でも、なんか有ったのかい？」

黙っている居た堪れないので、軽口で混ぜ返す風^{ふう}に口を挟む。

しかし、これは言うべきでは無かった。

「ああ、連中の持ってた獲物だとか、鎧かなんかの破片が散らばってらしい。再利用しようと思つたら、一回溶かして打ち直したほうが早いつてくらい、粉々だったそうだ」

そう言つてエールを煽り、やはり豪快に笑うグスタフさんだが、俺は割と気が気じゃない。

第三者視点でリリスの災禍を聞かされるとか、これは思つたより心臓に悪い。

「……証拠を残しちゃつたのか、私も詰めが甘い」

なんせ、隣に突っ込み^{つこ}みだの反省だのしちゃつてる犯行の主が居るわけ。

「ただ、眉唾^{まゆ唾}だつて奴も居てな。その跡やら破片やらは確かに有るんだが、その破片が、手配の人数に比べて少なすぎるとかでな？」

不思議そうに腕組みするグスタフさんは、その謎を解くことは無いんだらうなあ。

「……証拠隠滅は基本、割と高威力のデイスインテグレイドだったけど、まだ甘かったか。本気で撃てば良かった」

隣の隣に犯人が居ると思つちやいないだらうし。

つていうかりリスさん、独り言が物騒怖^{こえ}えよ！

やめて？ 本気とか、方向間違つたら確実に街に影響出るから！

「で、噂好きの連中は全滅したつてのと、逃げ出してまだ生き残りが居るつてのに分かれててな。酒の肴に、あーだこーだと言ひ合つてる訳よ」

「全滅で間違いない。私がきつちりとどめ」

「あー、どつちだらうなあ！ そういうのつて、話を聞くと案外、どつちも有りそうだったりして、それ考え始めると面白いんだよな！」

犯行を自供しようとするんじゃないよりリスさん！

何のためにキミは証拠を隠滅しようとしたの!!

俺の隣でちよつとご機嫌ナナメなりリスが俺を睨むが、お前、自分が口走ろうとした内容をよく考えて反省しなさいバカモノ。

「まあな。無責任に笑ってられるうちは、笑つとくのが得だわな」

グスタフさんの言葉に合わせ、俺も笑って誤魔化す。

どうか、笑ってる間に噂話として風化してくれますように……!」

話しちやマズい話題と判るものの、やったのは自分と大つぴらに語れないフラストレーションにご機嫌ナナメなりリスを宥める為、俺はリリースと2人で商業区の食品区画に来ています。

甘いもん食おうぜ、ってことで。

「パウンドケーキは危険って何でなの?」

甘い物と聞いて一転、ご機嫌であちこちに視線を走らせるリリース。

「カロリー量がやべえんだよ。材料思い出してみ?」

実はスイーツ関係の「レシピ」に関しては、リリースの方が詳しい。

そりやまあ、ネットで拾ったレシピをそのまま記憶してるんだもん、詳しいよね。

実際に食べたことが無いってだけで。

「でも、現在はレシピも改良されてるんでしょ? 大丈夫じゃない?」

唇に人差し指を当てて、考え込むリリース。

ふふん、甘いんだぜ。

「言うほど変わつちや居ないし、なにより元レシピの通りに作ったほうがな、味わいが深いんだよ。人によつちやあ『罪の味』つ言つてな?」

小麦粉、砂糖、バター、卵、それぞれ完全同量。

カロリー気にしちやあ、本来は食えないお品だ。

「スイーツの基本って攪拌かくはんと言うか、混ぜる事な気がするのよな?」

勿論、俺の勝手な偏見だ。

偏見だけど、そんなに大きくズレては居ないと思うんだ。

「んー? まあ、必ずしもそうだとは……でも、大体はそんな感じか

な」

生クリームだつてそんなんだぜ？　もう、基本動作なんじゃないのか、かくはん攪拌作業。

んで、そういう、混ぜる、かくはん攪拌する作業っていうのは、つまり。

「お菓子作りの基礎つて、錬金術師の得意分野じゃね？」

俺の言いたいことに、リリスが思い至った様だ。

最初の一回は、作り方を見せる意味もあるので、俺がやって見せる必要は有るだろう。

だが、その作業を覚えたなら。

「レイニーちゃんがタネを作つて……！」

焼きの作業は経験が物を言う。

だが、その経験をもち、遺憾無く発揮してくれる存在。

「ウォルターくんが焼いて、モノによってはデコレーションして！」

あの料理好きの事だ、始めたならばきつと凝り始める。

そういうしてる間に、レイニーちゃんまで調理の方に手を伸ばしちゃったりすれば……！

ていうか、いつそあの2人結婚して店開けばいいのに……！！

「イリスちゃん、戻ってきて。現実わらめだに帰ってきて」

ハツとし辺りを見渡すが変に悪目立ちわるめだこそしていないが食品区画の外れ近く。

全然気が付かなかつた、妄想も程々にしよう。

「んじゃあ、どうしようか？　悪魔のお菓子をこの街に産み落とすのか、ヘルシースイーツを流行らせるのか」

リリスの提起に、俺は腕組みする。

正直な話、俺とリリスは人間をベースに肉体を作っているが、人間とは違う「存在」なので、カロリーなんぞ気にする必要がそもそも無い。

味覚は人間に準拠しているので、美味しいとこだけ味わつて、カロリーの悪夢に悩まされる事は無い。

「罪の味つてのに、興味は有るんだけど……悩ましいわね……」

うーん、さすがのリリスでも、即断という訳には行かないか。

だったら。

「リリス、仕方がない。こういう考えは好きじゃないが」

俺の決意を含んだ声に、リリスがハツとして顔を向ける。

「俺たちは、ただ与えるのみ。選ぶのは、人間に任せよう」

リリスの顔を見て、ニヤリと笑う。

「素敵ね、神様気取りという訳ね？」

リリスも、邪悪な笑みを返す。

決まった。

悪魔の双子のプレゼントは、カロリーの暴力、元祖パウンドケーキだ。

砂糖はキッチンにも工房にも有るが、此処は俺たちが用意するのが肝要。

小麦粉、砂糖、バターに卵。

ドライフルーツはそのうち挑戦したいので、販売していることを確認できただけでも収穫だ。

バナラビーンズは有るには有るが、あんまり量がない。

そう言えば、バナラエッセンスってどう作るのかリリスに聞いて、問題が発覚。

この世界で、酒精の強い酒を見てない。

バナラエッセンスと言えばウオツカが定番（リリス調べ）らしいが、そもそもこの世界ではウオツカなぞ見たこと無い。

そんな強い酒が有れば、あの酒樽の妖精が放ほつとく訳もないだろう。

……今回はバナラエッセンスは見送りだ。

材料も揃ったので、屋敷に戻ることにしつつ、途中で思いついてヘンリー不動産に。

塀の一部と建物の一部を改造したいので、近いうちに屋敷に職人さんを派遣してもらえるようお願いして、今日は即退散。

屋敷に帰ったらまずはレイニーちゃんと、ウォルターくんを捕まえないきや。

バタバタと屋敷の中を走ってマシユウ君に怒られつつ、まずは工房へ。

「へい彼女お！ 暇してる？」

工房では、一息ついたらしいレイニーちゃんがぼーっと椅子に座っていた。

「はい？ ああ、お帰りなさい、つていうか早いわね？ お昼食べてすぐ飲みに行ったのに、1時間位で帰ってくるなんて」

このセリフだけで、俺達が普段、どんだけバーに入り浸ってるか判るね。

今日はまあ、話題的に居づらくなって逃げてきたんだけどね？

「ふふふ！ お嬢さん、悪魔のお菓子に興味無いかね！」

ボデイソープやらシャンプーの本日分を作り終え、でれんと呆けきったレイニーちゃんに、俺は大仰にポーズまで決めて言い放つ。

「甘いやつですか？ 今丁度欲しい気分ですよー」

頑張つて働くと、甘いものが欲しくなるよね！ 判る！！

「よし、では早速ウォルターくんトコに行こう！ 取り敢えず最初は俺が作るけど、最終的にはレイニーちゃんの方が上手く作れる筈なんだ！」

我ながらテンション高すぎて、レイニーちゃんが着いてこれてないのが良く分かる。

だけどコレは食べて見て欲しい、そういう逸品だ。

そんな訳でお目当てのオーブンがあるキッチンへ。

「たーのもー！」

「あんだよウルセエな！」

厨房の掃除を終わらせ、一服していたウォルターくんが俺のテンションに負けじと怒鳴り返してくる。

あ、一服と言つても、お茶を飲んでただけだよ？

ウチの屋敷で、タバコ吸う奴居ないね、そう言えば。

「タバコは舌が鈍る。俺は凡人だからな、味をぼかす要素はなるべく排除しときてえんだ」

うーんストイック。

それはそれとして、今日の目的は冷やかしじゃ無いんですよ。

「まあ、そんな訳で、焼き菓子を作りたいんですよ大将」

言いながら、作業台の上に材料を並べていく。

「ああん？ 焼き菓子……って、俺は作った事ねえぞ？」

ちつつちつつ。

ウォルターくんがお菓子作りに興味なんて持って無かったことなんて、風貌を見れば一目瞭然いちもくりようぜんですよ。

「最初は俺も作るよ。でもね」

挑戦的に、真正面からウォルターくんの目を見つめてやる。

「かくはん攪拌作業のプロたる錬金術師と、焼きの工程なんざ呼吸するのと同じ、って言う料理人が、素人の作業を見て真似できない、いや超えることが出来ない道理は無いよねえ？」

殊更に挑発的に。

レイニーちゃんとウォルターくんが、顔を見合わせる。

「あの、かくはん攪拌のプロってなんだか語弊がありますよね？」

「こつちもなんだ、妙に持ち上げやがるが、何を企んでるんだ？」

胡散臭げな2つの視線。

なんだか遊んでると思っただけらしい子供達や、ギイちゃんに引つ張られてヘレネちゃんもキッチンを覗いている。

「おう、なんだなんだ、ガキ共も来たか。ほれ、入ってきやがれ。イリスが何かやらかすらしいぞ？」

やらかすって何だ料理馬鹿。そういう口はなあ、結果を見てから言いやがれい！

という訳で、ろくに自炊もしていない元アラサー男の、おっかなびつくり料理ショーの開幕である。

常温で柔らかくなっているバター110グラムを泡立て器で混ぜる。

正直舐めていたのだが、単純作業に腕が悲鳴を上げそうに。

しかしこの工程を含め、全てを「見せる」事が重要。

俺は腕と喉から上がる悲鳴を抑えつつ、白っぽくなった所で砂糖を投入。

ただし、一回で全部ではなく、3回位に分けると良いらしいので、混ぜては砂糖、混ぜては砂糖できっちり3回に分けての全投入。

すかさず卵を1個投入、腕力勝負で混ぜ合わせたら、更に卵をもう1個。

ここで、ふるっておいた小麦粉を……ふるっておいた？

リリースの方を見れば、どうやらその工程は先にやってくれている様子。

その工程も、職人ズはちゃんと見ていたらしい。

流石だぜ！

そんな訳で小麦粉も投入。

この先の作業は泡立て器ではキツイ、というか泡立て器が破損するので、ヘラを使用。

ダムにならないよう、ヘラを使って斬るように混ぜていく。

ここで妥協してしまうと台無しなので、慎重に、だけど大胆に！

「はぁー……此処までで、私に見せたかった意味が判りました……手作業でコレ、すっごい大変じゃないです？」

溜息を吐いて、レイニーちゃんが俺の手元を眺めた感想を漏らす。

モチロン大変だよツ！

俺はいい笑顔で答えるつもりが、声が出ていない。

ちよつと集中し過ぎであるな。

咳払い咳払い。

「まあ、大変だけど、各ポイントを抑えて、レイニーちゃんが作業すれば……一瞬じゃない？ コレ」

正直癪では有るが、現実を受け入れなければ先に進めない。

考え込むレイニーちゃんは、しばし目を閉じた後、俺の目を見据えてハッキリという。

「楽勝です」

ですよね！

「錬金術の嬢ちゃんの出番は判るが、俺の仕事はいつだ？ 焼くとか言ってたが？」

おやおや、ウォルターくんが痺れをきらさせたようだ。

しかもまた、タイミングの良いことだねえ。

「ふふん、お待たせだぜウォルターくんよ。コイツを型に入れて、つと。これを、180度のオーブンで45分程度、焼いて欲しいのさ」
「お、なんだコレをオーブンで焼きや良いのか？ 温度上がるまでちよつとかかるけど、大丈夫か？」

言いながら、ウォルターくんは手早くオーブンの準備をする。
ちよつと時間が有る、って事で、レイニーちゃんも動き出す。

「私もやってみて良いです？ 今見てたので、多分出来ると思うんです」

良いね、元よりそのつもりだったんだ。

材料を手渡し、改めて分量を伝える。

かつ、分量はレシピによつては前後10グラムせんごの差が有る事を伝える。

要は好みなのだ。

「なるほど、じゃあ、まずは私も110グラムで、コレを基準に何度か作って見る感じですかね？」

言いながら、作業を開始する。

俺は「バターを混ぜる時は空気を練り込むイメージで」とか、偉そうに講釈。

どうせ物の数時間で立場逆転の予定なのだが、今くらいは良いじゃない。

それにしても錬金術はスゴいねえ。

出来上がりのイメージが出来てさえ居れば最適の工程を踏んだ事になるというのは、やっぱりズルいと言わざるを得ない。

そんな訳で、2つの型にそれぞれタネが出来た。

程なくオーブンの準備も終わり、焼きの工程に。

「所で、あんな型、良く有ったな？」

ウォルターくんの疑問に、俺も領かざるを得ない。

調理具を売ってる一角で見かけたのだが、正直、なんで有るのかと。

……あ、パン焼くのかな。

まあ、都合の良いことの1つ2つ、有っても良いじゃないのさ、た

まにはね。

そうして焼くこと45分、オーブンから出して10分程置いてから、型から外して切り分ける。

竹串チエツクを忘れてたが、ちゃんと焼けているようで良かった。遅れ馳せで2人に竹串チエツクを教え、先に言えとウォルターくんに怒られる。ごめんて。

そして実食^{じっしょく}。

騒がしい感想の言い合いは割愛するが、俺とリリスの大勝利と言つて良い。

なにげに初パウンドケーキのリリスの笑顔がとても可愛く見えたのは、身内鼻肩だろうかね？

やる事はエゲツないのにね。

人体実験とか。

みんなで仲良く食べた後で、思い出したようにレイニーちゃんが口を開く。

「あの、そう言えば最初に『悪魔的なお菓子』つて言ってみましたよね？

何の事なんです？」

不思議そうな顔。

ああ、今それ聞いちやうのね？ 話すけど良いのね？

俺の前フリに若干顔をひきつらせ、説明後には俺はレイニーちゃんに掴みかかられていた。

うははははは。

美味しかったもんねえ？ 食べちゃったもんねえ？

楽しーなあ！

レイニーちゃんとヘレネちゃんが、今度はジエシカさんも巻き込もうと妙な同盟を結成している一方、カロリーなんか気にしない、元氣いっぱい運動ざかりの子供達は次回のオヤツを心待ちにしている様子。

意外な事にウォルターくんも気に入ったようで何より。

「いや、色々できそうじゃねえか。果物混ぜたりとか」

悪魔的菓子にさらなる改良案、衝撃を受ける2人の少女。

あ、俺とリリスは予想してたサイドだから、今更そんなんでも衝撃は受けないよ？

「果物だと水分増えて焼き上がりに影響しそうなのがなあ……あ、ドライフルーツだったらどうだろうね？」

さり気なく「思いついた」風を装って入れ知恵。

なるほどと頷くウォルターさんと、頑張つて悪魔の誘惑に抗おうとする錬金術師とメイドさん。

子供達がもう既に期待の声を上げているので、コレに抗うのは無理ですな。

「そうすつと、ドライフルーツも自家製で作りたいな。今度やってみるかね」

お菓子作りに前向きになってくれたので、これは頑張ればショートケーキまで行けるかな？

レイニーちゃんが揺れまくってカワイイそうなので、カロリー控えめレシピなんかも織り交ぜつつ。

俺はまだ気付いていなかった。

今回はたまたま、パウンドケーキの作り方を知っていたから、被害が無かったという事に。

俺はスイーツ作りなんぞした事がないので、基本的にレシピなんて知らない。

しかし、レシピはリリスが持っていて、「伝達方法」もリリスは持っている。

俺が実践して見せれば良いと知ってしまったリリスは、大事なレイニーちゃんに無闇に負荷を掛けるような真似はしない。

近い将来、自分の脳がパチパチ言うことになるとは、俺は考えもしていなかった。

「国喰らいが処刑されたそうだな」

爽やかな昼下がりの陽光を受けるテラスで、場にそぐわない影が5

つ。

「人の話を聞かないで好き放題するからですよ。下手な事を喋ってやしないか、気が気じゃないですね」

影の1つが、大仰に肩を竦めて見せる。

「大丈夫じゃないですかね？ 聞いた話ですが、モンテリアに連行された時にはもう、喉をやられて喋れない状態だったとか。そもそも瀕死で運び込まれたらしいですし」

別の影がそれに応える。

「いずれ我らも辿る道よ。享楽に身を委ねた、堕ちた我らにとっては、羨むべき最期なのかも知れん」

どこか羨望を帯びた溜息に、1人が反応する。

「そんなもん、羨ましくもねえよ。それに、堕ちた理由はそもそもが復讐だ。俺たちはそれぞれ、まだ復讐は果たしていない」

目的を果たしても居ないのに、死んでたまるか。

「それで、今回集められたのは、国喰らいの冥福でも祈るつもりですか？ そろそろ、目的をお教え下さいよ」

今まで口を閉ざしていた1人が、先を促すように口を開く。

世界に仇成す6名。

それぞれの理由で、ヒトで有りながらヒトに害を成す、6人の災厄。その1人が滅ぼされた。

「国喰らいを屠った相手には、手を出さぬほうが良い、と言う報告だ」残る4人の顔が、自然と発言者に向く。

「理由を聞いても良いか？ 別にあれの復讐なんざする気もないが、立ち塞がるようなら殺つちまや良いだろう？」

1人、荒い口調が疑問を述べる。

復讐心に突き動かされ、力を求め、力に呑まれたその身だが、それだけに己の力には絶対とも言える自信があった。

「国喰らいを追い詰めたのは、単身の魔道士だそうだ」

静かな声に、再び時間が停まる。

「それも、無傷でな」

静かだった世界が、ざわつく。

魔道士など、国喰らいにとって最もあしらい易い相手ではないのか？

あの呪詛は最早物理的な障壁とも言えるレベルで、並の魔法なら無効化できるし、並を超えていた所で容易く破れる物ではない。

少なくとも此処に居る5人ですら、国喰らいがゴーレムを纏っている間は有効打を与えられる自信は無い。

「魔道士が単身で無傷だと？ 幾ら何でもフカシの度が過ぎるんじゃないのか？」

荒い声が、僅かに怒気を帯びる。

認めたくない故か、それとも、戦いたいのか。

「詳細は判らん。獣追いが力を貸していたらしいが、それも全て倒されたと聞く」

ムツツリと黙り込む声に、影の中の、別の声が応える。

「ああ、僕が術を教えて、力を貸してたんだけどね。あの姐さん頑張って500近く創ったのに、あつという間に薙ぎ払われたよ。間違はなく、たった1人にね」

ごく軽い、朝の挨拶のような報告は、それだけに異様な凄みが在った。

「僕が観察用に紛れ込ませてた子も、巻き込まれて壊れちゃった。お陰で最後までは見れなかったよ。出鱈目な力も在ったもんだね」

つまらなそうに言葉を締めくくり、僅かな静寂が場に流れる。

「断定は出来ん。だが、異界のモノである可能性は高い。手出しは無用だろうな」

重々しく発せられた言葉に、溜息や舌打ちなど、大凡友好的とは言えない反応が並ぶ。

「俺たち以上に気紛れで、俺達ほど人を憎んじや居ない。それだけでも厄介な、化け物……か」

かつて各国で発見された異界のモノ達の報告を思い出す。

どれもこれも、出来の悪い冗談のようでは無い。

だが、その半分程度でも事実であったなら、それは油断どころか、そもそも敵対なぞ出来る存在ではない、と言う事。

「それが現れたというだけで脅威だ。我々はまだ、それぞれ目的を果たしていない。別に好きにすれば良いと思うが、こうして結託している誼だ。無理はするな、程度は言わせて貰おう」

言いざま、影が1つ消える。

「やれやれ、爺さんはせつかちだね？　言うだけ言つて消えちやつたよ」

肩をすくめる影。

「だが、注意すべきという事は判つた。復讐を志す身に『無理をするな』とは笑えん冗談だが、障壁となるなら兎も角、関わらずに済むならその方が良い。忠告は素直に受けるとしよう」

静かな声が宣言するように言うと、そのまま消え去る。

他の影も同意であつたり悪態であつたりを残し、次々と消えゆく。「……冗談じゃねえ。そんな面白いモン、放つとく手こそねえだろうが」

最期に残つた影は顔を上げ、彼方の空を見やる。

「モンテリア、言つたか？　面白え。遊んで貰おうじゃねえか」

眩きを残し、影は消える。

日差しを受け止めるテラスには人の姿はなく、始めからそうだった様に、風が遊ぶのみであつた。

第21話 イリスと本格銭湯の気配

ウチのリリスさんが大暴れした痕跡は日常の様々な噂に紛れ、たまに聞くかな？ 程度の物に。

そんな中、パウンドケーキのレシピは相談の末、商業区のお菓子屋さんと提携し、商業ギルドへ登録される運びに。

ここ2週間程で、レイニーちゃんの登録している商品の数が結構な数になり、間違いなくウチ一番の稼ぎ頭だ。

ちなみに、パウンドケーキのロイヤリティにウチこと「ノスタルジア」は絡んでない。

ウチではアレを売る予定は無いし、何でもかんでも絡んでいくと、色々と面倒臭いことになりそうだったので、レイニーちゃんがお菓子屋さんに売り込んだ、という形になっている。

ウチで作って食べれば問題無いし、プロの技術でどう変わっていくのかを見ているのも、きつと楽しいだろう。

それらの出来事とは別に、先週ウチの従業員に給料をお支払いしました。

本当に払う気有ったのかと驚かれて、ちよつぱり傷ついた俺です。

娯楽の普及と称してリバーシでも流行らせて、街の機能を麻痺させてやろうかと、異世界モノっぽいことを考えつつお昼ごはんを待つ。

そんな時間帯に訪れたお客さんに隠しもしないで舌打ちしつつ、セレネちゃんの案内で玄関に向かうと、そこに立っていたのは商業ギルドのお偉いさんらしき人と、レイニーちゃんの担当の人だった。

レイニーちゃんは先に来て何やら話をしているらしいね。

いやそんな事より、昼飯時ひるめしときに来るんじゃないよ全く。

「お待ちせしました、『ノスタルジア』マスターのイリスですよ」と
当人比3割増し程度の仏頂面だが、仮面のせいで伝わっていないだろうと気づいたのはたった今だ。

まあ、声の方にも愛想が乗っていないので、多分、ちよつぱりご機嫌ナナメ、くらいには思っただろう。

実際ご機嫌ナナメだしな。

「あ、あの、イリス？ どうしたの？」

寧ろレイニーちゃんが慌てておる。

どうしたのかった？

「事前連絡無しで昼飯時ひるめしじきに来られて、すごぶる機嫌悪いから帰って欲しいだけだよ？」

もう面倒臭いので、仮面を外して遠慮無しに睨みながら言ってる。

それだけで、お偉いさんが気絶した。

精進が足らんわ。

気絶したお偉いさんは客間に放りこみ、看病は担当ちゃんに任せ、俺達は呑気に食事。

ウォルターくんの料理は美味いね、相変わらず。

あ、今日はパスタでした。

「イリス、そろそろ商業ギルドの人……」

え？ あつ。

ごめん、3行で忘れてた。

でもなー、どうも気が乗らないんだよなー。

「先程は大変失礼いたしましたッ！」

気乗りしないながらも客間を覗いたら、ああ、こんな異郷の果てで、まさかのジャパニーズ・ドゲザスタイルを眺める事になるとは。

っていうか、そんな必死に謝るくらいなら、最初から飯時めしじき避ければ良いのに。

「あー、まあ良いから、そんで話ってなんなの」

字に起こしてみるとすげえ偉そうなセリフだけど、実際は引いちやつてる俺。

流石に土下座は想定してないよ。

お腹なか空いただろうし、なんか土下座見てたら可哀想な事した気になるし、ドライフルーツ入のパウンドケーキとお茶を出してもらおう。

早速働かせちゃつてごめんね、ヘレネちゃん。

そう言えば、カレンちゃん、ティアちゃん、ギイちゃんのお子様3人娘も、最近はヘレネちゃんにお茶の淹れ方とかを習っているとか。冒険者より良いと思う程度には、あの子達にも身内として心配もするようになった。

男の子組はグイクンも冒険者になったとかで、ノービスクラスで頑張っている。

たまに、タイラーくんが面倒見たり、俺と一緒に遊んだりしてるけど、やっぱり無理とか無茶はして欲しくない。

それでもその内しちゃうんだろうなあ、男の子だし。

「本日お伺いしたのは、是非、お知恵をお借りしたく思っています」
言いながら、いかにも中間管理職上がり、と言った風情の疲れた表情で、男は俺に商人ギルドのギルドカードを提示する。

アラン・ウォーデン、41歳。

この世界としては高齢の部類なんじゃないかな？

肩書は都市歓楽施設部統括、とある。

統括？ お偉いさんっぽいんじゃないかと、ホントにお偉いさんだった。

その割には随分フットワークが軽いと言うか、ホイホイ現場に出ちゃうタイプ？

それに随分と腰が低いと言うか、優しすぎでない？

こういう立場の人が俺がさつきやったような対応に、怒りもしないとか……大丈夫なのかな。

それにしても、だ。

「はあ……お知恵って、歓楽施設？　なんだ、娼館でも取り仕切ってるのかい？」

俺が思ったままだとすると、アランさんは力なく笑う。

「ははは、まあ、そちらも扱っておりますが……そちらのご相談では有りません」

ああ、扱ってるのね。

そっか、成程ね？

まあ、俺はこのナリじゃお世話になる事も無いし、気にしてもしよ

うがないか。

うん、気にしない気にしない。

……どんな美人さんが居るのか、今度冷やかしに行ってみようかな？

「んぎゅッ!」

隣のリリースさんに足を踏まれる。

なんで？ 俺、今回ばかりは確実に、声になんか出してないぞ？

「？ どうかされましたか？」

アランさんがキョトンとした顔をしているが、流石にテーブル下の惨劇にまで気付く筈もない。

「いえ、実に美味しそうな……じゃなくて、そう、夕食の献立を考えてまして……」

咄嗟に思ったままの事を言いそうになって、慌てて考えても居ない事に言い直す。

隣には、澄ました顔で茶を飲みながら、人様の足を踏みつけたリリースがティーカップを口元に寄せている。

ぐぬぬ、と思つて睨みつつ、ふと気づくとレイニーちゃんまで俺を進路上のゴミを見るような眼で眺めている。

なんで？

「そ、それで、その都市歓楽施設部統括さんが、一体何を？」

爪先踏まれるのって痛いよね？

なんでこの子は平気で人の足踏めるの？

「はい、実は——」

そこから始まるのは、実に長い話だった。

交易の要衝たるこの街（初めて知った）、アルバレインは東西と南からの大街道の交差点であり（初めて略）、当然人の出入りは激しい。

なるほど、活気のある街だけど、この世界は人口が多いのかと思つたら、何の事はない、この街が規模の大きな交易都市だったという訳だ。

広い街で、南門の方には余程の用事がなきや行かない、行く気にならない程度には離れている。

それに、南側ってこつちと違って本格派の貴族さんの生息地域でしょ？ エンカウントしたら怖いじゃん？

自己制御的な意味で。

んで、そんな交易で賑わうこの街なのだが、ここ数年は東方の、1つ隣の交易の街で大規模なバザーが開催されたりと、そちらに商人の足も向かいがちなのだという。

アルバレインでもバザーをやったりもするそうなのだが、気合い負けというか、開催規模からしてどうしても一歩及ばず、このままではいずれこの街は「古い交易の街」として、静かに寂れてしまう、というのが商業ギルドの悲観的な観測なのだとか。

それを避ける為に、打てる手を打つ。

交易だけでなく、この街でのみ取り扱う、或いは他に比べて質の良い商品を作る等、動き始めているが、並行して目玉となる施設が作れないかと、そういう話が出たのだそうだ。

ざっくりとこう言う話なのだが、ここまで聞くのにまあ長かった。適当な相槌がホントに適当になっていたが、アランさんは気にしていない様子。

「と、そういう訳でして。向こうのバザーの時期に負けてしまうのは仕方ないですが、何かこう、目玉になるような施設とか、そこで行う^{イベント}催事とか、そういったもののアイデアを広く募ろう、と言うことになったのですが……」

ん？ なに、なんで齒切れ悪いの？

「何処もまともに取り合ってくれず……協力してくれるスポンサーも見つからない状況なのです」

あらららら。

それって致命的じゃない？

「はい、致命的以前に、何をする資金も無いのです……。どうしたものかと」

あっさりと計画の八方塞がり感を認めるアランさん。

うーん。

商業ギルドからの持ち出しも当然有るけど、大規模な仕事はスポン

サーが付かないと動けないだろうなあ。

アイディアそのものはまあ、温泉とか思ったけど、そもそも源泉が無さそうだしなあ。知らんけど。

いや、温泉に拘こたわる理由はないか？

うーん、とりあえずスポンサーの話は一旦置いて、話すだけ話してみるかね。

「アランさん、この街、水資源ってどうなってるんだっけ？」

訪ねながら、俺は知っている限りの街周辺の地図を思い浮かべる。

東側に川があつたが、そこから生活用水を引き込んでるんだろうか？

しかし、そんなにでかい川でも無かった気がするんだけどなあ……。

「ああ、生活用水は、地下水脈が街の真下を通っているので、それを汲み上げて居ますね」

ええ？ 川が有って、地下水脈まで有るの？

「……今まで、水不足になった事とか、有るの？」

というか水資源豊富ってスゴいな。

東の川は、畑用の用水を引いたりとか、なんかそういう使い方がメインらしい。

南と、東も川の先は知らないからなあ。

東門の外なんて、薬草採りに行ったことしか無いや。

「水不足は、私は経験したことが無いですねえ」

顎に手を添え、アランさんは答えてくれる。

ふむふむ、じゃあ、多少の水の再生処理を考えてやれば、問題は無いのかな。

水の使用が出来るなら、温泉じゃなくてもやりようはあるね。

「なるほど。んじゃあ、その潤沢な水資源を使いましょうかね」

「はい？ 水……ですか？」

俺の考えが読めないアランさんに、俺はニヤリと笑って見せてから、レイニーちゃんに顔を向ける。

「レイニーちゃん、今度は魔道具技師の腕を見せて貰うぜ。取り敢え

ず、ヘンリーさんの不動産屋に行こうか」

詳しい話は、ヘンリーさんを混じえて、可能かどうかの意見を聞きながら。

話が見えていないレイニーちゃんと担当ちゃん、アランさん、それに暇つぶしに着いてくるリリースを引き連れて、俺はヘンリー不動産へ。

その前に、お土産用の焼菓子やきがしセットを忘れずに。

自分でこっそり食べたり、子供達のお土産用の分の確保も目論みつつ、お菓子屋さんへ顔を出すのだった。

久々のヘンリー不動産。

今日は商談と言う事で、応接室に通された。

「お待たせしました、リ……リリースさん、お久しぶりです。リリースさんもお元気そうで」

ヘンリーさんはいつも通りの紳士だ。

一瞬俺の名前を間違えたようだけど、余裕のスルー。

リリースも此処では野暮な事をせず、俺と揃って仮面を外し、軽く会釈。

「お久しぶりです。今日は商業ギルド絡みの案件で、ちよつと規模の大きな賃貸物件を紹介して欲しくて相談に来ました」

まずは簡潔に、来訪目的を告げる。

「ふむ……まずはお話を伺っても？」

人の良い紳士の面影を残しながら、商人の眼差しでヘンリーさんは俺達の対面に腰を下ろす。

「はい、では、まずは事のあらましですが……ウォーデンさん、説明をお願いできますか？」

俺が話を振ると、アランさんは慌てず頷き、説明を始めてくれる。

こういう場面での場馴れ感流石のものが有る。

……のんびり気質も併せ持つので、うっかり人様の飯時めしじきに訪問しちゃうお茶目な一面も有ったのだろう。

きつと。

そんな事を考えている間に、概要の説明が終了。

「成程、大筋は理解しました。しかし、具体的には何を為さりたいのか、そこをお聞かせ頂けますか？」

ヘンリーさんが頷きながら言う。

アランさんは具体的なアイディアを持っていない、というよりアイディアを求めてあちこち走り回ってた人なので、手持ちに具体案はない。

この街の有名な商人とか、色々回ってウチに来たのは最後までいい。ろう。

ダメ元だったんじゃないかな？

まあ、ダメ元ついでに、俺の案を聞いていってよお客さん。

「銭湯をやりたいたいですよ」

ざっくりと言う。

ざっくり過ぎるしそもそも銭湯なんてない世界？ だし、ヘンリーさんもアランさんも担当ちゃんも、目を丸くするしか無いご様子。

「銭湯つてのは、大規模な入浴施設ですよ」

このアイディアは、最早ある意味でこの街の特産品となりつつある、ボディソープやシャンプー、コンディショナー等の「お風呂用品」の普及を後押しする目的も有る。

「でかい浴槽を用意して、そこに旅人を漬け込んで骨抜きにしよう、つていうのが大まかな狙いです」

「お、大まかすぎてイマイチ理解りませんー！」

担当ちゃんが手を挙げて発言。

うんうん、なんで挙手？

「まあ、ウチのボディソープで身体洗からだってもらって、その威力……効果の程を体験して貰ったら、風呂に浸かってのんびりして貰おうと言う算段ですよ。湯上がりにはエールはさぞ美味しいでしょうし、施設内に簡単な食事も提供出来るバーを併設してもいいでしょうね。あとはお土産コーナーでも作って、この街の石鹸自慢の力作を並べて。何なら、買ってそのままお風呂で試してもらっても良いでしょうね」

ヘンリーさんとアランさんが顔を見合わせる。

「宿泊施設を併設、とかも考えたんですが、そうすると街の宿屋さんが困りかねない。なので、銭湯に宿泊施設は付けません。また、建物内にはお土産屋さん程度の店だけで、中規模以上のお店は設置しません。これは宿屋さんと同じく、元から有る商店街の利権を損ねる事の無い様にするためです」

やろうと思えば、銭湯付きのでかい商業施設、なんて真似も出来るだろう。

だけど、そんな事をして元々有る商店街と客の取り合いとか、そういう真似はしたくない。

お互いに利用し会える、そんな関係くらいが丁度良いのだ。

大儲けを狙うと、足元が留守になりがちだ。

大金を手にしたけど転んで大怪我、なんてのは避けたい。

「銭湯……でかい風呂の方も、一工夫ひとくふうしたいですね。アイデアそのものは有るので、帰ってからでも、ウチの技術者と相談したいと思います」

俺の発言に、何も聞いてないレイニーちゃんがぎよつとする。

俺は軽く目配せウインクして、話を続ける。

「他にも、開発したい新商品から幾つかあるので、それも技術者と相談して、実現出来次第、導入しても面白いかも知れません」

此処まで話して、自分の話の酷さに笑ってしまう。

今の話の中で現実に出せるものは、今はお風呂セットしか無い。

良く言ってハツタリ、普通に聞いて詐欺だ。

「その、開発中の商品のアイデアは、詳細をお教え頂く事は可能ですか？」

アランさんが探るように俺を見る。

先程のレイニーちゃんの様子から、彼女は何も知らないと思われたらしい。

担当ちゃんは俺とアランさん、レイニーちゃんを等分に見回しているの、こちらはその事にも気づいていない様子。

「あはは。実はまだ、レイニーちゃんにも話してない物も有るのです。なので、それについても相談して実現可能かを検討する所なので、詳

細はある程度詰めてからで」

変に見栄を張つてもしようがないし、出来なかつたら目も当てられない。

俺は笑って誤魔化しながら、頭を搔く。

だが、今の俺の話を、ただのフカシでは無い、とは受け止めてくれたようだ。

それはそれでプレツチャーだけだね。

「なるほど。その、銭湯、ですか。そちらと付随する施設を含めた施設だけでも、集客は期待できるかも知れませんが、ですが……」

アランさんがヘンリーさんに目を向ける。

「それほどの規模の建物となると……」

ヘンリーさんも、アランさんの視線を受けて困つたように溜息を漏らす。

おや？ まさかヘンリーさんも思いつかないとか思わなかった。

……あれ？ もしかしてあの建物、賃貸は考慮してない？

えー？

アレ、住むのは不味いにしても、商業的な用途なら、行けるんじゃないかと思つただけだな……。

いや、最悪は買うか？

「ヘンリーさん、俺が家を買う時に候補に出てた、なんとか言う貴族のお家騒動が有った屋敷。あれ、賃貸には出来ないのですか？」

俺が言うと、ヘンリーさんは動きを止める。

貴族のお家騒動、である程度ピンときたのか、アランさんも顔を青くしている。

「その話を知った上で、あの屋敷をお使いになるのですか？」

当然だよ？

「あの屋敷、価格を相当下げますが、あれ、売れても儲け出ないでしょ？」

アランさんの発言に頷いて見せてから、俺はヘンリーさんへ言葉を向ける。

「ええ……なにせ、前の持ち主の幽霊ゴーストが出るとか」

んんん？

その話は初耳だよ、なにさ幽霊ゴーストって。

囁くのか？

って言うか、そんな物件勧めたの？

「ああ、以前お勧めした際は、案内の者に事情の説明をするように言っておりましてので。2軒目の物件を押すように、とも」

成程、そこは商人なんだねえ。

でも、危なかったよ？

もし下見に行くのが俺だけだったら、あの屋敷を買ってたよ？

格安超絶豪邸、しかも曰く付き。

その上幽霊ゴーストまで出るとなったら……ん？

「ヘンリーさん、その幽霊ゴーストって、具体的に危害を加えてくるのか？」

ここは魔法も有りの異世界だった。

最近は当たり前に受け入れてるけど、まだ俺が見ている夢である可能性は消えてない、ってのは一旦置いてこう。

幽霊ゴーストとか、普通に魔物扱いっぽい響きだし、魔法とか使って来そうな気がする。

呪いとかも。

「普通に攻撃して参ります。ただ、屋敷に愛着が有るようなので、追出す程度で済ませてくれるようですが」

ははーん、厄介じゃん？

ヘンリーさんもアランさんも固唾を吞んで俺の次の動作を待っている。

レイニーちゃんも担当ちゃん——そう言えば、担当ちゃんの名前何ていうんだっけ——も、同様に、俺の言葉なりを待っている様子。

リリスだけは気づいている。

あの顔はそうだ。

ここまでの事態は想定していないし、当然そんな俺が打てる手を持っていない、って事を。

困ったな……多分、仮に戦闘になっても、俺やリリスなら楽勝だと思う。

幽霊？ だってここ異世界でしょ？

魔法で倒せる相手なら、俺に任せろ、くらいの勢いですよ。ただ、今回は利用したい建物に居座る幽霊が相手。

下手に俺やリリスが魔法なんぞぶつ放せば、建物どころが街が危ない。

スペクトラルブレイドでどうにかなるかな……？

ダメだったら、他の魔法じゃあほぼ確実に建物を傷める。

ブレイドだって、使う場所次第じゃあ多少なり傷を付けてしまうだろう。

それに、変にこつちが粘れば、幽霊も形振り構わずに排除に動くかも知れない。

そうなれば、どうしたって建物が荒れる。

どうしたもんか……。

別の建物に、とか逃げ出したくもなるが、しかしあの物件は立地的にも魅力なのだ。

静かな中流貴族の屋敷の立ち並ぶ中、尚且、周囲とある程度距離がありつつ、あの無駄に……失礼、えーつと、広い庭園。

整備すればあの庭園でバザーが出来そうだし、片隅に建物を建てる許可が下りれば、警備の人とか衛兵さんの詰め所を置いたり、バザーの管理の人がそこに詰めたり出来そうだ。

公衆トイレも増設する必要がありそうだけでも。

そして、あの巨大な建物なら、巨大な銭湯を作ることも出来るだろうし、そこそこの物を幾つか作るのもアリだ。

2階はバーとかお土産屋さん、軽食専門店を構えても良い。

3階は各事務所関係。

なんならアランさんにでも、直接現場を見る、とか適当な理由をつけて事務所をここに移して貰うのも良いかも知れない。

そんな事まで可能な敷地面積と建物に匹敵する物件が、他に空いているとはちよつと思えない。

更には、立地的には貴族サマの屋敷が近い、と言う事も利点に成り得る。

あまり騒げば苦情も出るだろうが、あの落ち着いた町並み、景観の美しさは観光にうってつけだ。

季節ごとにバザーを開くとしても、雑多な商業区の一角ではなく、あの閑静な貴族屋敷の通りを抜けて、目指す先があの大邸宅。

バザーを開く方にも客として訪れる方にも、これはインパクトがあるんじゃないかな？

多少騒がしくなるのは、季節の風物詩として慣れて頂くしか無い。それに普段はあの広い庭が緩衝材になって、多少の騒ぎ声があっても気にならない……と、良いな。無理かな。

衛兵さんは、むしろ貴族サマが近くに居るからこそ、気合い入れて警備してくれそうだ。

まあ、貴族と言っても南地区程しつかりした感じでも無いらしいし、こつちに住んでる人はむしろ堅苦しいのは苦手って人が多いとも聞く。

出来ればそういう、庶民的には付き合やすそうな「貴族さん」とは、いい関係を築いて行きたいもんだ。

そんな訳で、あの建物は押さえない。

1号店、いやアルバレインの湯本店ほんてん（仮）としては、考えるほどアレ以上の物はない、気がする。

んで、此処が当たるようなら、別の区画に庶民向けの、ちよつと小さい施設を幾つか作っても良いのだ。

風呂を沸かす装置は有るんだし（ウチにも有るよ、毎晩の楽しみだ）、それを大規模にすれば良い。

それこそ、魔道具制作技師の腕の見せどころだ。

庶民向けの風呂の方は、ほうウチの風呂くらいの大ききで良いだろうか、つまりは現行の技術でどうとでもなるという事。

ウチの風呂？ その気になれば全員で入っても余裕あると思うよ？

野郎のナニなんぞ見ても楽しくも何とも無いから、絶対やらんけど。

あ、女の子チームはたまに一緒に入ってます。

中身オツサンの俺は、大体リリスに監視されてるけどね！
サービスのお風呂回？

無いよ残念だったな！

そんな皮算用を幾らしても、まずは幽霊ゴーストをどうにかしなければス
タートラインにも立てない。

どうしたものか。

「説得すれば良いじゃない」

考え込む俺と、無茶するんじゃないかと心配してる様子のヘンリー
さん他を纏めて思考停止に追い込む声は、俺の半身とも言える存在が
発したものだつた。

「はい？ リリスさん、なんて？」

きつと間まの抜けた顔をしている俺に溜息を吐いてみせ、リリスは言
葉を紡ぐ。

「だから、その幽霊ゴーストの説得をすれば良いじゃない」

実に短気なリリスらしい考えだ。

そんな簡単な事じゃなさそうだから困ってるんですよ？

「リリスさんや。キミの『説得』だと、屋敷が半壊しちゃうでしょ？
街に被害が広がったらどうするの」

「……アンタは私の説得を何だと思ってるワケ？」

どこか不満げに、半眼で俺を見ながら口を開く。

なについて、馬鹿なこと聞くね、この子は。

「殲滅って書いて、『せつとく』って読むんだろ？ 実にお前らしいけ

ど——！！」

言いかけた俺のこめカミテンブルに、真横からの衝撃。

正確に打ち抜かれ、脳を揺らされた俺はテーブルの上に崩れ落ち
る。

もしかして、顎にも良いの入った？ なにその神速の2連撃。

この子、実はモンク？

「アンタは、この天使とも妖精とも称される私を捕まえて何を言い出
すのよ。説得って言ったなら説得に決まってるでしょうが」

考え込んじゃう俺に、リリスが声を投げつけてくる。

ああ、殺戮の天使と死の妖精ですね？
殲滅^{せつとく}って言ったら殲滅^{せつとく}、了解です。

元氣な返事を返したいのだが、あいにく綺麗に脳を揺らされた俺が
まともな言葉を返せるようになるには、もうちよつとだけ時間が必要
だった。

領都モンテリア。

交易都市アルバレインから南に馬車で3日。

そのアルバレインをも凌ぐ巨大都市は、王都に於いて4番目に広
く、2番目に美しい街と称される。

その街を訪れた災厄は、思っていたのとは違う街の様子に戸惑いを
隠せずに居た。

「どうなつてやがる？ 化け物じみた冒険者の気配なんぞ何処にも
無^ねえ。そこそこやる、程度の連中なら見かけるが、とてもあの『国喰
らい』を単騎で相手できそうな奴は居そうに無^ねえんだが」

あちこち街を^{まち}ふらつき、それらしい気配を探るが見つからない。
気配を隠すのが上手い可能性は勿論あるが、冒険者ギルドを冷やか
しても見かけないどころか、それらしい噂も聞かない。

「最近化け物を退治した冒険者が居るって聞いたんだが」

と、手近な冒険者に酒まで振る舞っても、知っている者が居なかつ
た。

さては唯の噂か、そう思いかけた時に耳に入ったのは、アルバレイ
ンで大きな動きがあったらしい、と言う噂。

聞く話の方向を少し変えれば、アルバレインに最近少し目立つ、仮
面の双子の魔法使いが現れ、向こうではちよつとした話題なのだとい
う。

最近、領都に来て、領主の館^{やかた}にしばらく逗留していたらしい、との
噂もあったが、その噂を確認するために領主邸を訪ねるのは、いささ
かりスクが大きい。

適当に会話を切り上げ、呑み代を支払って街へ踏み出した彼は鋭い
眼光を空に向ける。

完全な無駄足では無い、少なくとも噂に上るような冒険者は存在した。

しかし、双子、と言うのが気にかかる。
単騎と聞いていたが、2人だったのか。

1人が2人だったところで信じられない話に変わりはないのだが。

「……悪目立ちしてもしようがねえ、アルバレインに行くか。無駄足って訳じゃねえだけ、マシだったな」

苛立ち紛れに暴れようかとも脳裏を掠めるが、その衝動は抑える。
なにせ各国で手配されているお尋ね者だ。

妙な真似をして存在がバレたら面倒だ。

負けるつもりなど無いが、この領都の冒険者や衛兵の大多数と渡り合うのは流石に骨が折れる。

目的は飽くまでも、復讐。

それを達成するまでは死ねない。

しかし、国喰らいを倒したという魔法使いには、酷く興味を惹かれた。

異界のモノ。

そいつを喰えば或いは。

世界に仇成す者の一角、「悪食」は先程よりも更に、期待の籠もった目を行く先へと向けていた。

第22話 死闘！ 夜の大邸宅！

商業ギルドからの相談を受けて、銭湯を作りたくなったのでむやみに張り切ってヘンリー不動産に。

しかし、曰く付き物件には攻撃を仕掛けてくる幽霊がいるとか。流石にそれは聞いてないよ、そう思うのも束の間、仲間の思いつきで幽霊の説得に当たることになりました。

絶対、説得（魔法）になる予感しかないんだけど。

失敗したらお屋敷お買い上げだけど、リリスさんはその辺理解わかてるのかな？

除霊じよれいじゃなくて説得って所に妙な引つ掛かりを覚える、そんな俺です。

一度おうちに帰って仮眠を取ってから、ウォルターくんの手作り晩ごはんを食べて、お夜食にサンドイッチを作って貰ってから、俺とリリス、タイラーさんとヘレネちゃん、そしてヘンリー不動産前で待ちあわせたエドモンドさんと共に、都合5名で曰く付きのお屋敷へ。

時刻はざっくり言うと21時くらい。

エドモンドさんは管理会社の立ち会いということで、鍵を持ってきてくれている。

ウチのメンツはなんで居るのかって？

俺が1人で行きたくないってゴネたからだよ。

心霊スポット凸の1人検証みたいな真似、誰が好き好んでやりたいと思うんだって話ですよ。

ジェシカさんはお肌が悪いからパスだそうで、ヘレネちゃんに「代わりをお願い」と軽く一言ひこと。

断れない系メイドさんのヘレネちゃんは泣きそうな顔で一緒に来てくれている。

タイラーくんが謎に付き合い良いのよな……。

さては俺に惚れてる？ ンなワケないな。

あ、アレか、やらかしの監視。

……身に覚えが有るから何も言えねえ……。

リリスは強制連行枠です。

俺だけにやらせようとか、甘いんだよお嬢さん？

という訳で、管理会社の人と押し付けられたメイドさんには同情しつつ、俺は張り切って屋敷へと向かう。

世の中には、空元気とかハツタリとかが重要な場面というものも有るのだ。

メイド服ってさ？

こう、種類こそ有るものの、やっぱこう、押し並べて良いもんだよね？

例の面接後の服選びで、まさかのメイドスタイル、それに近い服を選んできたセレネちゃん。

もしや才能持ちか？ と思い、後日、バーテンススタイルっぽい服を選んできたウォルターくんの物と合わせて、商業区の防具屋兼仕立て屋テラーにデザインを持ち込み——リリスによるデザイン起こしで作って貰ったメイド服は、無事にセレネちゃんのハートを直撃してくれたらしい。

ちよつと値が張ったものの、リリスのデザインに感動した店主の計らいでお値段はお勉強して貰いつつ、魔法処理に依る防御機能を拡張しており、戦闘にも耐えられる素敵な代物へと昇華している。

え？ ウォルターくん？

ああ、なんか喜んでた気がするね？

あと、多少髪伸ばしても良いよとは伝えといたので、これから伸びるんじゃないかな、髪が。

そんな事よりヘレネちゃんなんだよ、今は！

なにせ俺の敬愛する英国式メイドスタイルだぞ!!

あの長いスカートが良いんだよ！

ヘッドドレスも——当然リリスデザインで——喜んでくれたし、調子に乗って10セット注文したよ。

ちなみに、ウォルターくんのバーテンスマイルセットは5セット注文でした。

今はヘレネちゃんしか着る人居ないし、サイズもヘレネちゃんに合わせてるけど、後悔は全く無い。

俺がこの世界に来たのは、ヘレネちゃんのあの姿を見るためだったのかも知れない……！

「馬鹿エロドスケベイリス、妙な事考えてないで集中なさい」

俺の名前、また変わったね？

いい加減にしないとアレだぞ？ 泣くぞ？

俺は抗議を込めて視線を鋭くする。

傍^{はた}から見たら、多分ただのジト目ってやつだと思うけど。

「集中って、全然なんの気配も無いじゃんよ。お前らこそなんで呑気に遊んでんだよ」

呑気にトランプ——大富豪とか、お前らタイラーくん相手になんて不利な勝負を——に興じる愉快的仲間達に苦情を投げつける。

っていうかトランプとか有ったのかよ。

誰だよ先に持ち込んだ奴。

いや、独自にたどり着いたのかも知れないけどさ。

持ち込んだ者が居るのなら、それは俺やリリースと同じ転移者の可能性は考えた方が良さそうだ。

そいつが俺と同じ巻き込まれた者なのか、リリースと同じ自ら世界を超えた者なのか、どちらなのかで結構話が変わってくると思う。

「ちよつと！ このタイミングで革命って！」

「これは……プランが変わりますね……」

トランプを引き金に割と真面目に考え込む俺の耳に、リリースの悲鳴とエドモンドさんの眩きが飛び込む。

なんでエドモンドさんも普通に遊んでるんですかね？

「あ、あの、革命返しです」

「なんだと……?!」

そんな呆れモードに変化した俺の耳に、今度はセレネちゃんの躊躇^{ためら}

いがちな声と、タイラーくんの驚愕の声が滑り込む。

端的に言つて、ザマ見よ。

それにしても緊張感が無いメンバーを背に、俺は1階の大ホールで仁王立ちである。

それにしても、幽霊かあ。

割とゲームでは見かける敵だし、当然アイアブロ3でも居た……よな。

あれ、見た目は幽霊^{ゴースト}っぽかったけど、違ったらどうしよう。

当然のように照明の無い館内で、魔法による、熱の発生しないランタンが今の仲間たちの光源。

正直、遊んでるんなら帰れと言いたいが、言ったら間違ひなく全員帰るので黙っているしか無い。

克蘭マスターの威厳？ そんなもん何処で買えるんですかね？

そんな事を考えながら、ホールと真ん中の大階段を見上げる。

ウチの螺旋階段もお気に入りだが、こういう幅広の大階段つて奴もスゴいもんだね。

迫力が違う。

正面の大階段を上って、2階で左右に折り返し、2本？ の階段——言つても、これもかなりの幅広だ——を上ると3階へ。

惨劇の現場はこの建物全体。

酷かったのは、この大階段を上った突き当り、2階の大広間らしい。家族と、使用人の大部分がそこで、つて話だ。

……つか、大広間が2階？ 不思議な作りというか、プライベート空間が3階だから、2階も社交的な用途に使ってたんだらうかね？

そんな考えを脈絡もなく頭の中で走らせ、ついでに改装案を練りながら、ホールから左右に拡がる通路の奥を見やる。

特に夜目が効く訳でも無い俺では、最奥までは見通せないけれど。入浴施設を増設するなら、1階しか無いけど、このホールならおみやげコーナーの出張版みたいな、小さい店舗を幾つか置けそうだ。

本店？ は2階にして、1階はお土産コーナーとお風呂用品販売ブースを置くのが良いだろう。

「フルハウス、だ」

タイラーくんのドヤ声が後頭部を叩く。

続く悲鳴と嘆息。

……いつの間に、ポーカーに変わってるんですかね？

「うーん、やっぱり何か賭けないと面白くないわねえ」

そんな事言いながら、どうやらリリスは伸びをしているらしい。

ほほう？

随分熱中してたように見受けませんがね、姫様よう。

「賭けか。それも良いな、何を賭ける？」

タイラーくんが乗る。

「つーかお前ら、遊びに熱中しすぎじゃないかしら？」

「そうね……勝ったら、イリスを好きに出来るとか？」

おい待て。

なんだその年齢制限掛かりそうな提案は。

「なるほど、面白いですね。ウチで働いて貰うのもアリですね」

何で乗るの、エドモンドさんよ？

つーか、労働力としてかよ。

「ふむ、しかし色々な意味で魅力には欠けるからな……ああ、炭鉱に売
るのもアリか」

魅力に欠けるとかお前、ボディ以外は魅力のカタマリだろうがアア
ン？

つーか炭鉱とか、アリじゃねえよ、無しだ無し。

そもそもクラマス売り飛ばそうとしてんじゃねえよ。

号泣すんぞコラ。

「ここら、ウチの妹を勝手に販売しないで。儲けは6：4ね」

お前はなんで売上の権利主張してるんだ。

そうじゃないだろ、止めろよ。

「仕方ないな。じゃあ、俺が4と言う事か」

何が仕方ないんだ馬鹿野郎。

「あ、あの、私が勝ったら、イリスさんと1日一緒に居ても良いんです
か？」

天使は希望すら天使だった。

もう、1日と言わず、ずっと一緒に居て良いよ。

よし、クランマスター命令だ。ヘレネちゃん、勝って。

ホントにもう、なにこの可愛い生き物。

ヘレネちゃんは明日から公認クランマススコットで良いね、うん。

「じゃあ、私も参加しようかしらー。自由に動き回るのに、身体からだが有ると便利そうだからー」

なんだよもう、身体からだ目当てとか理解わかり易いと思いきや、憑依目的とか。

憑いてるね、じゃねえんだよ。

俺が困るわ！

一通り突っ込んでから、初めて俺は違和感に気付く。

振り返るが、ランタンに照らされた5人は特に何かに気づいた様子もなく、呑気にカードとにらめっこだ。

大階段を振り仰ぎ、ホールの隅々を見渡し、通路の奥にも再度視線を送るが、異常無し。

気の……せいかな？

どうも気を張りすぎてたらしい、と言うか、自分で思ってたよりもビビってたのかな。

溜息と一緒に肩の力を吐き出して、気分転換代わりに、後ろにいる5人に馬鹿話でも振ろうと考えた時に、俺は違和感の正体に気付く。

此処に居るのは、俺、イリス、ヘレネちゃん、タイラーくんとエドモンドさん、以上5名だ。

そして、さつき振り向いて皆を確認した時、そこに居たのは5人。……なんで俺の視界に5人居んだ？

えー……なにその……えー？

俺は意を決して振り返り、スゴい楽しそうにポーカーを楽しむ一同を見回し、ためらいがちに言葉を掛ける。

「……おい、リリスさん、タイラーくんよ。俺だけ真面目に働かされてるのをとやかく言う気は無いんだけどさ？」

俺が声を掛けると、面倒臭そうに顔を上げた2人は俺の方に顔を向

けて、声を発しようとして気付いたらしい。

輪の中に居ると思ひ込んでいた俺の音が、思わぬ方向から聞こえた事に。

俺に向けていた視線を外し、一度お互いに顔を見合わせてから、視線をカードを楽しむ輪の中へ。

「そちらのヒトは、どなた様？」

俺の言葉の意味を考え、漸く視線を動かしたヘレネちゃんとエドモントさんも、すぐにその姿を視界に捉える。

俺たち5人の視線の中で、6人目はにっこりと微笑んだ。

「あ、すみません、ドローしますー」

とても柔和な表情で指を2本立て、2枚ドローの要求をしているが、気付いて下さい。

貴女以外、みな手が止まっています。

確か、此処に出るのはちよつとはつちやけちやつたご当主様だと聞いてたんですが。

失礼を承知で年齢の話題を挙げるなら、結婚前とお見受けするお若いご婦人、というよりお嬢さんが半透明でお出ましである。

お出まじどころか、自然に輪に混じってカードに興じるとか、レベル高くないですか？

タイラーくんは無言で彼女に目を向け、少し考えたように動きを止めると、彼女が2枚手札を捨てたことを確認し、ストックから2枚、ちよつと遠いようなので引いて手渡してやる。

……いや、なんで普通に進めてるんだよキミたち。

「あー、お父さまは、暴れるだけ暴れて、満足してしまつたようですよー」
錯乱貴族の三女、丁寧の名乗つてから、メアリーちゃんはここにこ
と教えてくれる。

あー、そつか、成程。

好き放題暴れて気が済んだのね。

そう言う意味なら確かに、もうこの世に執着を無くしたかも知れないなあ、と、無責任に思う。

でもそれ、暴れた方は、って話だよな？

……殺された方は……？

「あー。それはまあ、殺された直後は何処に向けたら良いか判らない憎しみとか、恨みとかー。それなりに酷かったですけどー」

おっとりしたご様子で、ヘレネちゃんの淹れたお茶を味わうお嬢様。

そんなメアリーちゃんに対し、ヘレネちゃんは真つ青な顔でだいぶ引き気味である。

って言うか、のんびりした口調だから流しちやっただけど、結構凄惨な告白だよな？

「この建物を管理してくれる方々にはとても感謝しておりますがー、成り立ての頃は、割と見境無かったので、屋敷に来た方々には……ねえ？」

ねえ？ っってお嬢さん、何したの？

「あー、殺しては居ませんよー？」

最近、俺の心の声と会話する人が増えた気がするんだけど、そんなに顔に出てるの？ 俺？

え？ 実は声に出てる？

そう言うのはもつと早く教えてよ。

そんな思いとは別に、俺はエドモンドさんに顔を向ける。

「あ、はい、20年前、事件発生直後は館やかたには立ち入れず、無理に入ろうとした領主様の使いの方が大怪我をして、怒った領主様の御子息ごしそくが兵を突入させましたが、全員追い返されたという記録は有ります」

俺の視線を受けて、エドモンドさんは説明しながら懐から取り出した帳面を捲る。

何となく光源ライトを追加で唱え、エドモンドさんの補助を試みる。

「ただ、お嬢様の仰るとおり、重傷者は出ておりますが、死者が出た記録は有りません」

ほうほう。

中々やるのね、このお嬢さん。

「元々、魔法はそれなりに使えましたがー、この身体からだになってからは、

「一層魔法が得意になりましたー」
なるほどねえ。

ふと思いついて、俺はこのお嬢さんの種族だけでも確認出来るかも知れない、そう気付く。

実は鑑定スキルを持っていた？

まさか、そんな訳はない。

アイテムに関しては謎の力で「フレーバーテキスト」を見ることが出来るだけで、あれは所謂鑑定とは違うだろう。

意味不明な力の作用という点は一緒か。

元々ゲーム内で、なんでそんな事が出来るかなんて説明、されていないからなあ、ディアブロ3世界。

まあ、ゲームなんて往々にしてそんなもんな訳だけど。

で、そういったゲーム内の謎仕様は、この世界でも適用出来ている。同種アイテムの自動取得とか、自動金拾いとか、確認出来ているのは幾つか有る。

そんな能力の中、今まで意識もしてなかった能力？ を思い出したのだ。

まあ、大げさなものでも何でも無く、単にターゲットイングした対象の名前が判る、っていうモノだ。

ディアブロ3では、名前持ちのエリートかボス以外は、種族名しか判らない、レベルすらも不明だったが、せめて「レベル」と「名前」を知りたいものである。

その程度でも知れば大きいし、出来ないなら、今後は使用頻度は下がるといっただけだ。

用がない時、意識していない時は発動しないというのは非常に助かる。

常に視界の端になんかの名前とかが出続けるとか、気が散って仕方ない。

で、その能力によると……？

名前：男爵の狂った娘メアリー

L v : 7 2

種族：リツチ

おおん？

簡易情報というか、人によっては「それだけ？」と言われ兼ねない
シンプル情報。

しかし俺は思いがけない情報量に驚く。

知りたい情報が知りたいまま知れるって、すごいね。

都合が良すぎてこれもう絶対、俺、夢見てるか危篤かどっちかだよ
ね。

俺の状態はもうこの際置いてこう。

名前、これ、ディアブロ3風の二つ名っぽい名前だけど、変だよ
ね？

一家虐殺とかやらかしたのは、エドモンドさんの話とかでも、男爵
さんだよ？

だったらさ、表現するなら「狂った男爵の娘」じゃない？

この書き方だと、まるで……。

うん、今普通に話せてるっぽいし、良いんじゃないかな、掘り返し
たりしなくても。

「あー、それはアレですねー。殺された恨み的な感情の発露ですねー」
折角ぼかそうと思ったのに、また声に出してたのか表情を読まれた
のか、メアリーちゃんがあっけらかんと言つてのける。

殺された恨み的なって、もうそこまでハッキリ言つてたら恨みでし
か無いよね？

まあ、本人が割り切れてる風なんだつたら良いんだけどさ？

「10年位前まではそこそこ暴れてましたねー。やっぱり愛着の有る
建物なので、あんまりヒトに踏み込んで欲しくないですしー」

ほーう？

そつかあ、愛着有るよねえ。

一気に話し難い雰囲気、俺は気弱な視線をリリスに向ける。

此処に愛着の有る、狂った娘さんに……銭湯に作り変えて良いです
かって、話すんの？

俺が？

さりげに種族名が「リッチ」ってなってるけど、コレも確か、上位
アンデットよね？

色々合わさって、フツーに超怖こええんだけど？

優しいリリスは全然目を合わせてくれないので、もう無かった事に
して帰ろうかと本気で思う。

闘ったら勝てるのか、ステータスがどうかレベルが云々とか、そ
ういうコトじゃ無いよね？

「それで、皆さんはなんだか楽しげだったので私も興じてしまいまし
たがー？ 此方こちらにはどういったご用件だったんですかー？」

わあん。

なんか色々考えて撤退しようか悩んでる所に、のんびりと斬り込ん
で来こられたよ。

しかも、なんかこつちが勝手なことを提案しようとしているのを察
したのか、周囲の空気が徐々に温度を下げていく。

怨霊化しているのか、これからなろうとしているのか、いずれにせ
よ良い傾向なんかじゃないよね、絶対。

そんな風ふうにビビる俺を置いて、頼れる姉貴分、リリスが颯爽と口を
開く。

「えつとね、イリスが、此処を銭湯にしたいんだって」

ってちよつと待ってリリスさんよ、お前まへ何意気揚々と俺を売ってる
んだこの野郎！

更に下がる気温に加え、室内だと言うのに風まで吹き始める。

「ちよ、カードがー！」

もうお前黙ってろよりリスさん！

て言うかも、トランプそしまえ！

「セントー？ 此処をです？」

ほーら、お嬢さんにロックオンされたじゃんか、俺が！

身体からだごと俺の方を向いて、そしてゆっくりと宙に……ホールの
宙空ちゆうくうに浮かび、俺を、俺たちを睥睨するお嬢様。

「セントーとは……」

うーん、思い入れの有るお屋敷を改装するどころか、商業施設にし

たいです、なんて、ほぼ第一声でいう事じゃない。

リリスさんには、ホント、後で色々話すことがいっぱい有るな、コ
ンチキシヨウ!

「……一体何なのですー?」

見つめ合う俺とお嬢様。

んんんー?

お怒りなの……だよな、コレ?

お嬢様は中空で俺を見下ろし気味、程度の位置まで降りてきて、そ
してじっと俺の目を見ると。

徐に、小首を傾げる。

あつ。

これ、この子、もしかして。

俺の身の回りの、「変な奴」枠と同じじゃないのか?

ちらりと視線を向けた先の変な奴枠の方々は、流石にトランプは片
付けつつも何とも緊張感のない様子で俺とお嬢さんを見守ってい
る。

約1名は真つ青な顔で軽く震えてるけど。

何でお前らは他人事^{なん}ポジシヨンなの?

ポジシヨンのには、エドモンドさん以外は俺と一蓮托生だろうが。

エドモンドさんについてはホントにゴメン、管理会社責任つて事で
諦めて下さい。

「そう、それです! 私も、そのセンターとやらが判りません、是非お
教えいただきたいのです!」

そんな、俺の中で無害枠に入り掛けてたエドモンドさんが突然猛
る。

えっ、なに、どうしたの突然。

つていうか銭湯の概要は説明した筈……つて、そっか、あの会議に、
エドモンドさんは居なかったわ。

「あー……銭湯つていうのは……」

良いんだろうか、コレ。

説明したら、いやむしろ説明途中でお嬢さん大暴れつて展開になり

かねないんだけど？

俺はエドモンドさんの熱い視線を受けつつ、お嬢さんにフワフワと纏わり付かれながら考え込む。

なんだコレ、どういう状況だ？

キレやすそうな相手を怒らせないようにしたいのに、なんか良く判らん状況にどんどん追い込まれているようで、俺は知恵熱というものを知覚し始める有様だった。

悩みは深かったものの、悩んだ時間は短い。

怒らせるかも知れないが、素直に言うしか無いのだ。

嘘ついても余計怒らせるだけだし。

そんな風^{ふう}に腹を決め、怒り始めたら撤退、そう考えつつ、事情を手短に纏めつつ織り交せて、銭湯と言う物についての説明を行う。

「まあ……！ そんなに大きなお風呂なのですかー？」

その結果、すつごく好^{こう}感^{かん}触^{しょく}なのはこういう訳なんだ？

お嬢さんや、この屋敷に愛着が有ったのでは無いのかね？

「勿論、お屋敷は大事ですよー？ 具体的に言えば、私のお部屋がとても大事ですよー」

あ、自分のプライベートな空間を守りたいとか、そんな感じ？

屋敷全体じゃないの？

「お屋敷全体だと、私1人だとお掃除大変なんですー。なので、たまにお掃除に来てくださるのは凄く助かるんですよー」

あー。

10年くらい前に、それに気付いちやったのかな？

んで、それ以降は、ヘンリー不動産の管理の人には特に危害は加えず、と？

「はいー。たまに来る、此処を買いたいっぽい人は様子を見て、私の部屋に入ろうとしたり、後はなんか嫌な感じの人には帰ってもらってましたー」

あ、そ、そうなのね？

あれ、でもそうすると。

「あの、メアリーお嬢さん、俺も割と好き勝手する系の、嫌な奴じゃないの？」

俺が疑問を口にする、お嬢さんは俺の眼の前まで飛んできて、俺の眼をじつと見つめる。

「私の部屋、どうにかするんですー?」

真っ直ぐに見つめられながら、俺は考え込む。

勿論、お嬢さんのお部屋が大事なのは判るし、守りたいのも理解出来る。

だが、お嬢さんの部屋が改装エリアに入っていたら……。

そこまで考えて、はたと気がつく。

「お嬢さんの部屋って、もしかして3階の何処かな？」

普通こういうお屋敷は、というか一般家庭も割と同じだと思うが、上階じょうかいというのは家人のプライベート空間、というのが普通だ。

そうになると、お嬢さんのプライベート空間は3階って事にならないか？

俺の改装計画では、1階が各種銭湯とお土産コーナー、2階が本格？ お土産コーナーとお食事処、酒場的な施設。

そして、3階には事務所を幾つか、と言うプランだ。

3階に関しては、大きく手を加える予定は、現状ではない。

「はい、3階の、南の端っこのお部屋ですー」

ふむ。

位置的に、人気の出そうな部屋であるな。

しかし、これだけ広い屋敷だったら、3階の1部屋くらい開あかすの間まにしても問題ない気がする。

ふむう。

「じゃあ、3階のその部屋に手を出さなきゃ、この建物の1階2階を改装しても大丈夫？」

前置きにはちよつと過激なそんな言葉を皮切りに、俺はお嬢さんに、ついでにエドモンドさんにも、俺の構想をちよつと踏み込んで話す。

「まあ！ それじゃあ、私は営業終了後とか、好きに使っても良いんで

すねー?」

お嬢さんが瞳を輝かせる。

……自分の部屋が無事なら、ホントに他はどうでも良さそうである。

そうになると、ちよつとコレは、俺も考えを変えたほうが良さそうだ。

お嬢さんの部屋を確実に守るための手を打たなければならぬ。

俺はお嬢さんに、日中の活動は出来るのかを確認し、翌々日、改めて訪問する事を告げて、屋敷を後にする。

これから帰って寝て、起きてすぐに仕事とか、わざわざ異世界でまですたくない。

それに、明日は明日で、ウチの連中に許可を得なきゃならない事が出来たしな。

あー、我が事ながら面倒臭い。

俺。
何にでも首突っ込みたがるような、面白おかしい性格だったかな、

盛大に溜息を吐きながら、どこか天真爛漫つぼさを感じさせるお嬢様の笑顔を思い出し、その顔に、カレンちゃんやティアちゃん、ギイちゃんに、リリス。

見知った子供の笑顔を重ね、そして頭を抱える。

自分の考えで確実に面倒事を背負い込む事になる。

そんな予感を覚えながら、それでもお嬢様の部屋を守ると約束したのだから、出来る手は打とうと心に決める。

なあ、またタイラーくん辺りに、ボツコボコに凹まされるんだろうなあ。

ウチのメンバーに相談する事を考えるだけで、溜息は飽きること無く湧いて出るのであった。

第23話 異世界いただけき商店街

無闇に晴れ渡った空を見上げ、公に人類の敵として国を跨いで手配される男は干し肉を噛む。

渡る風は爽やかで、陽光の熱さを程よく和らげてくれる。

「……クソツ。あの芋の薄揚げとやら、もつと買ってあげれば良かったぜ」

仇成あだなす6名——既に5名となっているが——の一角、「悪食」はのんびりと悪態を吐きながら、モンテリアで出会った軽食を思い出していた。

サクサクとした食感の軽さと、程よい塩気を入ったが、あの見た目に反して保存は効かないとの事で、旅路の伴とするのは諦めた。

油で揚げることで水分を飛ばしているとかで、時間が経ってしまふと空気中の水分を吸い、フニヤフニヤとして食感が悪くなり、不味くなるのだという。

出来るだけ早く食わせる為の文言だと思うが、わざわざ試したくもない。

時間停止系のアイテムボックス等という高級品の持ち合わせがあるわけもなく、諦めるしか無かった。

心の支えは、目指すアルバレインこそが、芋の薄揚げの発祥の地だと言う事だ。

些か目的が変わりつつ有るが、当初の目的も忘れては居ない。

国喰らいを追い詰めた魔道士とやらを見つけ出し、叩きのめし、喰らう。

同じ「食」に因む名を持つ因果、という訳でも無いし、仇を討とうと思える程の仲間意識が有る訳でもない。

飽くまでも自身の為、強き者の力を取り込む為に。

強き者の心臓を、食す為に。

「あー……早いとこ、食くいたいモン、食って帰るか。しかし、こんなにもアイテムボックスが欲しいと思ったのは初めてだぜ」

悪食はのんびりと、目的地への道半ばで遙か行く手を見やる。
モンテリアを出て2日、馬で5〜6日の道行きを徒歩で征くその身は、人の姿をしながらも既に旅程の半分に届こうかという位置に居た。

魔術によらず、ただその身に宿る膂力のみで。

目指すのは、本場の「芋の薄揚げ」と「魔道士の心臓」。

食道楽の旅路は、目的地まであと僅か。

復讐者としては遙かな旅路の途中、ささやかな寄り道の物語であった。

どうも、良く判らないままに靈魂系不死者なお嬢さんと仲良く？
なりました。

そんでそのまま帰り、なんて平和に終わる筈もなく。

当然のように冒険者ギルドに連行されてしまったま吞まされ、例によつて前後不覚でご帰宅。

フラフラと飛び込んだであろう寢床では、脈絡もなくタイラーくんに教えてもらった魔道具「真実の天秤」を掛けられる夢を見るといふ、思いつく限り中々に最悪な夢見。

なんでリリースとの結婚式の場面だったん？

なんで誓いの場面で出てくるん？

お決まりの、永遠の愛を誓いますか？ の問いかけに、
「誓います」

と、真面目顔で答えたら肋骨パツカーン。

寧ろ喰い気味の判定に、作的なものを感じざるを得ない。

俺が何か悪い事したのかと、今までの全部を棚に上げて聞きたい。

あ、因みに、俺がタキシードでした。

胸がなんだって？

そこはリリースも同スケールだよ。

1／1スケールだよ。

あつ、でも、ウエディングドレスのリリースは可愛かったです。

宿酔の頭で無理に夢で見たい場面を思い出そうとするも、どう

してもパツカーンからのポーン、そしてパーンを思い出して気分が悪い、そんないつも通りの俺です。

気分には多少左右されるものの、ウォルターくんのご飯は美味しい。自家製のマヨネーズも最早俺の食事に欠かせないモノになりつつ有る。

醤油は只今、リリース主導で作業が進んでいると言うので、楽しみに待つ。

俺？ 作り方を知らないし、やりたい奴に任せるに限るよ、こういうのは。

朝食後はヘレネちゃんのを淹れてくれたお茶を皆で味わう。

ヘンリーさんのご祝儀のお茶が美味しすぎて、こつそり何処で買ったか聞きに行ったりして、同じ葉をゲット。

このお茶は皆お気に入りのご様子で、特に食事後には欠かせない物になっている。

貴族様ってこんな生活なのかなあ？

「……少なくとも、貴族様は閉店で叩き出されるまで酒場に居ることも無いし、酔って半裸で道を練り歩く事も無いでしょうし、かと思えば奇声を上げて目を覚ますとかも無いんじゃないかしら」

今日も懲りもせず内心を音読しちゃう俺と、それに対して暖かくて泣けてくる（皮肉）ツッコミのリリースさん。

……いやちよつと待って？

俺、そう言えば酔ってる間どうしてるのか初めて聞いた気がするけど、え？

俺、脱いじやってるの？ え？

なんで誰も止めないの？

「止めてるから半裸で済んでいるんだ、この馬鹿者」

ほぼ全員の呆れ顔に見つめられる中、タイラーくんが代表して溜息に言葉を乗せる。

「最初はお前、上半身を……」

「おっとそれ以上は俺の精神がキツイ、今はやめてくれ」

悩み事抱えつつ悪夢まで見て、その上知りたくなかった現実なんて抱えたくないよ今は。

そう。

俺の脱ぎ癖くせとか、どうでも良いのだ、今は。

……あの、どの辺まで脱いだかは気になるので、やっぱちよつと聞いて良いですか？

ちよつと個人的にシヨツキングな事は有ったものの、今はそれどころではないと後ろ髪を引かれつつ思考を戻す。

皆みんなに話、というか相談が有るのだ。

有るんだけど……こう、すつごく切り出し難にくい。

相談内容は、ズバリ言つて、あの曰く付きの大豪邸の購入についてだ。

男爵の狂った娘ことメアリーちゃんは、話を聞けばどうやら執着が有るのは私室ししつのみ、と言うことらしい。

そこをお手つき禁止アンタツクチャブルにしてしまえば、問題なく計画は実行できそうな予感だ。

だがしかし。

彼女のお部屋は南の角部屋。

とても人気の出そうな位置関係。

例えば、どこその有力商會が、資金にモノを言わせて「お嬢様の部屋」を事務所にしたいと言い出したりしたら。

或いは、どこその貴族のボンボン辺りが、そこに私室ししつを構えたいと言いだしたら。

お金で動く商業ギルドが、お金さえ払えばと扉を開き兼ねないのではないか？

例えばアランさんにきっちり説明して、そこに手を出すと街中まちなかでお嬢様リツチと魔道士ウィザードが大暴れを始めるよ、と言ったとしても。

馬鹿は、何処にでも居るのだ。

金かねに目を眩かませて、そして安易に考えて、勝手に部屋の貸し出しに許可を出す馬鹿は絶対に居ないとは言えない。

と言うか、居ないと言われても信用出来ない。

だったらいつそあの屋敷を買い、お嬢様の部屋を含む一角を俺の私有エリアにして、立入禁止にしまえばどうか？

このエリアはオーナー権限で抑えていますので、どなた様もご遠慮下さい、と言う奴だ。

正直、これでも手を出そうとする馬鹿は居るだろう。

だけど、この建物は商業ギルドの持ち物ではない、となれば勝手は出来ないだろうし、そのオーナーの俺が首を縦には振る筈がない。

冗談抜きで、実力で俺を排除しない限り、無関係な者は入り込むことを許さない。

そう言う空間にしてしまえば良い。

と、割と過激に考えるんだけども。

俺の弱点は、どうにも身内に甘い、頭が上がらないと言う事だ。

一度は購入を諦めた曰く付き物件を、特にメリットも無く買うとか。

いや、メリットはこれから生まれる予定だけど、それでも工事なんかをして、先の話だ。

普通に考えたらそんなの博打でしか無いし、失敗したら赤字じゃ済まない。

そんなものの許可、どうやって取れば良いんだ？

みんなに、なんて説明するよ？

一応はクランマスターって立場だし、好き勝手にでかい買い物なんて、ダメだと思ふのよね。

だけどき。

リリースに頼むのもなんか違うと思うし、俺の思い付きだし、やっぱ俺が買うしか無いよね。

「リリース。アンタいつもは思ってた事をそのまま口にしちゃうのに、今日はヤケに慎重じゃない？ 拾い食いでもしたの？」

リリースの声に、俺は自分が考え込み過ぎていた事に気が付く。

いつの間にか下がっていた視線の先には、すっかり冷めたお茶が。

「拾い食いってお前、幾ら何でもな……」

まだ相談するという事に踏ん切りの付いていない俺は、曖昧に笑いながら視線をリリースに向け、誤魔化しを試みる。

「見え見えなのよ、このバカちゃん。大凡何について悩んでいるかも、透けて見えてる有様よ。いつもみたいいに、思いつくままに行動なさいよ、らしくなくてキモチワルイのよ」

気持ち悪いってお前、そこまで……。

ちよつと凹むが、リリースの言いたい事はそういう部分には無いってのは良く分かる。

それこそリリースには珍しく、俺の事を気遣っている事も。

「透けて見えるってなあ……。そりゃあ、深い事で悩んでちやいないけど、だからってなあ」

それが判って尚、俺の口は重い。

マジで？　じゃあ俺、家買いたいんだけど！　でっかいお屋敷！

なんて言える訳、無いじゃんよ。

呆れられて終了だ、そんなもん。

「イリス。お前は、あの屋敷を買いたいんだろう？」

尚もウジウジと悩む俺に、直球で言葉が投げつけられる。

聞き慣れたその声に顔を向ければ、呆れ顔のタイラーくんだ。

悩んでいる事、更にその内容までズバリと言い当てられて、俺は言い訳の言葉も直ぐには出てこない。

「何を思い悩むのか、大体想像は付くがな。好きにしろ」

だから、言い訳なんて考えていたから。

俺は、タイラーくんの言葉を受け止め、消化するのにちよいと時間が掛かった。

え？　今コイツ、なんて？

「好きにつて……お前、ええ？」

本気で何を言われたのか判らなくなった俺は、盛大に間抜けな顔を晒す。

そんな俺の視界の端で、呆れ顔に、肩を竦めるジェスチャーまで添えて、リリースが口を開く。

「見え見えって言ったでしょ？　皆、アンタが悩んでる事なんてお見

通しだし、どんな悩みかも大体判るわよ。大方、あのお嬢様幽霊ゴーストの保護を考えてるんでしょ？」

リリスの言い分がその通り過ぎてやはり俺は何も言えない。

「それで身銭を切ると言う発想に至るのが、お前らしいと言うか……。博打が過ぎるから本当なら止めるべきだとは思うが」

タイラーくんがメガネを押し上げながら言う。

頻繁にメガネがずり落ちるのはフィッティングが出来てないって事だから、一回専門店で見つて貰った方が良いぞ？

「俺は銭湯は当たると思っている。少なくとも、バザーの時期には確実に。各種液体石鹼の製造・販売権と、銭湯の儲け。それらを考えれば、あのお嬢さんゴーストの部屋を確保して保護するのは悪い手では無い」
そんなどうでも良い俺の感想を他所に、タイラーくんがつつらと言葉を並べる。

そんなタイラーくんの言葉を耳にしながら、俺は何を言うべきか、どう答えるべきか迷い、言葉が出ない。

「あの屋敷を、買おうか悩んでいるんだろう？」

自分の考えに囚われ、自分の言葉を縛ってしまう俺に、いつものように、タイラーくんはまっすぐに言葉を投げてくる。

俺はついに言い訳が脳内でオーバーフローして、何も考えられずにタイラーくんを見つめる。

「悩んでいるなら、さっさと買ってしまえ。事が動く前に決めないと、後悔するのはお前だぞ」

事も無げに、何でも無いように言つてのけるタイラーくん。

お前は人の金かねをなんだと思つているんだとか、文句らしきは浮かび来るが、それは口を突いてこない。

ただ、ぽかんと、タイラーくんを見て。

それでも、言葉は一つも出てこなかった。

「儲けは幾らか頂戴ね、イリスちゃん」

リリスのわざとらしいセリフに、俺は有難うと答えたものか、軽口で答えたものか判断がつかない。

なんだそれ？

文句がある訳じゃないけどさ？

絶対怒られる、そう思ってた俺は、有り体に言うと拍子抜けし過ぎて呆けきってしまい、再活動までに時間を要する有様なのであった。

懸案が、俺が思ってた以上に簡単に片付いてしまい、俺はもうなんて言うか、今日の目的を見失ってしまう。

一応、商業ギルドとヘンリーさんトコに顔だして、明日お屋敷で、お嬢様を交えて話が有ると伝えておかねばならない。

それにしたって、そんなに時間が掛かる訳じゃない。

今からそれらに顔を出しても、その後の予定が無き過ぎて却って動くのに躊躇してしまう。

「イリス姉ちゃん！ 姉ちゃんヒマか!？」

純粹に呆けている俺に、声と一緒に飛びかかる影。

ゴブリンの男の子、グイクくんがヤンチャに飛びついてくる。

危ないからそういうのは止しなさい、もう。

受け止めた俺はグイクんの頭を撫でながら溜息を吐く。

「こらあ！ グイ、危ないからそういうコトしちやダメでしょ！ ヘレネ姉ちゃんにまた怒られるよ!」

リビングに駆け込んだきたグイちゃんが、グイクんの頭を小突く。

いや、小突くってというか普通に殴ったな、今。

フルスイングで。

って言うか、なんて？ ヘレネちゃん怒らせたの？

それはそれでスゴいことだと思っぞ？

俺、ヘレネちゃんが怒るトコなんて想像出来ねえ。

「痛えな！ 何すんだこの……!」

元気だねえ、うん、子供が元気なのは良い事だ。

良い事なんだがね？

「グイクんや、喧嘩するなら俺から離れてくんないかな？ 巻き込まれて俺が危ねえ」

グイちゃんに殴られたってえのに、グイクくんは俺から離れようとし
ない。

何だつてんだ、一体？

「やだ！ イリス姉ちゃん良い匂いがするから、離れない！」

俺の言葉に、頑かたくなになつたらしいグイクンが、より一層俺にしがみつく。

何だそりや、死なばもろとも？ 喧嘩相手は俺じゃねえだろ。

「こらあ！ もう！ 私だつてイリス姉ちゃん好きすなんだからね！
独り占めしてるんじゃないわよ！」

なんてどうでも良いこと考えてたら、グイちゃんにまで熱い告白を貰もらっちゃった。

2人とも可愛いから、喧嘩すんなよもう。

「まってー！ イリスお姉ちゃんは私のよ！」

「え？ ちょっとカレン？ 聞き捨てにならないんだけど？」

更に、面白い事を見つけた顔で駆け込んでくるカレンちゃんと、なんかすんげえ怖い顔のティアちゃんが次々俺に飛びつく。

待て待て待て、暑い暑い暑い、あと、グイクン潰れちゃう。

リビングの入口では、なんだか羨ましそうな顔でマシユークんとフレッドくんが、仲間になりたそうな目でこつちを見ている。

そんな事より助けておくれ。

子供パワーに圧倒される俺の救いを求める眼差しは、羨んでどう行動するか迷う2人には届いていないようであつた。

通りかかったヘレネちゃんが、なんだか黒い笑顔で子供達を引き剥がし、眺めていただけのフレッドくんやマシユークンをも巻き込んで、全員正座させている。

やだ、ヘレネちゃん怖い、でもそんな所も素敵……！！

「それで？ どうしてイリスさんに抱きついてたんです？」

そこは私の、とか小さな声が聞こえたが、きつと気の所為だろう。
俺の過剰気味な自意識にも困ったもんだ。

今のヘレネちゃんは黒怖いので、ツツコミなんて出来る気がしない。
い。

自分の邪心の為せる業わざという事にして、心の安寧を図る。

「イリス姉ちゃんが居たから！」

元気の良い、グイクンのお返事。

うん、元気と勢いは認めるけど、意味は理解わからないね？

「違うでしょバカ！ イリス姉ちゃんを、クエストに誘いいに来たんでしょ！」

ギイちゃんが隣のグイクンを小突く……じゃなくて殴る。

うん、あれはやっぱり、殴っている、で良いと思う。

「痛いってえよ！ この暴力女！ お前ホントはオーガなんじゃないのか!?」

「誰がオーガだ、このエロガキ！ 薬草採りもマトモに出来ないクセに、いっちょ前に色気ついてんじやないわよバーカ！」

おうおう、やっぱり何処の世界でも、女の子つよつてのは強いねえ。

とてもじゃないが、口じゃあ勝ち目がないぞ、グイクン。

そんで腕つぶしでも互角つてんだから、グイクンの立つ瀬せが無いやな。

とかのほほんとしてたら、多分取っ組み合いになる。

「落ち着ちきなつて、2人とも。あんま続けると、あれだぞ？ 指差して

爆笑しちやうぞ？」

気の抜けた俺の仲裁。

あんまり仲裁としての役割を果たしてない、そんな気がしなくもないが、まあ、2人が嫌そうな顔で黙ってくれたので良しとしよう。

気を取り直しつつ、俺はギイちゃんちゃんの言葉を拾う。

随分離れた所に放り投げられて、俺も良く気がついたもんだと思う。

「つていうか、俺をクエストに？ 薬草採り、OK出たの？」

そう言つて、俺はきつと不思議そうな顔みんなで見回したと思う。

なにせ、先日俺は薬草を採り過ぎだと言われ、しばらく薬草採取のクエストは禁止されてしまったのだ。

「もうOK出てるよ、一昨日話したよね？」

おおおう？

俺は呆ほうけた顔を声の方に向け、凄く失敗したことを悟る。

頬を膨らませたティアちゃんが、泣きそうな顔で俺を睨んでいた。「ああああ、ごめん、ごめんて、泣かないで、ね？ ね？」

慌ててティアちゃんに飛びつき、わしゃわしゃと頭を撫でる。

仏頂面のティアちゃんはここぞと俺に飛びつき、キツくしがみついてくる。

この子なりの抗議なのだろうか。

俺は頭を撫でながら「ごめんて」を繰り返すしか無い。

「んじゃ、ティアちゃん、一緒に行こうか、みんなでき」

10分位ぐずつていると思えば、しこたま撫でられて満足した風の顔のティアちゃんを筆頭に、元気いっぱいの子供達と共に、ヘンリーさんとココと商業ギルドを経由して冒険者ギルドへ向かうことになった。

ヘレネちゃんも行ったそうな顔してたけど、まだお掃除が残ってるからって事で、今日はお見送り。

今度一緒に買い物でも行こうと誘えば、スンゴイ良い笑顔で頷いてくれた。

天使……ッ！ 圧倒的天使……ッ！

ヘンリー不動産と商業ギルドで、明日の予定を伝えて時間を貰う事をお願いして、今日は東門へ。

元気一杯に走り回る少年組と、真面目にやれと怒る女子組、と言うか主にギイちゃん。

学校の掃除の時間とか思い出して、ほのぼのするね。

ちよつと真面目にやってよ男子だんしー！ みたいな？

今日はズルはなし！ と言われ、アイテム自動拾いの機能オフの仕方が判らず途方に暮れた——結局どうやってもおフ出来ないの、1人だけレポートでかなり離れた所で採取して、後は皆みんなの採取の進捗を眺める係になった——り、出掛けにウォルターくんが持たせてくれたお弁当を皆で仲良く食べたり、中々に楽しい時間を過ごす。

子供達にはホントに癒やされる。

結局食事休憩を挟んで、午後の割と早い時間で全員が採取を終わ

り、皆でワイワイとギルドに報告に戻る。

そして案の定、酒樽の妖精とギルドの熊さんに捕まり、これは絶対子供達に悪影響だと思いつつ、テーブルに引きずって行かれる俺。

「子供達の食事もあるから、夕方には家に帰るからな！」

そんな俺に適当に返事をする、昼から酒を呷る系のダメ冒険者共。

今日はグスタフさんトコの若い子も何人かいて、子供達の相手もしてくれている。

そう言えばなんか最近、俺、っていうか俺とリリス——今日は居ないけど——の隣の席を巡って、ちよつとした争いが起こったりするようになった。

大体はグスタフさんの「めんどくせえ！」の一言でいつも通りの……まあ、オツサンサンドで片付くんだが、たまに、隣が若い冒険者になったりする。

まあ、今日はいつもの席順だけでもな。

今度一緒に狩りに行こうとか若い子に誘われたり、グスタフさんに頭掴まれたまま薄芋揚げについて熱く語られ、何事かと良く良く聞けば「新しい味を出してくれ」と懇願されてたり。

そういうのはウオルターくんのが専門だろうに、と言えば、

「ウオルターが、お前に言えって。イリスの方が、そういうアイデアは豊富だつて言つてたぞ？」

相談済みだった。

ていうかウオルターくんよ、俺に振つても、俺は基本料理出来ないぞ？

「あー、んじや、帰ったらウオルターくんと相談してみるよ」

リリスにも相談して……場合によっちゃあまた脳内映像の刑に処されるなあ、とか暗澹たる気分になりつつ、適当に若い子に酒を勧められたりして時間を過ごす。

ああ、早いとこ銭湯の方片付けて、のんびりとダメダメ冒険者ライフに戻りたいもんだ。

そんな事を考えていた俺だけど、不意にある事に思い当たり、とたんにげんなりしてしまう。

屋敷を買うのは良いけど、金貨用意しとかないと、明日面倒だ……。早めに帰ってみんなに手伝って貰おう、そう思うが、問題はこの酔っぱらい共が素直に解放してくれるかどうかだな。

もう帰るもう帰ると繰り返すが一向に解放されず、気がつけば夕刻に。

業を煮やした俺は「もう帰る！ ご飯はおウチで食べる！」と、それは立派な駄々を捏ね、なんとか子供達を引き連れて屋敷へ帰還。

ご飯も勿論本心だが、明日の作業を楽にするためにも、なるべく早く帰って金貨を用意したかったのだ。

結局、開放は晩飯前ギリギリになってしまった訳だが。

帰った所で暇だったらしいリリースに捕まり、ほんじゃあついでだとヘレネちゃんとレイニーちゃんを捕まえ、晩飯の準備中のウォルターくんを手伝いに10人で台所に押し掛け、呆れられる。

女子組+フレッドくんが料理に興味津々だったので、4人はウォルターくんについて、他は完全に雑用。

人数が居るからとだんだん調子に乗ったウォルターくんが張り切り、今日はちよつと豪勢な食卓になりそうである。

出来るだけ早く終わらせようと思っただけど、完全に裏目に出た訳である。

そんな俺はウォルターくんの手元を眺めてても、何を作ろうとしているのか、さっぱり判らんけどな！

そうこうしている間に料理は出来上がり、何処に出掛けていたのか、ジェシカさんとタイラーくんも帰宅し、みんなで晩ごはん。

何だかんだでみんな集合、良いね。

そんな訳で楽しい夕食後。

今回はこの後地味にキツイ作業なので、楽しい思い出はカットで。俺はいつか使うかも知れない、そう思って用意していた小袋——コインなら大体100枚入りそうなサイズ——を用意し、リビングに全員お呼び出し。

っていうか、まあ大概食事の後はみんながリビングに集まり、ワイ

ワイ話して風呂の準備したり、そんな感じなんだけど。

「えー、みなさんに手伝って欲しい事がありまーす」

お屋敷だし、帰ってからもうずっと仮面を外してる俺は、ドヤ顔で腕組みという、人様にモノを頼むにしては随分な態度で宣言する。

頼まれた皆みなさんはきよとんとした顔が8割、何がいってんだ顔が2割。

「なんだ、まだ迷ってるのかお前は」

やれやれ顔のタイラーくん。

お前はお前で、いつの話をしてるんだ。

「そうじゃねえよ。お屋敷買うのは良いとして、金貨数えるのが面倒臭いだろ。人海戦術で1万枚、数えときたいんだよ」

俺が言うと、露骨に嫌そうな顔のタイラーくん。

「金貨?! 1万枚?!」

物凄い食いつきで、俺に物理的に飛びついてくるグイクン。

「離れるバカグイ! アンタのじゃないでしょー!」

そんなグイクンの髪と耳を引っ張るギイちゃん。

エグいな……。

ハゲたりモゲたりしない程度にね?

「1万枚って、なんでそんな用意するの?」

不思議そうな顔で、リリスが質問をぶつけてくる。

多分、口にしてないけど、タイラーくんはじめ、他にも似たような感想は各々浮かんでるだろう。

きちんと説明しなきゃいけないな。

「あー。あのお屋敷、曰く付きで金貨5000枚なんだけどさ? 倍額出してでも、確実に押さえたいってトコかな」

それでも、本来のお値段には及ばないんだろうけども。

「成程ねえ……だったたら、3万枚にしましょう」

そんな事を言いながら、リリスがティーカップをソーサーに戻すと、リビングのテーブルが上に乗った人数分のティーセットごと消える。

多分、リリスがアイテムボックスに収納したんだろう。

「はあ？ ……いや、そっか。確かに、それくらい出したほうが良いのかもな」

一瞬そんなに？ って思ったけど、元の価格に近づけたほうが良いんだらうなあ、と、思い直す。

新築の相場が判らないけど、聞いたらその金額出さなきゃいけない気がして、なんだか怖いのでスルーしとこう。

まあ、この街で新築ってのは買えないし建てられないし、知らないって事で許して貰おう。

そんな事を考えていると、目の前に金貨の山が現れ、すぐに崩れて金貨の海になる。

おうん？ 俺じゃないよ、コレ？

「私よバカちゃん。きつちり3万枚有るから、ほら、みんなで数えるわよ？」

なんだろう、なんでリリースが金出してくれるのかさっぱり判らない。

そんな思いでぼんやりとリリースを見てみると、リリースは俺に向けて少し得意げな顔をしてみせる。

なにそれ可愛い。

「たまにはお姉ちゃんに任せなさい！」

ああ、言いたかったんだな。

吹かせたかったんだな、お姉ちゃん風かぜ。

「わー、おねーちゃんありがとー」

なので、俺は素直に手を叩きながら言ってみる。

「ホント可愛くないわね！ なにその無表情！ もうちよつと感謝しても良いんじゃないの！！」

だと言うのに、リリースには凄く怒られた。

理不尽だ。

っていうかりリスさんや、実年齢？ 生前の年齢と合わせて？

言ったら、俺のが遥かに年上だろうが。

お前さんは生後何ヶ月とか言うレベルだろう。

ドヤるぞこの野郎。

知性も知識も、俺はリリスの足元にも及ばないけどな。

「良いから、ほら！早く数えるわよ！」

すっかりヘソを曲げてしまったらしい。

「悪かったって、ごめんて。色々片付いたら、お菓子買いに行こうな？」

「ヤダー！ スポンジケーキ作る！」

すっかりご機嫌斜めで幼児化されてしまった我が姉。

スポンジケーキで……。

どうせ生クリームとか作るんだろうなー、とか思いながら、取り敢えず機嫌を取るために頭を撫でる。

「あー、どうせならカロリー控えめのやつ作ろう。フルーツいっぱい、日本式ショートケーキで」

頭を撫でた事よりも、スポンジケーキより一步踏み込んでショートケーキと言ったことに大変お慶びの様子で、んふー、とか言ってる。

我が姉は実に可愛らしい。

視界の端に、何やら期待顔のレイニーちゃんとかヘレネちゃんが見えるので、コレは確実に作る事になるな、うん。

そんな事を思いながら、俺はコインを数え、100枚毎に小袋に入れるよう皆みんなに指示する。

子供達は張り切って、大人組？は何だかんだとくつつちゃべりながら、それぞれのペースで作業を進める。

……冷静に考えたら13人居るとは言え、1人約2300枚の計算なんだけど、みんな理解わかってるのかな？

投げ出されても困るから、言わないけど。

ワイワイと騒がしく作業を勧めてる最中に、俺はふと、「アイテムボックス内で任意の枚数を小袋に収める事は出来ないのか？」という疑問に駆られる。

こっそり200枚試してみたら、ちゃんと2袋出来てしまった。

俺は嫌な汗を抱えつつ、この実験結果の公表を差し控えた。

今言ったら、確実に吊るし上げられるからな。

そこそ良い時間になった頃に、作業終了。

小袋に100枚づつきつちり小分けされた金貨達をありがたくアイテムボックスに収め、ふと、俺は悪ノリを思いつく。

「タイラーくん、ジェシカさん。久々にアレやるかい？」

本来は2度としない予定だったんだが、リリースが身銭を切ってくれたし、何だかんだ面倒臭い作業を手伝って貰ったつてのも有る。

それに、実の所、ウチのメンバーで「雇われている」扱いの3人は兎も角、他のメンバーは給金なんて無い。

ちよつとした不公平感が要らんフラストレーションになつても困るし、ガス抜きの意味でも、ここらで何かやったほうが良いかも知れない。

「アレ？ ……ちよつと待ってる、袋を取ってくる」

「用意してるよバカ、何の袋持つてこようとしてるんだお前は」

流石タイラーくん、ジェシカさんは何の事か判らなかつた様なのに、コイツは一瞬で気付いた。

恐らく、部屋に置いてあるであろうアイテムボックスを取りに戻ろうとしたのだろうが、させる訳ねえだろが。

鼻が利くと言うか、勘が良いと言うべきか。

いずれにせよ、油断できん奴である。

「イリスちゃん？ あれって？」

心底不思議そうなジェシカさんが凄く美人可愛いです。

「金貨が大量に出たら、そりゃあもう、ね？」

そんな俺視点の、仲間に対する寸評は兎も角、イベントの説明はきちんとしなければ。

俺の説明になつていない言葉で、それでもピンと来たらしい。

「ああ！ うん、私ちよつと鞆取ってくるね？」

ピンと来たのは良いんですがね？

「だからダメだってば！ 入れ物はこつちで用意してるから、今回はそれに入れるの！」

こいつら、コンビで同じ発想か！

そんなもん、金貨が何枚有つても足りんわ！

そんな俺と面白ダメ大人2人組ふたりぐみの遣り取りを、子供組4人は兎も

角、それ以外のメンバーは何の事が判らずポカンと眺めている。

ピンと来るものも無いので、何だそりやの質問も無い。

あー、馬鹿やってるなー、位の感想なんだろう。

まあ、ルールの説明が、全ての説明になるだろうし、取り敢えず聞いて貰おう。

説明の前に、俺は作業が終わった段階でリリースが戻してくれたテーブルとティーセット達を、アイテムボックスにしまう。

短時間で出入りの激しい家具である。

ともあれ、そうして出来たスペースに、俺は様々なサイズの袋を、敢えてごちゃ混ぜに——ぱつと見て袋の大きさが判らないように——積み上げる。

「まずは、袋選びだ。ただし、ひっくり返したり、他のと比べるのは禁止だぜ？ この状態で掴んだやつが、それぞれの袋だ。勘が重要だぜ？」

この説明で、真剣な顔をする6名と、まだ良く理解^{わか}って居ない5人。メガネを光らせ、タイラーくんが誰より早く山の一角に手を伸ばし、選んだ袋を一つ掴む。

「俺はコレだ。もう引っこ抜いて良いのか？」

メガネを押し上げて、俺に目を向けるタイラーくん。

本気すぎて引くんだけど？

「待て待て、こういうのは皆^{みんな}で一斉に、の方が楽しいだろ。さあ、皆^{みんな}もコレってのを掴んだら、待機しててくれ」

俺の言葉に、真剣に袋を選ぶ者、良く判らないなりに適当に手を伸ばす者、それぞれがそれぞれ、袋をしっかりと掴んだ所で、俺の号令で一気に引き抜く。

基本的にはそんなに大きくない、小脇に抱える程度のサイズを中心に、大きさにばらつきが有る、程度のものだ。

孤児院の子供達が、小遣い稼ぎのために一生懸命作った袋を、まとも買いたのだ。

意外としっかりしていて、金貨の重みにも充分耐えてくれるだろう。

しかし、ばらつきが有るとは言え、実に悲喜こもごもである。
タイラーくんはドヤ顔で、一番大きな袋を引き当てた。

この野郎、良い勘じゃねえか。

他はそれなりに大きさはバラけつつ、あんまり不満も出ない感じであつた。

と言いたいが、1人、悲しみを背負つた者が居る。

ヘレネちゃん……可愛いとか言ってるけど、君……皆の^{みんな}と比べて、
2回^{ふたまわ}りくらい小さいんじゃないかな？

俺は、不憫すぎて泣いた。

「み、みんな、袋^{ふくろ}は選んだね？　じゃあ、残りはしまおうよー」

まだ何が始まるのか判っていないので、何だか楽しげなヘレネちゃんを痛々しく眺めながら、俺は何も無くなったスペースに、金貨の山を築く。

それはやはりすぐに崩れ、金貨の海に。

この辺りで、全員、何が始まるのか理解^{わか}つたらしい。

ヘレネちゃんの目に、ちよつとだけ、悲しみが浮かんだ。

「さあ！　その手の袋に、詰められるだけ金貨詰めてみよう！　袋に入つた分だけ、皆^{みんな}の物だぜー！」

俺が全部言い切る前に、全員が金貨の海に飛びつく。

豪快に袋に流し込むタイラーくんやウォルターくん、それを真似る男の子組。

両手で掬い、楽しそうに袋に流し込むジェシカさん、それを真似る女の子組。

なんだか色々買い込む計画でも立てているのか、ニヤニヤしちやつてるレイニーちゃんと、金貨の感触を確かめるように少しづつ、しっかりと袋に収めるヘレネちゃん。

「アンタも、暇な事思いつくのね。私がお金建て替えた意味、無いじゃない」

俺の隣でソファアに腰掛けながら、皆^{みんな}の様子を見てため息をつくりリス。

言われた俺はと言えば、笑って頬を掻き、誤魔化す。

限界を超える！ とか頑張った結果、袋が破裂し、残った袋状の部分にどうにか両手に収まる程度の金貨が残った、と言うタイラーくんの有様を素直に爆笑し、それを横目に見ていたウォルターくんがそつと金貨を袋から抜いていたりと、見てるだけでもなんか色々イベントが有った訳だが、それでも割とすぐに全員が袋詰を終えてしまう。

欲をかかなければ、普通に誰よりも金貨を得ることの出来た筈のタイラーくんは、理解^{わか}り易い悲しみを背負う羽目に。

やべえ、なんか童話みたいで、見てる分にはすげえ笑える。

まあ、お前さんは前回分も有るから、そんな気にすんなよ、な？

終わってみれば子供達もヘレネちゃんもニコニコで、レイニーちゃんもニコニコで。

人間性とか見えちゃって面白いね、これ。

もうちよつと規模縮小しつつ、またやろうかな、なんて思えてしまう。

そして、床に、もの凄く金貨が残った訳だけど。

「よし、んじゃあ、残りはリリース、拾つといてくれ」

出来るだけ普通に、事も無げに言う。

面倒事を押し付けた、なんて事は無い。

リリースも俺と同じく、金貨やアイテムの自動取得は出来るんだから。

「……アンタ、まさかと思うけど、コレが目的だった訳？」

ポツリと呟く声に、俺は囁きで返す。

「いんや？ 最初から考えてたんだ。折角だし、ついでに礼^{れい}つていうか、あー……」

納得しなさそうなりリリースの頭にポンと手を置いて続ける。

「なんて言うか、お前さんにはまあ、色々世話になってるしな」

リリースはちよつと驚いた顔をした後、ちよつと頬を赤らめて、すいっと視線を逸らす。

「何よ、ついでとか言ってるんじゃ無いわよ」

そんな事を言うリリースの頭を、俺はわしゃわしゃと撫で回す。

たまにこういう可愛い様子が見れるから、楽しいんだよな、リリース。

金貨は片付き、テーブルやティーセットは元に戻った。

ちよつといつもより遅くなったが、これから風呂に入り、髪を乾かし、横になったら1日が終わる。

明日は、ヘンリーさんにあの屋敷の購入意志を伝える。

それから、手続きだったり、その後の事をアランさんと話し合ったり、工事の業者なんかも手配して貰わなきゃいけない。

商業ギルドに買わせるでもなく、賃貸でもないから、工事費は俺持ちなのかなあ、そんな事をぼんやり考えつつ、俺の意識は夜に溶ける。

明日は忙しくなりそうだ。

せめて、今夜の夢くらいは、楽しく、穏やかな物が良い。

暗転しつつ有る思考の片隅で、俺はふと、そんな事を思う。

ささやかな祈りに反して、俺は夢を見る事もなく、只々眠りに身を任せるのだった。

第24話 厄介事は面倒な時にやって来る

俺はつくづく公的な席という奴が苦手なのだ、ぼんやりと思いつらされた気分だ。

俺自身の思惑とか、お屋敷を使用するのはお嬢様の——主に部屋の保護が絶対条件とか、そう言った部分の説明は良いんだけどさ。——その他の細かい部分のアレコレとか、まあ1日いちにちそこらで決まるようなモンじゃないけど、そういう欠伸が出そうな話になつてくるとどうにも集中力が落ちる。

ホント、リリースとタイラーくんが居てくれて良かった。

「俺とて交渉事など苦手だ。だがまあ、お前は神輿みこしで居て良いと言つたのは俺だからな。慣れない事でも多少は、な」

いつもの仏頂面で頼もしい事を言つてのけるウチの幹部に、柄がらにも無く頼もしさを感じたモンなのだが。

「お前に任せるよりはマシだからな」

即座に飛び出る余計な一言に、がっかりするのは最早様式美だろうか。

そんな様式も美要らない、心から思う俺です。

色々と細かい契約なんかはこれから詰めていく事になるし、何よりこの街で初の試みという事で、不都合が出たらその都度協議すると言う事になりました。

まあ、不都合とか予想外のことが起きない訳が無いので、そういう事が起きても慌てない様に、まあ、各方面との連絡やらを怠らないようにしようと思う。

と言う訳で、お嬢様も案外乗り気なので、お屋敷の1階及び2階の改装が早速始まる。

3階は一部廊下に壁とドアを取り付けるのが大きな工事だが、それ以外のエリアの部屋からは備え付けの家具を運び出す事に。

メアリーちゃん自身が選別した、思い入れの有りそうな家具については、閉鎖エリアの一室に保管して、時々お嬢様が思い出に浸りたい

んだそうだ。

例のお父様の部屋の内装と言うか、家具については一切躊躇なく全処分に決まった。

まあ、そりやそうだよね。

お嬢様も良い笑顔で、

「二束三文で叩き売りますわ」

とか言ってたし。

アンデットだけど、凄く人間らしい反応だと思うし、良いんじゃないのかな？

どうでも良い事だけど、俺、リッチってもつとこう、骸骨チツクな見た目を想像してたんだが、お嬢様はまるで違う。

フワフワと浮かぶというか、場合によっては飛ぶ、「ハッキリ見える幽霊」と言う感じだ。

そう思っただけ歩くウイ○なんとかこと、リリスに聞いてみたんだが。馬鹿を見るような目で見られた。

霊体なんだから、本人の望む姿で出るものなんだと。

ゾンビやスケルトンとは存在そのものが違うんだと。

ほう、なんて答えた俺だけど、今ひとつ理解は追いついていない。

「……ホントに馬鹿ね。考えて無いだけじゃない。まあ良いわ、とてつもなく強い幽霊だと思えば良いわよ。まあ、この世界基準の強さだけどね」

溜息まで添えて、リリスは俺にも判りやすく教えてくれた。

まあ、リッチって言うのが強力なアンデットっていう認識そのものは間違いじゃないらしい。

あと、でかい声じゃ言えないけど、俺が注意すべき脅威でもない、って事も判った。

まあ、だからって油断出来る程、俺は強い心算つもりも無いけども。

んで、そのお嬢様だけど、俺、というかウチのメンツを気に入ったらしく、度々ウチに遊びに来るようになった。

それも、日中に。

本人曰く、夜は出来れば寝ていたいんだそう。

う、うん、良いんじゃないかな？

ただ、出来れば日中の移動は飛ばずに、出来れば徒歩で来て欲しいかな？

すつかり慣れたヘレネちゃんが、それでも多少青い顔で淹れてくれたお茶を美味しそうに味わうお嬢様は、俺の苦言に笑顔を向けただけだった。

え？ 何、お嬢様も、俺の扱いそんな感じ？

俺の溜息はどうでも良いとばかりに、状況は動き始める。

レイニーちゃんと俺、そしてリリスとメアリーお嬢様が、ヘンリー不動産提携のリフォーム業者さん？ と共に、先ずは1階の浴場の配置やデザインを詰める。

デザイン関係はもっぱらリリスとお嬢様、それとリフォームの専門家に任せるとして、俺とレイニーちゃんは給湯システムと、秘密装置の制作・設置である。

給湯システムそのものは既存の物が有るので、それを元に、操作の簡易化と高出力化を目指す。

と言うか、実はその辺の仕込みは既に終わっていて……。

この世界の技術と、前世の技術とのハイブリッドと言うか、メンテナンスに支障を来さないような設計を事前にリリスが行っており、それを円滑に説明するために、俺の脳内にその設計図と、そういった図面の引き方の講習動画を脳内に流されたのだ。

有難うリリスさん、図面が有るお陰で説明もスムーズだったよ。

……じゃねえんだよ！

俺の脳が不具合起こすから、気軽に映像流し込んでくるんじゃないよ！

あと、結構怖いんだよ、脳がバチンとか言うの！

次は泣くぞ！ 泣くからな！

俺の泣き言は兎も角、実際に説明は実にスムーズで、給湯システムの設計から実際の製造までが問題無く進んでいる。

どうやら色々と画期的らしく、業者さん達がいつの間にか「レイ

ニー式」とか「フランセスカ・システム」とか言ってる、レイニーちゃんを慌てさせてた。

「良いんじゃないの？ レイニー式ボイラー、面白いじゃん」

俺が誂うと、レイニーちゃんは思いの外真面目な顔を俺に向ける。「だって、設計したの、イリスでしょ？ ダウンサイジングもそうだけど、操作の簡略化なんて、私、思いつけた自信が無いんだけど」

そもその設計はホントはイリスなんだけど、まあ、あんまり気にしない方向で行こう。

「今回は時間がないからしょうがない。でも俺、この設計くらいなら、時間さえ有ればレイニーちゃんなら届くと思うんだよね」

そう言って肩を叩くけど、納得しては居ない表情。

こういう性格だから、前に出てチャレンジして、時には失敗して、そして成長して行けるんだろうね。

失敗する時は派手にやるというか、仕事を取れる宛もないのに事務所構えて即座に逼迫するとかやらかしてるけど、若いしリカバリーも効くし、良いんじゃないの？

そんな事を考えたりしたけど、俺は別の事を続けて言葉にする。

「それにほら。例の装置の考案と設計は間違いなくレイニーちゃんじゃん？ 自信持ちなよ」

俺の声に、レイニーちゃんは顔を上げる。

そう、それはこの銭湯の秘密、給湯器の方は図面を公開する予定だけど、そっちは明かせない、開かせられないブラックボックス。

コレばかりは、開発はおろか製造もウチで行い、アイテムボックスを使ってわざわざ運んだものだ。

その正体は、薬水管理装置。

堅苦しい名前だが、要するにただの地下水に薬効を加えるモノ、半永久的に作動する、設置型の「温泉の素」だ。

檜湯、柑橘湯、ハーブ湯の3種を切替可能で、ボックス内のコアに接続するスロットに魔石板を差し込めば、新たな薬効を手軽に追加出来る。

因みに、魔石板の接続スロットは6つ。

充分だと思うけど、これ以上の枚数をセットするととなると、装置そのものを増設するか、設計を見直すしか無い。

現状は大浴場は6室に別けられているので、男女別に1種類づつ楽しんでもらえる筈だが、ゆくゆくは花の香かおりの湯とか、増やしたいものである。

「うん、あれは頑張った!」

自信の漲る目。

そりやそうだ、コレに関しては、俺が軽くアイデア出したけど、リスの映像流しも無しに、レイニーちゃんがかなり早い段階で上げてくれたものだ。

簡単に、薬効の切り替えが出来るようになれば良いな、くらいの軽いアイデアを、魔石を砕いて板状に再錬成し、錬金術の起動陣を刻んだ上から更に魔石板でコーティング。

それを主装置しゅそうちのコアに接続し、切り替え出来る様にするとか、そうそう考えつくことじゃないと思う。

大昔に流行った、多連装CDプレイヤーみたいなもんかな。

若い子は知らないだろうなー。

HDとかに、買ったCDのデータを取り込んでプレイリスト作って、とか、そんな事はとても一般的じゃあ無い時代も有ったんだよ。

まあ、オツサンの子供時代の思い出は置いといて。

あ、魔石つてのはアレだよ、良く読んだりしたこと有るでしょ、アレ。

魔物の体内に有ったり、魔素まその濃い所で生成されるって言うあのアレ。

「な? あー言うアイデアが出せる子が、俺やらが思いつく程度の事、出来無い訳が無いんだからさ」

そう言つてニカツと笑つて見せると、レイニーちゃんは顔を赤くして視線を逸らす。

おうん? どしたの?

「可愛い顔して、なんでそういう事をサラツと言えるかな、もうっ……!」

なんでも、料理人クランに話を通すかどうかで商業ギルドが割れているとか。

料理の腕は確か、っていう人間が揃っているが、揃いも揃って金にがめつく、商業ギルドを通さずに店を出したりしているのであんまり仲はよろしく無いご様子。

ウォルターくんも気に食わないと言って憚らないので、そんなトコに荒らして欲しくない俺はすぐに商業ギルドに乗り込み、俺の物件だからと言うことを盾に、料理人クランとやらへの話を止めさせた。

なんか1人熱心に俺を説得しようとするハゲがいたが、俺のひと睨みで気絶。

商業ギルドの人間は鍛錬が足らん。

料理人クランのは料理クランで、何処からか話を漏れ聞いたらしいが「商業ギルドが絡んでる案件に興味はない」とか強気なご様子。

そういう事ならと、俺の権限で「料理人クランが敷地内で商売することを禁ずる」と規約に追加。

興味無いんなら構わんでしょう？

一応、料理人クランの人間が上記のセリフを言っていた所にたまたま居合わせたので、きっちり音声は押さえて、その上できちんと指差し付きで宣告済みである。

……録音したのは俺じゃなくてリリースだけだ。

後から旨味を感じた所で、入り込む余地なぞ無いぞ。

地元の商店街の人は商業ギルドに加盟しているから、おみやげコーナーに限りがあるとはいえ参加は自由だ。

賑わってくれたら良いなあ。

一応貴族の方がご近所なので、内装はそこそこゴージャスな感じになる予定。

此処が当たれば、次は庶民向け、つまりは俺向けなシンプルな銭湯を庶民のエリアに作るのだ。

そっちは単純に風呂メインで、店は石鹸類くらいのを考えている。

欲を言えばコーヒー牛乳とかフルーツ牛乳を販売したいのだが、無

いものは仕方がない。

今後の商品開発に期待しよう。

代わりに、周辺に商業ギルドと提携してる料理人の店とか、そういうのが有れば良いよな、ってな感じ。

夢は拡がるけど、先ずはこの第一歩からだ。

すぐに結果に繋がる訳じゃないし、次の季節のバザーは2ヶ月後だとか。

今は空いてるテナントも、客入り次第で埋まっていくだろう。

商業ギルドも工事なんかの資金を投下してる以上、ポシヤつては困る訳で、宣伝は任せても良いだろう。

そちらのお手並みは拝見させて貰うとしよう。

完全に冒険者らしい活動を停止させているウチことノスタルジア・克蘭。

及び、俺。

少年少女組もたまに銭湯の内装の手伝いに来てくれたり、ヘレネちゃんと家の掃除をしてくれたりと色々活躍してくれている。

タイラーさんとジエシカさんが謎に商業ギルドに顔だしてたり、冒険者ギルドでハンスさんやブランドンさんと何やら話してるのが不気味なんだけど、きつと気にしちゃいけないだろう。

合間に、ヘンリー不動産に挨拶に行ったり、パルマーさんトコでアイテムボックスの入荷が有ったってんですぐに買い占めに行ったり、色々有りつつ、工事開始から1週間が過ぎようとしていた。

その目つきの悪い男が冒険者ギルドに顔を出した時、それが誰かを
知るものは殆ど居なかった。

殆ど居ない、と言うことは僅かに存在した、という事だ。

たまたまいつもの様に、仕事中に酒を呷りに来た所で、ハンスはその男に気がついた。

平然と顔色を変えずにエールを喉の奥に流し込むと、グスタフとのバカ話もそこそこに事務所に戻る。

じつとりと汗ばむ背中を意識しつつ、ハンスは退屈そうに欠伸を隠

しもしないブランドンに近付いた。

「悪食が来ているぞ」

ハンスの言葉に顔を向け、少し思案げな表情を浮かべた顔は、言葉の意味を飲み込むにつれ、みるみる青褪める。

「おいおいおいおい、冗談じゃねえぞ。今ホールに居る冒険者はどうなってる」

頭を抱えるブランドンに、副ギルドマスターの重い声が答える。

「A級はグスタフ、他はC級以下だ。今日はノスタルジアの連中は居ない」

頭を抱えていたブランドンは、椅子に腰掛けたままで上体を反し、天井を見上げる。

「はあ、タイミングが良いのか悪いのか。で、悪食はすぐにでも暴れそうなのか?」

どうにか溜息は堪えて、ブランドンは言葉を切るとハンスに目を向ける。

すぐにも手を打ちたいが、正直ハンスの話では、今の冒険者ギルド内の戦力では、仇成す者の相手は厳しいと言わざるを得ない。

それ程多くも無かったA級冒険者の大部分は東の街の活気に惹かれ、拠点をそちらに移した。

近年、明らかな冒険者の質が低下しているのだ。

こんな状況で、国を跨いで凶悪な手配犯の相手をさせるのは、少々分の悪い賭けに思える。

「いや、物色してる風では有るが、目当てを見つけた風でもない。グスタフには暴発しないように釘は差したが、相手が動けば奴も動かざるを得んだろう」

ハンスの言葉に、それ以上考える事は無いとばかりに、ブランドンは立ち上がる。

「ハンス、衛兵隊に連絡だ。今のウチの戦力じゃ心許ない。それと」
言葉を区切ったブランドンの顔に、非常に嫌そうな色が差す。

「商業ギルドの、建築部門に、修理見積もりでも出すか。取り敢えず、俺も直に見ておきたい。行くぞ」

予算の事を思つて我慢しきれず溜息を漏らし、ハンスの巨体を伴つてホールへと向かつたブランドンは、リリスやイリスの厄介さとは異質な、凶悪な厄介事がそこに居る事を認識する。

事を荒立てる雰囲気がある訳ではない。
だと言ふのに、その男を中心に、ホール内が異常なほど静まり返つている。

あの男が何者か、知らない者でも警戒しているのだろう。

「おい、ハンスよ」

ブランドンは、声が掠れるのを自覚しつつ、やや後ろに居るはずのハンスに声を向ける。

そのハンスは、返事も無く、ブランドンと同じ方向を見ている。

「厄介事とは聞いていたがよ？ 流石にアレは、聞いて無いぞ……」

厄介事。

自分の言葉に、自分で納得しながら視線は外せない。

ノスタルジアの、イリスの、まだしも笑える厄介事とはレベルが違う。

1国のみならず、複数の国家の「敵」と認定されている者が当たり前のようにジョッキを傾け、更には。

「……なんで、あだなすもの仇成す者が増えてるんだよ」

ハンスが、言葉もなく首を横に振つたのが判る。

ひどく静まり返つたホールで、彼らの声はよく響く。

その内容は、ひどくどうでも良いものだった。

だが、そんな会話の内容よりも。

あだなすもの仇成す者のうち2人。

悪食と獣追い。

そんな危険人物が何をしに来たのか？

考えるまでも無く、ブランドンの脳裏にイリスの、リリスの顔が浮かぶ。

「国喰らいの……あだう仇討ちか？」

聞こえない様に慎重に、口の中で呟く。

国喰らいの最期は、ブランドンも見届けた。

その生命を失う前から、既に死んでいるような状態の手配犯を見て、同情こそしなかったが、哀れには思えた。

あの仇討ちに、来たのか？

ブランドンは口元を引き結ぶと、受付役の一人に近寄り、トーンを落とした声を流す。

「アマンダ。お前、イリスの屋敷の場所は知ってるな？」

声を掛けられた方はきよとんと、振り返ってブランドンを見上げる。

「え？ ああ、はい。勿論、知ってますよ？」

答えながら、イリスの住む屋敷を思い出す。

冒険者が住むには大きい、克蘭ハウスとしても中々に立派な屋敷を。

「良し。お前さん、ちよいと行って、今日はギルドに顔を出さなつて伝えて来てくれねえかな？ ちよいと厄介な連中が居るもんでな」

アマンダに答えるブランドンも、その後ろのハンスも、冗談めかすことも笑みを浮かべることもしない。

どう答えたものか逡巡するアマンダの目を見て、ブランドンは更に声を落として囁くように言う。

「例の国喰らいの仲間が……悪食と獣追いが其処に居る。仇討ちかも知れん、準備も無しに此処で暴れて欲しく無い。衛兵と協議して、出来る限り被害のない方向で動かないと不味いからな」

そこまで言うブランドンは踵を返す。

領主様は人的被害を嫌うからな、そう口の中で呟くと、ギルドマスターは別の受付役に別の指示を出していた。

僅かな時間、呆気にとられたアマンダだが、気を取り直すと自分の受け持つ受付台に「休止中」の立て札を置くと、数人の訝しむ冒険者に愛想笑いを向け、制服姿で建物の外へと駆け出した。

それこそ領主様への報告案件だと思うが、これからモンテリアのギルド経由で報告をするのだろうか。

イリスと言えば、冒険者歴で言えば新人だが、今や克蘭の1つを預かるマスターと言う立場であり、Cランク冒険者である。

「どちらも冒険者登録から1ヶ月そこそこで手に出来る物ではない。その冒険者ランクの急上昇の原因が、重要手配犯である「国喰らい」の捕縛だった。

その時にギルド内の和を乱した、という部分でそれこそ領主様より叱責を受け、本来ならBランク昇格のところをCランクに落とされたとも聞いている。

その有り様は、規格外。

アマンダは、道すがら考える。

規格外の新人冒険者と、規格外の手配犯。

どっちが強いんだろう、と。

まさかの来訪者、ギルド受付中ナンバーワン（俺比）のアマンダさんの登場に、テンション爆上がりばくあの俺だが、そのアマンダさんの顔色は悪い。

何事かと話を聞いた俺達は、各々腕組み等思い思いのポーズで物思いに耽る。

「……やっぱこれ、俺の蒔いた種たねか？」

天井を見上げて唸ってみるが、だからと言ってやらかした事は無かった事にはならない。

「阿呆。アレは降りかかる火の粉を払っただけだろう。やり方は兎も角としてな」

そんな俺の独り言に、タイラーくんが溜息を吐いてから、面倒くさそうに答える。

「……そう言えば、あの国喰らいとか言う女、王都とやらに復讐するんだって言ってたけど」

仮面越しに、リリスが言葉を放つ。

来客と聞いた段階で付けたらしい。

俺も付けてたけど、来客がアマンダさんと知って外してしまっていた。

面倒な腹芸とか出来ない質タチで、すぐ顔に出るのは自分でも理解わかてるから、見知らぬ来客に対しては仮面が必須だ。

我ながらとんだ人見知り具合である。

「今ギルドに顔出してる、えーつと……『あの女』の仲間も、狙う先は王都って所なの？」

あの女こと、国喰らい。

俺は途中でリリースと入れ替わったからあの女の目的だったりとかは、後からリリースに教えて貰って知っている程度だ。

入れ替わらなくても勝てただろうと俺は思ってるし、リリースもそこは否定しないが、ただやりすぎて殺してしまうか隙を突かれて不要な怪我を負うか、どちらかだったろう、と言われた。

反発心が沸かなくもないが、でも、リリースの言う通りだろうと素直に思う。

俺には余裕が無さ過ぎる。

ホント、なんでクランマスターなんてやらされているのか、理解に苦しむ程度には器が小さいんだけどなあ。

「今来てるのは、『悪食』と『獣追い』って聞いているから、2人とも王都には用は無効筈よ？ 『悪食』は東の、『獣追い』は北の、それぞれそんなに大きくも無い国が復讐の対象だった筈」

ミードを口に運んでから、アマンダさんが答えてくれる。

「正直、手配で回ってる人相書きと違い過ぎてて、サブマスとギルマスがなんで気付けたのか、というか本当に仇成す者の2人なのか判断が付かないんだけど」

アマンダさんが事も無げに言うけど、え？

なにそれ。

詳しく聞くと、魔法を使用した似姿——写真の様なもんかな——は有るが、それが出来る術者が少ないので、どうしても手配書は似顔絵が主になるんだとか。

んで、手配犯をのんびりスケッチする余裕なんて現場に有る訳もないから、大体は伝聞を元に作られるから、場合に依っては正確性に難が有る、とか。

……場合に依ってっ言っか、それで良く手配書として機能する物が出来るね？

……カメラ的な物を作れたら、随分儲けられそうな気がするね？
「それは理解わかったけど、それで？ 私とかイリスが酒場バーに顔出さないのは良いんだけど、ギルドとしてはどう対処する予定なの？」
色々と実感の沸かない俺が何となく空想を遊ばせている傍ら、リリスがクツキーを手にしたままで問う。
……確保しなくても、俺とお前以外は……あ、ウチのメンツは普通に食いそうだな。

ごめん、リリス、ちゃんと欲しいのは確保しといてね。

「困りものなのよねえ、実際のトコ。仇成あだなすもの者の1人でもこの街の冒険者かき集めて足りるかどうかなのに、2人となると……」

リリスの質問に、アマンダさんが深い溜息と共に答えてくれる。

それを聞いて、顔を見合わせる俺とイリス。

うん？

あの、国喰らい、あいつも仇成あだなすもの者とか呼ばれてたんだっけ？

あれは、特別弱かった感じ？

「あー……アマンダさん、あの、国喰らい？ あれの戦力評価はどうなの？」

嫌な予感が渦巻く。

俺が控えめに差し出した疑問に対する答えは、予想の手をすり抜けてくれた。

「国喰らいについては……あのね、本来なら現状のこの街のギルド戦力でギリギリ、っていう判定だと思っただけだ」

えっ。

俺は変な声が出そうになるのを何とか抑える。

つまりは、今来ている仇成あだなすもの者とか言う奴らと同格って事だろう。

いや……言っちゃなんだけど……。

ちよつと、相手の実力を高めに評価し過ぎでは？

不明な戦力を過小に見積もるのは危険だけど、過大に見積もるのもどうかと思うんだけどなあ。

或いは、俺がああ国喰らいの実力を実際に目にして、戦ったからこそその感想なんだろうか？

そう思う俺の耳に、アマンダさんの言葉の続きが滑り込む。

「例の魔獣、あれはどうも『獣追い』の能力が関係してたらしくて。あの魔獣が何匹居たか不明だけど、あの獣追いの獣と国喰らいのゴーレムを同時に相手になると、この街の戦力全部出してどうにかするか、って程度には厄介だったみたいね」

俺は口元に手を添え、椅子の背もたれに背を預けて押し黙る。

今、この街の「戦力全部」って言った？

冒険者ギルドだけじゃなく、衛兵も掻き集めて、それで互角かどうか？

口にしかけた俺の脳裏に、ゲーム画面に踊る気の狂った様な与ダメージ数値が浮かんでは消える。

そうか、俺の感覚のほうがおかしいのだ。

あの狂ったダメージでなければ対抗出来ないイカれた世界のモンスター達は、此処には居ない。

アレは此処の普通ではない、それを忘れたら、俺がこの世界の化け物と化してしまう。

そう思うが、一方で。

消極に過ぎてギルドに、この街に何か被害が出てしまったら、俺はその時自分を許せるだろうか？

アマンダさんの話を総合するに、大人しくして居てどうにかなると思えない。

戦って負ける予感もしない。

……これは、俺が出てふん縛しばった方が早くないか？

俺が下手打つても、リリースもいる訳だし。

そう思っこってリリースに目を向けると、此方に仮面を向けて俺の視線を受け止めると、1つ頷いて見せた。

多分、似たような事を考えてるんだろう。

想定している役どころは逆かも知れないけど。

俺も1つ頷くと、アマンダさんに視線を向け直す。

「まあ、そうなったら俺が出るよ。取り敢えず話を聞いてみて、あんまりにも物騒な感じだったらやつちやええば良いんだろ？」

アマンダさんは、言葉を受けて何を答えたものか、ただ立ち上がる俺を見て口をパクパクさせている。

「この短絡馬鹿が。何なんでそうも易々やすやすと危険な事に首を突っ込むんだ、お前は」

一息に忠言と雑言ざうごんを吐き連ねるタイラーくんは、俺より先にリリスが答える。

「馬鹿だからでしょ？ まあ、私も今回に関しては、イリスにどうこう言えないけど」

随分辛口じゃないのさリリスさんよ。

「ほら、行くわよイリス。向こうが2人だったら、私が出ても卑怯ひせつとは言わないでしょ、向こうさんも」

どこか楽しそうに、という程隠すつもりも無いようで、リリスは露骨に楽しそうに椅子から立ち上がる。

まあ、知らないから卑怯ひせつとは言わないだろうなあ。

でも、俺はやっぱり、二人がかりだとズルいと言うか、可哀相な気がするよ？

と云うかりリスさんや、お前さんはなんでいきなり戦う前提なん？

フリーでも良いから、話し合う姿勢は見せとこうぜ？

先ずは話し合うところから、ただし拗れようが縋れようが知ったこつちやない。

暴れる場合は街の外で。

それだけを話し合った俺とリリスは、口々に慎重論を唱えるクランメンバーとギルドの受付嬢を引き連れて冒険者ギルドへと足を向けるのだった。

第25話 接敵、強襲

気がつくくと、酒場の空気が変わっている。

何処か張り詰めるような、其処彼処から、此方を監視するような視線が投げ掛けられている。

ふむ、少し感心したように、悪食はエールのジョッキを傾ける。

モンテリアのギルドでは、これほどの人数に警戒されもしなかった。

ごく数人、監視する目は有ったが、此処ほど多くはなかった。

危機感を持っている、その辺りの差か。

思えば国喰らいがこの街を襲って1月経ったかどうか。

危機感を無くすには、まだ早いと言うものか。

「なーんか、陰気なトコだね。ツマミは旨いけど」

テーブルを挟んで向かいに腰を下ろす獣追いが、悪食の手元の芋の薄揚げをつまみ上げながら、無邪気に言う。

お気に入りに出されて、若干苛立ちを滲ませつつも、近くを通りかかったウエイトレスに追加のツマミと、エールを2杯注文する。

「俺のお気に入り勝手に手を出すんじゃないよ。まあ、気持ちは判らなくもねえけどな」

言うほど怒っては居ない、そんな調子で悪食は獣追いの脳天に拳骨を落とす。

あくまで軽くだが、落とされた方はそうは思わなかった様だ。

「痛いな！ すーぐ暴力振るうんだから！ 悪いのは僕じゃなくて、この美味しい芋でしょ！！」

頭の前辺を押さえて抗議する獣追いの様子に、ギルド内の一部で警戒の糸が緩む。

仲の良い、兄弟のような2人パーティ、或いは先行で街に入った2人。

事情を知らない一部はそう判断しても仕方がないほど、のどかな光景。

それが国単位で手配を受けているお尋ね者だと知っている一部と、

悪食の放つ剣呑な気配に気を緩める気になれない一部でさえ、ともすれば今までの警戒がバカバカしく思えて来る。

だが、完全に気を許すには悪食あの男の眼光は鋭すぎて、完全に気を抜くことが出来ない。

「この芋が旨いのは認めるが、悪いのは人様の食い物に手を出したお前だ」

ふくれっ面の弟を諫める兄、とも見える2人の背後で、笑い声がかかる。

特に気配を消していた訳でも無く、偶然背後に居ただけ。

悪食が振り返ると、短髪で長身の男が此方こちらを向いて立っていた。

「いや、悪い。そんなに気に入って貰えて、嬉しくてな」

男は悪食の前に、芋ポテトチップスの薄揚げが山盛りのバスケットを置く。

「俺はウォルター。たまに此処に手伝いに来る、料理人だ」

料理人、という単語と眼の前のバスケットに、悪食は警戒を解く。

「見かけない顔の割に、随分揚げ芋を食ってるって聞いてな？ どうせなら、コイツも食ってみてくれよ」

ウォルターと名乗った男は見た目よりも遥かに人懐こい笑顔で、バスケットの中を指差す。

其処には、一口大の黄金色の何かが、湯気を立てつつ小山となって積み上がっていた。

「何だ？ コイツは……見たこと無ねえな……？」

「なになに？ これ、何かの実み？」

悪食と獣追いは改めてバスケットの中を覗き込み、仄かに立ち上る芳香に喉を鳴らす。

「コイツはカラアゲっ言つってな？ ウチのクラマスの故郷の料理らしいが、まだまだ試作なもんでな？ お前ら、食いっぷりも良いし、食って感想聞かせてくれよ」

ウォルターの新しい挑戦、それは街に来たばかりの冒険者風の2人にも物珍しく、食した事どころか見た事も無い物。

新設の「ノスタルジア」クランのマスターは変わり者だが食こたわの拘りは本物。

そんな噂が流れる程度には、既に冒険者ギルドの酒場には「ノスタルジア」から出たメニューが増えた。

克蘭に君臨する双子のマスター、妹が主に「食」と「酒」に工夫を凝らし、姉がそれに鋭いスパイスを効かせると評判である。

実情は8割が妹の何気ない一言が起点となっているのだが、調理方法を考えるのは姉のほうが得意である。

その辺りの事情から、噂として流れる時には上記の様になってしま

う。
噂と言えば、「ノスタルジアの双子は姉が創造を、妹は破壊を司る」と言う物も有るが、これも上記の事情と、主に妹の仕出かした幾つかの事件との合わせ技である。

「カラアゲか……聞いた事も無えが、それより良いのか？　こんなモン食わせて貰ってもよ？」

悪食は記憶の引き出しを幾つか探るが、「カラアゲ」と言う単語に該当する記憶は見当たらない。

ちらりと目をやると、獣追いの方は不審がるとかそんな様子は微塵もなく、料理人の返事も待たずに手を伸ばしている有様だ。

「あつっ！　まだ熱いんだね、これ！」

素手で摘み、熱の余韻に驚いて指を離す。

「人の話も聞かねえでがつつくからだ、阿呆。先ずはこの料理人に礼の1つも言ってからにしろよ、せめて」

悪食が呆れたように言くと、獣追いは不貞腐れたように頬を膨らませ、料理人はカラカラと笑う。

「気にしねえでゆつくり食ってくれ、後で感想くれれば良いぜ。熱いから気いつけてくれよ？」

そう言って笑うと、ウオルターは他の冒険者達に声を掛け、幾人かから新メニューを強請られつつ厨房へと戻っていく。

その背中を見送りながら、悪食は珍しく声を落として呟く。

「知らねえんだらうが……遣り難いな」

その隣で、獣追いが「カラアゲ」を口の中に放り込みながら静かに、しかし事も無げに言う。

「そうかい？ どうせ知ったら他の連中と同じさ。遠慮するだけ無駄だよ」

どうせ僕等は何処に行ってもお尋ね者さ。復讐を果たす、その日までね。

誰にも聞こえない様な獣追いの呟きを耳朶に収めつつ、悪食もまた「カラアゲ」を口に放り込む。

「……旨いな」

言葉とは裏腹に、その声には苦いものが浮かんでいた。

冒険者ギルドに国際手配犯が居るってんで、急いでギルドに向かっているんですがね。

それを伝えてくれたギルド受付のアマンダさんは、ギルマスの言伝として「来んじやねえよバーカ！（意識）」と教えてくれた訳だが、こちららハードなハードなハクスラ世界を識る者だ。

リリースに至ってはまさにハクスラ世界から来たに等しい。

そこそこ戦えるんじゃないやね？ 的な軽い気持ちで出陣の俺です。

それに今、ウォルターくんがギルドでバイト中なのよね。

ギルドハウスでドンパチ始まるとか、そういう面倒臭いことになる前に、とつとと踏み込んでしまおうと言う魂胆も有る。

「タイラーくんよ、俺が暴れるとして、街のどつちに出た方が都合が良いんだ？」

特に慌てて走るような事も無く、しかし、いつに無く早足で道を征きながら言葉を向ける。

「まず単身で暴れる事を前提とするな。他との連携を図れ。その上で言うなら、今なら西だな。北と同じように草原が広がっている。東は川がある関係で多少狭く、街の近くで戦闘する事になる」

前半の小言は無視して、俺は頷く。

「北は絶対に駄目だ、ゴブリンの生き残りの集落が、やっと整った所だ」

タイラーくんが続ける言葉に、俺はもう一度、無言で頷く。

領主様の温情で、外壁の外では有るが集落を構えることが許された

のだ。

彼らの安寧を乱してはイカン。

集落の外壁作りは、俺も手伝ったのだ。

「それに今、あの集落では蒸留酒を造らせてるのよ。絶対に危険を近づけては駄目よ」

俺の右を歩くりリスが、決然と言い切る。

「っておい、お前さん、そんなモン造らせてたの？」

「バナラエツセンスが……欲しいのよッ……!」

あ……あー、うん、パウンドケーキも一味ひとあじ違うものになるし、良いんじゃないかな？

「って事はアレか、ウオツカ造らせてんのか。」

「二応、ウオツカは目処が立ったわ。ウイスキーとブランデーは時間がかかるけどね」

いつ、そんな事まで手を広げたの？

流石に訳知り顔で受け流すなんて事も出来ず、俺は間抜け面ツラをリリスに向ける。

「まあ、そういう事情までは知らんが、北も使えない。南は……貴族様方を敵に回してみるか？」

そんな俺の後頭部に、タイラーくんの声がぶつかる。

「悪わるか無ねえけど、もうちつと嫌気が差してからでも遅ねか無ねえかな？」

割と物騒な事を軽口に包んで返すと、俺はあんまり真面目とも言えない顔を正面に向け直す。

「んじゃあ、お客さんは西門の外にご案内、か。リリス、俺が出て良いんだよね？」

「んー。相手を見てから、かなあ。まあ、あの女と互角程度なら、私が出る必要は無さそうだけど」

舐め腐った俺とリリスの会話だが、呆れ果てたのかタイラーくんのみならず、ウチのメンバーからは合いの手あだ一つ無い。

「あの、あのね、イリスちゃん、リリスちゃん？ 『仇成あだす者』って、すつごく危険な相手だからね？ それが2人だから、ホント、無茶は駄目よ?。」

アマンダさんがギルド職員の義務感から、俺達の注意を喚起しようと頑張っている。

勿論、俺もリリスも、見た目ほど相手を過小評価している心算は無^{つもり}い。

倒したのはリリスとは言え、あの、何だっけ？ 大喰らい？

あの女には、俺ですら案外余裕を持って対処出来ていたのだ。

とは言え、本当にアレと互角だなんて思っては居ない。

アレより強いのが2匹居る、そう言う算段で対処法を練る。

寧ろ、俺はもつと別の――最悪の相手を想定してさえ居る。

それは、俺と同じ巻^マき込ま^レれたもの^イか、リリスと同じ^キ世界を渡^ラった者^タ。

特にそれが、俺たちと同じ、ディアブロ3世界からの来訪者だったのなら。

更に言えば、ワールドランカーだったりしたら。

街だけは守れるように、ある程度離れて闘う必要も有る。

実はこの、俺達と同じ存在の可能性には、ついさつき思い至った事だ。

背中にイヤあな汗が流れる。

もしそうだったら、せめてウイザードである事を祈るしか無い。

なにせ俺は、本気でウイザードしかプレイしたことがないのだ。

他の職^{クラス}にどんなスキルが有るのか、どんなパワーをセットしているのか、セット効果はどうなのか、まるで知らないのだ。

リリスの足を引っ張らない程度には頑張らなきゃいけないんだが、果たして「最悪」の想定がハマってしまった時、そもそも俺が何処まで対抗できるのか自信がない。

レベルで言えば、カンストである70レベルに加えて、パラゴンレベルと言う、カンスト後にステータスを上げ続けられるモノは1451まで上げている。

単純かつ強引に言ってしまうえば、レベル1521。

この辺の、無駄に引き上げられたステータスに期待するしか無い。シーズンプレイヤーだったら此処までレベル上げをすることはま

ず無いと思うので、そつちだったらまだ相手できるかなー、とか安易に考えを逃避させて見るが、それならそれでプレイヤースキルがハンパ無い予感も漂う。

取り敢えず、ギルドハウスで戦闘が始まる事だけは避けなければ。考えた結果、最初に考えたのと同じ思考に戻った辺りで、俺はギルドハウスの前に立っていた。

立ち止まって仲間達を見回し、俺は1つ息を吸い込むと、ギルドハウスの扉に手を掛けた。

扉を潜った先は、いつもより静かで、ついでに言うなら若干空気が重かった。

其処此処で会話を交わしている様子は有るのだが、どうにもこう、いつもの怒号とか笑いとか、そういった勢いのある空気は息を潜めている様だ。

気楽に笑ってる奴も勿論居るんだが、不穏な空気を感じて周囲に気を配る、そう言う冒険者の方が多い様に思える。

え、なに？　なんか急に皆、歴戦の佇まいじゃない？

俺はちよつと空気に吞まれ、一旦酒場を避けて、クエストカウンターへと足を向ける。

熊のハンスさんに加えて、ブランドンさんまで其処にいるのが見えた、って言う理由も無くは無いんだよ、一応ね。

「ちつす。何この雰囲気？　戦争でも始まるのん？」

原因を知ってる癖に、わざとらしく右手を翳しながら問いかける。「お前が来たからそうなるんだだろうなって予感しかねえよ、何で来たんだこの馬鹿野郎」

ハンスさんは溜息を、ブランドンさんはハッキリと苛立ちを俺に向けて下さっている。

やだなあもう、仲良くしようよ、ね？

「んで、お前は何しに来たんだ？　アレにちよつかい出す気なんだつたら、摘み出すぞ？」

ブランドンさんのご機嫌が全力で悪いのは何でだ？

俺は特に警戒も何も無く、ブランドンさんが眼だけを向けている方に無造作に顔を向ける。

「お前は……いっ……少しは慎重な行動をだな……いっ……」

声を押さえた怒鳴りとか、ブランドンさん器用ね。

そんな事を思った俺がブランドンさんに視線を戻した一瞬。

ブランドンさんが俺の肩を掴んで小さく怒鳴った一瞬。

そんな俺達に注意を向けたハンスさんや、ウチのメンバーの視線が俺に集まった一瞬。

視線を戻した俺は、いや俺達は、それが何なのかを理解出来なかった。

黒髪の、目つきの悪い男と、向かい合う何やら楽しそうな顔でバスケットに手を伸ばし、揚げ芋……あれ？ あれ、違うな、なんだあれ？ を摘む赤毛で目の細い男。

その2人のテーブル、ちょうど2人の間に入るように、見慣れた仮

面の女……。

「何してんのリリース？」

俺とブランドンさんの声が綺麗にハモった。

から揚げと言ったか、鶏肉か？ 肉に味付けして、これは焼いてあるのか？

揚げる、と言う調理法が今ひとつ理解らない悪食は、知っている調理法で想像するしか無い。

だが、どうやって作るのかが理解らなくても、旨い事は理解る。

「なにこれ、こんなの食べた事無いよー！」

向かいに陣取る獣追いがはしゃいでいるが、気持ち的には悪食も同意だ。

ツマミが旨いと酒も進む。

エールを呷り、ふと気配を感じて視線を向けた先に。

「あつ……いっ……」

獣追いの声が耳に届く。

其処には、見慣れない仮面の女が。

「アンタ達、何なの？ あの女の仲間か何か？」

仮面に阻まれ見えない筈の目に殺気を乗せて、真っ直ぐに悪食を見下ろしていた。

これは予想外な事態だ。

俺は勿論、ギルドマスターのブランドンさんや副マスターのハンスさんでさえ、リリスの行動を読めなかった。

っていうか、何で、いの一リリス番にお前が喧嘩売ってるんだよ!!

「コレだから双子って奴は厄介なんだよ、あつちがイリスか！」
相変わらず小声で怒鳴るブランドンさん。

俺は驚きすぎて、ブランドンさんは器用だなー、とか呑気な感想しか浮かんでいなかったが直ぐに気を取り直し、仮面を外して顔をブランドンさんの方ほうに向ける。

「いやいやいや、ほれ、目を見ろって。あつちはリリスだよ」

俺とリリスの、外見上唯一の違いを見て、それでもブランドンさんは訝しげだ。

なんでそんなに信用ないの、俺。

「普段の行いの賜物だな」

やはり釈然としない面持ちで、タイラーくんが言う。

なんでい、俺の普段の善行に文句でもあんのかこの野郎。

「そうすつと、お前の姉もだいぶ喧嘩ばやっ早はやいってことになって、俺の頭痛の種が増えるんだが」

タイラーくんの方ほうに目を向けた俺の後頭部に、ブランドンさんの声が刺さる。

「奇遇じゃないの、俺もどうしたもんか悩んでるトコだよ」

正直、どうやってアプローチしたもんか考えていた手前、強くも言えないんだけど。

しかし、リリスのヤツ、どういう心算つもりなんだ？

いつもならアイツが俺のストツパー役の……いや、そうでもないのか……？

などと呑気に眺めてしまっていたが、放ほつとく訳にも行かない。

「ブランドンさんよ、ちよいと行ってくるぜ。まさか此処で暴れたあ思ったかねえが、ありやあ不味い。リリスが殺気立ち過ぎだ」
カウンターに肘まで突いて身を預ける俺は、心底湧き上がる面倒臭さを余すこと無く全身に纏まとわせて言い放つ。

そんな俺の暴れっぷりを「報告でしか知らない」ブランドンさんが、カウンターから身を乗り出して止めようとするが、それをハンスさんが止める。

実際に俺が暴れている所を見たことの有る、ハンスさんが。

「出来るだけ殺すな。出来るか？」

ブランドンさんを完全に遮って、ハンスさんが俺に目を向ける。

「相手次第だけど、俺よりもリリスがヤバイよ。アイツ、どうしたってんだ？　ありや、完全に殺す気だぞ」

そんな俺の言葉に、ブランドンさんがギョツとした目を俺に向けてくる。

俺は俺で、溜息を重ねて、身体からだを預けていたカウンターから離れる。「取り敢えず、場所を変えさせる。衛兵の人らにも伝えてくれ、西門の外だ」

言い置いて、俺はリリスの居るテーブル目掛けて駆け出す。

衛兵の人に、とか言っただけど、正直あんなヤババリいモノスの近くに人を近寄らせちやいけな。

兎とにも角かくにも、あの三人をとつと街から離さないとヤバイ、そんな気がした俺は、割と本気で逃げ出したい心境だった。

「へえ、唐揚げたあ……此処で出す事にしたのか」

どうやって（ウチの姉ことリリスが）殺気立っている現場に介入したのか考えあぐねた俺は、目に入ったそれに、思ったままの事を口にしてしまう。

それは明らかにウォルターくんの仕事。

醤油の目処がまだ立っていないから、リリスに教えて貰ったレシピを伝え、先日試作したばかりの塩唐揚げ。

聞いただけである程度纏めてしまうウォルターくんの技量に、惚れ惚れしたもんだ。

「……なあに？ イリス、邪魔するつもり？」

そんな俺のほのぼのとした現実逃避は、あっさりと身内に崩される。

……なんで、仲間の方がキツイ殺気をぶつけて来るんですかね？

俺はとつくに仮面を外しているが、遅れ馳せでリリースも仮面を外し、その爛々と輝く真紅の瞳が俺を真っ直ぐに捉える。

だからなんで俺を見てるんだよ、敵は俺じゃねえだろ。

「双子、か」

そんな俺の耳に、低い声が滑り込む。

「……ああ。そっちの物騒な方が姉で、俺は妹だ」

その声の方に視線だけ向けると、そいつの、昏い、只々昏い瞳が俺を真っ直ぐに見据えていた。

俺はその暗い瞳に、意識した軽い調子で、だが短めに答える。

「なるほど、双子か」

そう言うと、男は何事か考えるように、思い出すように目を閉じる。

「で？ 国喰らいを殺したのは、どっちだ？」

その言葉を切っ掛けに、男の身体から殺気が炎の様に立ち上り、連れと思しき男も染み出すような殺気を纏い、それを隠す事もしない。

いやああ、殺気なんて大袈裟な言い回しだと、元の世界……或いは現実世界か？ では思っていたモンだったけどさ。

こうして3者3様の殺気に当てられてその圧を感じると、そういうモノは有るんだと実感させられてしまう。

あと、平和ボケしてる俺はこの感覚には中々慣れない、って事も。怖いとか気圧される、じゃなくて、なんつーか……実感はするけど、やっぱりどこか他人事な感じなのだ。

多分、危機感が足りていないんだろうなあ。

俺は自分の甘さというか、間抜けさに溜息を吐き、軽く首を振る。その行為が、相手を軽く見ている、そう誤解させると知りながら。

「あのオバサンを死刑台に送ったのは俺だよ。で？ 仇討ちにでも来たのかい？」

こっそりと、獲物をデス・ウィツシュからエーテルウォーカーに持

ち替え、ちよつとだけ挑発気味に言う。

激昂して掴みかかってくるとかなら、そのままテレポトで俺ごと強制移動だ。

そんな事を思いつつ、こつそり冷や汗を浮かべる俺の前で、黒髪の男がふんと小さく鼻を鳴らす。

「此処は、飯が旨いな」

あん？

殺気ダダ漏れで、コイツは何を言い出すんだ？

「会計済ましてくる。やり合うにしても、此処は壊したく無え。獣の、お前もそれで良いな？」

黒髪の男の言葉に、ジクジクと殺気を垂れ流す赤毛は面倒臭そうに視線を転がす。

「えー？ 移動するの？ 面倒じゃん、此処で良くない？」

瞬間、殺気の風向きが変わる。

「旨い飯屋は貴重だ。壊す事は許さん」

「……別に、死にたいんなら俺が殺しても良いんだよ？ 悪食さん」

おいおいおいおい、待て待て、お前ら仲間じゃないのか？

一瞬で睨み合いの関係に変化している黒髪と赤毛を、俺はどうしたもんかと呆れて眺めていた。

もう一匹、何故か堪え性の無くなった姉の事を完全に意識から外して。

その華奢な手が振り下ろされ、テーブルは真つ二つに押し折れて倒壊する。

「馬鹿共が、お前等の相手は私だ。勝手に殺し合う前に、黙って着いて来い。死に場所に案内してやる」

言うや否や、リリスはテーブルに一瞬気を取られた男2人の胸倉を腕1本に付き1人づつ掴み、そして消えた。

ざわめくホール内。

ウチの連中+αが此方へ駆け寄ってくる気配にも気が付くが、悠長に待っても居られない。

リリスは強引に真上へとテレポトしたのだ。

ゲームから離れ、自由になった視界の中、その視界の届かない建物の上空。

其処に跳んでから、西の門の外、遙か先を^{めざし}目指しているのだろう。

偶々^{たまたま}鳥でも飛んでたら、どうする^{つもり}心算だったんだ、アイツ。

俺は頭を搔いてから仮面を着け直し、一度仲間達^{ほう}の方へ手を振ってから、リリースを真似て跳ぶ。

障害物をすり抜け、澄み渡る空の中で視線を巡らせ、目標となる西門を確認する。

向かうべき路が見えたなら、後は跳ぶだけだ。

どうせ直ぐに上がるだろう戦闘痕を見逃さないように気をつけつつ、俺は連続ジャンプを敢行する。

あの男達を目にしてから、妙に不機嫌というか、なんだかとても殺^やる気に溢れたリリースに不審なモノを感じながら、俺はその違和感の正体に気付ける筈もなく。

絶対、正義感とかじゃ無^ねえよな？

そんな可愛げが有るとも思え無^ねえし、今までの行動を思い返して見ても、それだけは無いと言い切れる。

だとすると、確実にロクでも無い事を考えてる気がするのだ。

何を考えているにせよ、今回の行動は、幾ら何でも性急に過ぎやしないか？

ちよつと相手の力量とか、そういった所を考えていない気がするんだ、今日のリリースは。

それが慢心なら、それこそロクな事にならない気がする。

一度意識してしまった為に少しづつ膨らむ不安から目を背けるように、俺は発生するであろう戦闘痕を探しつつ、空を駆けるのだった。